

東田室遺跡

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

2008

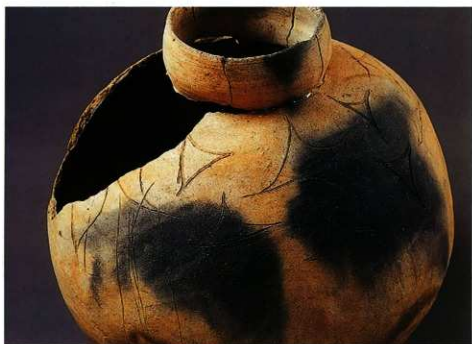
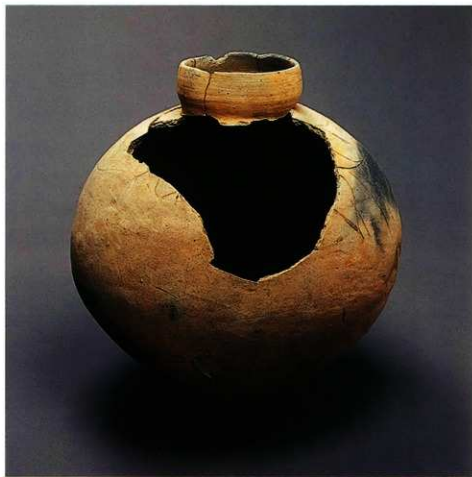
大分県教育庁埋蔵文化財センター

東田室遺跡

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター



SH3205出土繪面土器 (第185・186圖參照)

序 文

本書は、県教育委員会が平成13年度及び14年度に大分駅総合整備事務所の依頼を受けて実施した、大分駅付近連続立体交差事業に伴う東田空遺跡の発掘調査報告書です。

東田空遺跡が所在する大分市は、東九州のほぼ中央に位置しており、古代・中世以降、豊後国府や戦国大名大友氏の守護所が設置され、また近世には譜代大名大給松平氏2万2千石の城下町が建設されるなど、古い歴史と文化をもつ地域です。

今回調査した東田空遺跡は、弥生時代前期末の貯蔵穴群をはじめ、古墳時代の竪穴住居跡など数多くの遺構・遺物が発見されました。出土遺物の中には胴部に「竜」と推定されるヘラ描き文様を描いた古墳時代中期の「絵画土器」などもあり、本遺跡が大分市内の遺跡の中でも有数の規模を誇るものであることが判明しました。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成20年3月25日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 福 田 快 次

例 言

1. 本書は大分県大分市田室町に所在する東田室遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分県付近連続立体交差事業の実施に伴い、大分県周辺総合整備事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成14（2002）年2月26日から平成15（2003）年3月14日にかけて実施し、吉田寛（大分県教育庁埋蔵文化財センター）・松田幸之助・山崎文子（元大分県教育庁文化課）が担当した。
4. 現地での写真撮影・遺構の実測は大分県教育庁文化課の担当職員のほか、株式会社埋蔵文化財サポートシステムの職員（石川哲哉・池田鮎子・七島陽子・中田裕樹）が担当した。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については調査員のほか、越智淳平・河原英明・巻岐尾可奈子（大分県教育庁埋蔵文化財センター）ならびに大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理補佐員の多大な協力を得た。また、出土遺物の一部について、洗浄・注記を株式会社大分営業所、実測・トレース・写真撮影をアジア航測株式会社・有限会社九州文化財リサーチに委託した。
6. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門1977）において保管している。
7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。座標値については、旧日本測地系の数値を使用している。
8. 本書で使用する遺構略号は、以下の通りとする。
SD：溝、SK：土坑・貯蔵穴、SH：竪穴住居跡、SP：柱穴および小穴、SX：その他の遺構
9. 本書は、第5章を孔智賢（パレオ・ラボ）・梶泉岳二（早稲田大学）、その他を吉田寛（大分県教育庁埋蔵文化財センター）が執筆した。また、本書の編集は吉田が担当した。

目 次

第1章 経過	
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 既往の調査と調査の方法	
第1節 既往の調査	10
第2節 調査の方法	12
第4章 調査の成果	
第1節 基本厨序と調査の概要	13
第2節 弥生時代前期末の遺構・遺物	20
第3節 古墳時代前期～中期前半の遺構・遺物	75
第4節 古墳時代中期後半～後期の遺構・遺物	152
第5節 古代・中世・近世の遺構・遺物	182
第6節 時期不明の遺構	189
第5章 自然科学的分析	191
第6章 総括	195
補遺	199
写真図版	201
報告書抄録	258

挿 図 目 次

第1図 東田空遺跡と周辺の遺跡(1/25,000)	5	第8図 SK1101a実測図(1/30)	22
第2図 調査地点位置図(1/3,000)	11	第9図 SK1101a出土遺物実測図(1/4)	22
第3図 遺構番号の原則	12	第10図 SK1103実測図(1/30)	22
第4図 基本厨序(大分市教委2005より引用)	13	第11図 SK1103出土遺物①(1/4)	23
第5図 東田空遺跡第3次調査 遺構配置図①(1/600)	16	第12図 SK1103出土遺物②(1/4)	24
第6図 東田空遺跡第3次調査 遺構配置図②(1/600)	17	第13図 SK1103出土遺物③(1/4)	24
第7図 弥生時代前期末の遺構(1/1,200)	20	第14図 SK1104実測図(1/30)	25
		第15図 SK1104出土遺物(1/4)	25
		第16図 SK1105実測図(1/30)	25

第17図	SK1105出土遺物(1/4)	25	第58図	SK2407実測図(1/30)	41
第18図	SK1106実測図(1/30)	26	第59図	SK2407山上遺物(1/4)	41
第19図	SK1106出土遺物①(1/4)	26	第60図	SK3103実測図(1/30)	42
第20図	SK1106出土遺物②(1/4)	27	第61図	SK3103出土遺物(1/4)	42
第21図	SK1112実測図(1/30)	27	第62図	SK3104実測図(1/30)	42
第22図	SK1112出土遺物(1/4)	27	第63図	SK3104出土遺物(1/4)	42
第23図	SK1203実測図(1/30)	28	第64図	SK3105実測図(1/30)	43
第24図	SK1203出土遺物①(2/3)	28	第65図	SK3105出土遺物(1/4)	43
第25図	SK1203出土遺物②(1/4)	28	第66図	SK3111実測図(1/30)	44
第26図	SK1204実測図(1/30)	29	第67図	SK3111出土遺物(1/4)	44
第27図	SK1204出土遺物(1/4)	29	第68図	SK3113実測図(1/30)	45
第28図	SK1205・SK1206実測図(1/30)	29	第69図	SK3114実測図(1/30)	45
第29図	SK1205・SK1206出土遺物(1/4)	30	第70図	SK3114出土遺物(1/4)	46
第30図	SK1207実測図(1/30)	30	第71図	SK3201実測図(1/30)	47
第31図	SK1207出土遺物①(1/2)	30	第72図	SK3201出土遺物(1/4)	47
第32図	SK1207出土遺物②(1/4)	31	第73図	SK3202実測図(1/30)	48
第33図	SK1208実測図(1/30)	31	第74図	SK3202出土遺物(1/4)	48
第34図	SK1208出土遺物(1/4)	32	第75図	SK3207実測図(1/30)	49
第35図	SK1209実測図(1/30)	33	第76図	SK3207出土遺物(1/4)	49
第36図	SK1209出土遺物(1/4)	33	第77図	SK3208実測図(1/30)	50
第37図	SK1210実測図(1/30)	33	第78図	SK3208出土遺物(1/4)	50
第38図	SK1210出土遺物(1/4・2/3)	33	第79図	SK3211・SK3212実測図(1/30)	51
第39図	SK2103実測図(1/30)	34	第80図	SK3211出土遺物(1/4)	51
第40図	SK2103出土遺物(1/4)	34	第81図	SK3213実測図(1/30)	52
第41図	SK2104実測図(1/30)	34	第82図	SK3214実測図(1/30)	52
第42図	SK2114実測図(1/30)	35	第83図	SK3215実測図(1/30)	53
第43図	SK2114出土遺物(1/4)	35	第84図	SK3215出土遺物(1/4)	53
第44図	SK2115実測図(1/30)	35	第85図	SK3217・SK3218実測図(1/30)	53
第45図	SK2115出土遺物(1/4)	35	第86図	SK3217実測図(1/30)	53
第46図	SK2201実測図(1/30)	36	第87図	SK3219出土遺物(1/3)	53
第47図	SK2201出土遺物(1/4)	36	第88図	SK3221実測図(1/30)	54
第48図	SK2308実測図(1/30)	37	第89図	SK3221出土遺物(1/4)	54
第49図	SK2308出土遺物(1/4)	37	第90図	SK3222実測図(1/30)	55
第50図	SK2313・SK2314実測図(1/30)	38	第91図	SK3222出土遺物(1/4)	55
第51図	SK2313・SK2314出土遺物(1/4)	38	第92図	SK4003実測図(1/30)	56
第52図	SK2315実測図(1/30)	39	第93図	SK4003出土遺物(1/4)	56
第53図	SK2315出土遺物(1/4)	39	第94図	SK4005実測図(1/30)	57
第54図	SK2316実測図(1/30)	40	第95図	SK4005出土遺物(1/4)	57
第55図	SK2316出土遺物(1/4)	40	第96図	SK4006実測図(1/30)	58
第56図	SK2401実測図(1/30)	40	第97図	SK4006出土遺物(1/4)	58
第57図	SK2401出土遺物(1/4)	41	第98図	SK4007実測図(1/30)	59

第99図	SK4007出土遺物(1/4)	59	第134図	SD1111b出土遺物②(1/4)	81
第100図	SK4008実測図(1/30)	59	第135図	SD1111a(X6区)出土遺物①(1/4)	82
第101図	SK4008出土遺物(1/4)	59	第136図	SD1111a(X6区)出土遺物②(1/4)	83
第102図	SK4009実測図(1/30)	60	第137図	SD1111a(X6区)出土遺物③(1/4)	84
第103図	SK4009出土遺物(1/4)	60	第138図	SD1111a(X6区)出土遺物④(1/4)	85
第104図	SK4014実測図(1/30)	60	第139図	SD1111a(X6区)出土遺物⑤(1/4)	86
第105図	SK4013・SK4015・ SK4016実測図(1/30)	61	第140図	SD1111a(X6区)出土遺物⑥(1/4)	87
第106図	SK4013・SK4015・ SK4016出土遺物(1/4)	61	第141図	SD1111a(X7小区)遺物 出土状況(1/20)	88
第107図	SK4017実測図(1/30)	62	第142図	SD1111a(X7小区)出土遺物①(1/4)	89
第108図	SK4017出土遺物(1/4)	62	第143図	SD1111a(X7小区)出土遺物②(1/4)	90
第109図	SK4018実測図(1/30)	63	第144図	SD1111およびSD1111 周辺包含層出土遺物(1/4)	90
第110図	SK4018出土遺物(1/4)	64	第145図	SH1101b・SH1101c実測図(1/60)	91
第111図	SK4019・SK4020実測図(1/30)	64	第146図	SH1202実測図(1/60)	91
第112図	SK4019出土遺物(1/4)	65	第147図	SH1202出土遺物(1/4)	91
第113図	SK4020出土遺物(1/4)	65	第148図	SH1301実測図(1/60)	92
第114図	SK4021～SK4024実測図(1/30)	66	第149図	SH1301出土遺物(1/4)	92
第115図	SK4021～SK4024出土遺物(1/4)	67	第150図	SH2101実測図と遺物 出土状況(1/60)	94
第116図	SK4025実測図(1/30)	68	第151図	SH2101出土遺物①(1/4)	95
第117図	SK4025出土遺物(1/4)	68	第152図	SH2101出土遺物②(1/4)	95
第118図	SK4027実測図(1/30)	69	第153図	SH2102a実測図(1/60)	96
第119図	SK4027出土遺物(1/4)	69	第154図	SH2102a出土遺物(1/4)	97
第120図	SK4028実測図(1/30)	70	第155図	SH2106実測図(1/60)	98
第121図	SK4028出土遺物(1/4)	70	第156図	SH2106出土遺物①(1/4)	99
第122図	SX1211実測図(1/30)	70	第157図	SH2106出土遺物②(1/4)	100
第123図	SX1211出土遺物(1/4)	70	第158図	SH2106出土遺物③(1/4)	101
第124図	I-3区弥生時代前期包含層 遺物出土状況(1/50)	71	第159図	SH2106出土遺物④(1/4)	102
第125図	I-3区包含層出土遺物①(1/4)	72	第160図	SH2106出土遺物⑤(1/4)	103
第126図	I-3区包含層出土遺物②(1/4)	72	第161図	SH2107実測図(1/60)	105
第127図	包含層出土遺物①(1/4)	73	第162図	SH2107出土遺物(1/4)	105
第128図	包含層出土遺物② (1～4は2/3、他は1/4)	74	第163図	SH2108実測図と遺物 出土状況(1/60)	107
第129図	古墳時代前期～ 中期前半の遺構配置図(1/1,200)	76	第164図	SH2108出土遺物(1/4)	108
第130図	SD1111の位置(1/800)	77	第165図	SH2109・SH2110実測図(1/60)	109
第131図	SD1111a・SD1111b 遺物出土状況(1/80)	78	第166図	SH2109出土遺物①(1/4)	110
第132図	SD1111土層断面図(1/60)	79	第167図	SH2109出土遺物②(1/4)	111
第133図	SD1111b出土遺物①(1/4)	80	第168図	SH2305実測図(1/60)	113
			第169図	SH2305出土遺物①(1/4)	114
			第170図	SH2305出土遺物②(1/2)	114

第171図	SH2311実測図(1/60)	115	第203図	SK1108出土遺物①(1/4)	141
第172図	SH2311出土遺物(1/4)	115	第204図	SK1108出土遺物②(1/4)	142
第173図	SH2404実測図(1/60)	116	第205図	SK1108出土遺物③(1/4)	143
第174図	SH2404出土遺物 (1~3は1/4, 4は1/3)	116	第206図	SK1108出土遺物④(1/4)	144
第175図	SH3109実測図(1/60)	117	第207図	SK1108出土遺物⑤(1/4)	145
第176図	SH3109出土遺物 (1~4は1/4, 5は2/3)	117	第208図	SK1108出土遺物⑥(1/4)	146
第177図	SH3112実測図(1/60)	118	第209図	SK1108出土遺物⑦(1/4)	146
第178図	SH3112出土遺物①(1/4)	119	第210図	SK1110実測図(1/30)	147
第179図	SH3112出土遺物②(1/4)	120	第211図	SK1110出土遺物 (1は1/2, 2~7は1/4)	147
第180図	SH3112出土遺物③(1/4)	121	第212図	SK1113実測図(1/30)	148
第181図	SH3112出土遺物④(2/3)	121	第213図	SK1113出土遺物(1/4)	148
第182図	SH3203実測図(1/60)	122	第214図	SK2105実測図(1/30)	148
第183図	SH3203出土遺物(1/4)	122	第215図	SK2105出土遺物(1/4)	148
第184図	SH3205実測図(1/60)	123	第216図	SK3216実測図(1/30)	149
第185図	SH3205出土遺物① (絵画土器 1/4)	124	第217図	SK3216出土遺物(1/4)	149
第186図	SH3205出土遺物② (絵画土器 1/4)	125	第218図	SX3220実測図(1/40)	150
第187図	SH3205出土遺物③ (1~5は1/4, 6は1/6)	126	第219図	SX3220出土遺物(1/4)	150
第188図	SH3205出土遺物④(1/4)	127	第220図	SX4029出土遺物(1/4)	151
第189図	SH3205出土遺物⑤(1/4)	128	第221図	古墳時代中期後半~後期の遺構 (1/1200)	152
第190図	SH3205出土遺物⑥ (36・37・39・40は1/4, 38は1/2, 41は2/3)	129	第222図	SH2501実測図(1/60)	154
第191図	SH3206実測図(1/60)	130	第223図	SH2501出土遺物①(1/4)	155
第192図	SH3206出土遺物①(1/4)	131	第224図	SH2501出土遺物②(1/4)	156
第193図	SH3206出土遺物②(1/4)	131	第225図	SH2501出土遺物③(1/4)	157
第194図	SH4010実測図(1/60)	132	第226図	SH2501出土遺物④(1/4)	158
第195図	SH4010出土遺物 (1~7は1/4, 8は1/3)	133	第227図	SH2501出土遺物⑤(1/4)	159
第196図	SH4012実測図(1/60)	133	第228図	SH2501出土遺物⑥(2/3)	159
第197図	SH4012出土遺物①(1/4)	134	第229図	SH3107実測図(1/60)	160
第198図	SH4012出土遺物②(1/4)	135	第230図	SH3107出土遺物①(1/4)	161
第199図	SH4012出土遺物③(1/4)	136	第231図	SH3107出土遺物②(1/4)	162
第200図	SH4026実測図(1/60)	137	第232図	SH2101b出土遺物(1/4)	163
第201図	SH4026出土遺物 (1~7は1/4, 8は2/3)	137	第233図	SH2403・2410実測図(1/60)	163
第202図	SK1108実測図(1/30)	138	第234図	SH2403・2410出土遺物①(1/3)	163
			第235図	SH2403・2410出土遺物②(1/4)	164
			第236図	SH3204実測図(1/60)	165
			第237図	SH3204出土遺物(1/4)	166
			第238図	SH4002実測図(1/60)	166
			第239図	SH4002出土遺物 (1~22は1/4, 23・24は1/3)	167
			第240図	SH4004実測図(1/60)	168

第241図	SH4004出土遺物①(1/4)	168	第260図	SD1102実測図(1/40)	183
第242図	SH4004出土遺物②(1/4)	169	第261図	SK2202実測図(1/30)	183
第243図	SH4004出土遺物③(1/4)	170	第262図	SK2202出土遺物(1/4)	184
第244図	SX3209実測図(1/20)	170	第263図	SK2113実測図(1/30)	184
第245図	SX3209出土遺物(1/4)	170	第264図	SK2113出土遺物(1/4)	185
第246図	SX4011実測図(1/20)	171	第265図	SK2304実測図(1/30)	186
第247図	SX4011出土遺物(1/4)	171	第266図	SK2304出土遺物(1/4)	186
第248図	SX3101実測図(1/40)	172	第267図	SX4001実測図(1/20)	186
第249図	SX3101出土遺物①(1/4)	173	第268図	SX4001出土遺物(1/3)	186
第250図	SX3101出土遺物②(1/4)	174	第269図	I-3区柱穴山十遺物(1/3)	187
第251図	SK3102実測図(1/30)	174	第270図	SD1109出土遺物(1は1/3、2は1/2)	187
第252図	SK3102出土遺物(1/4)	175	第271図	その他の遺物(1/3、3の刻印は実大)	188
第253図	包含層等出土遺物① (土器1 1/4)	176	第272図	時期不明の遺構(1/1,200)	189
第254図	包含層等出土遺物② (土器2 1/4)	177	第273図	SK1107実測図(1/30)	190
第255図	包含層等出土遺物③ (土器3 1/4)	178	第274図	SK1114実測図(1/30)	190
第256図	包含層等出土遺物④ (土製品 1/3)	179	第275図	SD1201出土遺物(1/4)	190
第257図	包含層等出土遺物⑤ (石製品 1~13は1/2、 14~18は1/3)	180	第276図	東田家遺跡出土の動物遺体①	193
第259図	古代・中世・近世の 遺構(1/1,200)	182	第277図	東田家遺跡出土の動物遺体②	194
			第278図	東田家遺跡における遺構の変遷① (1/1,500)	196
			第279図	東田家遺跡における遺構の変遷② (1/1,500)	197
			第280図	SH3205・SH2501出土遺物(補遺) (1/4)	200

表 目 次

第1表	東田家遺跡調査一覧	10	第7表	古墳時代前期～中期前半の 遺構一覧	76
第2表	東田家遺跡第3次調査 調査面積一覧	13	第8表	古墳時代中期後半～後期の 遺構一覧	152
第3表	東田家遺跡第3次調査 遺構一覧①	14	第9表	古代・中世・近世の遺構一覧	182
第4表	東田家遺跡第3次調査 遺構一覧②	15	第10表	時期不明の遺構一覧	189
第5表	弥生時代前期末の遺構一覧	21	第11表	東田家遺跡から採集された 動物遺体の同定結果	192
第6表	古墳時代前期～中期前半に おける遺構の時期区分(細別)	75			

写真図版目次

写真図版1	203	SK4008 SK4009 SK4013 SK4014	
東田室遺跡第3次調査全景		写真図版12	214
写真図版2	204	SK4015 SK4015遺物出土状況近景	
東田室遺跡第3次調査Ⅰ-1区		SK4015-4016 SK4019	
東田室遺跡第3次調査Ⅰ-2・Ⅰ-3区		SK4017 SK4017遺物出土状況近景	
写真図版3	205	SK4018 SK4018獣骨出土状況	
東田室遺跡第3次調査Ⅰ-1~3区(東から)		写真図版13	215
東田室遺跡第3次調査Ⅱ-1区		SK4020 SK4028	
写真図版4	206	SK4021~4024 SK4023 SK4027	
東田室遺跡第3次調査Ⅲ-1・Ⅲ-2区		SK4027遺物出土状況近景	
東田室遺跡第3次調査Ⅲ-1区		Ⅲ-1区遺物出土状況近景①	
写真図版5	207	Ⅲ-1区遺物出土状況近景②	
SK1101a・SH1101b・SH1101c遺物出土状況		写真図版14	216
SK1101a・SH1101b・SH1101c完掘		SD1111検出状況 SD1111遺物出土状況	
SK1103 SK1103完掘		写真図版15	217
SK1104 SK1106		SD1111遺物出土状況 SD1111土層	
SK1112検出状況 SK1112完掘		写真図版16	218
写真図版6	208	SH1201・SK1203 SH1301	
SK1203 SK1203石礎出土状況		SH1201遺物出土状況 SH2101遺物出土状況	
SK1204 SK1205・SK1206		SH2101完掘状況 SH2102遺物出土状況	
SK1207 SK1207筋線甲出土状況		SH2102完掘状況	
写真図版7	209	写真図版17	219
SK1208 SK1209		SH2106遺物出土状況 SH2106調査風景	
SK1210 SK1210石籬出土状況		SH2106完掘状況 SH2107遺物出土状況	
SK2114 SK2115		SH2107完掘状況	
SK2308 SK2313		写真図版18	220
写真図版8	210	SH2108検出状況 SH2108遺物出土状況	
SK2314 SK2315 SK2316 SK2401		SH2108遺物出土状況 SH2108完掘状況	
SK2407 SK3103 SK3104 SK3111		写真図版19	221
写真図版9	211	SH2305遺物出土状況 SH2305完掘状況	
SK3113 SK3201 SK3114		写真図版20	222
SK3114遺物出土状況近景		SH2305遺物出土状況 SH2305鉄族出土状況	
SK3202 SK3207 SK3208		SH2305銅族出土状況 SH2311遺物出土状況	
SK3207・SK3211・SK3212		SH2311完掘状況	
写真図版10	212	写真図版21	223
SK3211 SK3213 SK3214 SK3215		SH3112遺物出土状況 SH3112完掘出土状況	
SK3217・SK3218 SK3219 SK3221		SH3112遺物出土状況	
SK3222		写真図版22	224
写真図版11	213	SH3203遺物出土状況 SH3203完掘状況	
SK4003 SK4005 SK4006 SK4007		SH3205検出状況	

写真図版23	225	写真図版35	237
SH3205遺物出土状況 SH3205完掘状況		SK4023出土遺物 SK4027出土遺物	
写真図版24	226	石苞丁	
SH3205遺物出土状況		写真図版36	238
SH3205絵画土器出土状況		SD1111b出土遺物 SD1111a(X6区)出土遺物①	
写真図版25	227	写真図版37	239
SH3206 SH4010鉄剣出土状況		SD1111a(X6区)出土遺物②	
SH4010遺物出土状況 SH4010完掘状況		写真図版38	240
SH4012遺物出土状況 SH4012完掘状況		SD1111a(X6区)出土遺物③ SD1111a(X7区)出土遺物	
SH4026遺物出土状況 SH4026完掘状況		写真図版39	241
写真図版26	228	SH2101出土遺物 SH2102a出土遺物	
SK1108遺物出土状況		写真図版40	242
写真図版27	229	SH2106出土遺物①	
SK1110遺物出土状況		写真図版41	243
SK1110紡錘車出土状況		SH2106出土遺物②	
SK1113 SK2105 SK3216 SX3220		写真図版42	244
写真図版28	230	SH2106出土遺物③	
SH2501遺物出土状況 SH2501完掘状況		写真図版43	245
SH2501垂飾品出土状況		SH2107出土遺物 SH2108出土遺物	
写真図版29	231	写真図版44	246
SH3107遺物出土状況		SH2109出土遺物	
SH2403・2410遺物出土状況		写真図版45	247
SH2403・2410管玉出土状況		SH2305出土遺物 SH2311出土遺物	
写真図版30	232	SH2404出土遺物	
SH3204 SH3204獸骨出土状況		写真図版46	248
SH4002 SH4002土錘出土状況		SH3112出土遺物①	
SH4004検出状況 SH4004調査状況		写真図版47	249
SH4004カマド検出状況		SH3112出土遺物② SH3203出土遺物	
SH4004遺物出土状況		写真図版48	250
写真図版31	233	SH3205出土絵画土器	
SX3209 SX3101 SX4011 SK3102		写真図版49	251
写真図版32	234	SH3205出土遺物①	
SK2202遺物出土状況 SK2202完掘状況		写真図版50	252
SK2113遺物出土状況 SK2113完掘状況		SH3205出土遺物② SH3206出土遺物	
SK2304 SK2304遺物出土状況		写真図版51	253
SX4001遺物出土状況		SH4012出土遺物	
写真図版33	235	写真図版52	254
SK1103出土遺物 SK1106出土遺物		SK1108出土遺物	
SK1208出土遺物 SK2201出土遺物		写真図版53	255
SK2308出土遺物		SK3220出土遺物 SH2501出土遺物①	
写真図版34	236	写真図版54	256
SK2401出土遺物 SK3111・SK3114出土遺物		SH2501出土遺物② SH3107出土遺物	
SK3202出土遺物 SK3208出土遺物		写真図版55	257
SK3207出土遺物 SK4005出土遺物		SH2403・2410出土遺物 SK2113出土遺物	
		SX4001出土遺物	

第1章 経過

第1節 調査の経過

本書に収録した東田窪遺跡は、大分市田室町に所在し、弥生時代前期末と古墳時代前期から中期前半の集落を主体とした遺跡である。東田窪遺跡周辺では、戦後間もない時期の水路敷設工事などに伴って弥生土器などが出土し、この頃にはすでに遺跡の存在が知られていたようである。1949年（昭和24年）には、大分師範学校歴史科による発掘調査で弥生時代後期の遺物包含層が確認され、遺跡の存在が周知されることになった。1993年に刊行された『大分県遺跡地図』にも、埋蔵文化財としての取り扱いを受ける周知遺跡として登録されている。

大分県周辺
総合整備
事業

2002年になると、大分県周辺総合整備事業が本格化し、その事業範囲が東田窪遺跡周辺にも及んできた。大分県周辺総合整備事業とは、国・大分県・大分市が一体となって進めている大分駅南側地域の再開発事業で、その内容は「大分駅付近連続立体交差事業」・「大分駅南上地区画事業」・「庄の原佐野線（地域高規格道路大分中央幹線道路）等関連道路事業」という大きな3つの柱がある。このうち、「大分駅付近連続立体交差事業」では、大分駅の東西に敷設されているJR日豊本線・JR豊肥本線・JR久大本線の鉄道を高架化することによって、鉄道を挟んだ南北市街地間の交通の円滑化と踏切事故等の危険性の解消、および従来鉄道によって分断されていた南北市街地の一体的発展の促進などを目的としている。事業対象地域は、日豊本線3.65km・豊肥本線1.60km・久大本線1.92kmの総延長7.17kmにおよぶ。事業の実施期間は、1996年（平成8年）から2010年（平成22年）までが予定されている。

記録保存を
開始

大分県教育委員会では、大分県周辺総合整備事務所の委託を受けて、1998年（平成10年）より事業対象地における埋蔵文化財の有無に関する試掘・確認調査と遺跡の発掘調査を行い、現在に至っている。東田窪遺跡では2001年（平成13年）10月に大分駅付近連続立体交差事業対象予定地の確認調査を実施し、発掘調査（本調査）対象地点を日豊本線旧軌道敷き南側の長さ約240m、幅約10～15mに絞り込んだ。そして、2002年（平成14年）3月から翌2003年（平成15年）3月にかけて、記録保存を前提とした発掘調査を実施した。

第2節 発掘作業の経過

東田窪遺跡
第3次調査

東田窪遺跡の発掘調査（本調査）は、平成13年度と平成14年度の2年度にわたり実施した。平成13年度は年度末に近い2002年3月から約1箇月間、IV区を対象として発掘調査を実施した。平成14年度は年度当初の準備期間を経て、2002年5月から2003年3月まで、I～IV区を対象として発掘調査を実施した。なお、大分県教育委員会の発掘調査期間とほぼ併行して、同じ東田窪遺跡として周知されている範囲の中で、大分市教育委員会が都市計画道路田室町昔日線の建設に伴う発掘調査を実施していた。そこで県教委と市教委の発掘担当者と協議を行い、県教委の調査地点を東田窪遺跡第3次調査、市教委の調査地点を東田窪遺跡第2・4～11次調査と呼称するようにした。県教委の調査組織等について、以下に記す。

遺跡名：東田窪遺跡第3次調査 所在地：大分市田室町
 調査期間：平成13年度 平成14年（2002年）2月26日～3月22日
 平成14年度 平成14年5月7日～平成15年（2003年）3月14日
 調査面積：約1,320㎡
 事業主体：大分県周辺総合整備事務所 調査主体：大分県教育委員会

第3節 整理作業の経過

調査組織（役職は当時）：

平成13年度	総括	工藤 正徳	（大分県教育庁文化課長）
	調査主任	坂本 嘉弘	（大分県教育庁文化課主幹 発掘調査大型事業担当）
	調査担当	青田 寛	（ 同 主査）
		中田 裕樹	（ 同 囑託）
平成14年度	総括	岩尾 康晴	（大分県教育庁文化課長）
	調査指導委員	小田富士雄	（福岡大学教授）
	調査主任	栗田 勝弘	（大分県教育庁文化課主幹 発掘調査大型事業担当）
	調査担当	吉田 寛	（ 同 主査）
		松田幸之助	（ 同 囑託）
		山崎 文子	（ 同 囑託）

なお、平成14年度におけるⅢ-2区の調査では、古墳時代中期前半の住居跡SH3205から絵画土器が出土した。当該資料の出土と発掘現場の状況は、地元の新聞紙上にも取り上げられ、報道がなされた。また、2003年（平成15年）1月には福岡大学教授小田富士雄氏に調査指導委員を依頼し、絵画土器をはじめ、遺跡全体の調査指導をいただいた。さらに、同年1月26日（日曜日）には、一般県民を対象にして現地説明会を開催した。

現地説明会では約200人の参加があり、発掘現場とともに絵画土器も一般公開した。



現地説明会風景

絵画土器

調査指導委員

現地説明会

第3節 整理作業の経過

東田室遺跡の発掘調査で出土した遺物は整理用コンテナで約450箱と膨大な量ののぼり、その一部については、発掘調査と併行して発掘現場にて洗浄・注記・接合作業を行った。現地での発掘調査終了後、東田室遺跡の遺物整理は、大分駅周辺総合整備事業に伴う発掘調査と整理作業の全体計画の中で、一時中断されることとなった。そして、平成18年度になって、大分県教育庁埋蔵文化財センターで出土遺物の整理作業を再開し、さらに発掘現場において未整理となっていた約200箱分の洗浄・注記を株式会社雅企画に、出土遺物について約500点の実測・トレース・写真撮影をアジア航測株式会社・有限会社九州文化財リサーチに委託した。残りの出土遺物の実測や遺構図の整理・作成等については、平成18年度から平成19年度にかけて、埋蔵文化財センターにおいて直営で行った。さらに、鉄器類の保存処理については平成18年度末から19年度にかけて大分県立歴史博物館で行い、獣骨の同定など自然科学的分析については平成19年度に株式会社パレオ・ラボに委託した。

委託と直営

鉄器類の保存処理

自然科学的分析

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

九州の東岸に位置する大分県は、その複雑で変化に富んだ地勢に規制される特徴的な小地域性を育んでいる。高橋徹氏は1989年に大分県における弥生時代の地域区分を概観する中で、これらの小地域性を「歴史的に形成された特定の地域」⁽¹⁾と呼称し、大分県下を宇佐・中津・豊後高田を中心とした地域（第1地域）、岡東半島東部から佐賀関半島・別府湾沿岸・臼杵・佐伯を中心とする豊後水道沿岸（第2地域）、大野川川上・上流域（第3地域）、日田・玖珠盆地を中心とする筑後川上流域（第4地域）に大別した。

東田家遺跡が所在する現在の大大分市は、上記の第2地域に位置しており、年間を通じて温暖な気温と雨の少ないことを特徴とする瀬（内性の気候帯に属している。また、大大分市周辺は別府湾沿岸に位置することから、古くより近畿・瀬戸内地域と交流をもち、東九州の歴史の形成に重要な役割を担ってきた地域のひとつである。大大分市は大分県の単庁所在地で、現在の人口は約42万人を数え、1997年には地方自治法による「中核市」に指定された地方都市である。

東田家遺跡は、大分川下流域に形成された標高約4mの沖積低地の微高地上に立地する。遺跡の西側には別府湾に注ぐ昆沙門川（住吉川）という小河川があり、遺跡の西限となっている。南側には上野台地、西側には駄原台地といった洪積台地が位置している。遺跡が立地する地点の周辺には、古代・中世以降、豊後国府の国衙関連施設や大友氏の守護所が設置され、また近世には譜代大名大給松平氏2万2千石の府内城下町が建設されるなど、現在に至る大大分市の発展の基礎となった地域であった。

第2節 歴史的環境

東田家遺跡が位置する地点を中心に半径約2kmの円を描くと、大分川左岸の沖積低地・上野台地、さらには中世の大友府内町跡、近世の府内城下町までを含む範囲となる。当該地域は大大分市街地の再開発事業に伴う発掘調査が頻繁に行われている地点で、考古学的な新知見が数多く提出されている。この状況を踏まえて、時代ごと遺跡ごとに、当該地域における考古学的調査の成果を概観してみたい⁽²⁾。

旧石器・
縄文時代

旧石器・縄文時代については、良好な遺跡が確認されていない。ただ、後述する古国府上七曾子遺跡・若宮八幡宮遺跡・園遺跡などで縄文時代後晩期の包含層や土器が確認されているほか、中世大友府内町跡・近世府内城下町跡の整地層中から、二次的に移動した状態で縄文時代後晩期の土器片が出土することがあり、今後いずれかの地点で当該時期の良好な遺跡が発見される可能性が高いと考えられる。

弥生時代・
古墳時代

弥生時代・古墳時代になると、良好な集落遺跡の存在が知られてくる。古国府上遺跡群上七曾子遺跡⁽³⁾では弥生時代前期前半から中葉の土器が出土する溝が発見され、初期の水田耕作に関わる遺構だと考えられている。本書に収録した東田家遺跡は弥生時代前期末と古墳時代前期の遺構が主体となり、集落を区画する古墳時代前期の溝も確認されている。東大遺跡B地区⁽⁴⁾では弥生時代後期前半の土坑が発見された。この遺跡からは、二次的に移動した状態ではあったが、後漢鏡片も採集されており、この遺跡の周辺に拠点的な集落の存在が予測される。若宮八幡宮遺跡⁽⁵⁾では古墳時代後期の工作り工房を伴った集落跡が確認され、工房である堅穴住居跡の内部から、近畿地方より搬入されたと考えられる大阪湾沿岸産製塩土器が出土した。また、上野台地上にも弥生時代中期の遺跡が立地する。大大分美術館の建設に伴って調査が行われた上野遺跡群⁽⁶⁾では、当該時期に比定される集落を区画するV字溝（環濠）・住居跡・貯蔵穴・内部に掘立柱建物をもつ方形周溝

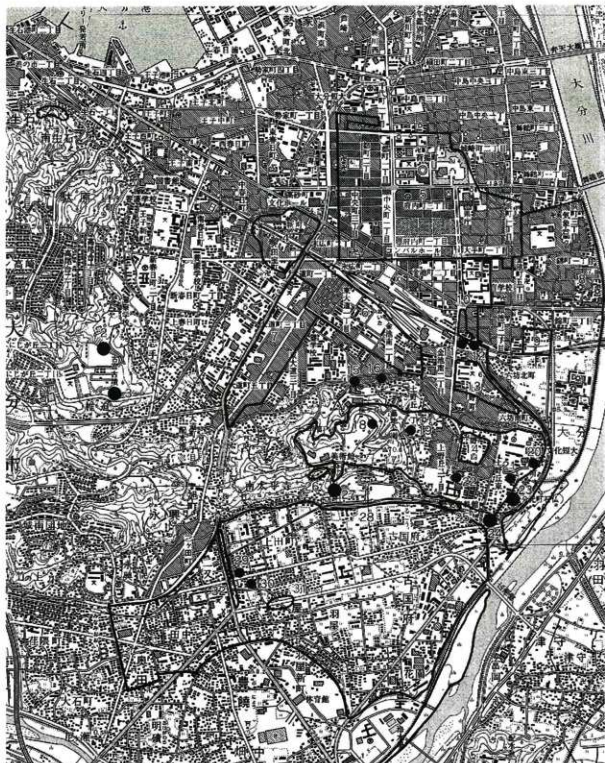
古墳

遺構などが発見された。特に、方形周溝遺構の埋土からは祭祀用の小型土器や丹塗り土器、鉄製ヤリガンナなどが出土しており、集落内における特殊な祭祀遺構としての位置づけがなされている。

古墳時代の墳墓である高塚古墳や横穴墓については、上野台地および駄ノ原・永興台地に存在する。永興台地上に位置する亀甲古墳（龜甲山古墳）⁽⁷⁷⁾は、豊後地域で三角縁神祇鏡を出土した唯一の前期古墳で、その発見と調査は1911年（明治44年）に遡る。主体部は箱形の石積であるが、古い時期の調査であるため、墳丘の形状や遺物の出土状態等も不明な点が多く、古墳の名称や詳細な所在位置についても、研究史上混乱をきたしていた。最近、木村幾太郎氏によって古墳の名称や所在地についての再検討がなされた⁽⁷⁸⁾が、残念ながら古墳の推定所在地は宅地造成によって完全に消滅している。山上遺物は東京国立博物館に所蔵されており、その中で甕については三角縁波文帯三神三献鏡と仿製重圓文鏡が存在する。船載鏡と仿製鏡を同時に副葬する古墳は、古墳時代前期でも新相に位置づけられるものと推定される。このような前期古墳と関連する集落遺跡としては、本書に収録した東川宮遺跡が指摘され、亀甲古墳と同時期の4世紀後半代にも遺跡の最盛期が継続していることが確認できている。上野台地の東端部に位置する大臣塚古墳は、江戸時代前期の寛永12年（1635）に大風によって墳丘上の巨松が倒れ、埋葬主体である石棺が露出したという古記録がある。当時の府内藩主日根野吉明は、家臣の木口與左衛門・小倉九郎右衛門に命じて石棺を開削させ、石棺内から人骨・太刀・甲冑が出土したことを踏まえ、これが伝説上の「百合若大臣」の墓であることを推定した。その後、山上遺物などの調査を作成し、遺物を石棺内に埋め戻した後、墳頂部に石棺に石碑を建立した（『豊府聞書』）⁽⁷⁹⁾。これらの処置は元禄5年（1692）に徳川光圀が塙本県上塚塚古墳・下塚塚古墳⁽⁸⁰⁾で行った調査に先立つこと57年前の出来事であり、近世前期段階での古墳調査と保護の事例としても注目すべき事象であろう。当該古墳は1997年に大分県教育委員会が実施した確認調査で円筒埴輪片が出土し、その特徴から4世紀末～5世紀初頭の前方後円墳と考えられている。近年、発掘調査が実施された永興千人塚古墳⁽⁸¹⁾は、全長約56mの前方後円墳で、主体部は未調査のため不明であるものの、墳丘上に残存していた砺り抜き式石棺や出土遺物から5世紀後半代の所産と推定されている。また、永興千人塚古墳の北西約800mに位置する古宮古墳⁽⁸²⁾は、九州地方唯一の畿内系列貫式横溝構造を有する石棺系石室を有する終末期古墳で、石室構造と出土遺物から、古墳の年代は7世紀後半代に比定されている。被葬者は大和政権と密接に関わった在地の首長と考えられており、具体的な人物像として、『日本書紀』天武即位前紀に登場し、壬申の乱（672年）で活躍する大分君岩尺・稚田のいずれかが想定されている。

古代（奈良・平安時代）

古代（奈良・平安時代）の遺跡群の展開も興味深い。近年、豊後国府の中心施設が、上野台地周辺に設置されていたことを推定する仮説が有力になりつつある。従来、豊後国府は大分側左岸地域で、上野台地南側に所在する大分市古国府地区の沖積低地上に想定されてきたが、この地域では国府関連施設が存在を考古学的に確認できない状況が長く続いている⁽⁸³⁾。近年の古国府地区の発掘調査では、羽屋井戸遺跡・園遺跡などの成果が目玉される。とくに、羽屋井戸遺跡⁽⁸⁴⁾では長大な規模の独立柱建物や門状遺構・欄列などが検出され、それらの発掘年代が7世紀後半から8世紀初頭に遡ることから、評衙関連の遺構である可能性が想定されている。また、園遺跡⁽⁸⁵⁾では一定のまとまりをもつ独立柱建物や倉庫跡が確認されているが、出土遺物からは詳細な時期を確定できず、建物群の一部は古墳時代後期に遡る可能性もある。このように古国府地区では、今後の調査においても、7世紀後半から8世紀初頭に比定できる評衙関連施設の存在は想定されうるものの、8世紀以降の国衙関連施設が存在は、現状では困難であるという評価がなされつつあるのである。その一方、1997年に大分県教育委員会が実施した上野遺跡群竜王畑遺跡⁽⁸⁶⁾の調査では、7世紀後半から10世紀代にかけてのまとまった大規模建物群が検出された。特に、9世紀代の遺構群には、築地塙を構成すると推定される2条の溝と築地塙の途切れる部分（門跡か？）、築地塙の南側に展開する



1. 生石横穴瓦群 2. 亀甲古墳 3. 古宮古墳 4. 東田室遺跡 5. 府内城・城下町遺跡 6. 大運道跡群 7. 大道条里跡 8. 中世大友府内町跡 9. 大友氏館跡 10. 南金池遺跡 11. 上野町遺跡 12. 観徳寺遺跡 13. 表宮八幡宮遺跡 14. 上原館跡 15. 東大運道跡(A地区) 16. 東大運道跡(B地区) 17. 上野遺跡群 18. 飯崎舞穴塚 19. 上野瀬寺跡 20. 大臣塚古墳 21. 上野滝王館遺跡 22. 上野遺跡群上野丘高校地区 23. 大分元町石仏 24. 岩屋寺石仏 25. 岩屋寺横穴瓦群 26. 南太平寺横穴瓦群 27. 南太平寺伽藍石仏 28. 古国府遺跡群 29. 古国府遺跡群上七曾了迹 30. 羽鳥井戸跡 31. 園道跡 32. 古国府遺跡群(上芦原地区・土毛地区・甲斐本地区)

第1図 東田室遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000)

掘立柱建物などが、一定方位に沿って規画的に配置されている状況が看取され、これらが「国司館」の一部であった可能性が考えられている。竜王畑遺跡は上野台地の東端部に位置しており、遺構の展開がさらに西側に延びることが想定されることや遺跡の存続期間が7世紀後半から10世紀と、奈良時代を前後する広範な時期におよんでいることなどが特記される。この調査を契機として、上野台地上に奈良時代以降の豊後国府関連施設の存在を想定する考え方が有力になってきた。翻って考えてみれば、上野台地上に豊後国府の国衙域を想定する考えは、竜王畑遺跡の調査以前にも存在した。1987年（昭和62年）、大分市史編纂委員会は上野台地の地模図を検討する中で、平安時代後期に「高国府」と呼ばれた上野台地の中央南端部、現在の⁽¹⁷⁾上野丘高等学校付近に国衙域を想定している。ただ、大分市史の解説では、豊後国府が古国府から上野台地上に移転したのは、「11世紀の中ごろ」以前としており、奈良時代・平安時代前期の国府はやはり古国府地域に考えていたようである。2000年になると、上野丘高等学校の校舎改築に伴い、大分県教育委員会によって、大分市史による国衙想定地域内の一部の発掘調査が行われた（上野遺跡群大分上野丘高校地区⁽¹⁸⁾）。当該調査は豊後国府の所在地問題に必ずや一石を投じるものとして大きな期待がもたれたが、遺構残存状態の悪さと調査面積の制約から、極めて短期間での調査終了となった。豊後国府の所在地問題は、いまだ未解決の課題として今後に残されている。

古代寺院

古代寺院に関する調査の進展もあった。上野台地の一面からは百済系単弁八葉軒丸瓦などの古代瓦が採集されることが知られており、古代寺院（上野廣寺⁽¹⁹⁾）の存在が想定されている地点があった。1997年、集合住宅建設に伴う発掘調査では、8～9世紀に比定される基礎遺構と基礎遺構上に梁行4間・桁行5間+ α の4間庇大型礎石建物が発見され、当該遺構が古代寺院を構成する堂宇の一部であることが判明した。軒丸瓦には百済系単弁八葉軒丸瓦・複弁七葉蓮華文軒平瓦の2種がみられ、軒平瓦にも均整草文軒平瓦と豊後国分寺創建時所用瓦と同形の扁行唐草文軒平瓦の2種が認められた⁽²⁰⁾。しかしながら、御藍配置や庇付大型建物の詳細な存続年代、軒瓦の組み合わせなど、現状で不明な点も多く、正式報告書の刊行が待たれる。また、基礎遺構の下層には7世紀後半代の掘立柱建物遺構も複数確認されており、これらの建物群の性格も今後の課題となる。

上野台地北側の沖積低地上では、近年、金池南遺跡⁽²¹⁾が発掘調査され、8世紀末から9世紀前半にかけての集落が確認された。当該遺跡からは、削り抜きの井戸枠を有する井戸や使塩用製塩土器が多量に廃棄された土坑などが検出されている。また、青銅製杓子の注口部破片など、特殊な遺物の出土もある。南金池遺跡と近接し、一連の遺跡である可能性が高い上野町遺跡⁽²²⁾でも、自然水路と思われる遺構の内部から、多量の大形土鍾をはじめ、円形硯や墨書土器、長沙窯系黄釉褐彩水注などが出土した。上記の古代（奈良・平安時代）集落の様子は、豊後国府周辺域の位置関係を反映するもので、大分川河口部の水上交通における拠点的な集落である可能性が指摘されている。また、中世大友府内町跡第7次調査区⁽²³⁾では、中世の遺構群の下層で、大型の掘立柱建物群が発見された。建物群の存続時期は8世紀末頃から9世紀中葉に比定されており、大分川の渡河点に設けられた交通路に関わる地方官衙と考えられている。

11世紀後半以降、上野台地西部とその北・東側の沖積低地は、「高（隆）国府・勝津留」⁽²⁴⁾の名称で呼ばれるようになる。13世紀になると、大友氏がこの地域の支配権を掌握するようになり、この高国府勝津留の割譲を迫る文書が散見されるようになる。大友3代頼泰は、建長6年（1254）から文永6年（1254）の間には確実に関東から豊後に南向したといわれており、この点について渡辺滝夫氏は「頼泰が高国府を割譲させたことは守護所設置を前提」⁽²⁵⁾にしたものと解釈している。従って、これらの考え方を妥当なものとする、上野台地もしくはその北・東側の沖積低地上に大友氏の初期の守護所が想定されることになる。この初期の守護所の位置については、現在大分市順

初期の
守護所

徳町で発掘調査が進行している「大友氏館跡」あるいは上野台地上に位置する「上原館跡」を想定する考えがある。しかし、大友氏館跡の発掘調査では、15世紀前半から16世紀後半代までの整地層や大型掘立柱建物・庭園遺構等の遺構群が確認されるのみで、13世紀代に遡る遺構は確認できていない。同様に上原館跡でも、館内部の調査データが不足しているものの、外郭土塁の断ち割り調査などによって3段階の変遷が認められ¹⁹⁰⁾、一番古い時期でも15世紀を大きく遡らないことが明らかにされている。よって、このふたつの館跡が13世紀代に遡る施設である可能性は低く、初期の守護所はまた別の地点に求められなければならない。逆に、上野台地南側に位置する古国府地区の沖積低地では、古国府字「明」（明遺跡）において13世紀代に比定される住穴群、井戸、大型罌穴（池？）、区画溝が発見されている¹⁹¹⁾。発掘調査は1978年から1984年にかけて数次にわたる調査が行われており、溝の規模や庭園遺構を思わせるような大型罌穴（池？）のあり方は、これらが初期守護所の関連遺跡または当該時期の上級武士の邸宅跡である可能性を想起させる。しかしながら、当該遺跡は古代の豊後国府を探るという当時の考古学的な問題意識の中で、ネガティブな調査成果として提出された経緯もあり、調査時点で遺跡の的確な評価が行われたとは言い難く、またなによりも発掘調査の成果がほとんど公表されていないという大きな制約がある。さらに、当該遺跡周辺に初期の守護所を想定するとしても、文献に記載された「高国府勝津宿」の比定地問題や大友氏の豊後下向との関連についても再検討を行わなければならない、問題は山積している。大友氏の初期守護所の所在地についても、大きな検討課題として、今後に残されている問題である。

大友氏遺跡
・中世大友
城下町跡

戦国期で最も注目されるものは、大友氏遺跡と中世大友府内町跡である。大友氏遺跡の中に包括される「大友氏館跡」は1998年に大規模な庭園遺構が確認されて以来、2町四方の規模を有する大友氏の戦国期館跡と認識され、同庫補助事業による発掘調査が継続して実施されている¹⁹²⁾。近年では「旧万寿寺跡」とともに、「大友氏遺跡」として国指定史跡に認定され、2007年末現在、大友氏館跡では20次、旧万寿寺跡では3次におよぶ発掘調査が実施・計画されている¹⁹³⁾。中世大友府内町跡は、大分川左岸地域の南北約2.2km、東西約0.7kmの範囲に立地する都市遺跡で、大分駅周辺総合整備事業や一般国道10号古国府拡幅事業など、近年の再開発事業に伴い、81次にわたる発掘調査が行われている。1996・1997年に実施された第1～3次調査では、幅約10mにおよぶ東西道路や備前焼大甕を並べた「甕倉」遺構などが検出された¹⁹⁴⁾。甕倉内の大甕やその掘形から、火災によって二次的に被熱した陶磁器類が多量に出土し、これが天正14年(1586)12月の陸奥島津氏による府内侵攻時の遺物群であることが想定された。出土した陶磁器の中には、備前や信楽など国産の陶器とともに中国・朝鮮をはじめ、タイ・ベトナム・ミャンマーなど東南アジア産陶磁も認められ、大友21代義統(宗麟)の庇護のもとで行われた南蛮貿易の実態を物語る考古資料として、重要視されている¹⁹⁵⁾。その他、大分県教育委員会が行った発掘調査では、キリスト教会である「ダイウス堂」に付属すると推定される墓地の調査¹⁹⁶⁾や万寿寺の北¹⁹⁷⁾・東側区画とみられる堀の検出など、多大な調査成果が提出されている。特に、大友氏館跡正面の大路(第2南北街路)沿いに町屋の遺構群が展開する¹⁹⁸⁾など、日本列島内の中世都市では従来知られていなかった都市景観が復元されつつあり、その調査成果は全国的にも大きな注目を集めている。

近世府内
城下町

大友氏は22代義統の時期になると、急速に衰退を遂げる。文禄2年(1593)、大友義統は文禄の役における朝鮮半島での失態を理由に、豊臣秀吉により豊後国を改易される。その後、大友領国であった豊後は複数の豊臣系大名によって分割統治されることになる。そのうちの大部分には早川長敏、次いで福原直高が入部し、福原直高は新たに大分川河口付近の「荷落」（現在の大分市荷揚町）の地に、近世城郭としての府内城の建設に着手する。関ヶ原の戦い（1600年）以後、徳川政権に移行した後に府内藩主となるのは、竹中重利である。慶長6年（1601）、豊後高田から転任した竹中重利は府内城の増改築を行い、翌年の慶長7年（1602）には旧府内から新しい近世府内城下町へと

町の移転を行う⁽²¹⁾など、近世府内城と城下町の整備に尽力した。さらにその後、寛永11年（1634）に日根野吉明、万治元年（1658）に大給松平忠昭と城主が交替し、以後鹿澤藩領に至るまで大給松平氏が府内藩2万2千石を領有し、10代にわたる藩主を輩出した。近世府内城町跡（府内城・城下町跡）についても、2007年9月末現在、大分県教育委員会・大分市教育委員会によって、18次にわたる発掘調査が行われ、現在に至っている。

- 註(1) 高橋徹「大分の弥生時代」（『大分県史』歴史編 1989年）15頁
- (2) 本芝は、吉田寛「筑跡の立地と環境」（『上野町遺跡・駒徳寺遺跡 大分県付近連続立体交差事業に伴う地域文化財発掘調査報告書1-1』大分県文化財調査報告書164冊 2006年）に追加・訂正を行って作成した。
- (3) 大分市教育委員会「古川町地跡跡・七竹子遺跡・共同住宅建設事業に伴う発掘調査報告書」（2003年）
- (4) 大分市教育委員会「東大道路跡（B地区）1区の歴史群建設事業に伴う地域文化財発掘調査報告書（1）-」（大分県文化財調査報告書145冊 2002年）
- (5) 大分市教育委員会「豊宮八幡宮遺跡第1次調査～上野ヶ丘中学の校舎建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」（2006年）
- (6) 横塚和夫「上野遺跡群」（『大分県文化財年報3～平成3年度～』（大分市教育委員会 1992年）
- (7) 日暮千鶴軒「大分三芳の古墳発見」（『考古学雑誌』第1巻第9号 1911年）
- (8) 木村貴多郎「大分市亀甲・墳跡の所在について」（『おひいた考古』第11集 1999年）
- (9) 大分市史編纂委員会『大分市史』（上巻 1995年）472・473頁参照。
- (10) 藤原忠・大和久徳平「那須城跡と・中津古墳の調査」（宮川弘文館 1986年）
- (11) 大分市教育委員会「永高千人塚古墳発掘調査報告書 漢南遺跡群第3次調査-」（大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集 2002年）
- (12) 大分市教育委員会「豊宮史跡古宮古墳保存修理事業報告書」（1996年）
- (13) 横塚和夫「豊宮園神定地周辺発掘調査-大分市川内区・河原地区の調査から-」（『大分県地方史』第117号 大分県地方史研究会 1985年）
- (14) 坪塚幸也・松崎潤一「豊後国府推定地周辺の発掘調査II 羽原・井戸遺跡の調査から-」（『大分県地方史』第163号 大分県地方史研究会 1996年）
- (15) 大分市教育委員会「熊鷹第一町市川區道路古園木ノ上線改良工事に伴う発掘調査報告書」（1992年）
- (16) 高橋信武「上野遺跡群亀王塚遺跡の発掘調査-豊後国府内城遺跡の発見-」（『大分県地方史』第173号 大分県地方史研究会 1999年）
- (17) 大分市史編纂委員会『大分市史（中巻）付録1-上野各地の地籍図1』（『大分市史』中巻 1987年）
- (18) 大分県教育委員会「上野遺跡群大分上野丘高校地区 大分上野丘高校管理棟建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」（大分県文化財調査報告書第123冊 2001年）
- (19) 小川富太郎「百濟系卑弥呼瓦葺・その1」（『史叢』96 1966年）
 （後）『九州考古学研究会 歴史時代編』学生社 1977年に収録
 また、1989年に大分市教育委員会が金剛立成寺遺跡で発掘した発掘調査でも、中庭の遺構から掘入の状態で古代瓦が多数に出た。
 大分市教育委員会「上野遺跡 金剛立成寺遺跡における発掘調査報告書」（1990年）
- (20) 横塚和夫「上野遺跡（上野宮寺）」（『大分県埋蔵文化財調査年報』vol.10 1998年度 大分市教育委員会 1999年）
 藤岡昆二「上野遺跡群（上野宮寺2次調査）」（『大分県埋蔵文化財調査年報』vol.16 2004年度 大分市教育委員会 2005年）
- (21) 大分市教育委員会「山余池遺跡 大分県周辺地帯整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3」（大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第64集 2006年）
- (22) 大分県教育委員会「上野町遺跡・駒徳寺遺跡-大分県付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1-」（大分県文化財調査報告書164冊 2006年）
- (23) 大分県教育庁埋蔵文化財センター「豊後府内3 中津大友府内跡第7次・第16次調査区・大分県付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）-」（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第8集 2006年）
- (24) 木村貴多郎「高宮宮・沼津宮考」（『Funai-府内おひいた大友氏関連総合調査研究年報V-』大分県歴史資料館 1996年）参照。

- (25) 渡辺道夫『豊後河府と守護所』（『増訂豊後人友氏の研究』収録 1982年）
- (26) 河野史郎『上野大友館（上原館）扉第4次調査』（『大分県埋蔵文化財調査年報 vol.12 大分県教育委員会 2000年』）
- (27) 社（13）文献および大分県教育委員会『市立豊府小学校建設地緊急発掘調査報告』（1974年）
- (28) 大分県教育委員会『大友氏館跡-発掘調査報告Ⅰ-』（2000年）
大分県教育委員会『大友氏館跡-発掘調査報告Ⅱ-』（2001年）
大分県教育委員会『国指定史跡大友氏館跡-発掘調査報告Ⅲ-』（『大分市内遺跡確認調査報告-2001年度-』収録 2002年）
大分県教育委員会『国指定史跡大友氏館跡-発掘調査報告Ⅳ- 中世大友府内町跡』（『大分市内遺跡確認調査報告-2002年度-』収録 2003年）
大分県教育委員会『国指定史跡大友氏館跡-発掘調査報告Ⅴ- 中世大友府内町跡』（『大分市内遺跡確認調査報告-2003年度-』収録 2004年）
大分県教育委員会『国指定史跡大友氏館跡-発掘調査報告Ⅵ- 中世大友府内町跡』（『大分市内遺跡確認調査報告-2004年度-』収録 2005年）
大分県教育委員会『国指定史跡大友氏館跡Ⅱ（万寿寺地区）-発掘調査報告Ⅶ- 中世大友府内町跡』（『大分市内遺跡確認調査報告-2004年度-』収録 2005年）
- (29) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内Ⅰ』1～7（2005～2007年）
大分県教育委員会『大友府内Ⅳ』4～8（2002～2006年）
- (30) 大分県教育委員会『大友府内Ⅴ 中世大友府内町跡第3次調査報告』（2003年）
- (31) 岩田寛『豊後府内における天正14年（1586）一括資料について-中世大友府内町跡第3次調査SX210の評価と検討-』（『筑基内閣研究』№26 2006年）
- (32) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内Ⅵ 中世大友府内町跡第10次調査区-Ⅰ』（大分駅前近隣緑地立休交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（5）大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第15集 2007年）
- (33) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内Ⅶ-中世大友府内町跡第20次調査区-Ⅰ』（一院町道10号古国府拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第16集 2007年）
- (34) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内Ⅳ-中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第48次調査区-Ⅰ』（一院町道10号古国府拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第9集 2006年）
- (35) 木村幾多郎『豊後府内城下町移転と旧府内町』（『大分・大友氏研究会論集』2001年）
慶長7年（1602）に竹中重将が行った中世府内から近世府内城下町への町人移転により、中世大友府内町跡は遺跡としての経緯を迎えることになる。従って、この時期（慶長7年）を中世大友府内町の最終的な下限と解釈することができる。

第3章 既往の調査と調査の方法

第1節 既往の調査（第1表・第2図参照）

大分前編
字次の調査

東田室遺跡の調査履歴は、1949年（昭和24年）まで遡る。この調査は大分師範学校歴史科によるもので、調査期間は2日と短かったものの、弥生時代後期の遺物包含層が確認され、遺跡の存在が周知される契機となった¹⁾。

東田室遺跡
第1次調査

1997年には、大分市教育委員会によって共同住宅建設に伴う発掘調査が行われ、中世の土坑墓や近世初頭の井戸などが発見された（東田室遺跡第1次調査）²⁾。中世の土坑墓には和泉型瓦器皿3個体を供献するもの認められ、墳墓の被葬者としては畿内系の仏師や僧侶などの可能性が想定されている。第1次調査では調査区北側に低湿地の広がり確認されるとともに、検出された遺構も中世前期を主体とするものであり、弥生・古墳時代の遺構は確認されていない。このことは逆に言えば、東田室遺跡で主体となる弥生・古墳時代の集落が、第1次調査区の低湿地より南側には広がっていないことを確認できたことにもなる。

東田室遺跡
第2次・
第4～11次
調査

2001年からは都市計画道路山笠町春日町線建設に伴う発掘調査が、大分市教育委員会によって開始された（東田室遺跡第2次・第4～11次調査）³⁾。この調査によって、弥生時代前期末と古墳時代前期の遺構群が数多く発見され、当該時期の大規模集落が調査区付近に存在することが明らかになった。山上遺物も多岐に及ぶが、その中でも第11調査の竪穴遺構11SX015から出土した舟形土製品（古墳時代前期前半）⁴⁾は特に注目される遺物である。さらに、古代（奈良・平安時代）の遺構群も一定の広がりをみせ、緑釉陶器なども出土している。以上のように、東田室遺跡は弥生時代から中世に至る複合遺跡（歴代遺跡）であることが明らかになり、その規模は大分市内の古代遺跡の中でも有数のものであることが想定されるようになった。

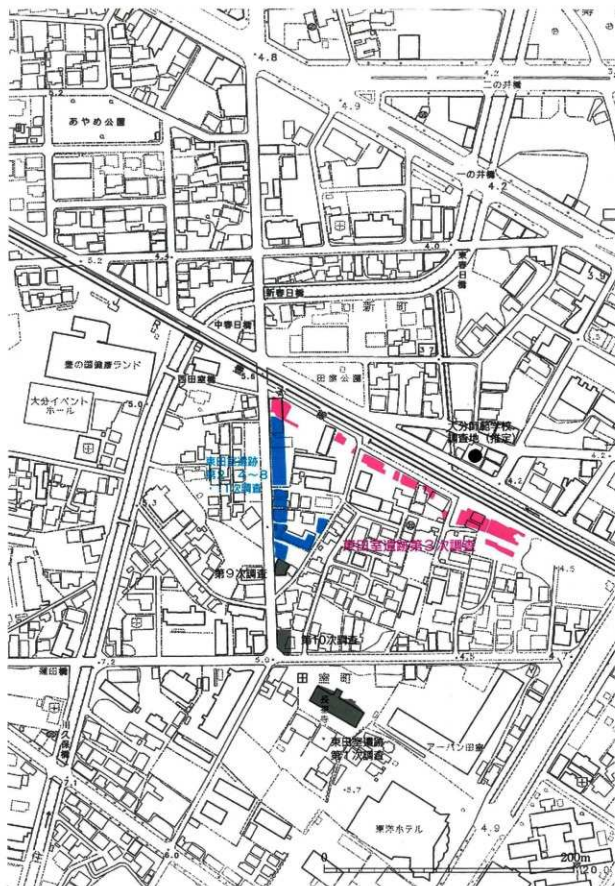
第1表 東田室遺跡調査一覧

調査回数	調査主体	調査期間	調査趣旨	調査面積(m ²)	報告書	調査内容
第1次	大分前編字 大分市教育委員会	1949年4月25～26日 1997年12月8日～1998年2月27日	— 共同住宅建設	— 750	文誌1 文家2	弥生時代後期の包含層（土器類） 中世の墓、井戸・近世
第2次	大分市教育委員会	2001年5月6日～9月20日	都市計画道路山笠町春日町線建設	400	文家3	弥生時代前期・古墳時代前期の墓所
第3次	大分県教育委員会	2002年2月26日～2003年3月14日	大分駅前道路組合整備事業	1,320	本報告書	弥生時代前期・古墳時代前期～後期の集落
第4次	大分市教育委員会	2002年5月9日～2002年7月4日	都市計画道路山笠町春日町線建設	330	文家3	(第9・10次は経度調査のみ)
第5次	大分市教育委員会	2002年11月11日～2003年1月30日		180		
第6次	大分市教育委員会	2002年7月18日～10月11日		130		
第7次	大分市教育委員会	2002年8月1日～9月27日		140		
第8次	大分市教育委員会	2002年10月22日～12月17日		190		
第9次	大分市教育委員会	2002年8月30日～9月10日		60		
第10次	大分市教育委員会	2003年2月1日～2月15日		30		
第11次	大分市教育委員会	2003年7月24日～9月4日		100		

文献1 大分師範学校歴史科「大分市東田室町春日町線第一次発掘調査報告」（1949年 ガリ標附り）

文献2 大分市教育委員会「東田室遺跡～大分市山笠町所在遺跡の発掘調査報告～」（1999年）

文献3 大分市教育委員会「東田室遺跡2～都市計画道路山笠町春日町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～」（2005年）



第2図 調査地点位置図 (S=1/3,000)

第2節 調査の方法

東田室遺跡
第3次調査

本書に収録したものは、東田室遺跡第3次調査の調査成果である。当該調査は大本県教育委員会が大分県付近連続立体的な事業に伴い、大分駅周辺総合整備事務所の委託を受けて実施したもので、発掘調査の期間は2002年2月26日から2003年3月14日までの約1箇年に及ぶ。2003年4月は年度替わりで発掘調査を一時休止していたため、実質的な発掘期間は2002年2月下旬から3月まで、同年5月から翌2003年3月までの計12箇月である。前述のように、大本県教育委員会の発掘期間と重複して、大分市教育委員会でも隣接地で発掘調査を実施していたため、県市の調査担当者で協議を行い、県教育委員会の調査地点を東田室遺跡第3次調査、市教育委員会の調査地点を東田室遺跡第2・4～11次調査と呼称するようにした。第3次調査でも弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が多数検出され、東田室遺跡が大規模な複合遺跡であることを追認する結果となった。特に、古墳時代前期では集落を区画する溝SD1111（環溝または条溝?）が発見され、当該時代の集落構造を検討する上で重要な資料が得られた。また、古墳時代中期前半の竈穴住居跡SH3205からは、胴部にヘラ描きによって絵画を描いた「絵画土器」が発見され、当時の人々の精神世界を探る上でも貴重な資料を得ることができた。

第2節 調査の方法

「小区」の
設定

東田室遺跡第3次調査では、2001年10月に実施した確認調査の結果を受けて、発掘調査（本調査）の対象地点を日豊本線旧軌道敷き南側の長さ約240m、幅約10～15mに絞り込んだ。本調査地点では調査区全体に国土座標に乗せた10m方眼を設定し、それぞれのスクエアを「小区」として、北から南へW～Y・A～J、西から東へ5～27の番号を振り、アルファベットと数字の組み合わせで呼称することにした（例えばX6小区、G21小区など）。また、遺跡は市街地に位置しているため、一度に大きな面積を調査することはできず、小面積あるいは一定面積を調査することに埋め戻しを行い、掘土の処理などが効率的に行われるようにした。その際、調査区に隣接した宅地の通路の確保やガス管・水道管などの存在が想定される地点の安全性を保つために、未発掘となる部分も生じてしまったが、その場合もできるだけ攪乱等による破壊の多い部分に相当するように考慮した。調査区の地区名は、西側から東側へ向かってⅠ-1～Ⅰ-3区、Ⅱ-1～Ⅱ-5区、Ⅲ-1～Ⅲ-2区、Ⅳ区とし（第5・6図）、調査区内をさらに細分する必要が生じた時は、先に設定した小区の名称を併用することにした。それぞれの調査区は大型重機によって表土の除去を行った後、人力によって包含層の掘削、遺構検出を行い、検出された遺構はすべて掘り下げを行った。各遺構については必要に応じて、検出状況や遺物出土状況、完掘状況などの写真撮影・実測等の記録作業を行った。本調査区で使用される遺構番号については4桁の数字を使用し、先頭の2桁で地区名を、末尾の2桁で遺構番号を表現できるようにした（第3図）。また、ラジコンヘリによる空中写真撮影も、2度に渡って実施した。

調査区
の地区名

遺構番号

SD1101

Ⅰ-1区 1番目の遺構

SK3212

Ⅲ-2区 12番目の遺構

SH4002

Ⅳ区 2番目の遺構

第3図 遺構番号の原則

註（1）大分県総合歴史資料『大分市東田室町築生式遺跡第一次発掘調査報告』（1949年 ガリ版刷り）

（2）大分市教育委員会『東田室遺跡—大分市田室町所在遺跡の発掘調査報告書—』（1999年）

（3）大分市教育委員会『東田室遺跡2—都市計画道路田室町町門線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』（2005年）

（4）註（3）文獻151頁、第128図32。

第4章 調査の成果

第1節 基本層序と調査の概要

基本層序

東田室遺跡第3次調査の基本層序は、大分市教育委員会による第2次調査で提示された土層模式図⁽¹⁾とほぼ同じである(第3図)。重機によって除去した近年の客土や表土の下位には、中世から古墳時代の遺物を包含する黒褐色砂質土が堆積する。本来ならば、この層の上面で古墳時代後期以降の遺構が検出されるはずであるが、現場での発掘調査では当該レベルでの遺構



第4図 基本層序 (大分市教委2005より引用)

検出は困難を極め、ほとんどの遺構を基盤土層である黄褐色砂質土上面で確認した。大分市教育委員会の報告で既に指摘されているとおり、表土下位に堆積する黒褐色砂質土は、基盤土層の上面が黒色化したものと推定され、東田室遺跡は基本的に1枚の遺構面 で形成されていると認識することが妥当である。

前述のように、東田室遺跡第3次調査では、調査区をI-1～I-3区、II-1～II-5区、III-1～III-2区、IV区に大別しており(第5・6図)、それぞれの調査面積は第2表で提示した。すべての調査面積の総計は、1,320㎡である。

調査面積
1,320㎡

検出された遺構の総数は125基以上におよび、その内訳は弥生時代前期末の貯蔵穴・土坑が67基、不明遺構が1基、古墳時代前期から中期前半の溝が2基、堅穴住居跡が22基、土坑が5基、不明遺構が1基、古墳時代中期後半から古墳時代後期の堅穴住居跡が8基、土坑が1基、不明遺構が3基、中世から近世にかけての溝が2基、土坑が3基、不明遺構が1基、柱穴が2基、時期不明の遺構が5基である(第3・4表)。

調査の概要
I-1区

I-1区では、弥生時代前期末の貯蔵穴・土坑が6基、古墳時代前期の溝が2基、古墳時代前期の堅穴住居跡が2基、同土坑が1基、古代の溝が1基検出されている。この中で、古墳時代前期の溝SD1111(77頁参照)は前期前半のSD1111a、前期後半のSD1111bの2基が重複しており、いずれも当該時期の集落を区画する溝(環溝または条溝)と推定される。今回の調査区で確認された溝は長さ約14mに留まるが、古墳時代前期の集落の規模や性格を検討する上で重要な遺構である。SD1111a・SD1111bともに、埋土中から多量の土器が廃棄された状態で出土しており、これらは当該時期の土師器編年の良好な一括資料を形成している。古墳時代前期前半の土坑SK1108(138頁参照)では、多量の土器が特異な出土状況で検出されている。古代の溝SD1102(183頁参照)は断面が逆台形を呈する区画溝であるが、南北方向に長く伸びる特徴的な遺構である可能性が想定されている。

第2表 東田室遺跡
第3次調査調査面積一覧

地区名	調査面積(㎡)
I-1E	215
I-2区	70
I-3区	16
II-1区	160
II-2区	44
II-3区	110
II-4区	54
II-5区	38
III-1区	73
III-2区	280
IV区	260
総計	1,320

註(1) 大分市教育委員会『東田室遺跡2-都市計画道路山室町春日線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』(2005年 9頁)

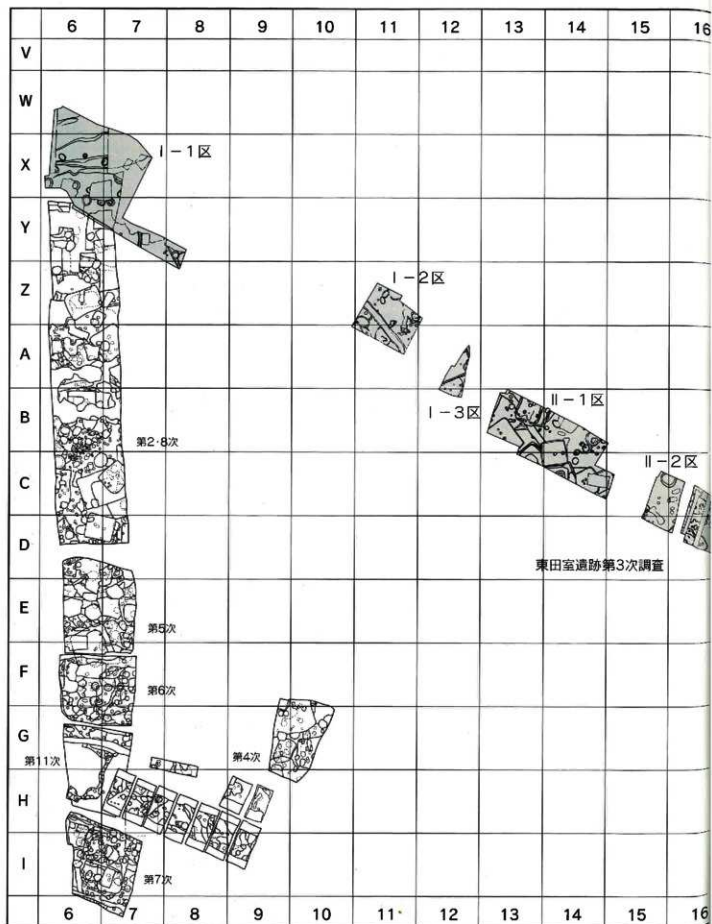
第1節 基本層序と調査の概要

第3表 東田室遺跡第3次調査通観一覧①

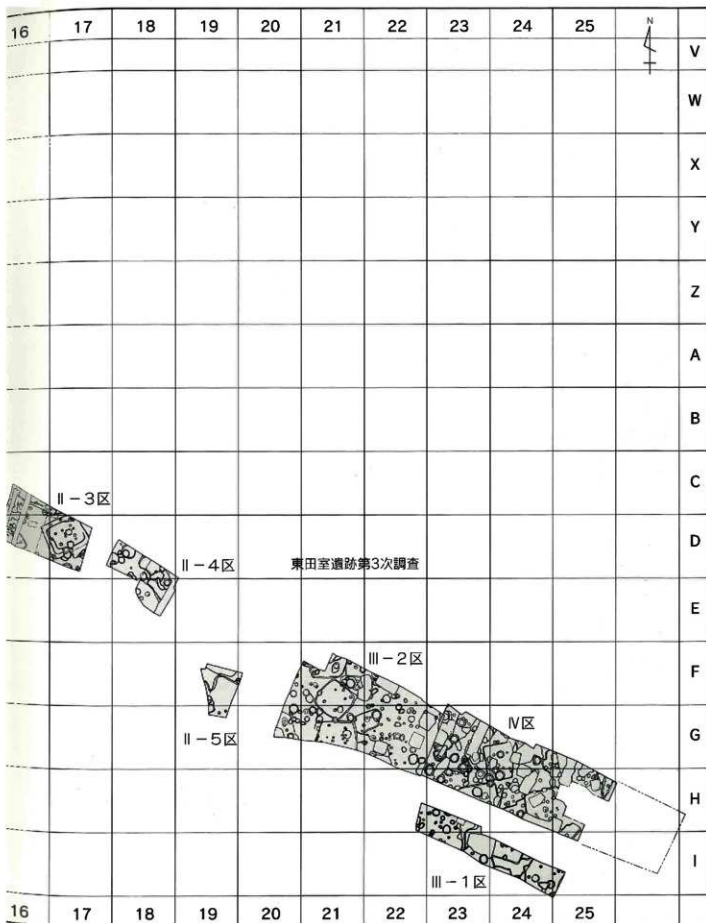
地区	遺構名称	遺構の性格	時期	注目すべき遺物	備考	通観頁	
I-1区	SK1101a	貯蔵穴	弥生時代前期末		遺物僅少	22	
	SH1101b	住居跡	古墳時代前期			91	
	SH1101c	住居跡	古墳時代前期			91	
	SD1102	溝	古代?			183	
	SK1103	貯蔵穴	弥生時代前期末			22	
	SK1104	貯蔵穴	弥生時代前期末			25	
	SK1105	貯蔵穴	弥生時代前期末			26	
	SK1106	貯蔵穴	弥生時代前期末			26	
	SK1107	土坑	不明			遺物僅少のため、時期不明	189
	SK1108	土坑	古墳時代前期前半			土器の大量廃棄	138
	SD1109	溝	近世～近代				187
	SK1110	土坑	古墳時代前期後半	土製紡錘車			146
	SD1111a	溝	古墳時代前期後半			集落を区画する溝	77
	SD1111b	溝	古墳時代前期前半	製塩土器		集落を区画する溝	77
SK1112	土坑	弥生時代前期末			27		
SK1113	土坑	古墳時代前期前半			147		
SK1114	土坑	不明		遺物僅少のため、時期不明	189		
I-2区	SD1201	溝	不明		遺物僅少のため、時期不明	190	
	SH1202	住居跡	古墳時代前期	石鏡		91	
	SK1203	土坑	弥生時代前期末		28		
	SK1204	土坑	弥生時代前期末		29		
	SK1205	土坑	弥生時代前期末		29		
	SK1206	土坑	弥生時代前期末		29		
	SK1207	貯蔵穴	弥生時代前期末		土製紡錘車	30	
	SK1208	土坑	弥生時代前期末			31	
	SK1209	土坑	弥生時代前期末			33	
	SK1210	貯蔵穴	弥生時代前期末		石鏡	33	
SK1211	不明遺構	弥生時代前期末			70		
I-3区	SH1301	住居跡	古墳時代前期後半	内黒土師器 赤切り土師器		92	
	SP1302	柱穴	中世(12～13世紀)		187		
	SK1303	柱穴	中世(12～13世紀)		187		
II-1区	SH2101	住居跡	古墳時代中期前半	フイゴ羽口 瓢形土器 製塩土器	小型丸底土器4個体がまぎって出土 古墳時代後期の住居跡が重複 古墳時代前期の住居跡が重複 弥生土器が混入	93	
	SH2102a	住居跡	古墳時代前期前半			96	
	SH2102b	住居跡	古墳時代後期			162	
	SK2103	貯蔵穴	弥生時代前期末			34	
	SK2104	貯蔵穴	弥生時代前期末			34	
	SK2105	土坑	古墳時代前期前半			148	
	SH2106	住居跡	古墳時代中期前半			98	
	SH2107	住居跡	古墳時代前期後半			106	
	SH2108	住居跡	古墳時代前期前半			106	
	SH2109	住居跡	古墳時代前期前半			109	
	SH2110	住居跡	古墳時代前期前半			遺物僅少	112
	SH2111	住居跡?	不明			遺物僅少のため、時期不明	-
	SD2112	溝	不明			遺物僅少のため、時期不明	190
	SK2113	土坑	中世(12～13世紀)			185	
	SK2114	貯蔵穴	弥生時代前期末			35	
	SK2115	土坑	弥生時代前期末			35	
II-2区	SK2201	土坑	弥生時代前期末		36		
	SK2202	土坑	古代		183		
II-3区	SK2301	土坑	不明	白磁口縁 鉄線・銅線	遺物僅少のため、時期不明	186	
	SK2304	土坑	中世(12～13世紀)			-	
	SH2305	住居跡	古墳時代前期前半			113	
	SK2308	土坑	弥生時代前期末			37	
	SH2311	住居跡	古墳時代前期前半			116	
	SK2313	貯蔵穴	弥生時代前期末			38	
	SK2314	貯蔵穴	弥生時代前期末			38	
	SK2315	土坑	弥生時代前期末			38	
SK2316	貯蔵穴	弥生時代前期末	40				
II-4区	SK2401	貯蔵穴	弥生時代前期末	管玉 磁石	SH2410と同一遺構	40	
	SH2403	住居跡	古墳時代後期			163	
	SH2404	住居跡	古墳時代前期前半			116	
	SK2407	土坑	弥生時代前期末			41	
	SH2410	住居跡	古墳時代後期			163	
II-5区	SH2501	住居跡	古墳時代中期後半	石製倉庫品	動物遺存体(シカ)出土	154	

第4表 東田窪遺跡第3次調査遺構一覧②

地区	遺構名	遺構の性格	時期	注目すべき遺物	備 考	掲載頁
Ⅲ-1区	SK3101	不明遺構	古墳時代後期			172
	SK3102	土坑	古墳時代後期			174
	SK3103	貯蔵穴	弥生時代前期末			42
	SK3104	貯蔵穴	弥生時代前期末			43
	SK3106	貯蔵穴	弥生時代前期末			43
	SH3107	住居跡	古墳時代中期後半			160
	SH3109	住居跡	古墳時代前期前半?			117
	SK3111	貯蔵穴	弥生時代前期末			44
	SH3112	住居跡	古墳時代前期前半			118
	SK3113	貯蔵穴	弥生時代前期末			45
	SK3114	貯蔵穴	弥生時代前期末			45
Ⅲ-2区	SK3201	貯蔵穴	弥生時代前期末		動物遺存体(ウマの歯)出土	46
	SK3202	貯蔵穴	弥生時代前期末			47
	SH3203	住居跡	古墳時代前期前半			122
	SH3204	住居跡	古墳時代後期			165
	SH3205	住居跡	古墳時代中期前半	麻石土器		122
	SH3206	住居跡	古墳時代前期後半			130
	SK3207	貯蔵穴	弥生時代前期末	石鏝		49
	SK3208	貯蔵穴	弥生時代前期末			50
	SK3209	カマド	古墳時代後期			170
	SK3211	貯蔵穴	弥生時代前期末			51
	SK3212	貯蔵穴	弥生時代前期末			51
	SK3213	貯蔵穴	弥生時代前期末			52
	SK3214	貯蔵穴	弥生時代前期末			52
	SK3215	貯蔵穴	弥生時代前期末			52
	SK3216	土坑	古墳時代前期前半			149
	SK3217	貯蔵穴	弥生時代前期末	片刃石斧		52
	SK3218	貯蔵穴	弥生時代前期末			52
	SK3219	貯蔵穴	弥生時代前期末			54
	SK3220	土坑	古墳時代前期前半			149
	SK3221	貯蔵穴	弥生時代前期末			54
SK3222	貯蔵穴	弥生時代前期末		54		
Ⅳ区	SK4001	不明遺構	中世(12世紀)	和泉型瓦葺屋根		186
	SH4002	住居跡	古墳時代後期	有孔土埴		166
	SK4003	貯蔵穴	弥生時代前期末			56
	SH4004	住居跡	古墳時代後期			168
	SK4005	貯蔵穴	弥生時代前期末			57
	SK4006	貯蔵穴	弥生時代前期末			58
	SK4007	貯蔵穴	弥生時代前期末			58
	SK4008	貯蔵穴	弥生時代前期末			58
	SK4009	貯蔵穴	弥生時代前期末			60
	SH4010	住居跡	古墳時代前期後半	鉄剣		132
	SK4011	カマド	古墳時代後期			171
	SH4012	住居跡	古墳時代前期後半	ミニチュア土器・磁石		133
	SK4013	貯蔵穴	弥生時代前期末			60
	SK4014	貯蔵穴	弥生時代前期末			60
	SK4015	貯蔵穴	弥生時代前期末	石鏝		60
	SK4016	貯蔵穴	弥生時代前期末			60
	SK4017	貯蔵穴	弥生時代前期末			62
	SK4018	貯蔵穴	弥生時代前期末			64
	SK4019	貯蔵穴	弥生時代前期末			64
	SK4020	貯蔵穴	弥生時代前期末			64
	SK4021	貯蔵穴	弥生時代前期末			66
	SK4022	貯蔵穴	弥生時代前期末			66
	SK4023	貯蔵穴	弥生時代前期末			66
	SK4024	貯蔵穴	弥生時代前期末			66
	SK4025	貯蔵穴	弥生時代前期末			68
	SH4026	住居跡	古墳時代前期前半			136
	SK4027	貯蔵穴	弥生時代前期末			69
SK4028	貯蔵穴	弥生時代前期末			70	
SK4029	不明遺構	古墳時代前期前半	ミニチュア土器		151	



第5図 東田室遺跡第3次調査遺構配置図① (1/600)



第6図 東田室遺跡第3次調査遺構配置圖② (1/600)

- 1-2区 Ⅰ-2区では、弥生時代前期末の貯蔵穴・土坑が9基、古墳時代前期の竪穴住居跡が1基、時期不明の溝が1基、柱穴数基が検出されている。弥生時代前期末の土坑であるSK1207（30頁参照）からは、当該時期の弥生土器とともに土製紡錘車（第31図、30頁参照）が出土した。また、弥生時代前期末の貯蔵穴であるSK1210（33頁参照）は、土層の観察によって、床面を再生（造り直し）していることが確認できた事例である。調査区を斜めに横断する形で検出された溝SD1201（190頁参照）は詳細な時期や性格は不明であるが、古墳時代の古い段階以前に比定される可能性が考えられ、注意を払っておきたい遺構である。
- 1-3区 Ⅰ-3区では、弥生時代前期末の包含層（71頁参照）と古墳時代前期前半の竪穴住居跡（92頁参照）が1基の他、柱穴が数基検出されている。弥生時代前期末の包含層から検出された大型石造丁の再加工作品（第126図、72頁参照）は、大分県内でも例が少ない遺物であり、注目される。柱穴の大部分は時期不明であるが、古代（奈良・平安時代）や中世の所産となる土器類が出土したピット（SP1302・SP1303）も認められた。
- Ⅱ-1区 Ⅱ-1区では、弥生時代前期末の貯蔵穴・土坑が4基、古墳時代前期から中期前半の竪穴住居跡が8基、古墳時代後期の竪穴住居跡が1基、古代の土坑が1基の他、柱穴が数基検出されている。本調査区では竪穴住居跡の重複が目立ち、古墳時代前期から後期にかけて住居跡の構築が盛んに行われていた地点のひとつである。竪穴住居跡のうち、古墳時代中期前半の住居跡SH2106（98頁参照）からは多量の土師器が廃棄された状態で出土しており、当該時期の土器編年の指標となる資料が得られた。また、古墳時代中期前半の住居跡SH2101（93頁参照）や古墳時代前期前半の住居跡SH2108（106頁参照）からは土師器類が特異な出土状態で検出され、竪穴住居の廃絶儀礼に関わるものと推定される。
- Ⅱ-2区 Ⅱ-2区では、弥生時代前期末の貯蔵穴・土坑が1基、古代（奈良・平安時代）の土坑が1基のほか、柱穴が数基検出されている。当該地区の遺構は本項目で特筆すべき事象は認められないが、土坑SK2202（183頁参照）は東田家遺跡の中では数少ない古代の廃棄土坑として注目される遺構である。
- Ⅱ-3区 Ⅱ-3区では、弥生時代前期末の貯蔵穴・土坑が5基、古墳時代前期の竪穴住居跡2基、中世の土坑1基の他、時期不明の土坑や柱穴が数基検出されている。このうち、古墳時代前期前半の住居跡SH2305（113頁参照）は東田家遺跡の中で唯一ベット状遺構を有するもので、銅鍔と鉄鍔の出土が認められるなど、東田家遺跡の住居跡の中ではやや傑出した様相を示している。中世の土坑SK2304（186頁参照）については、出土遺物が僅少で遺構の性格も不明であるが、確実に中世前期（12～13世紀代）に比定できるものとして、注意を払っておきたい遺構である。
- Ⅱ-4区 Ⅱ-4区では、弥生時代前期末の貯蔵穴・土坑が1基、古墳時代前期の竪穴住居跡1基、古墳時代後期の竪穴住居跡1基の他、時期不明の土坑や柱穴が数基検出されている。この中で古墳時代後期の住居跡SH2403・2410（163頁参照）の埋土中からは、両面穿孔により貫通孔が形成された管玉（第233図、163頁参照）が出土した。
- Ⅱ-5区 Ⅱ-5区では、古墳時代中期後半の住居跡1基ほかの遺構を検出した。住居跡SH2105（154頁参照）は出土する須恵器の型式などから、東田家遺跡では数少ない古墳時代中期後半に比定される遺構である。また、住居跡埋土中から垂飾品（第227図68、159頁参照）が出土した。
- Ⅲ-1区 Ⅲ-1区では、弥生時代前期末の貯蔵穴・土坑が6基、古墳時代前期の竪穴住居跡が2基、古墳時代中期後半の住居跡が1基、古墳時代後期の土坑1基、その他柱穴数基が検出された。古墳時代前期の住居跡SH3109（117頁参照）は残存状況が不良であり、山上遺物も僅少であるが、出土遺物はすべて弥生時代後期の土器に限られ、住居跡の所産時期が遡る可能性が考えられる遺構である。古墳時代前期の住居跡SH3112からは前期前半に比定される比較的良好的な一括資料が得られたが、

この中には頸部にリボン状浮文をもつ単口縁壺(第178図2、119頁参照)が認められた。弥生時代後期の土器に散見されるリボン状浮文が、古墳時代前期まで残存する事例として興味深い資料である。SH3107は出土した須恵器甕の型式から、東田室遺跡では数少ない古墳時代中期後半に比定される遺構である。

III-2区

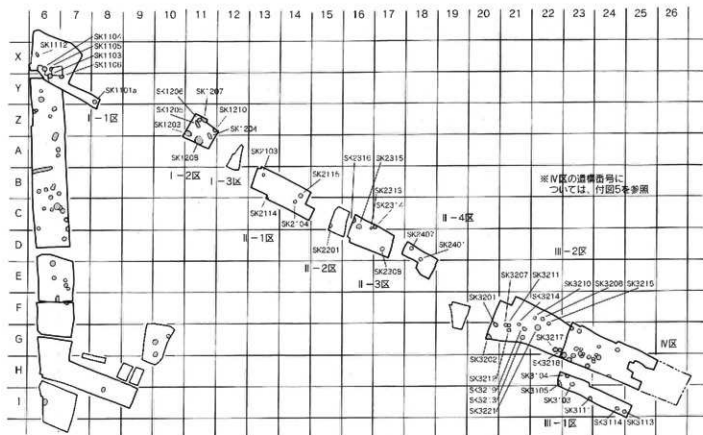
III-2区では、弥生時代前期末の貯蔵穴・土坑が14基、古墳時代前期から中期前半の竪穴住居跡が3基、土坑が2基、古墳時代後期の住居跡が1基、不明遺構(カマド?)が1基、その他柱穴遺基が検出された。この中で最も注目される遺構が、古墳時代中期前半の竪穴住居跡SH3205(122頁参照)である。当該住居跡からは、胴部外面にヘラ掻きによって絵画を描いた「絵画土器」(第185・186図、124・125頁参照)が発見された。絵画土器には三角形やヒレ状のモチーフが描かれ、絵画の中心モチーフは「竜」を表現したものと推定される。土器は口縁部が意図的に分割されており、絵画の中心モチーフと思われる部位も意図的に破壊されていた。これらの行為は、住居の廃絶儀礼に関わるものである可能性が考えられる。また、古墳時代前期後半の竪穴住居跡SH3206(131頁参照)からは、小型丸底土器や小型器台、在地系(安福寺式系)の甕を小型化したミニチュア土器(第192図18、131頁参照)などが出土しており、当該時期の典型的な一括資料が得られている。

IV区

IV区では、弥生時代前期末の貯蔵穴・土坑が21基、古墳時代前期の竪穴住居跡が2基、古墳時代後期の住居跡が2基、不明遺構(カマド?)が1基、中世の不明遺構が1基、その他柱穴遺基が検出された。古墳時代前期の住居跡SH4010(132頁参照)は遺構の残存状態がやや不良で、出土遺物も僅少であったものの、埋土中より鉄剣(第195図8、133頁参照)が出土している。また、古墳時代後期の住居跡SH4004(168頁参照)は、これも遺構の残存状態が不良であったものの、カマドを付設する住居跡であり、その内部からは土師器・須恵器を主体とした当該時期の一括資料が得られている。中世の不明遺構SX4001(186頁参照)は和泉型瓦器皿2個体を埋置したもので、遺構の性格を明らかにすることはできなかった。出土遺物である和泉型瓦器皿は、第1次調査SX020⁽²⁾でも出土しており、その関連性が注目される。

註(2) 大分市教育委員会「東田室遺跡-大分市田室町所在遺跡の発掘調査報告」(1999年)22~25頁

第2節 弥生時代前期末の遺構・遺物



第7図 弥生時代前期末の遺構配置図 (1/1,200)

第2節 弥生時代前期末の遺構・遺物

概要 弥生前期末に比定される遺構としては、貯蔵穴・廃棄土坑・不明遺構がある。

貯蔵穴

貯蔵穴は、東田室遺跡第3次調査では54基が検出されている。貯蔵穴とは円形袋状の穴倉で、基本的には炭などの土器に食糧を入れて、保存する機能をもった遺構⁽¹⁾である。しかし、東田室遺跡第3次調査では、土器が貯蔵穴で使用された状態で出土した事例は皆無であり、土器の大半は貯蔵穴が本来の機能を停止した後に廃棄された状態で出土している。このことは、ほとんどすべての貯蔵穴が機能停止後、廃棄土坑(ゴミ穴)として再利用されたことを示唆しており、貯蔵穴の埋土中に出土遺物がレンズ状に堆積するSK2308・SK2401・SK3314・SK4023・SK4027などはその典型例と思われる。また、SK1210のように、土層観察によって、貯蔵穴床面がかさ上げされ、床面の再生が行われていることが確認できた事例も存在する。

廃棄土坑 (ゴミ穴)

廃棄土坑(ゴミ穴)と推定されるものは、11基が確認されており、貯蔵穴とした遺構よりも規模が小さい土坑をこれに比定した。

不明遺構

不明遺構としたものは1基(SX2111)があり、調査区の制限から、性格が明らかにできなかった遺構である。平面プランが略円形の住居跡である可能性も考えられるが、断定できなかったものである。

包含形 出土遺物

その他、遺構に附属していない遺物で、当該時期に比定される土器・石器についても、本節で報告する。

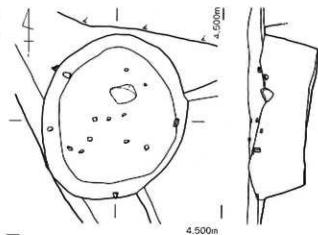
註(1) 平田辰之「穴倉」(田中強・佐原真「日本考古学事典」三巻 2003年 8頁)

第5表 弥生時代前期末の遺構一覧

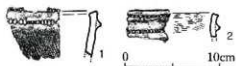
地区	遺構名称	遺構の性格	時期	注目すべき遺物	備考	掲載頁	
I-1区	SK1101a	貯蔵穴	弥生時代前期末			22	
	SK1105	貯蔵穴	弥生時代前期末			22	
	SK1104	貯蔵穴	弥生時代前期末			25	
	SK1106	貯蔵穴	弥生時代前期末			25	
	SK1106	貯蔵穴	弥生時代前期末			26	
	SK1112	土坑	弥生時代前期末			27	
I-2区	SK1203	土坑	弥生時代前期末	石皿		28	
	SK1204	土坑	弥生時代前期末			29	
	SK1205	土坑	弥生時代前期末			29	
	SK1206	土坑	弥生時代前期末			29	
	SK1207	貯蔵穴	弥生時代前期末	七股紡錘車		30	
	SK1208	土坑	弥生時代前期末			31	
	SK1209	土坑	弥生時代前期末			33	
	SK1210	貯蔵穴	弥生時代前期末	石皿		33	
	SK1211	不明遺構	弥生時代前期末			70	
	II-1区	SK2103	貯蔵穴	弥生時代前期末			34
SK2104		貯蔵穴	弥生時代前期末			34	
SK2114		貯蔵穴	弥生時代前期末			35	
SK2115		土坑	弥生時代前期末			35	
II-2区		SK2201	土坑	弥生時代前期末			36
		SK2208	土坑	弥生時代前期末			37
II-3区		SK2313	貯蔵穴	弥生時代前期末			38
		SK2314	貯蔵穴	弥生時代前期末			38
		SK2315	土坑	弥生時代前期末			38
		SK2316	貯蔵穴	弥生時代前期末			40
II-4区	SK2401	貯蔵穴	弥生時代前期末			40	
	SK2407	土坑	弥生時代前期末			41	
III-1区	SK3103	貯蔵穴	弥生時代前期末			42	
	SK3104	貯蔵穴	弥生時代前期末			43	
	SK3105	貯蔵穴	弥生時代前期末			43	
	SK3111	貯蔵穴	弥生時代前期末			44	
	SK3113	貯蔵穴	弥生時代前期末			45	
	SK3114	貯蔵穴	弥生時代前期末			45	
	SK3201	貯蔵穴	弥生時代前期末			46	
	SK3202	貯蔵穴	弥生時代前期末			47	
	SK3207	貯蔵穴	弥生時代前期末	石皿		49	
	SK3208	貯蔵穴	弥生時代前期末			50	
	SK3211	貯蔵穴	弥生時代前期末			51	
	SK3212	貯蔵穴	弥生時代前期末			51	
	SK3213	貯蔵穴	弥生時代前期末			52	
	SK3214	貯蔵穴	弥生時代前期末			52	
	SK3215	貯蔵穴	弥生時代前期末			52	
III-2区	SK3217	貯蔵穴	弥生時代前期末	片刃石斧		52	
	SK3218	貯蔵穴	弥生時代前期末			52	
	SK3219	貯蔵穴	弥生時代前期末			54	
	SK3221	貯蔵穴	弥生時代前期末			54	
	SK3222	貯蔵穴	弥生時代前期末			54	
	IV区	SK4003	貯蔵穴	弥生時代前期末			56
		SK4006	貯蔵穴	弥生時代前期末			57
		SK4006	貯蔵穴	弥生時代前期末			58
SK4007		貯蔵穴	弥生時代前期末			58	
SK4008		貯蔵穴	弥生時代前期末			58	
SK4009		貯蔵穴	弥生時代前期末			60	
SK4013		貯蔵穴	弥生時代前期末			60	
SK4014		貯蔵穴	弥生時代前期末			60	
SK4015		貯蔵穴	弥生時代前期末			60	
SK4016		貯蔵穴	弥生時代前期末	石皿		60	
SK4017		貯蔵穴	弥生時代前期末			62	
SK4018		貯蔵穴	弥生時代前期末			63	
SK4019		貯蔵穴	弥生時代前期末		動物遺体(イノシシ)出土	63	
SK4020		貯蔵穴	弥生時代前期末			64	
SK4021		貯蔵穴	弥生時代前期末			64	
SK4022		貯蔵穴	弥生時代前期末			66	
SK4023		貯蔵穴	弥生時代前期末			66	
SK4024		貯蔵穴	弥生時代前期末			66	
SK4025	貯蔵穴	弥生時代前期末			68		
SK4027	貯蔵穴	弥生時代前期末			69		
SK4028	貯蔵穴	弥生時代前期末			70		

古墳時代
前期生厩
跡(SH
1101b
・SH1101
c)との
切り合い

**SK1101a (第8図) I-1区 (Y8
小区)**に位置する貯蔵穴である。古墳
時代前期の住居跡SH1101b・SH1101
c(91頁参照)と切り合い関係を有して
いる。遺構の平面形態は円形プラン
を呈し、断面形態は袋状を呈していた
ものと推定されるが、上面が削平を受
けている。規模は東西1.15m、南北
1.3m、深さ約40cmである。出土遺物
については、埋土上位から弥生土器片
が少量出土している。弥生時代前期末
に比定される遺構である。



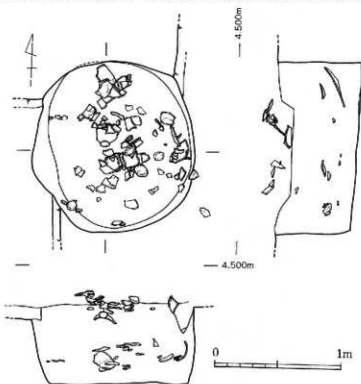
第8図 SK1101a実測図 (1/30)



第9図 SK1101a出土遺物実測図 (1/4)

SK1101a出土遺物 (第9図) 1・2は下城式土器の甕の口縁部である。いずれも口縁端部と
突帯に刻目を有する。

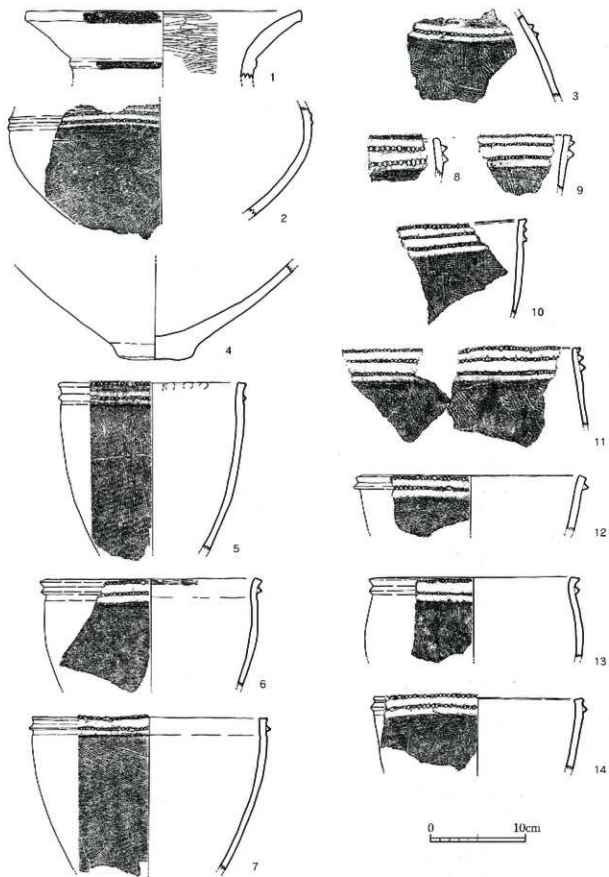
SK1103 (第10図) I-1区 (Y6小区)に位置する貯蔵穴である。検出時には東側と西側の
部に掘乱を受けていたが、遺構の遺存状況は比較的良好であった。平面形態は円形プランを呈し、
断面形態は袋状を呈しているが、上面は削平を受けている。規模は東西1.3m、
南北1.35m、深さ約65cmである。出土遺物は埋土上位と中位に集中する傾向が
認められるが、両者の遺物群には相互に接合する資料が存在しており、上位遺物
群と中位遺物群とに明瞭な時間差は認められない。弥生時代前期末に比定される
遺構である。



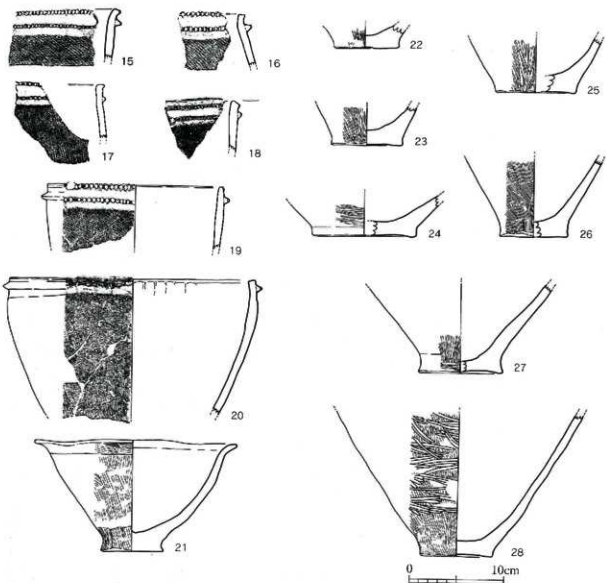
第10図 SK1103実測図 (1/30)

上位遺物
群と中位
遺物群に
明瞭な
時間差は
ない

**SK1103出土遺物 (第
11~12図) 第11図1**は
甕の口縁部で、口縁部と頸
部の境に断面略方形の突帯
を貼り付けている。また、
口縁部外面に2列、突帯



第11図 SK1103出土遺物① (1/4)

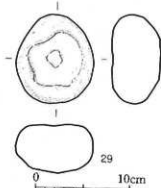


第12図 SK1103出土遺物② (1/4)

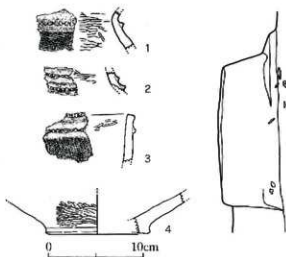
上に1列の円形竹管文を施している。2は壺の胴部で、胴部中に断面略三角形の2条刻目突帯を貼り付ける。3は壺の肩部と思われる破片で、肩部と胴部の境に2条の刻目突帯を貼り付ける。上位の突帯はほとんどが剥落しており、一部が僅かに残存する。4は壺の底部で、内外面ともナゲ調整を主体とする。5～14・第12図15～20は下城式土器の甕である。口縁部外面よりやや下位に1条突帯を有し、突帯上と口縁部外面に刻目を有するものが主体となるが、1条刻目突帯で口縁部に刻目のないもの(20)や2条刻目突帯で口縁部に刻目のないもの(8)、2条刻目突帯で口縁部にも刻目を有するもの(9～11)などのバリエーションが認められる。21は口縁部が外反する鉢である。口縁部を上に向けた状態で図示したが、天地逆の器形である可能性も考えられ、その場合は蓋とセットになる「蓋」と考えられるであろう。22～28は底部で、このうち25は壺の底部、その他は甕の底部と推定される資料である。第13図29は磨石で、図示した部分に磨滅痕が認められる。

鉢または
壺

磨石



第13図 SK1103出土遺物③ (1/4)



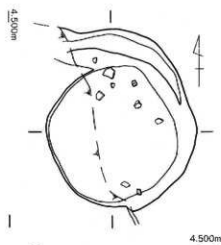
第15図 SK1104出土遺物 (1/4)

SK1104 (第14図) I-1区 (Y6小区)に位置する貯蔵穴である。検出時には西南側の約半分を攪乱によって破壊されているようにみられたが、掘り下げてみると、遺構の底面付近は破壊を免れていた。平面形態は円形プランを呈し、断面形態については上面が削平を受けているものの、袋状を呈するものと思われる。規模は径約1.2m、深さ約50cmである。出土遺物については、埋土上位から弥生土器片が出土している。弥生時代前期末に比定される遺構である。

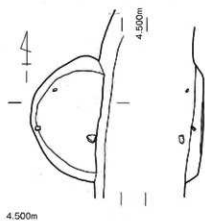
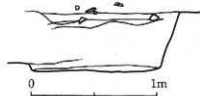
SK1104出土遺物 (第15図) 1・2は弥生土器の壺で、いずれも頸部付近に数条の刻目突帯を有する。内外面とも、主体となる調整はミガキである。3は下城式土器の甕の口縁部で、口縁部と突帯に刻目を有する資料である。4は壺の底部で、外面にミガキが施されている。

SK1105 (第16図) I-1区 (Y6小区)に位置する貯蔵穴である。東側を攪乱によって完全に破壊されていた。平面形態は円形プランを呈し、断面形態については、上面が大きく削平を受けており不明である。規模については東西0.53m、南北1.0m、深さ9cmである。削平のため、他の貯蔵穴と比較してやや小型である印象を受けるものの、当該遺構も断面形態が袋状を呈する貯蔵穴と考えておきたい。出土遺物については、埋土上位から弥生土器片が少量出土している。弥生時代前期末に比定される遺構である。

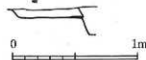
規孔による
破壊



第14図 SK1104実測 (1/30)



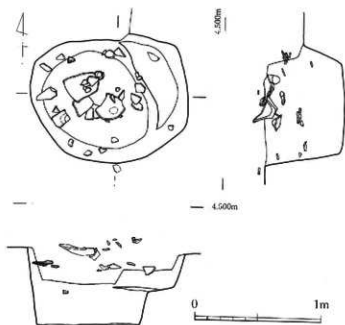
第16図 SK1105実測図 (1/30)



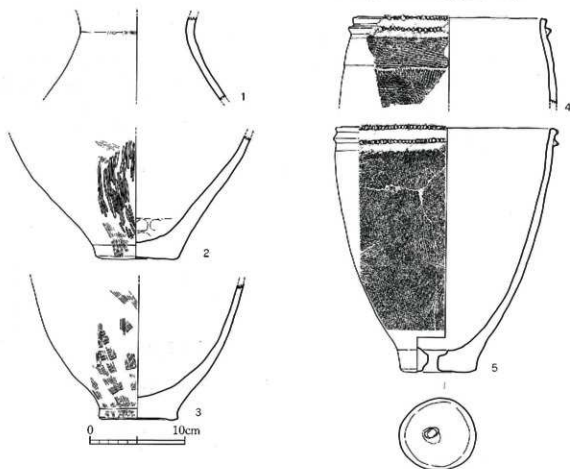
第17図 SK1105出土遺物 (1/4)

SK1105出土遺物 (第17図) 図示した遺物は口縁端部からやや下った部位に刻目突帯を有する甕の口縁部である。調整は内外面ともミガキを主体とする。下威式土器の甕のヴァリエーションと考えられる資料である。

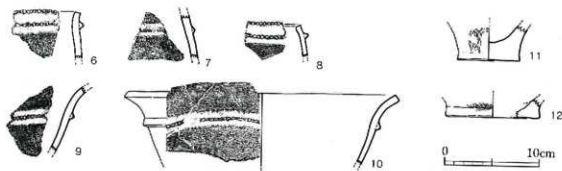
SK1106 (第18図) 1-1区(Y6・7小区)に位置する貯蔵穴である。北西側の一部に擾乱を受けていたが、遺構の遺存状況は比較的良好であった。平面形態は円形プランを呈し、断面形態は袋状を呈しているが、上面は削平を受けている。規模は径約1m、深さ約60cmである。出土遺物は埋土上位と中位に集中し、特に埋土上位中央部には壘の大型破片などが廃棄されていた。弥生時代前期末に比定される遺構である。



第18図 SK1106実測図 (1/30)



第19図 SK1106出土遺物① (1/4)



第20図 SK1106出土遺物② (1/4)

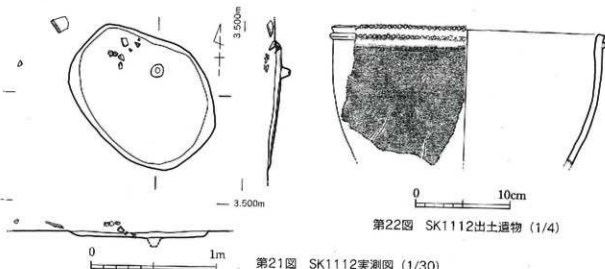
SK1106出土遺物 (第19・20図) 第19図1は壺の頸部の破片である。外面は刷毛目調整を施した後、ナデ仕上げを行う。内面はナデ調整を主体とする。残存部の外面に段や沈線は認められず、口縁部と頸部の境が若干強く屈曲する器形となる。2・3は底部から胴部にかけての大型破片で、前者は壺、後者は壺の底部になる可能性が高い。4は内湾しながら直立する口縁部をもつ壺で、口縁端部外面に刻目を施すとともに口縁端部外面よりやや下位に1条の刻目突帯を有する。さらに、胴部外面の上位には刷毛目調整の工具で施した弱い段が認められる。5・第20図6～8は下城式土器の端で、5の底部には焼成後の穿孔がみられる。9・10は口縁部が大きく開く鉢で、外面に1条の刻目突帯を有する。11・12は底部で、前者は壺、後者は壺の底部と考えられる資料である。

片割に
焼成後
穿孔

SK1112 (第21図) I-1区(X6小区)に位置する土坑である。古墳時代前期の溝であるSD1111の下層から検出された。平面プランは略楕円形を呈し、埋土は黒褐色土を主体とする土層で形成されている。遺構の規模は長径1.2m、短径1.0m、深さ20cmである。遺構の性格は不明であるが、その形態から貯蔵穴ではなく、廃棄土坑(ゴミ穴)などの用途を想定しておきたい。遺構周辺と埋土上位から土器小片が少量出土している。埋土上位からの遺物には詳細な構築時期を決定できる資料はないが、遺構周辺から出土した遺物の中に下城式土器が認められた。弥生時代前期末に比定される遺構である。

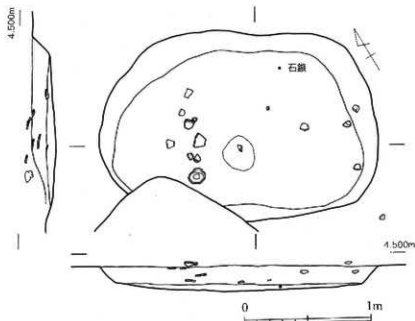
廃棄土坑
(ゴミ穴)

SK1112出土遺物 (第22図) 図示した遺物は下城式土器の壺である。口縁端部からやや下った部位に1条の刻目突帯を有し、口縁端部外面にも刻目を施す資料である。



第22図 SK1112出土遺物 (1/4)

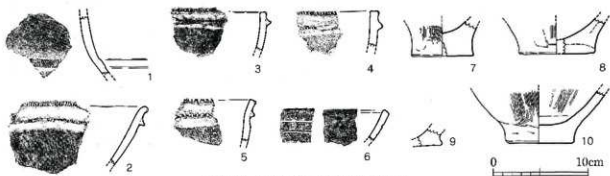
第21図 SK1112実測図 (1/30)



第23図 SK1203実測図 (1/30)



第24図 SK1203出土遺物① (2/3)



第25図 SK1203出土遺物② (1/4)

SK1203 (第23図) 1-2区(711小区)に位置する土坑である。古墳時代前期の住居跡SH1202、弥生時代前期末の性格不明遺構SX1211と切り合い関係を有し、遺構の構築順序は、SX1211(弥生時代前期末)→SK1203(弥生時代前期末)→SH1202(古墳時代前期)となる。平面プランは略楕円形を呈し、遺構の規模は長径2.2m、短径1.5m、深さ20cmである。当該遺構の性格も不明であるが、その形態から貯蔵穴ではなく、廃棄土坑(ゴミ穴)などの用途を想定しておきたい。遺構埋土から石罫や土器小片が少量出土しており、やや古相を呈する壺形土器なども認められるが、その大半が弥生時代前期末に比定される資料である。

廃棄土坑
(ゴミ穴)?

SK1203出土遺物 (第24・25図) 第25図1は甕の肩部の破片である。残存部の下位に1条の削出突帯を有し、外面は縦方向、内面は横方向のミガキ調整を主体とする。東田空遺跡出土の弥生時代前期土器の中では、やや古い属性を有する資料として注意を払っておきたい。2は口縁端部が外側に開く器形を呈する鉢で、外面に刻目突帯を1条有する。3～5は下城式土器の甕の口縁部である。いずれも口縁端部と突帯上に刻目を有する。6は鉢の口縁部と思われ、外面に2条のヘラ掻き沈線をもつ。7～10は底部で、7・8は壺、9・10は甕の底部となる可能性が高い資料である。

削出突帯

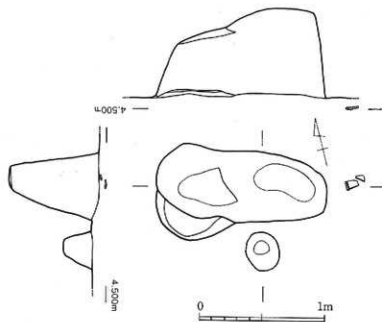
石罫

第24図は姫島産黒耀石の石罫である。

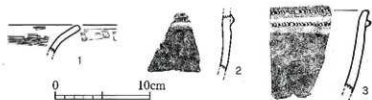
SK1204 (第26図)

1-2区 (A11小区) に位置する土坑である。平面プランは略楕円形を呈し、遺構の規模は長径1.35m、短径0.55m、深さ45~70cmである。底面は東に向かって緩やかに傾斜している。埋土中からの出土遺物はなく、遺構の性格や詳細な構築時期は不明である。土坑の周辺から弥生時代前期末の土器片が出土していることなどから、ここでは弥生時代前期末の遺構と判断しておきたい。

遺構の性格
・詳細な
構築時期は
不明



第26図 SK1204実測図 (1/30)

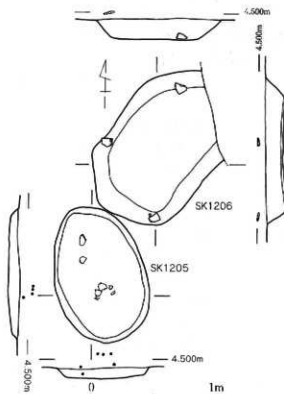


第27図 SK1204出土遺物 (1/4)

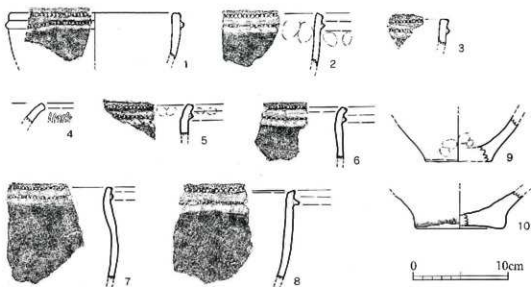
SK1204出土遺物(第27図) 1は壺の口縁部の破片で、外面は刷毛目の後にミガキ、内面はミガキによる調整が認められる。2・3は下城式土器の壺である。

SK1205・SK1206 (第28図) 近接した位置に構築された2基の土坑で、いずれも1-2区 (Z11小区) に位置する。両者とも平面プランは略楕円形を呈し、SK1205の規模は長径1.1m、短径0.7m、深さ10cm、SK1206の規模は長径1.1m、短径0.85m、深さ18cmである。SK1206は弥生時代前期末の貯蔵穴SK1207と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK1207→SK1206となる。両者とも、その形態から貯蔵穴ではなく、廃棄土坑(ゴミ穴)などの用途が想定される遺構である。埋土中や遺構の周辺から弥生時代前期末の土器が出土しており、両者とも弥生時代前期末に比定される土坑である。

廃棄土坑
(ゴミ穴)?



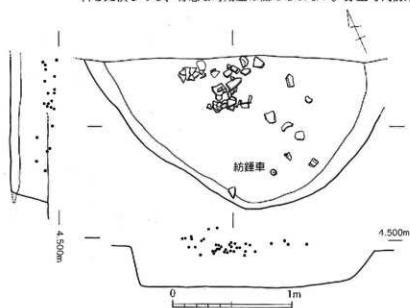
第28図 SK1205・SK1206実測図 (1/30)



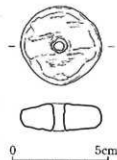
第29図 SK1205・SK1206出土遺物 (1/4)

SK1205・SK1206出土遺物 (第29図) 1～3はSK1205の出土遺物で、いずれも下城式土器の壁である。4～10はSK1206の出土遺物である。4は壺の口縁部で、外面にミガキ、内面にナデ調整を施す。5～8は下城式土器の壺、9・10は底部である。

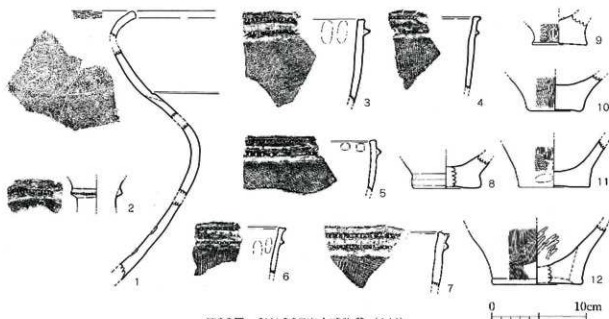
SK1207 (第30図) 1～2区 (Z11小区) に位置する貯蔵穴である。弥生時代前期末の上坑SK1208と切り合い関係を有し、遺構の構築順序は貯蔵穴SK1207・土坑SK1206となる。遺構の平面形態は略円形プランを呈し、北側は調査区外に伸びている。規模は現状で東西2.5m、南北1.3m、深さ35cmを測り、他の貯蔵穴と比較するとやや大型である。出土遺物には、埋土上位から弥生土器片や土製紡錘車などが出土している。出土土器の一部には、やや古相を呈する資料も存在するようであるが、その大半は弥生時代前期末に比定される。切り合い関係にある土坑SK1206の出土資料と比較しても、有意な時期差は認められない。弥生時代前期末に比定される遺構である。



第30図 SK1207実測図 (1/30)



第31図 SK1207出土遺物① (1/2)

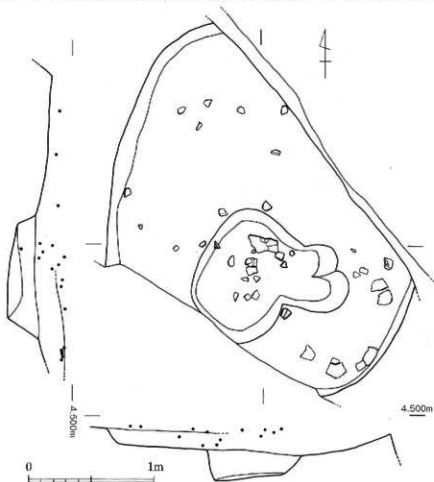


第32図 SK1207出土遺物② (1/4)

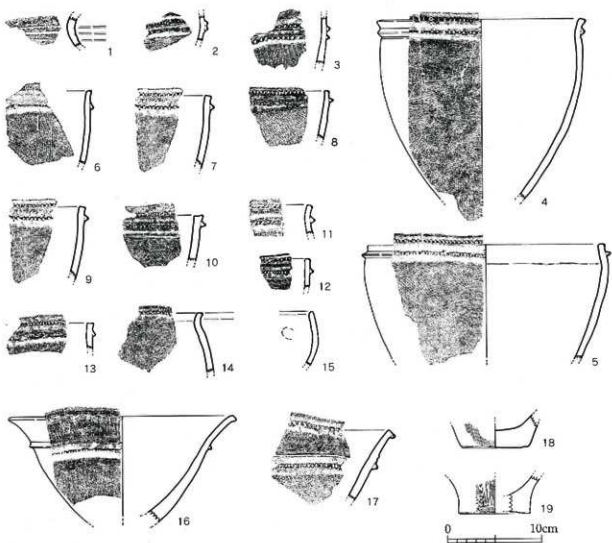
十段紡織車

SK1207出土遺物 (第31・32図) 第31図は土製紡織車である。径4.2cm、厚み1.4cmを測る。第32図1は壺である。同一個体と推定される口縁部から底部までの破片が存在するが、接合していない。肩部に段を打し、調整は内外面ともミガキとナデを主体とする。2は高坏の破片で、環部と脚部の境界に刻目突帯を貼り付ける。3～7は下城式土器の頸、8～11は底部である。

SK1208 (第33図) I-2区 (A11小区) に位置する貯蔵穴である。時期不明の溝SD1201 (190頁参照) に切られており、遺構の構築順序はSK1208→SD1201とな



第33図 SK1208実測図 (1/30)



第34図 SK1208出土遺物 (1/4)

る。遺構の平面形態は不整円形プランを呈し、南側は調査区外に伸びている。断面形態は袋状を呈する可能性があるが、上面がかなり削平されている。規模は現状で長径2.8m、深さ15cmを測り、他の貯蔵穴と比較するとやや大型である。また、底面に長径1.1m、短径0.75m、深さ20cmの楕円形ピットが構築されている。埋土中から弥生土器片が出土しており、その年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

SK1208出土遺物 (第34図) 1～3は壺である。1は頸部の破片で、外面に3条のヘラ描き沈線を施す。2・3は胴部の破片で、胴部中に相当する部位に2条の刻目突帯を有する。4～13は下城式土器の罌である。14は口縁端部が如意状に外反する罌の口縁部で、端部外面に刻目を施している。15は鉢の口縁部と推定され、内湾しながら直立する形態を呈する。内面には指頭痕が認められる。16は口縁部が大きく開く鉢で、外面に1条の刻目突帯を有する。17は波状口縁を呈する鉢で、口縁端部外面に1条の刻目突帯、残存部の中位に各1条のヘラ描き沈線と刻目突帯を有する。類例の少ない、特異な形態を呈する鉢である。18・19は底部の資料である。

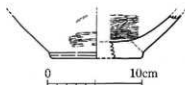
遺物の横円形ピット

波状口縁の罌

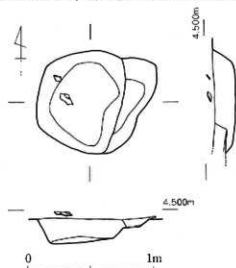
SK1209 (第35図) I 2区 (Z11小区) に位置する土坑である。遺構の平面形態は不整形円形プランを呈し、規模は東西0.85m、南北0.8m、深さ20cmである。出土遺物は検出面から弥生1:1器片が少量出土している。その形態から貯蔵穴ではなく、廃棄土坑(ゴミ穴)などの用途を想定している。弥生時代前期末に比定される遺構である。

SK1209出土遺物(第36図) 図示した遺物は壺の底部である。内外面ともミガキ調整を主体とする。

廃棄土坑
(ゴミ穴)?

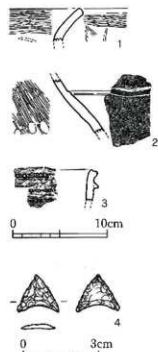


第36図 SK1209出土遺物 (1/4)

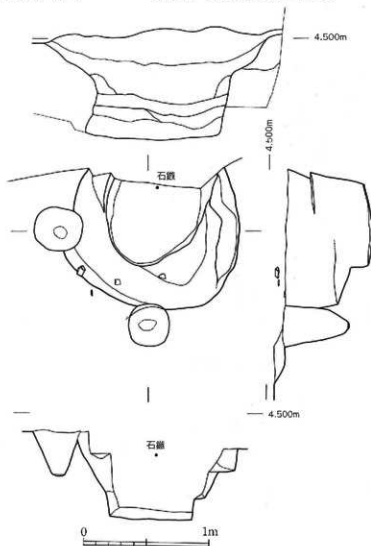


第35図 SK1209実測図 (1/30)

SK1210 (第37図) I・2区 (Z11小区) に位置する貯蔵穴である。遺構の南西側と北西側は時期不明のピットによって切られている。遺構の平面形態は略円形プラン



第38図 SK1210出土遺物 (1/4・2/3)



第37図 SK1210実測図 (1/30)

土面の再生
(盛り直し)

を呈し、北側は調査区外に伸びている。断面形態は袋状を呈し、遺構の規模は径1.35m、深さ35cmを測る。土層断面を観察すると、埋土下位に黒褐色土や暗茶褐色土などの意図的な埋土が認められ、床面を再生(盛り直し)している様子が看取できる。出土遺物については、埋土上位から行徳や弥生土器片が認められた。弥生土器は前期末の資料と比較して、やや古相を呈する資料が主体を占めているが、出土量が僅少である。弥生時代前期後半から末にかけての遺構である。

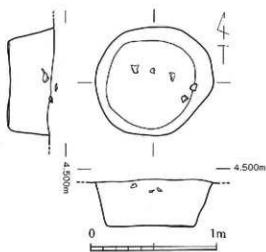
SK1210出土遺物(第38回) 1・2は壺である。

1は口縁部の破片で、内外面ともにミガキ調整を行っている。2は頸部から肩部にかけての破片で、頸部と肩部の境に削出突帯を有する。

3は下城式土器の甕である。以上の土器は弥生前期末の土器群よりやや古相を呈する可能性が考えられるが、出土量が僅少であるため、良好な一括資料ではない。弥生時代前期後半から末の時間幅の中で、遺構の年代を考えておきたい。4は姫島産黒曜石の石鏃である。

削出突帯

石鏃

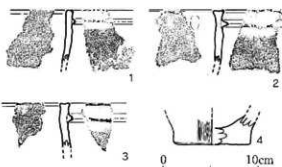


第39回 SK2103実測図(1/30)

SK2103(第39回) II-1区(B13小区)

に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は円形プランを呈し、断面形態は袋状を呈していたものと推定されるが、上面が削平を受けている。遺構の規模は径0.9~0.95m、深さ35cmである。埋土上位から弥生土器片が少量出土した。弥生時代前期末の遺構である。

SK2103出土遺物(第40回) 1~3は下城式土器の甕の口縁部である。いずれも、口縁部からやや下った部位に1条の刻目突帯を有し、端部外面にも刻目を施している。4は底部の資料である。



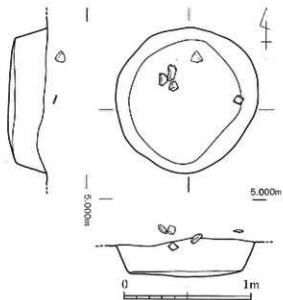
第40回 SK2103出土遺物(1/4)

SK2104(第41回) II-1区(C14小区)

に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は円形プランを呈し、断面形態は袋状を呈していたものと推定されるが、上面が削平を受けている。遺構の規模は径1.1~1.15m、深さ30cmである。埋土上位から弥生土器片や礫

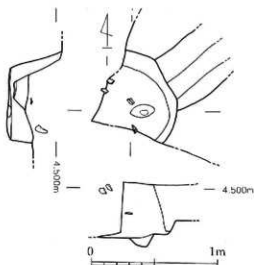
が少量出土したものの、円化可能な資料は存在しない。遺構周辺の状況から、弥生時代前期末の所産と考えられる。

円化可能な
遺物がない



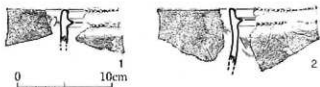
第41回 SK2104実測図(1/30)

SK2114 (第42図) II-1区 (B・C13 小区)に位置する貯蔵穴である。古墳時代前期の住居跡SH2107 (105頁参照)と切り合い関係を有する。遺構の平面形態は略円形を呈し、北西側と南側は調査区外に伸びている。規模は現状で最大径0.75m、深さ20cmを測り、やや小型の貯蔵穴となる可能性が考えられる。断面形態は袋状を呈していたものと推定されるが、やはり上面が削平を受けている。埋土中位から上位にかけて、少量の弥生土層が出土した。弥生時代前期末の所産と考えられる。



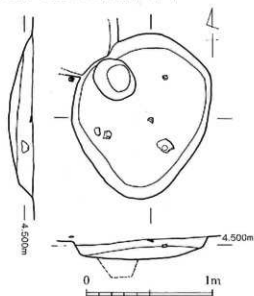
第42図 SK2114実測図 (1/30)

SK2114出土遺物 (第43図) 1・2は下城式土器の甕の口縁部で、口縁部からやや下った部位に1条の刻目突帯を有し、口縁部外面にも直接刻目を施す。



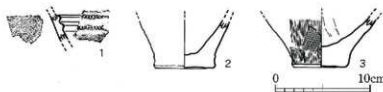
第43図 SK2114出土遺物 (1/4)

SK2115 (第44図) II-1区 (B14 小区)に位置する土坑である。遺構の平面形態は不整形円形を呈し、その規模は南北1.3m、東西1.1m、深さ10cmを測る。その形態から貯蔵穴ではなく、廃棄土坑 (ゴミ穴) などの用途が想定される遺構である。埋土中位から上位と遺構の周辺から、土器片が出土している。出土遺物は弥生時代前期の資料が主体となるが、古墳時代前期の遺物が混在している。遺構・遺物の状況から、弥生時代前期末の遺構と判断しているが、その所属年代が古墳時代前期に下る可能性も捨てきれない。



第44図 SK2115実測図 (1/30)

SK2115出土遺物 (第45図) 1は甕の肩部の破片で、頸部と胴部の境に2条の刻目突帯を有する資料である。2・3は底部で、前者は内外面ともナデ、後者は刷毛目を上体とした調整を行う。甕の底部になる可能性が考えられる。



第45図 SK2115出土遺物 (1/4)

廃棄土坑
(ゴミ穴)?

古墳時代
前期土坑
の所在

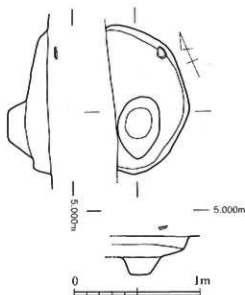
SK2201 (第46図) II-2区 (C15小区) に位置する土坑である。遺構の平面形態は略円形を呈し、西側は調査範囲外に伸びている。規模は最大径が約1.2m、深さ15cmを測る。底面付近で長径50cm、短径30cm、深さ15cm程度の小ピットを検出したが、この土坑に確實に付属する施設かどうかは判断が難しい。遺構の性格については、貯蔵穴である可能性も考えられるが、規模が小さいことや深度が浅いこと、出土遺物が僅少であることから、廃棄土坑(ゴミ穴)などの用途を想定しておくのが妥当であろう。遺構検出面よりやや上位で、土器片が少量認められた。弥生時代前期末に比定される遺構である。

廃棄土坑
(ゴミ穴)?

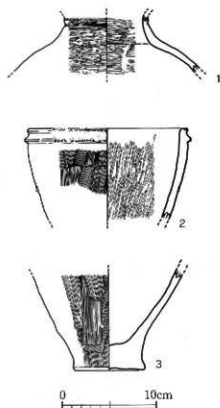
SK2201出土遺物 (第47図) 1は壺の頸部から肩部にかけての破片で、頸部外面に2条の沈線が施している。内外面ともミガキ調整が認められる。2は下城式土器の壺の口縁部で、外面は刷毛目調整、内面は斜め方向のミガキ調整が施されている。3は壺の底部と推定される資料で、外面は刷毛目調整、内面はナデ調整を主体とする。

SK2308 (第48図) II-3区 (D17小区) に位置する貯蔵穴である。中世の土坑SK2304および古墳時代前期の住居跡SH2105と切り合い関係を有する。遺構の北側はSK2304の構築によって、完全に破壊されていた。遺構の平面プランは略円形を呈し、断面形態は袋状を呈していたと思われるが、上面が削平を受けている。規模は径1.25m、深さ45cmである。埋土上位から検出面にかけて、弥生土器が西側から廃棄されたような状態で出土した。貯蔵穴が本来の機能を停止した後、廃棄土坑として再利用されたことが観察できる。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

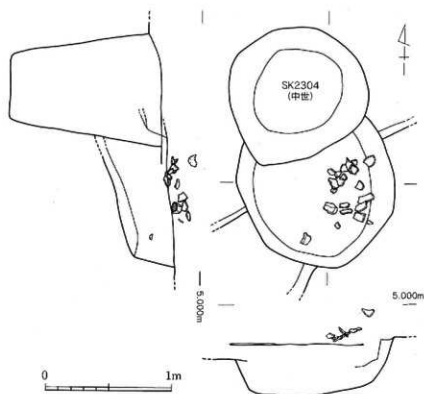
高瀬土坑と
して再利用



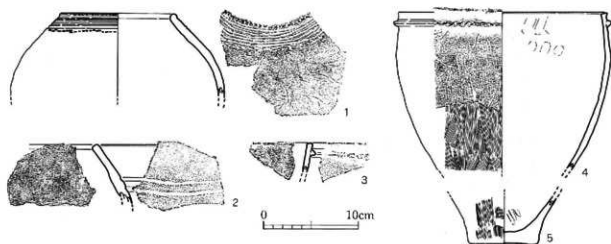
第46図 SK2201実測図 (1/30)



第47図 SK2201出土遺物 (1/4)



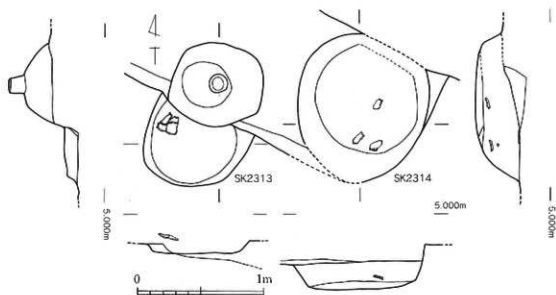
第48図 SK2308実測図 (1/30)



第49図 SK2308出土遺物 (1/4)

西部
瀬戸内系

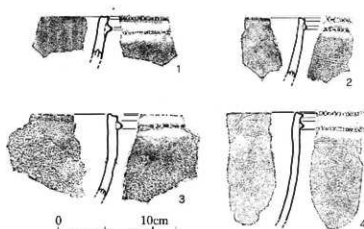
SK2308出土遺物 (第49図) 1は西部瀬戸系の無頸壺である。口縁端部外面に直接刻み、口縁外面上位に6条のヘラ描き沈線文、沈線文の下位に列点文を施している。調整は内外面ともナデあるいはミガキを主体とする。2も無頸壺で、外面に2条のヘラ描き沈線文を有する。この土器も、内外面ともナデあるいはミガキ調整を施している。3・4は下城式土器の甕で、いずれも口縁端部からやや下った部位に1条の刻目突帯を有する。口縁端部外面には刻みを施していない。5は甕の底部と推定される資料で、外面は刷毛目調整、内面は荒いナデ調整を施している。



第50図 SK2313・SK2314実測図 (1/30)

SK2313・SK2314 (第50図) いずれも、Ⅱ-3区(C・D16小区およびC17小区)に位置する貯蔵穴である。

両者ともに、古墳時代前期の住居跡SH2311と切り合い関係を有し、さらにSK2313については北側を時期不明の柱穴によって破壊されている。両者とも平面形態は略円形プランを呈し、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が崩平を受けている。SK2313の規模は最大径0.85m、深さ10cmで、検出面より上位で弥生土器片が出土した。SK2314の規模は径1.05m、深さ20cmで、埋土下位から中位にかけて弥生土器片が出土している。弥生時代前期末に比定される遺構である。



第51図 SK2313・SK2314出土遺物 (1/4)

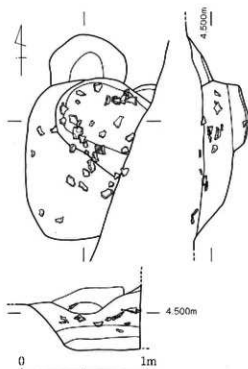
SK2313・SK2314出土遺物 (第51図) 1がSK2313、2～4がSK2314からの出土遺物である。いずれも下城式土器の甕の口縁部である。

SK2315 (第52図) Ⅱ-3区(D16小区)に位置する土坑である。遺構の平面形態は不整形円プランを呈し、東側は水道管やガス管等を避けるために未調査となっている。その規模は東西0.8m、南北1.25m、深さ20cmである。底面付近に深さ15cm前後の窪み、あるいは不整形土坑が検出されたが、当該遺構との関係は不明である。その形態や底面付近が緩やかに傾斜していることから、貯蔵穴ではなく、廃棄土坑などの用途が想定される遺構である。埋土中位から上位にかけて、弥生土器片が出土した。弥生時代前期末に比定される遺構である。

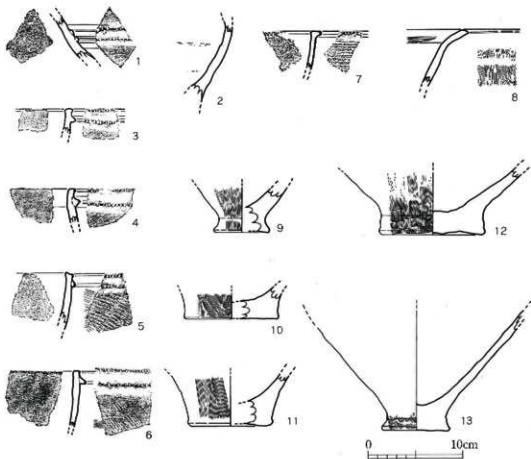
廃棄土坑
(ゴミ穴)?

西部
瀬戸内系

SK2315出土遺物 (第53図) 1は
壺の肩部の破片で、外面に2条の刻目
突帯を有する。2は壺の胴部で、調整
は内外面ともにナデ調整を主体とする。
3～6は下城式土器の壺の口縁部である。
いずれも口縁端部外面に直接刻み、口
縁端部からやや下った部位に刻目突帯
を有する。7は口縁部が逆し字状を呈
する西部瀬戸内系の壺である。胴部外
面上位にヘラ掻きによる多条沈線文を
施すとともに、口縁端部外面と端部内
面にも直接刻みが認められる。8は口
縁部が大きくラップ状に開く形態を呈
する鉢で、内外面とも刷毛目調整ある
いはナデ調整が行われている。9～13
は底部の資料である。



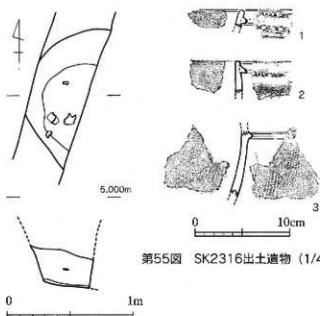
第52図 SK2315実測図 (1/30)



第53図 SK2315出土遺物 (1/4)

SK2316 (第54図) II-3区 (C16小区) に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は略円形プランを呈すると思われるが、東側はガス管や水道管等を避けるために未掘となっている。断面形態は袋状を呈していたと思われるが、上面が削平を受けている。現状での規模は最大径1.1m、深さ25cmである。埋土中位から検出面にかけて、弥生土器片が少量出土している。弥生時代前期末に比定される遺構である。

SK2316出土遺物 (第55図) 1~3はいずれも下城式土器の甕である。口縁部と胴部上位の破片が存在する。

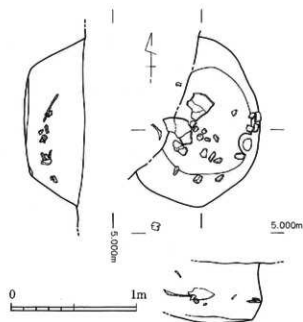


第55図 SK2316出土遺物 (1/4)

第54図 SK2316実測図 (1/30)

SK2401 (第56図) II-4区 (D18小区) に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は略円形プランを呈し、断面形態は袋状を呈していたと思われるが、上面が削平されている。規模は最大径1.3m、深さ75cmである。埋土中位付近に弥生土器片がややまとまった状態で出土しており、遺物の出土状態はレンズ状堆積の様相を呈する。このことから、当該遺構は貯蔵穴が本来の機能を停止した後に廃棄土坑として再利用されたことが観察できる。弥生時代前期末に比定される遺構である。

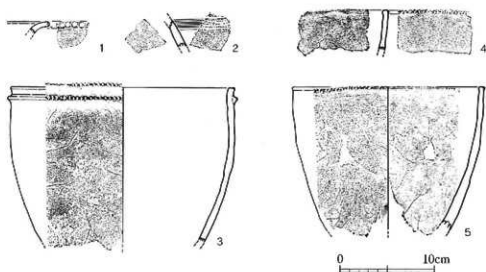
廃棄土坑として再利用



第56図 SK2401実測図 (1/30)

SK2401出土遺物 (第57図) 1は甕の口縁部の小破片で、端部外面にやや大型の円形刻目を有する。西部瀬戸内系の属性を有する資料であろう。2は甕の胴部付近の破片で、外面に4条のヘラ描き沈線文が認められる。3は下城式土器の甕で、口縁端部からやや下った部位に1条の刻目突帯を有し、端部外面に直接刻みが認められる。4・5は口縁部が直立する器形の甕で、口縁端部外面に直接刻みを施す。東出雲遺跡出土の弥生前期土器の中では、類例が少ない資料である。

西部瀬戸内系

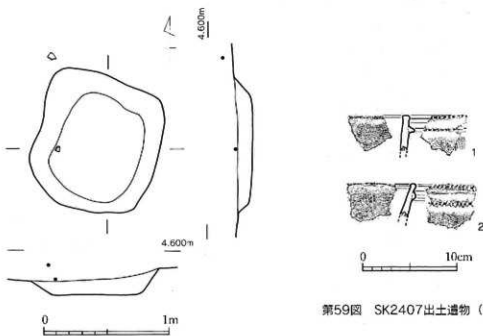


第57図 SK2401出土遺物 (1/4)

SK2407 (第58図) II-3区(F18小区)に位置する土坑である。古墳時代後期の住居跡SH2403(163頁参照)と切り合い関係を有し、住居跡の床面調査後に検出された。遺構の平面形態は不整円プランを呈し、その規模は東西1.0m、南北1.1m、深さ10cmである。遺構上面が大きく削平されているものの、遺構の規模が小さいことや深度が浅いこと、出土遺物が僅少であることなどから、廃棄土坑(ゴミ穴)などの用途を想定しておくのが妥当であろう。遺構の周辺や検出面付近で、下城式土器の破片が少量出土した。遺構の詳細な構築時期は確定できないが、弥生時代前期末の所産と考えるべき。

廃棄土坑
(ゴミ穴)?

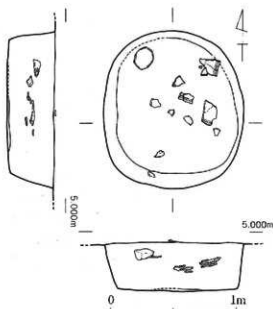
SK2407出土遺物 (第59図) 1・2は下城式土器の甕の口縁部で、いずれも口縁端部からやや下った部位に1条の刻目突帯を有し、端部外面に直接刻目が認められる。



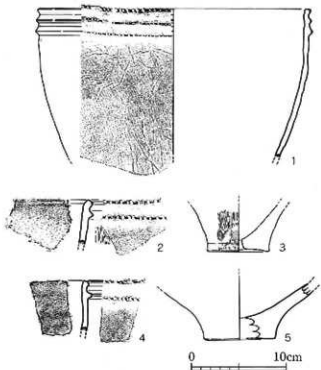
第59図 SK2407出土遺物 (1/4)

第58図 SK2407実測図 (1/30)

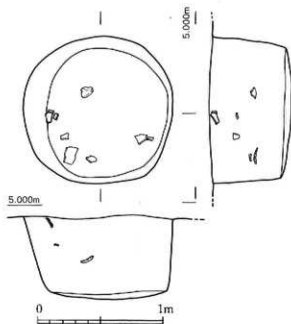
SK3103 (第60図) III-1区 (H-123小区) に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は略円形プランを呈し、断面形態は袋状を呈していたと思われるが、上面が削平されている。規模は長径1.25m、短径1.1m、深さ約40cmである。埋土小位から上位にかけて、弥生土器片や礫が出土した。遺物の出土状態から、貯蔵穴が本来の機能を停止した後に廃棄土坑として再利用された可能性が高い。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。



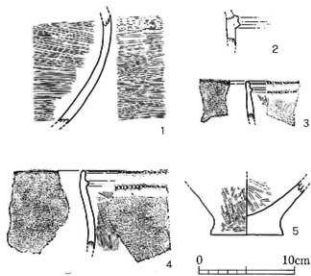
第60図 SK3103実測図 (1/30)



第61図 SK3103出土遺物 (1/4)



第62図 SK3104実測図 (1/30)



第63図 SK3104出土遺物 (1/4)

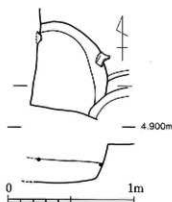
SK3103出土遺物 (第61図) 1～3は下城式土器の甕である。1は口縁端部外面に直接刻みを施し、口縁外面に2条の刻目突帯を有する。2・3は口縁外面の刻目突帯が1条となる資料である。4・5は底部で、前者は甕、後者は甕の底部と推定される資料である。

SK3104 (第62図) III-1区(H23小区)に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は略円形プランを呈し、断面形態は袋状を呈していたと思われるが、上面が削平されている。規模は径1.15m、深さ65cmである。埋土中位から上位にかけて、弥生土器片が出土した。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

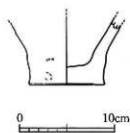
SK3104出土遺物 (第63図) 1は甕の胴部で、内外面ともミガキ調整によって仕上げている。2は胴部中位付近の破片で、外面にM字状の突帯を貼り付ける。突帯上に刻目は認められない。内外面ともナデ調整が主体となる。3・4は下城式土器の甕で、口縁端部外面に直接刻みを施し、口縁外面に1条の刻目突帯を有する。5は底部の資料で、内外面とも荒いナデもしくはミガキで仕上げている。

SK3105 (第64図) III-1区(H-122小区)の調査区西南隅に位置する貯蔵穴である。周辺にいくつかの土坑やピットが存在しており、切り合い関係を有していた可能性があるが、互いの埋土が類似しているため、構築順序などを明確にすることができなかった。遺構の平面形態は略円形プランと思われるが、調査区の制限により、北側と西側は未調査となっている。断面形態は袋状を呈していたと思われるが、上面が大きく削平されている。規模は現状で長径0.7m、深さ30cmで、貯蔵穴としてはやや小型のものである可能性が高い。埋土中位から、弥生土器片が少量出土した。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

SK3105出土遺物 (第65図) 図示した遺物は、甕の底部と推定される資料である。



第64図 SK3105実測図 (1/30)



第65図 SK3105出土遺物 (1/4)

SK3111 (第66図)

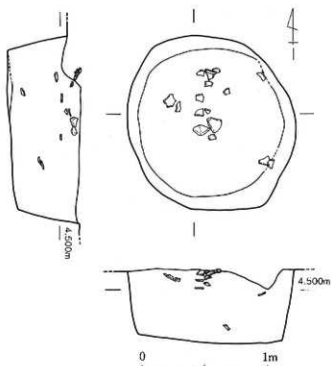
Ⅲ 1区 (23小区)

に位置する貯蔵穴である。時期不明の住居跡SH3109に切られており、遺構の構築順序はSK3111→SH3109となる。また、北側上面は擾乱によって破壊を受けている部位が認められる。遺構の平面形態は略円形プランを呈し、断面形態は袋状を呈していたと思われるが、上面が削平されている。規模は径1.35m、深さ55cmである。埋土中から弥生土器片が出土しているが、埋土上位に土器片がやや集中する傾向が観察できる。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

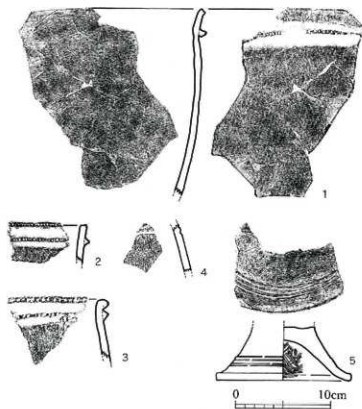
SK3111出土遺物 (第67図) 1～3は下城式土器の甕である。

1はやや外反する口縁をもち、口縁外面に1条の刻目突帯を有する。口縁部には刻目を施していないようである。2は直立する口縁をもち、口縁端部外面に直接刻みを施し、口縁外面に1条の刻目突帯を有する。3は口縁端部が外反し、端部外面と口縁外面の突帯上に刻目を施す資料である。

4は器種不明であるが、残存部の外面に沈線文が認められる。5は高環の脚部で、外面に3条のヘラ描き沈線を施す。外面は刷毛目調整の後ミガキを施し、内面はミガキ調整が主体となる。



第66図 SK3111実測図 (1/30)

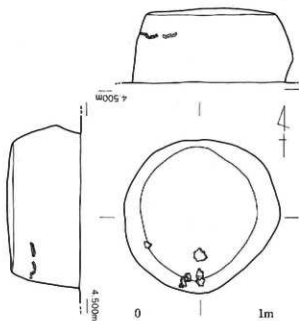


第67図 SK3111出土遺物 (1/4)

SK3113 (第68図) III-1

区(124・25小区)に位置する貯蔵穴である。古墳時代前期の住居跡SH3112、古墳時代後期の不整形土坑SK3102と切り合い関係を有し、SH3112の床面で検出された。遺構の構築順序は、SK3111→SH3112→SK3102となる。遺構の平面形態は略円形プランを呈し、断面形態は上面が削平されているものの、袋状を呈していたことが観察できる。規模は径1.2m、深さ55cmである。埋土中位から弥生土器片が少量出土しているが、図示可能な資料は存在しない。周辺の状況から、弥生時代前期末の遺構と推定している。

図示可能な
遺物なし

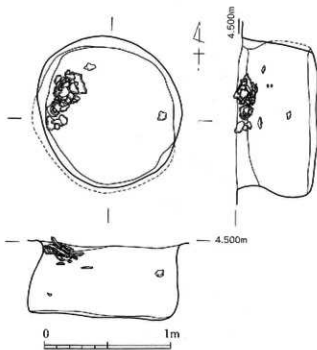


第68図 SK3113実測図 (1/30)

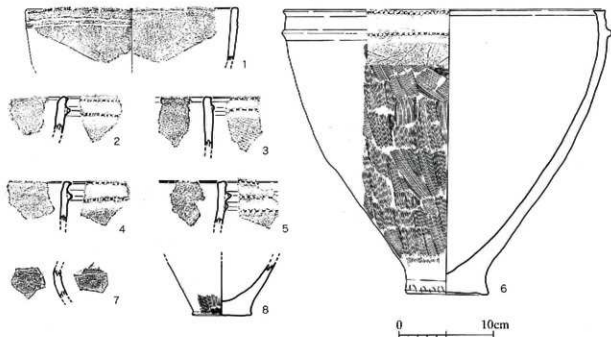
SK3114 (第69図) III-1区

(124小区)に位置する貯蔵穴である。当該遺構も古墳時代前期の住居跡SH3112と切り合い関係を有し、SH3112の床面で検出されている。遺構の平面形態は略円形プランを呈し、断面形態は上面が削平されているものの、袋状を呈していたことが観察できる。規模は径1.15m、深さ55cmである。埋土上位の北西側から宛形に復元できる下城式土器などの遺物が、まとまって廃棄された状態で出土している。このような出土状態から、当該遺構は貯蔵穴が本来の機能を停止した後に廃棄土坑として再利用されたことが推定される。出土遺物の年代観から、生時代前期末に比定される遺構である。

廃棄土坑と
して再利用



第69図 SK3114実測図 (1/30)



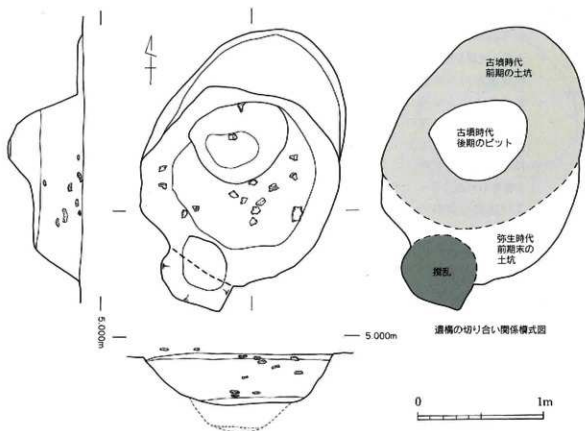
第70図 SK3114出土遺物 (1/4)

SK3114出土遺物 (第70図) 1は直立する口縁を有する甕で、口縁部外面に2条のヘラ描き沈線を施す。2～6は下城式土器の甕である。6については口縁部の上面に面を形成している。7は甕の頸部で、残存部の上位に2条のヘラ描き沈線が認められる。8は甕の底部と推定される資料である。

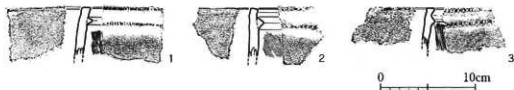
3つの遺構
の重複

SK3201 (第71図) III-2区 (G20小区) に位置する土坑である。検出時にはひとつの遺構と認識していたが、掘り下げの結果、遺構の形態と出土遺物から、3つの遺構が重複していることが判明した。3つの遺構とは古墳時代後期のピットと古墳時代前期の土坑、弥生時代前期の貯蔵穴で、遺構の位置関係と重複関係は第71図に示すとおりである。古墳時代後期のピットからは須恵器の小片、古墳時代前期の土坑からは小型器台の小片などが出土しているが、いずれも同化不能である。弥生時代前期の貯蔵穴は平面形態が略円形プランを呈し、断面形態は袋状を呈していたと思われるが、上面が削平されている。また、西南側は攪乱によって、一部が破壊を受けている。貯蔵穴の規模は径約1.5m、深さ40cmである。掘土中から弥生土器の破片が一定量出土しているが、小片が多い。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

SK3201出土遺物 (第72図) 1～3は下城式土器の甕で、いずれも口縁部外面に直接刻みを施し、口縁部外面に1条の刻目突帯を有する。



第71図 SK3201実測図 (1/30)



第72図 SK3201出土遺物 (1/4)

SK3202 (第73図) III-2区(G20小区)の調査区南西隅に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は略円形プランと推定されるが、西側と南側は調査区外に伸びている。断面形態は袋状を呈していたと思われるが、上面が削平を受けている。規模は最大径1.2m、深さ65cmである。埋土中位付近から、弥生式土器や鏝がややまとまって出土した。埋土下位以下からの出土遺物は極めて少ないことから、当該遺構も貯蔵穴が本来の機能を停止した後に、廃棄土坑として再利用されたことが推定される。出土遺物の年代観から、時代前期末に比定される遺構である。

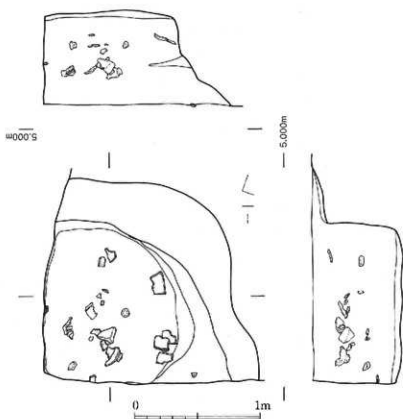
廃棄土坑と
して再利用

SK3202出土遺物 (第74図) 1～3は下城式土器の甕である。1はやや内湾気味に立ち上がる口縁部をもち、口縁部外面に直接刻み、口縁外面に1条の刻目突帯を有する。2は兜形に復元される資料で、直立する口縁部の外面に1条の刻目突帯を有し、口縁部外面にも直接刻みを施す。3も口縁部外面に直接刻みを施すが、口縁部外面の刻目突帯が2条となる。4は口縁部が逆L字

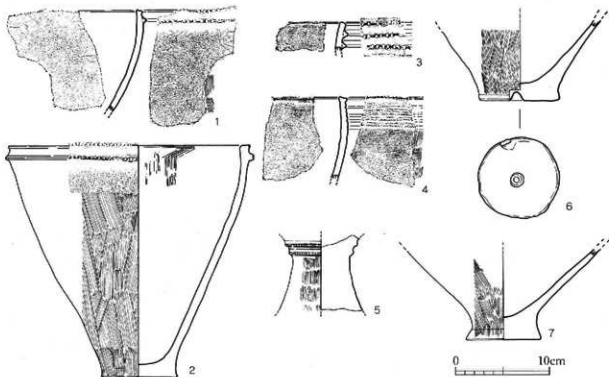
西部
板戸内系

状になる雲で、脚部外面に5条のヘラ描き沈線を施す。西部瀬戸内系の資料である。5は高坏の脚部で、坏坏の脚部と脚部の境界付近に2条の刻目突帯が認められる。6・7は底部の資料である。6については、底部外面に円形の窪みがあり、焼成前に穿孔を行おうとした意図がみられるが、穿孔は貫通していない。

貫通しない
焼成前穿孔



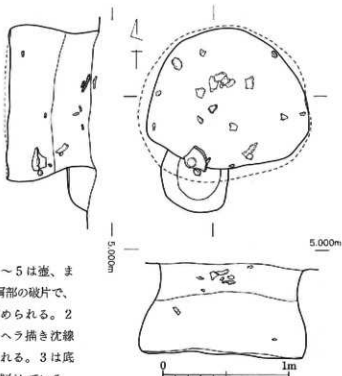
第73図 SK3202実測図 (1/30)



第74図 SK3202出土遺物 (1/4)

SK3207 (第75図) III-2

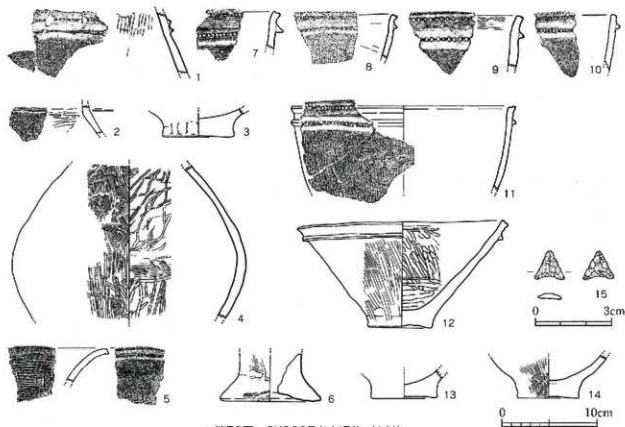
区(G21小区)に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は不整形円形プランで、断面形態は上面が削平を受けているものの、袋状を呈している。規模は長径1.3m、短径1.05m、深さ約70cmである。埋土中位から上位にかけて、弥生土器の鉢の大型破片などの遺物が出土している。弥生時代前期末に比定される遺構である。



第75図 SK3207実測図 (1/30)

SK3207出土遺物 (第76図) 1~5は蓋、または蓋と推定される資料である。1は胴部の破片で、残存部の上位に2条の刻目突帯が認められる。2も胴部の破片で、外面に1条以上のヘラ描き沈線文を有し、赤色顔料の塗布が認められる。3は底部で、この破片の外面にも赤色顔料が残存している。4は胴部の破片で、器表面は内外面ともミガキ調整で仕上げている。5は口縁部の破片で、口縁端部に面を形成し、内外面とも刷毛目あるいはナデが行われている。6は高環の脚部の破片である。7~11は下城式土器の甕である。12は鉢と思われる

赤色顔料



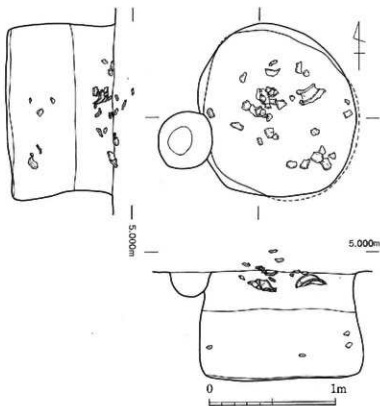
第76図 SK3207出土遺物 (1/4)

鉢または蓋 大きな大型破片で、口縁端部からやや下った部位に1条の突帯を有し、突帯上には刻目は施されていない。口縁部を上に向けた状態で図示したが、大地逆の器形である可能性も考えられ、その場合は「蓋」と呼称すべき資料である。13・14は底部の資料である。15は姫島産黒曜石の石鏝である。

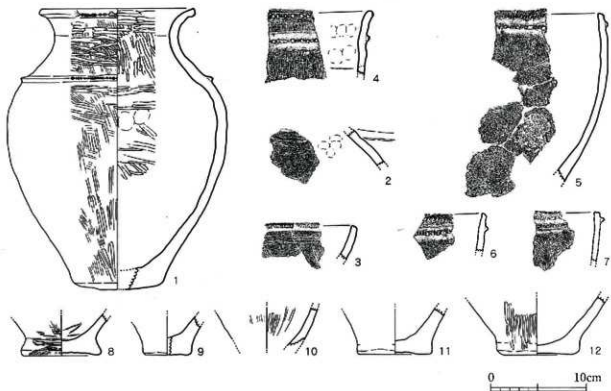
SK3208 (第77図)

Ⅲ-2区 (F22小区) に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は円形プランで、断面形態は上面が削平を受けているものの、袋状を呈している。規模は径1.2~1.3m、深さ85cmである。埋土中から弥生土器などの遺物が出土しているが、埋土上位に大型破片が集中する傾向が認められる。弥生時代前期末に比定される遺構である。

SK3208出土遺物 (第78図) 1は完形に復元される蓋である。口縁端



第77図 SK3208実測図 (1/30)



第78図 SK3208出土遺物 (1/4)

部外面下位に直接刻みを施し、肩部には1条の刻目突帯を有する。底部は凸レンズ状を呈し、外面は刷毛目調整の後にミガキ調整、内面はミガキ調整が主体となる。2は甕の肩部付近の破片と思われる、外面に弱い段が認められる。3は鉢の口縁部で、外面にヘラ掻き沈線文、口縁端部上面に刺突文が施されている。4～7は下城式土器の甕で、口縁部が外反するもの(4・6)や内湾するもの(5)、直立するもの(7)などのバリエーションが存在する。8～12は底部の資料である。

SK3211・SK3212 (第79図) いずれもⅢ-2区(G21小区)に位置する貯蔵穴である。

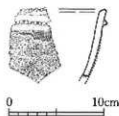
SK3211は古墳時代前期の住居跡SH3205(122頁参照)と、SK3212は古墳時代前期の住居跡SH3206(130頁参照)と切り合い関係を有する。SK3211とSK3212は近接した位置に構築されており、同時に併存した可能性は少ないと推定されるが、互いの埋しが類似しており、両者の切り合い関係などを明確にすることはできなかった。遺構の平面形態はいずれも略円形プランで、断面形態は上面が削平を受けているもの、

袋状を呈したことが観察される。規模についてはSK3211が径1.2m、深さ105cm、SK3212が径1.2m、深さ85cmである。出土遺物に関しては、SK3211については埋土下位から弥生土器の小片が出土しているものの、その量は僅少で、SK3212については図示可能な遺物が存在しない。出土遺物や周辺の状況から、両者とも弥生時代前期末に比定される遺構である。

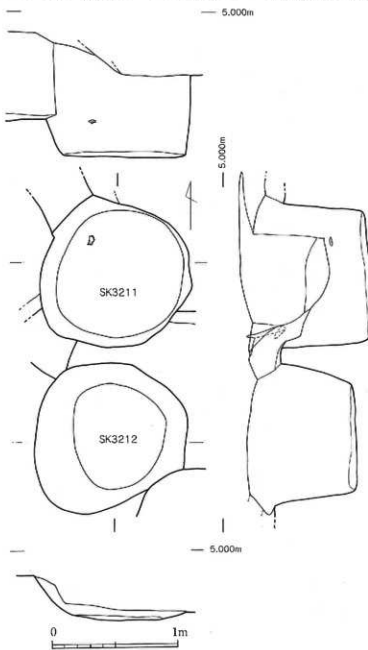
SK3211出土遺物 (第80図)

図示した遺物は、下城式土器の甕である。口縁端部外面に直接刻み、口縁端部からやや下った部位に1条の刻目突帯を有する。外面には刷毛目調整、内面には刷毛目調整とナゲ調整が行われている。

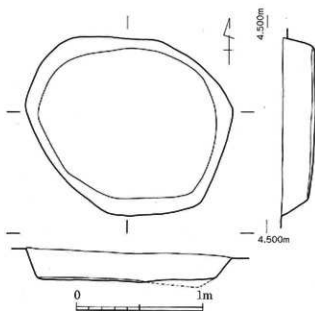
図示可能な
遺物なし



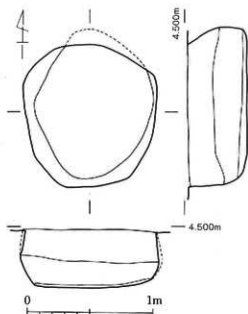
第80図 SK3211出土遺物 (1/4)



第79図 SK3211・SK3212実測 (1/30)



第81図 SK3213実測図 (1/30)



第82図 SK3214実測図 (1/30)

SK3213 (第81図) III-2区 (G21小区) に位置する貯蔵穴である。古墳時代前期の住居跡 SH3206 と切り合い関係を有し、SH3206 の床面調査後に検出された。遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が大きく削平を受けている。規模は東西1.6m、南北1.4m、深さ約20cmである。出土遺物は僅少で、図示に耐える資料は存在しない。周辺の状況から、弥生時代前期末に比定される遺構と考えられる。

SK3214 (第82図) III-2区 (G21小区) に位置する貯蔵穴である。古墳時代中期の住居跡 SH3205 と切り合い関係を有し、SH3205 の床面調査後に検出された。遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は上面が削平を受けているものの、袋状を呈している。規模は径1.0~1.1m、深さ45cmである。当該遺構についても、出土遺物は僅少で、図示に耐える資料は存在しない。周辺の状況から、弥生時代前期末に比定される遺構と考えられる。

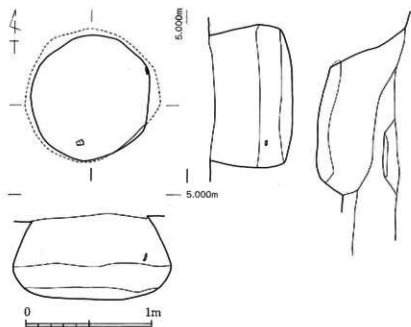
図示可能な
遺物なし

SK3215 (第83図) III-2区 (F・G22小区) に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は上面が削平を受けているものの、袋状を呈している。規模は径0.9~1.0m、深さ約70cmである。埋土中位付近から、弥生土器の小片が少量出土している。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

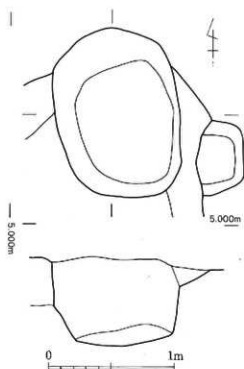
SK3215出土遺物 (第84図) 1~3はいずれも下城式土器の甕で、口縁部の破片である。

SK3217・SK3218 (第85図) いずれもIII-2区 (G22小区) に位置する貯蔵穴である。両者は同時に併存した可能性は少ないと推定されるが、互いの埋土が類似しており、両者の切り合い関係などを明確にすることはできなかった。遺構の平面形態はいずれも略円形または略楕円形プランで、断面形態は上面が削平を受けているものの、袋状を呈している。規模についてはSK3217が径1.5m、深さ60cm、SK3218が長径1.2m、短径1.05m、深さ65cmである。周辺の状況から、弥生時代前期末に比定される遺構と考えられる。

SK3217出土遺物 (第86図) 図示した遺物は片刃石斧で、欠損部位がなく、完存の資料である。



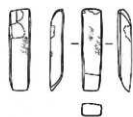
第83図 SK3215実測図 (1/30)



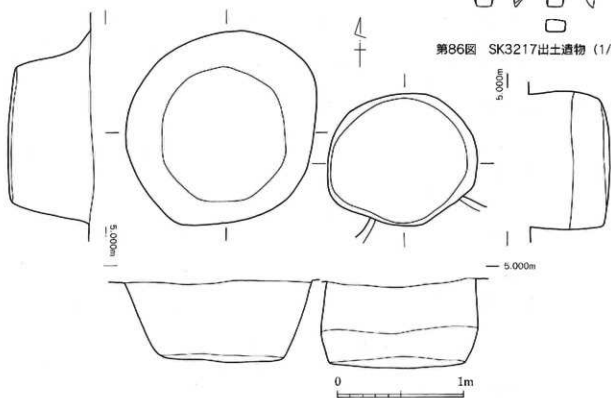
第87図 SK3219実測図 (1/30)



第84図 SK3215出土遺物 (1/4)



第86図 SK3217出土遺物 (1/4)

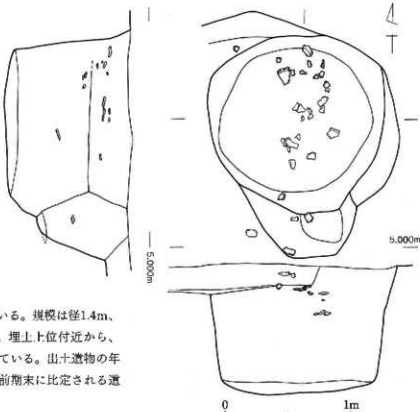


第85図 SK3217・SK3218実測図 (1/30)

図示可能な
遺物なし

SK3219 (第87図) III-2区 (G21小区) に位置する貯蔵穴である。古墳時代前期の住居跡 S113206 と切り合い関係を有している。遺構の平面形態は略楕円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと考えられるものの、上面が削平を受けている。規模は長径1.3m、短径1.0m、深さ70cmである。当該遺構についても、出土遺物は僅少で、図示に耐える資料は存在しない。周辺の状況から、弥生時代前期末に比定される遺構と考えられる。

SK3221 (第88図) III-2区 (G22小区) に位置する貯蔵穴である。古墳時代前期の不明遺構SK3220と切り合い関係を有する。遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと考えられるものの、上面が削平を受けている。規模は径1.4m、深さ約100cmである。埋土上位付近から、弥生土器片が出土している。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。



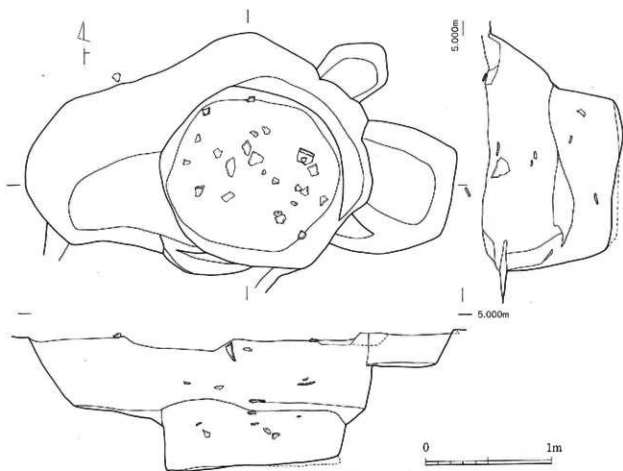
第88図 SK3221実測図 (1/30)

SK3221出土遺物 (第89図) 1~3は意で1は口縁部、2は肩部、3は胴部中位の破片である。4・5は下城式土器の壺の口縁部破片で、5については口縁部外面の突帯が剥落した痕跡が観察できる。

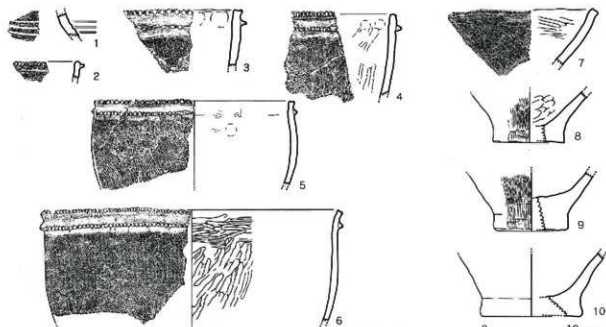


第89図 SK3221出土遺物 (1/4)

SK3222 (第90図) III-2区 (F21小区) に位置する貯蔵穴である。時期不明の土坑・柱穴などと切り合い関係を有するが、土坑・柱穴はいずれも貯蔵穴SK3222を切って構築されている。遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと考えられるものの、上面が削平を受けている。規模は径約1.5m、深さ45cmである。埋土上位付近から、弥生土器片が出土している。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。



第90図 SK3222実測図 (1/30)



第91図 SK3222出土遺物 (1/4)

SK3222出土遺物 (第91図) 1は壺の肩部付近の破片で、外面に3条のヘラ描き沈線が施されている。内面にはナデ調整が認められる。2は口縁端部直下に刻目突帯を有する甕で、西部瀬川内系の資料であろう。3～6は下城式土器の甕で、いずれも口縁端部外面に直接刻みを施し、口縁端

内部
瀬川内系

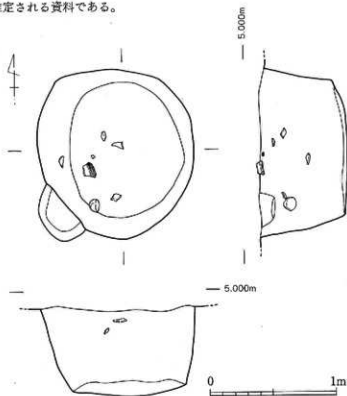
部からやや下った部位に刻目突帯を有する。7は器種不明であるが、鉢の口縁部として図示している。口縁端部付近は横ナデ、胴部外面には斜め方向の刷毛目調整、内面には荒いミガキ調整が行われている。8～10は甕の底部と推定される資料である。

SK4003 (第92図) IV区 (G24小区) に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が削平を受けている。規模は東西1.2m、南北1.35m、深さ約70cmである。埋土上位から中位にかけて、弥生土器片や礫が出土した。弥生時代前期末に比定される遺構である。

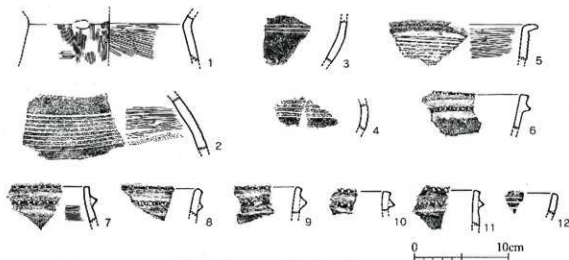
SK4003出土遺物 (第93図) 1は壺の頸部と思われる破片である。外面は縦方向の刷毛目調整の後にミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整を施している。

2は壺の肩部の破片で、外面にはヘラ描き多条(9条)沈線文、内面には横方向のミガキ調整が認められる。3・4は壺の胴部中位付近の破片と思われ、いずれも外面にヘラ描き沈線文が施されている。5は口縁部が逆L字状に屈曲する西部瀬戸内系の甕である。口縁端部に刻目、胴部外面にヘラ描きによる多条沈線文を施す。内面はナデ調整によって、仕上げている。6～11は下城式土器の甕で、いずれも甕の口縁部である。12は鉢と思われる口縁部の破片で、外面にヘラ描きによる沈線文が認められる。

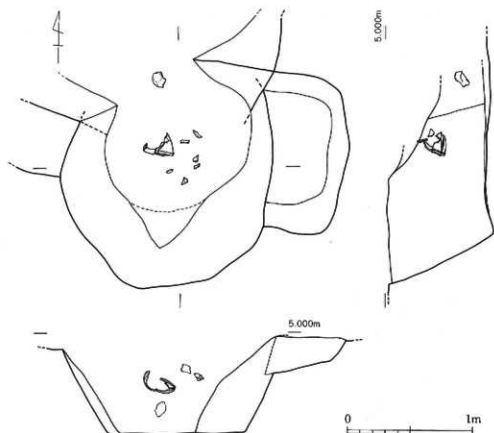
西部瀬戸内系



第92図 SK4003実測図 (1/30)



第93図 SK4003出土遺物 (1/4)



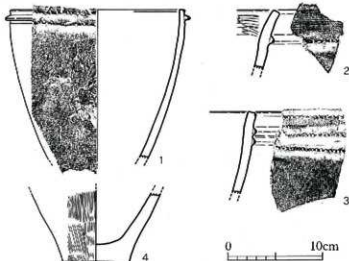
第94図 SK4005実測図 (1/30)

SK4005 (第94図) IV区 (G23小区) に位置する貯蔵穴である。北側は近年の擾乱によって、一部が破壊を受けている。遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が削平されている。規模は径1.65m、深さ約80cmである。埋土中から弥生土器片などの出土遺物が認められ、特に埋土中位付近からは、下城式土器の大型破片がつぶれたような状態で出土した。これらの遺物は貯蔵穴が本来の機能を停止した後に、廃棄されたものと推定される。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

廃棄土坑と
して再利用

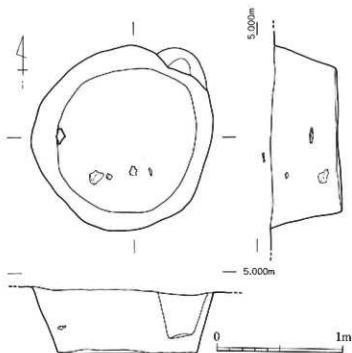
SK4005出土遺物 (第95図)

1～3は下城式土器の甕である。1は直立する口縁部をもち、口縁外部外面と端部からやや下った部位の突帯上に刻みを有する。2はやや外反する口縁をもち、口縁端部からやや下った部位に刻目突帯を有するが、端部外面の直接刻みは認められない。3は刻目突帯が2条となり、口縁外部外面にも直接刻みを施す。4は甕の底部と推定される資料である。



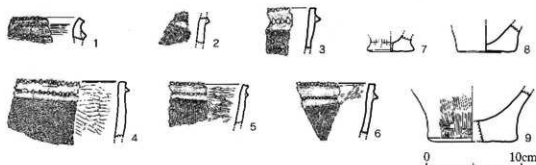
第95図 SK4005出土遺物 (1/4)

SK4006 (第96図) IV区 (C23小区)に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が削平されている。規模は径1.45m、深さ50cmである。埋土中から礫や弥生土器片などの遺物が出土している。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。



第96図 SK4006発掘図 (1/30)

SK4006出土遺物 (第97図) 1～6は下城式土器の甕で、いずれも口縁部の破片である。7～9は底部の資料である。



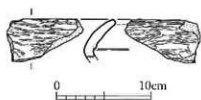
第97図 SK4006出土遺物 (1/4)

SK4007 (第98図) IV区 (H23小区)に位置する貯蔵穴である。南側の一部を時期不明の柱穴によって切られている。平面形態は略円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が削平されている。規模は径1.5m、深さ約80cmである。埋土中から弥生土器片の小片が少量出している。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

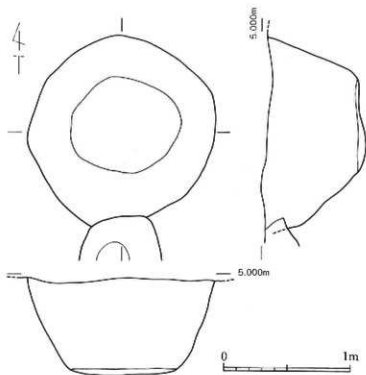
SK4007出土遺物 (第99図) 図示した遺物は、甕の口縁部と考えられる破片である。口縁部と頸部との境に弱い段を有する。内外面とも横方向のミガキ調整を主体とする。

SK4008 (第100図) IV区 (G・H23小区)に位置する貯蔵穴である。東側の一部を覆土によって破壊されていたが、底部付近は残存していた。遺構の平面形態は略楕円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が大きく削平されている。規模は長径1.6m、短径1.4m、深さ55cmである。埋土中から弥生土器片などが出土した。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

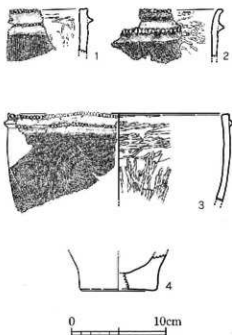
SK4008出土遺物 (第101図) 1～3は下城式土器の甕で、いずれも口縁部の破片である。4は甕の底部と推定されるもので、内外面ともナゲ調整を主体とする。



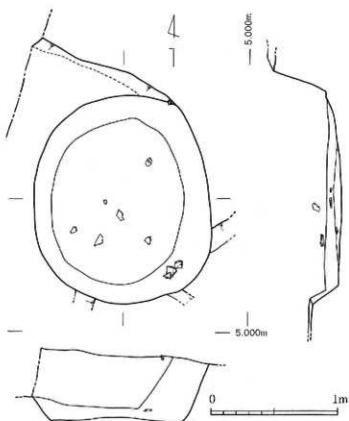
第99図 SK4007出土遺物 (1/4)



第98図 SK4007実測図 (1/30)

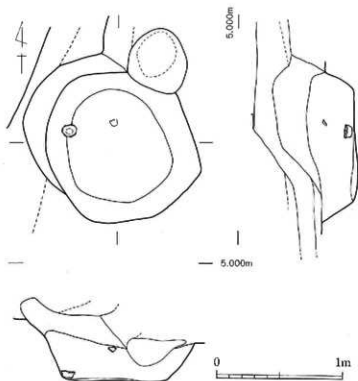


第101図 SK4008出土遺物 (1/4)



第100図 SK4008実測図 (1/30)

SK4009 (第102図) IV区 (G23小区) に位置する貯蔵穴である。北側の一部を時期不明の柱穴によって切られている。遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が大きく削平されている。規模は径約1.2m、深さ約50cmである。埋土中から弥生土器片が少量出土した。弥生時代前期末に比定される遺構である。

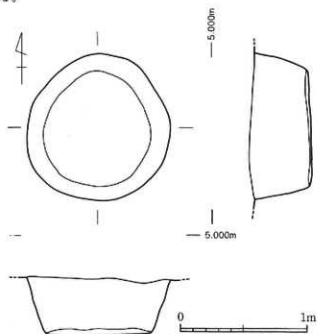


第103図 SK4009出土遺物 (1/4)

第102図 SK4009実測図 (1/30)

SK4009出土遺物 (第103図) 図示した遺物は、甕の底部と考えられる破片である。外面は刷毛目調整、内面はナデ調整が施されている。

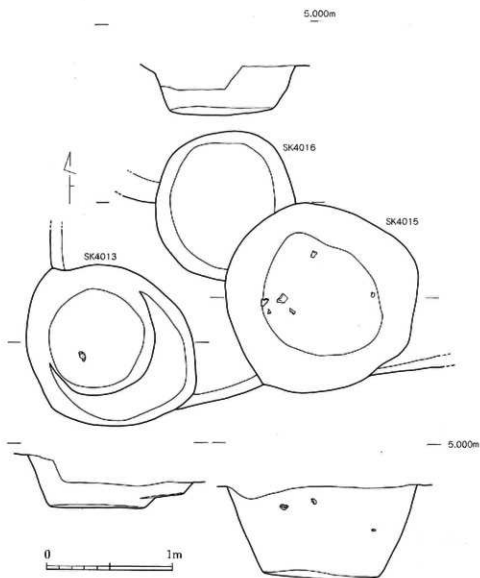
SK4014 (第104図) IV区 (G24小区) に位置する貯蔵穴である。古墳時代前期の住居跡SH4010と切り合い関係を有し、SH4010の床面で検出された。遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が削平されている。規模は径1.15m、深さ45cmである。出土遺物は僅少で、図示に耐える資料は存在しない。周辺の状況から、弥生時代前期末に比定される遺構である。



図示可能な遺物なし

第104図 SK4014実測図 (1/30)

SK4013・SK4015・SK4016 (第105図) 3基ともIV区 (H24小区) に位置する貯蔵穴である。いずれも古墳時代前期の住居跡SH4010と切り合い関係を有している。また、SK4015とSK4016の両者についても切り合い関係にあり (構築順序SK4016→SK4015)、SK4013についても当初は1基の遺構と認識していたものの、完掘後の状況から、2基の貯蔵穴が重複していた可能性も考えられる。3基の貯蔵穴とも遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面



第105図 SK4013・SK4015・SK4016実測図 (1/30)



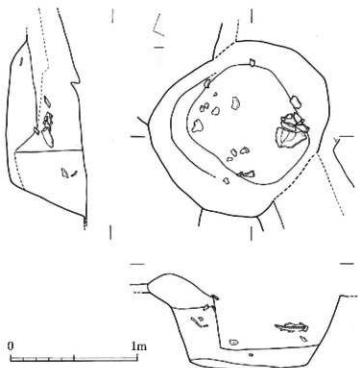
第106図 SK4013・SK4015・SK4016出土遺物 (1/4) (1 SK4013 2・3 SK4015 4 SK4016)

が削平されている。規模については、SK4013が径1.3m、深さ40cm、SK4015が径1.45～1.5m、深さ75cm、SK4016が径1.1m、深さ40cmである。埋土中から弥生土器などが出土しているが、出土量は僅少である。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

SK4013・SK4015・SK4016出土遺物 (第106図) 図示した遺物の中で、1がSK4013、2・3がSK4015、4がSK4016の出土遺物である。1は甕の底部で、外面はナデ調整、内面はナデ調整とともに一部ミガキ調整が認められる。2・3は下城式土器の甕の口縁部である。4は甕の底部付近の胴部小片と推定され、外面に刷毛目調整、内面にナデ調整が施されている。

SK4017 (第107図) IV

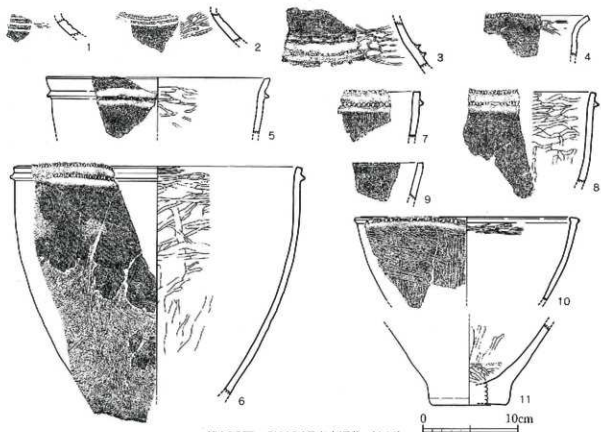
区 (G23小区) に位置する貯蔵穴である。平面形態は不整形円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が削平されている。規模は径1.35~1.4m、深さ約65cmである。埋土中位付近から弥生土器片などの遺物が、ややまとまって出土した。弥生時代前期末に比定される遺構である。



第107図 SK4017実測図 (1/30)

SK4017出土遺物 (第108図)

図 1~3は壺の肩部で、1・2は外面にヘラ描き沈線文、3は2条の刻目突帯を有する。4は口縁部が如意状に外反し、口縁端部に直接刻み、頸部外面に1条の沈線文を施している。5~8は下城式土器の甕である。5は口縁部外面に突帯を有するが、口縁端部外面と突帯上に刻目はない。9は鉢と推定される口縁部の破片で、文様は無く、内外面をナデ

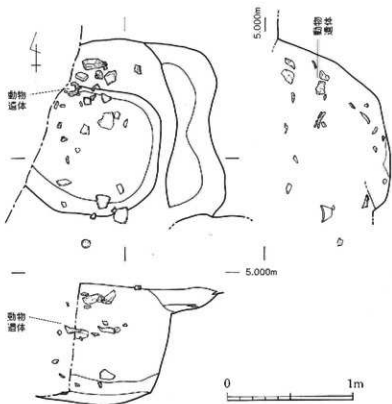


第108図 SK4017出土遺物 (1/4)

調整によって仕上げている。10も鉢で、口縁端部上面に面を形成し、端部外面に直接刻みを施す。11は底部の破片である。

SK4018 (第109

図) IV区 (G23小区) に位置する貯蔵穴である。完掘後の状況から、時期不明の不整形土坑と切り合い関係を有していた可能性が考えられるが、検出時には1つの遺構と認識していたため、構築順序等是不明である。貯蔵穴の平面形態は不整形のプランで、東側の一部は覆土によって完全に破壊されていた。断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が削平されている。



第109図 SK4018実測図 (1/30)

規模は径約1m、深さ95cmである。埋土中から標や動物遺存体、弥生土器片などが出土している。動物遺体はイノシシと同定されており(第5章参照)、弥生時代前期末に比定できる出土事例として注目しておきたい。出土遺物の年代から、弥生時代前期末の遺構と考えられる。

SK4018出土遺物 (第110図) 1・2は蓋の口縁で、端部に刺突文を有する。3も蓋の口縁で、口縁端部内面付近に強めのナデが施されている。外面には刷毛目調整、内面には横方向のミガキ調整が認められる。4は蓋の肩部付近の破片で、頸部外面に沈線を施す。外面には刷毛目が認められるが、ミガキによってそのほとんどが消されている。内面には指頭痕とナデ調整が行われている。5~10は下城式土器の蓋で、口縁端部が外反するもの(5)や外面の突帯が2条になるもの(10)などのバリエーションも存在する。11は器種不明であるが、鉢の口縁部として図示している。12は口縁部下に耳状の把手を貼り付ける鉢である。類例の探索が不十分であるが、愛媛県の松山平野の弥生時代遺跡などに類例⁽¹⁾が存在するようである。13は小型の蓋(ミニチュア土器)で、外面はミガキ調整が主体となり、内面には指頭痕が多く認められる。

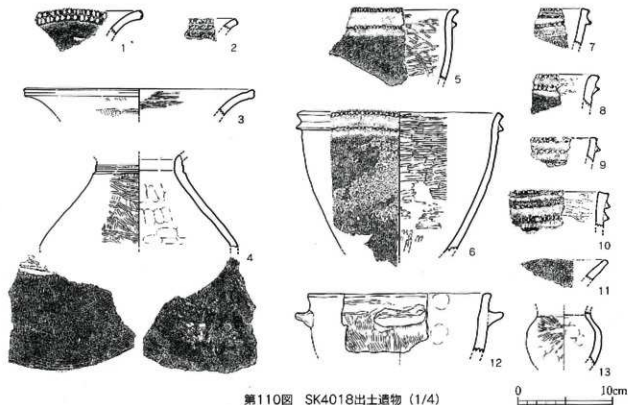
動物遺体
(イノシシ)

耳状把手を
もつ鉢

註(1) 松山市教育委員会ほか『石井弥生遺跡・海中学校校内遺跡―第2次調査―』(松山市埋蔵文化財調査報告書45 1994年) 47頁第38図14

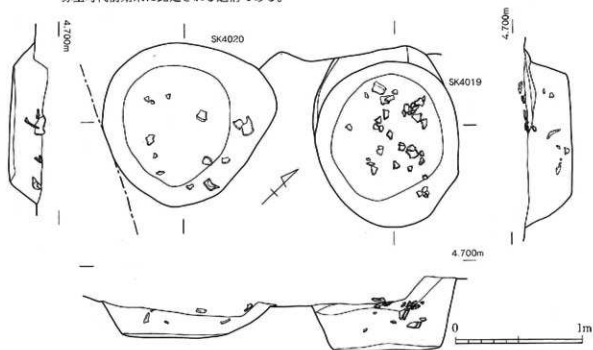
梅木謙・「西瀬戸内地方の弥生時代前期土器―松山平野を中心として―」(『中山裕二君追悼論集』中山裕二君追悼論集発行会 1994年)

梅木謙・『鹿屋の弥生時代遺跡』(『西部瀬戸内の弥生文化―福岡弥生土器の調査―』三田考古学協会創立記念大会実行委員会 1996年)

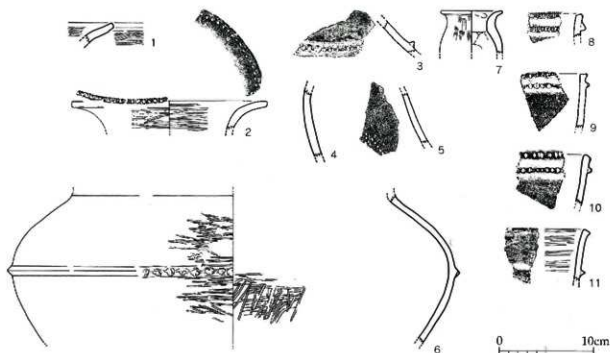


第110図 SK4018出土遺物 (1/4)

SK4019・SK4020 (第111図) IV区 (H23小区) に位置する貯蔵穴である。いずれも平面形態は不整円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が隅平されている。SK4019の規模は長径1.3m、短径1.15m、深さ約60cm、K4020の規模は長径1.4m、短径1.3m、深さ25cmである。埋土中から弥生土器片などが一定量出土している。出土遺物の年代観から、いずれも弥生時代前期末に比定される遺構である。



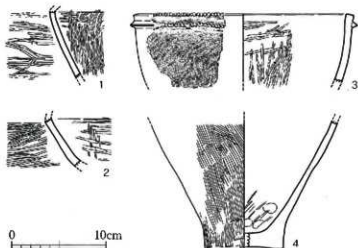
第111図 SK4019・SK4020実測図 (1/30)



第112図 SK4019出土遺物 (1/4)

SK4019出土遺物 (第112図) 1は壺の口縁部で、口縁端部が僅かに屈曲する形態を呈する。2も壺の口縁部で、口縁端部と内面に小円形の刺突文が認められる。3は肩部付近の破片で、外面に1条の刻目突帯を有する。4は頸部付近の破片で、内外面ともナデあるいはミガキ調整を施す。5も壺と推定されるが、部位は不明である。内面に刺突による木の葉状(?)の文様が認められる。6は大型の壺で、胴部中位に刻目のある突帯を貼り付ける。内外面ともミガキ調整が主体となる。7は小型の壺(ミニチュア土器)で、外面は刷毛目調整が主体となり、内面は指頭板が多く認められる。8~11は下城式土器の壺である。この中で11については、口縁端部にも突帯にも刻みは認められない。

SK4020出土遺物 (第113図) 1・2は壺の頸部の破片と推定される資料で、内外面ともミガキ調整を主体とする。3は下城式土器の壺の口縁部、4は壺の底部の資料である。

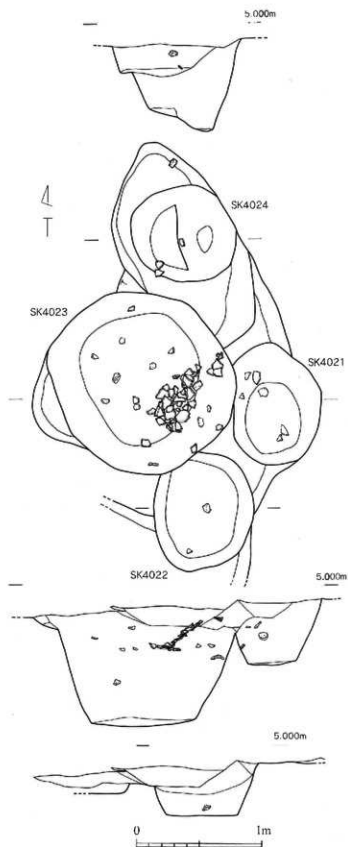


第113図 SK4020出土遺物 (1/4)

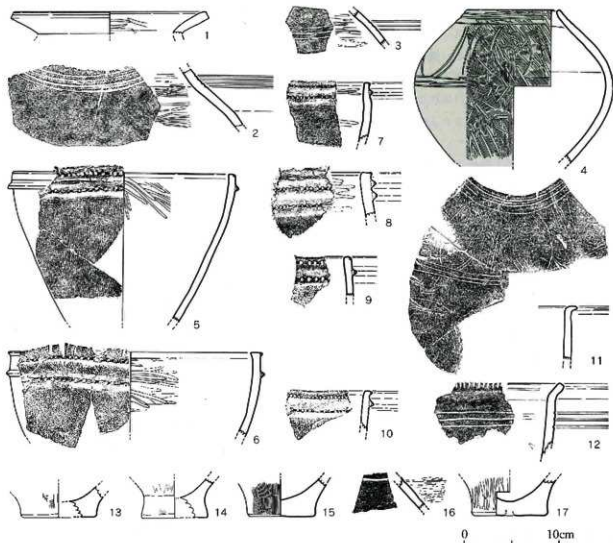
SK4021～SK4024 (第114図) IV区 (G・H23小区) に位置する貯蔵穴である。4基の貯蔵穴は近接した位置に構築されており、切り合い関係と構築順序が判明するものは、SK4021・SK4022・SK4024→SK4023である。これら4基の貯蔵穴は、切り合い関係が認められるものの、3者に有意な時期差は認められないようである。いずれも平面形態は不整形円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が削平されている。SK4021の規模は長径0.95m、短径0.65m、深さ50cm、SK4022の規模は長径0.9m、短径0.8m、深さ45cm、SK4023の規模は径1.4m、深さ95cm、SK4024の規模は径約0.8m、深さ70cmである。埋土中から弥生土器片などが一定量出土しており、特にSK4023埋土位からは無頭壺(第115図4)の大型破片がまとまった状態で出土した。また、当該資料と同一個体で接合する破片がSK4021の埋土上位からも出土しており、無頭壺はSK4023が貯蔵穴としての機能を停止した後に、遺構の東側から廃棄されたことが観察できる。当該遺構も貯蔵穴が機能停止後に廃棄土坑として再利用された典型的な事例である。SK4021からSK4024は、いずれも出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される。

無頭壺の
出土状況

深さ増大と
して再利用



第114図 SK4021～SK4024実測図 (1/30)



第115図 SK4021～SK4024出土遺物 (1/4) (1～14 SK4023 15 SK4021 16・17 SK4024)

SK4021～SK4024出土遺物 (第115図) 1～14はSK4023からの出土遺物である。1は壺の口縁部で、外面はナデ調整、内面はミガキ調整が主体となる。2・3は壺の肩部付近の破片で、2については外面にヘラ描きの多条(4条)沈線文、3については少条(3条)沈線文が施されている。4は無頸壺の大型破片で、底部が欠損する。胴部外面にはヘラ描きによる区画文と弧文が描かれている。外面には刷毛目調整が施された後にミガキによって仕上げられている。内面はナデ調整が主体となる。また、外面には赤色顔料が塗布されていた痕跡が認められる。なお、当該資料と同一個体で接合する破片が、SK4021からも出土している。5～10は下城式土器の甕で、口縁端部上面に面を形成するもの(6)や2条の刻目突帯を有するもの(8)などのバリエーションも存在する。11・12は西部瀬戸内系と推定される甕である。11は口縁部が逆L字状に屈曲し、胴部外面は無文となる。12は口縁部が「く」の状に屈曲し、口縁端部に直接刻み、胴部外面に3条のヘラ描き沈線が認められる。13・14は底部の資料である。15はSK4021の出土遺物で、甕の底部と推定される。外面は刷毛目調整、内面はナデ調整が施されている。16・17はSK4024からの出土遺物で、16は外面にヘラ描き沈線を有する壺の頸部、17は甕の底部と推定される資料である。

無頸壺

西部
瀬戸内系

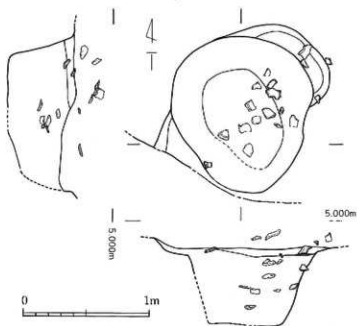
SK4025 (第116図)

IV区 (H24小区) に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は不整楕円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が削平されている。規模は長径1.25m、短径1.1m、深さ60cmである。埋土中から礫や赤土土器片が出土している。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

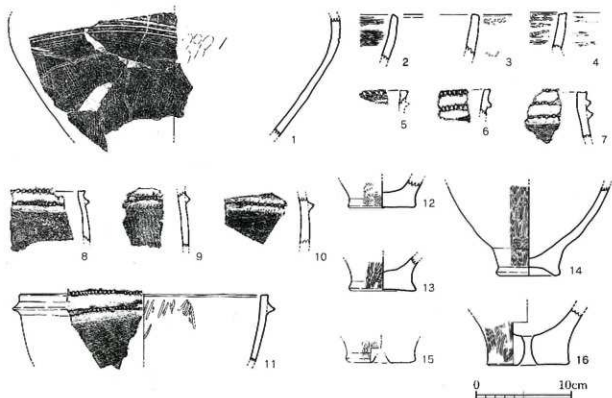
SK4025出土遺物 (第117図) 1は葦の胴部で、外面にヘラ掻きによる区画文を描く。外面には刷毛目調整、内面には指頭痕とナデ調整が認められる。2～4は甕あるいは鉢の口縁部と推定される資料である。5～11は下城式土器の甕で、口縁端部に直接刻みを施し、外面に1条の刻目突帯を有する資料 (6・8・11) のほかに、口縁部外面に2条の刻目突帯を有するもの (7) などのバリエーションも存在する。12～16は

焼成前穿孔

底部で、このうち15・16については焼成前に設けられた穿孔が存在する。



第116図 SK4025実測図 (1/30)

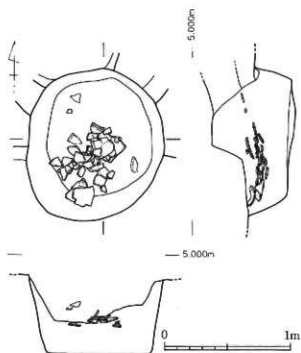


第117図 SK4025出土遺物 (1/4)

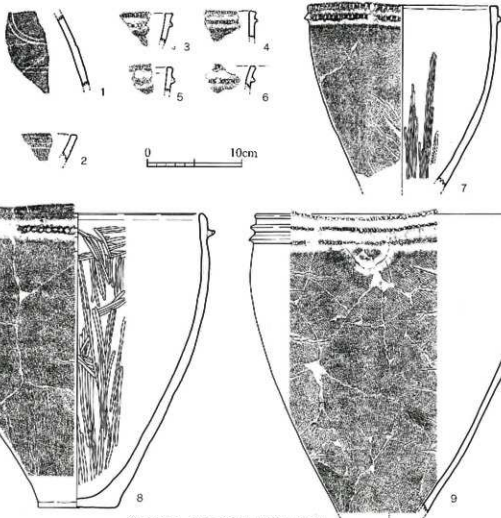
崩壊土坑として再利用

SK4027 (第118図) IV区 (H23 小区)に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は袋状と推定されるが、上面が削平されている。規模は径1.1~1.2m、深さ65cmである。埋土中位に弥生土器がまとまった状態で出土しており、貯蔵穴が本来の機能を停止した後に廃棄土坑として再利用されたことが観察できる。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。

SK4027出土遺物 (第119図) 1は壺の胴部で、外面にヘラ描きによる弧文と区画文の一部が認められる。**2**は鉢の口縁部で、外面にもヘラ描きによる2条の沈線が描かれる。**3~9**は下城式土器の残片である。この中で、**9**



第118図 SK4027実測図 (1/30)



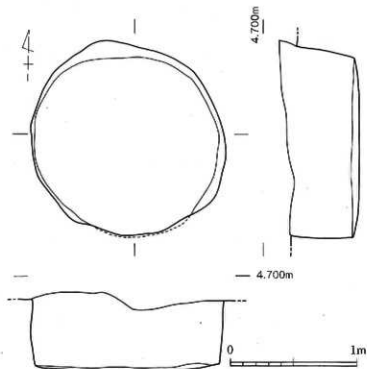
第119図 SK4027出土遺物 (1/4)

第2節 弥生時代前期末の遺構・遺物

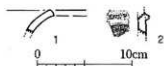
土器の
正面観

については2条の刻目突帯下に無刻目の突帯によって弧文を形成している部位が1箇所認められる。
土器の正面観を明示するものとして、注目に値する資料である。

SK4028 (第120図)
IV区(H23小区)に位置する貯蔵穴である。遺構の平面形態は略円形プランで、断面形態は袋状を呈していたと推定されるが、上面が削平されている。規模は径1.55m、深さ60cmである。埋土中から弥生土器などが少量出土している。出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される遺構である。



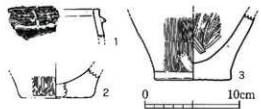
第120図 SK4028実測図 (1/30)



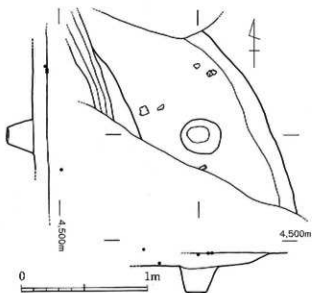
第121図 SK4028出土遺物 (1/4)

SK4028出土遺物 (第121図) 1は壺の口縁部、2は下城式土器の甕の破片である。

SX1211 (第122図) I-1区(A11小区)に位置する遺構である。古墳時代前期の住居跡SH1202、弥生時代前期末の土坑SK1203と切り合い関係を有し、いずれの遺構にも切られている。また、切り合い関係にありながら、弥生時代前期末の土坑SK1203とは有意な時期差は認められないようである。遺構の規模は現状で東西約1.0m、南北約1.0mで、南側は調査区外に伸びる。床面からは柱穴が1基検出されているが、この遺構に直接付属するものであるかどうかの判断が難しい。遺構の性格としては、平面形態のプランや柱穴の存在などから、住居跡等である可能性も考えられるが、調査区の制限



第123図 SX1211出土遺物 (1/4)



第122図 SX1211実測図 (1/30)

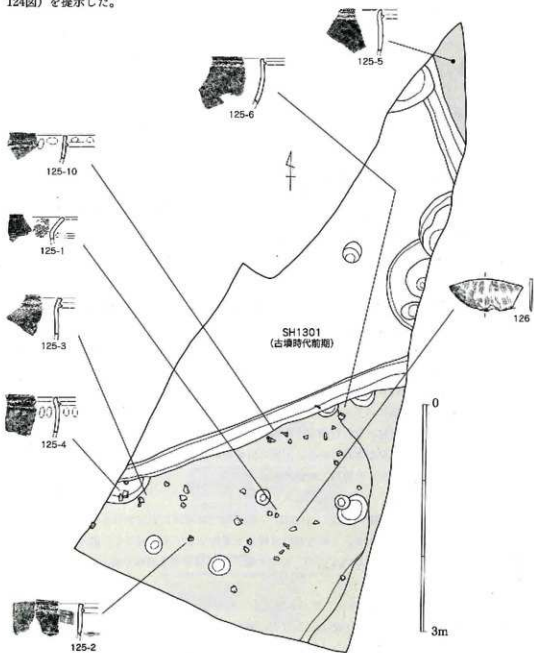
不明遺構

により断定できない。ここでは取りあえず不明遺構 (SX)として、報告しておきたい。埋土中より弥生土器片が少量出土しており、出土遺物の年代観から、弥生時代前期末に比定される。

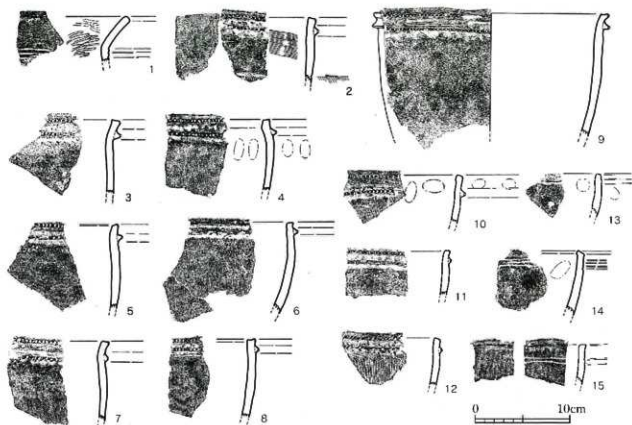
SX1211出土遺物 (第123図) 1は下城式土器の甕の口縁部、2・3は底部の資料である。

遺物包含層

I-3区包含層 (第124図) I-3区の南側で弥生時代前期末の土器片・石器片などがややまとまって出土し、当該時期の遺物包含層が存在することが予測された。出土状態や調査区壁面土層を精査したところ、包含層はI-3区全体に広がっており、調査区南側はプライマリーな状況であったが、北側については古墳時代前期の住居跡SH1301 (92頁参照)の構築により攪乱を受けていることがわかった。出土遺物には下城式土器を主体とした弥生土器片や石器片などがあり、一括資料に準じた扱いができる資料と考えられるため、遺物の出土状況や出土位置などを明示した挿図 (第124図)を提示した。



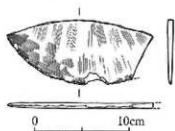
第124図 I-3区弥生時代前期包含層遺物出土状況 (1/50)



第125図 I-3区包含層出土遺物① (1/4)

I-3区包含層出土遺物(第125・126図) 第125図

1は壺の口縁部で、頸部外面に3条のヘラ描き沈線を施す。2～12は下城式土器の甕で、口縁部の破片である。13～15は甕または鉢で、いずれも口縁部外面にヘラ描きの少条沈線を施す。口縁部が直口するもの(13)、口縁端部上面に面を形成するもの(14)、口縁端部外面を僅かに外反させるもの(14・15)など、口縁端部の処理に細部のバリエーションが認められる。第126図は安山岩を素材とした石磨丁である。形態は半月形を呈し、体部に穿孔は認められない。背面は弧状で、面取りがなされている。刃部には使用による光沢がみられる。その形態から、大型石磨丁を再加工して製作した製品と推定される。



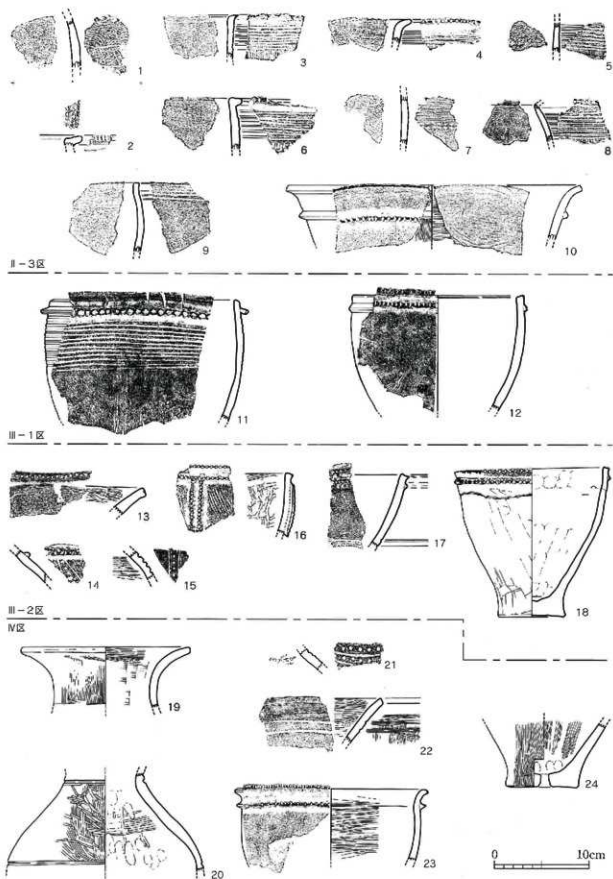
第126図 I-3区包含層出土遺物② (1/4)

石磨丁
(大型
石磨丁を
再加工)

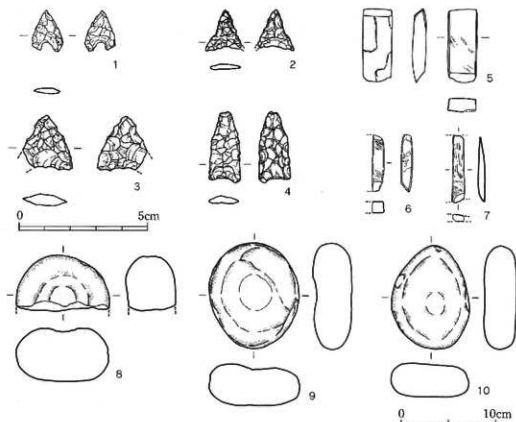
包含層出土遺物(第127・128図) 弥生時代前期末に比定される遺物の中で、遺構に伴わないものを以下で紹介する。これらは包含層出土遺物として小地区ごとに取り上げた資料を選別したもので、一括性には乏しいものの、大型の破片や注目すべき資料を提示した。第127図は弥生土器、第128図は石器である。

土器
II-3区

第127図1～10はII-3区から出土したもので、当該調査区の中でも西側(D・E16小区)から集中して出土した資料である。1は壺の割部と推定される破片で、外面にヘラ描きによる寛弧文と斜格子文が描かれている。2は西部瀬戸内系の甕で、L字状に屈曲する口縁部をもち、1縁端部に直接刻み、口縁上面に列点文(刺突文)が施されている。3～8も西部瀬戸内系の甕で、L字状また



第127図 包含層出土遺物① (1/4)



第128図 包含層出土遺物② (1~4は2/3、他は1/4)

- はくの字状に屈曲する口縁部をもち、口縁端部に直接刻みを施す。胴部外面には多条沈線文や列点文(刺突文)が描かれている。9は如意状口縁を有し、頸部に相当する部位に3条のヘラ描き沈線文を施す甕である。10は口縁部が大きく開く鉢で、口縁部外面に1条の刻目突帯を有する。11・12はⅢ-1区から出土した土器である。11は口縁外面に刻目突帯を有する甕で、胴部外面上位にはヘラ描きによる多条沈線を施す。刻目の形態はO字形である。当該資料も瀬戸内系の資料である。12は下城式土器の甕で、口縁端部外面に直接刻みを施し、口縁外面に1条の刻目突帯を有する。13~18はⅢ-2区から出土した土器である。13は壺の口縁部で、口縁端部に刺突文を巡らす。14・15は壺の肩部付近の破片と思われ、外面に1条の刻目突帯をもち、胴部外面にはヘラ描きによる沈線間に刺突文を施している。16は下城式土器の甕のバリエーションのひとつで、刻目突帯を工字形に形成している。17も下城式土器の影響下に成立した甕または鉢で、口縁端部と突帯上に刻目を有し、残存部の外面下位には数条の沈線を施す。18も下城式土器の甕で、やや小型のサイズとなる資料である。刻目突帯よりやや下位に粘土帯積み上げ痕が明瞭に認められる。当該土器は時期不明の土坑SK3210の内側に位置する攪乱から出土した資料である。19~24はIV区から出土した土器である。19・20は甕で、20には頸部と胴部外面中位に沈線が施されている。21は壺の肩部付近の破片で、沈線間に刺突文が施されている。22は鉢で、口縁外面にヘラ描きによる沈線が2条描かれている。23は口縁部が如意状に外反し、口縁端部と突帯上に刻目を施す甕である。下城式土器のバリエーションのひとつであるが、中でもやや古相を呈する資料である。24は甕で、底部に穿孔が認められる。
- 石器
第128図で提示したものは石器で、いずれもⅢ-2区から出土した資料である。1~4は石鏃で、いずれも姫島産黒曜石を素材とする。5~7は片刃石斧、8~10は安山岩を素材とした凹形である。

第3節 古墳時代前期～中期前半の遺構・遺物

概要 古墳時代前期から中期前半に比定される遺構としては、溝・竪穴住居跡・土坑などがある(第129図・第7表)。

溝

溝については、切り合い関係にある2基(SD1111a・SD1111b)が検出され、遺構の残存状況は不良であったものの、両者とも古墳時代前期の集落を区画または圍繞する性格の遺構と思われる。これらの溝は東田家遺跡の規模や集落構造を探る上で極めて重要な遺構であり、今回の調査では調査区の制限によって、検出された溝の調査面積は少なかったものの、当該遺構の延長部を追跡する必要性を強く感じるものである。SD1111a・SD1111bの埋土からは多量の土器が廃棄された状態で出土しており、切り合い関係と出土遺物の年代観から、SD1111bが古墳時代前期前半、SD1111aが古墳時代前期後半に比定される。両者とも古墳時代前期の時間幅の中で埋没を完了しているが、東田家遺跡では古墳時代前期後半以降も集落が存続していると思われるため、集落を区画する溝の埋没以降も住居跡などの遺構は継続していることになる。

竪穴住居跡

竪穴住居跡は17基を検出しており、土器類をはじめとした多量の出土遺物が認められるものも多い。このうち、埋土中から多量の土器が出土したSH2106、絵画土器が出土したSH3205などの出土遺物は当該時期の良好な一括資料として、特に注目される。SH2106・SH3205の時期的な位置づけについては、いずれも小型複製3器種が土器組成の中に含まれず、初期須恵器も出土していないことから、古墳時代中期前半に比定できると考えている。その他、古墳時代前期の標式となる資料も少量出土している。

土坑

土坑については、5基が検出されている。このうち、SK1108からは多量の土器が特異な出土状態で出土しており、古墳時代前期前半の標式資料として位置づけられるものである。

その他の遺構

その他の遺構としては、ミニチュア土器などを包含する土器溜めSX4029が1基検出されている。以上のように、古墳時代前期から中期前半は、東田家遺跡における集落の最盛期のひとつであり、検出遺構の数や出土遺物の量が多岐におよんでいる。

時期区分

なお、本節では古墳時代前期から中期前半までを、「前期前半」・「前期後半」・「中期前半」の3小期に細別している。これらは田中裕介氏による時期区分⁽¹⁾を踏襲したもので、土器編年については久住猛雄氏⁽²⁾による土器器種年に立脚している(第6表)。

以下、溝・住居跡・土坑・その他の遺構の順で、それぞれの遺構の詳細を報告したい。

第6表 古墳時代前期～中期前半における遺構の時期区分(細別)

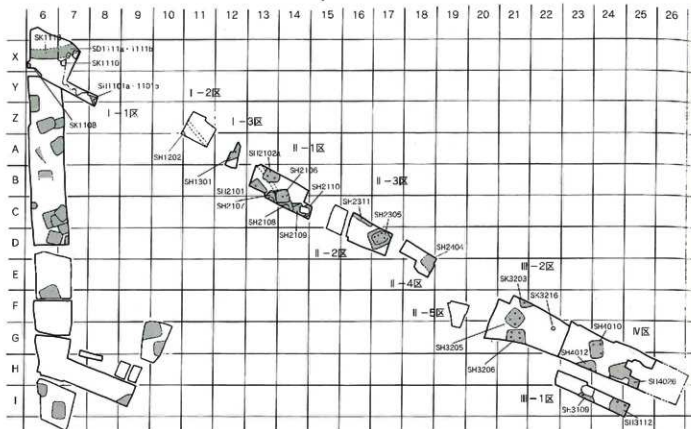
太字は良好な一括資料

田中2006	久住1999	遺 構				備 考
前期前半	II C	SH2102a SH2107 SH2108 SH2305 SH2311 SH2401	SH3112 SH3203 SH4026	SK1108 SK1113 SK2105 SK3206 SK3220	SD1111b	小型屈曲口縁鉢の出現 * SK1108製埋土器 * SH2107製埋土器
前期後半	III A	SH1301 SH2109	SH3206 SH4010 SH4012	SK1110	SD1111a	エンタシス高杯の出現 X形器台の出現
中期前半	(中期)	SH2101 SH2106 SH3205				小型複製3器種の消滅 ナデ肩臺の消滅 裾部が折曲せずに開く高杯が出現 初期須恵器が出土しない

註(1) 田中裕介「九州の出現期古墳」(『日本考古学協会2006年度常規大会研究発表資料集』2006年)

(2) 久住猛雄「北部九州における庄内式併行期の土器探検」(『庄内式土器研究』XIX 1998年)

第3節 古墳時代前期～中期前半の遺構・遺物



第129図 古墳時代前期～中期前半の遺構配置図 (1/1,200)

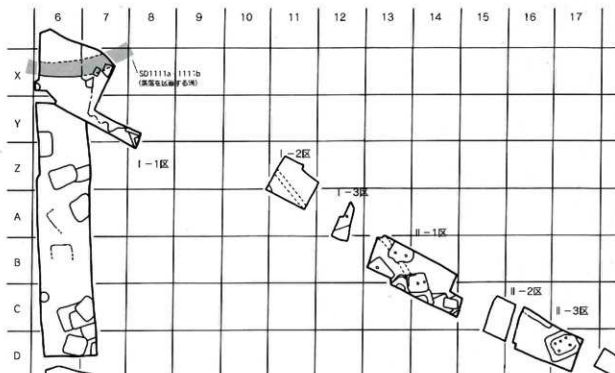
第7表 古墳時代前期～中期前半の遺構一覧

地区	遺構名称	遺構の性格	時期	注目すべき遺物	備考	掲載頁
I-1区	SH110b	住居跡	古墳時代前期	土製紡輪車 銅板土器	土器の大量発見 集落を区画する溝	91
	SH110c	住居跡	古墳時代前期			91
	SK1108	土坑	古墳時代前期後半			138
	SK1110	土坑	古墳時代前期後半			146
	SD1111a	溝	古墳時代前期後半			77
	SD1111b	溝	古墳時代前期後半			77
I-2区	SK1113	土坑	古墳時代前期前半			147
	SH1202	住居跡	古墳時代前期			91
	SH1301	住居跡	古墳時代前期後半			92
II-1区	SH2101	住居跡	古墳時代中期前半	瓶形土器 製造土器	小型丸底土器4個体がまとまって出土 古墳時代後期の住居跡が重複 発生土器が混入	93
	SH2102a	住居跡	古墳時代中期前半			96
	SK2105	土坑	古墳時代中期前半			148
	SH2106	住居跡	古墳時代中期前半			98
	SH2107	住居跡	古墳時代中期前半			165
	SH2108	住居跡	古墳時代中期前半			166
	SH2109	住居跡	古墳時代中期前半			169
	SH2110	住居跡	古墳時代中期前半			112
	SH2305	住居跡	古墳時代中期前半			113
	SH2311	住居跡	古墳時代中期前半			115
II-4区	SH2404	住居跡	古墳時代中期前半	磁石		116
	SH3109	住居跡	古墳時代中期前半?			117
III-1区	SH3112	住居跡	古墳時代中期前半			118
	SH3203	住居跡	古墳時代中期前半			122
	SH3205	住居跡	古墳時代中期前半	磁西土器		122
	SH3206	住居跡	古墳時代前期後半			130
	SK3216	土坑	古墳時代前期前半			149
IV区	SK3220	土坑	古墳時代前期前半			149
	SH4010	住居跡	古墳時代前期後半	鉄剣		132
	SH4012	住居跡	古墳時代前期後半	ミニチュア土器・磁石		133
	SH4026	住居跡	古墳時代前期後半			136
	SK4029	不明遺構	古墳時代前期前半	ミニチュア土器		151

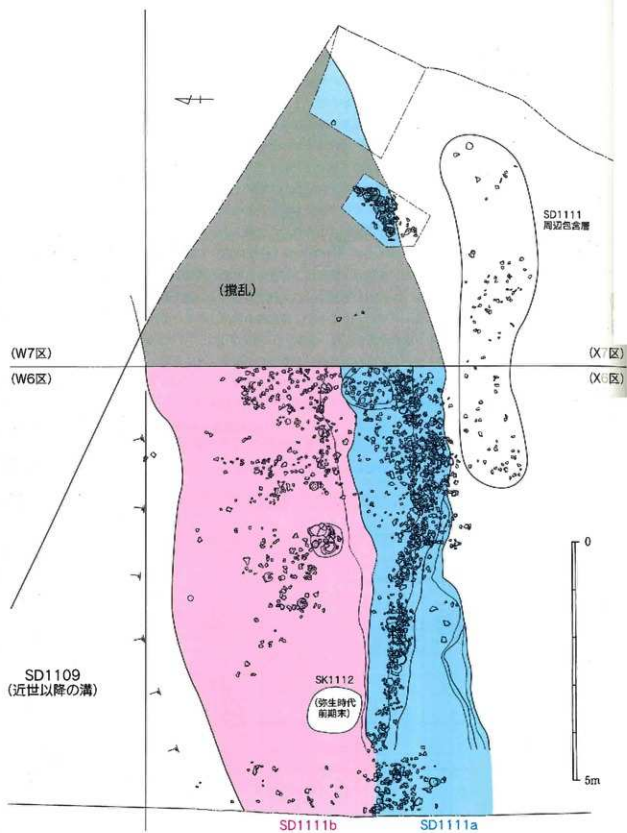
SD1111a・SD1111b (第130・131図) I-1区(X6・X7小区)に位置する溝である。I-1区北側は表土剥ぎ直後は、近年の浄化槽などによる攪乱が多くの部位で認められ、遺構の残存状況は極めて不良なものであると認識していた。事実、調査区北側のW6区では近世以降の溝SD1109が位置しており、その近世の溝も検出範囲に攪乱されていた。調査区の攪乱の除去や近世以降の溝SD1109のプランを明確にするための掘り下げを行っていた作業中、X6区で古墳時代前期の土師器が出土し始めた。土師器の中には完形に近い大型破片などもあったが、この時点では当該地点に古墳時代前期の溝が存在していることは全く予測できず、多量の土師器が出土する状況に困惑を覚えていた。このままでは発掘作業が進まないため、とりあえず調査区から出土した遺物をX6区出土資料として図化と記録を行い、遺物取り上げ終了後、さらに一定深度で掘り下げを行った。この際、W・X6区とW・X7区の境界に土層観察用のベルトを設定するとともに、攪乱の著しい部位などを利用してサブレンチを入れるなど、土器が集中的に出土する地点の性格を把握するように努めた。その結果、この地点には切り合い関係にある3基以上の溝が存在していることが判明し、3基の溝をそれぞれSD1109(近世以降)・SD1111a・SD1111b(古墳時代前期)と呼称することにした。多量の土師器は、古墳時代前期の溝SD1111に帰属する遺物であった。

次に、X7区については、前述のように攪乱が著しく、表土剥ぎ終了後、一定深度を掘り下げた時点で調査を断念していた。ところが、浄化槽が設置されている地点の東側に一部土師の破片が顔をのぞかせている地点が認められ、念のためにその周辺にグリットを設定して掘り下げた。その結果、当該地点にも完形品を含む大型破片が集中して廃棄されていることが確認され(第131・141図)、SD1111aの延長部と推定される溝のプランを確認することができた。さらに、このグリットの東側にももう1箇所新たにグリットを設定して掘り下げを行った。この東側のグリットでは、遺物の出土量は僅少であったものの、やはりSD1111aの延長部を確認することに成功した。

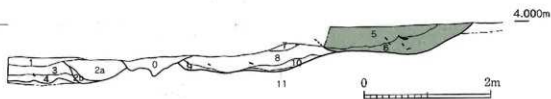
古墳時代前期の溝SD1111は、土層観察によると、2基の溝が重複していることが判明した。遺構の構築順序は、SD1111b→SD1111a(→SD1109(近世以降))である。攪乱による遺構の削平が



第130図 SD1111の位置 (1/800)



第131図 SD1111a・SD1111b遺物出土状況 (1/80)



0. 擾乱 1. 灰オリブ褐色粘質土 (鉄分含む) 2a. 暗褐色粘質土 2b. 明灰褐色砂質土 3. 暗灰色粘質土
4. 暗灰褐色粘質土 (わずかに鉄分含む) (*1~4. 近世以降の溝SD1109の埋土)
5. 暗赤灰色粘質土 6. 暗黒灰色粘質土 (南側からの流入土・土器を多量に含む) (*5・6 SD1111aの埋土)
7. 暗赤褐色粘質土 8. 黒灰色粘質土 9. 暗灰色砂質土 10. 暗黒灰色粘質土 11. 明灰褐色粘質シルト (*7~11 SD1111bの埋土)

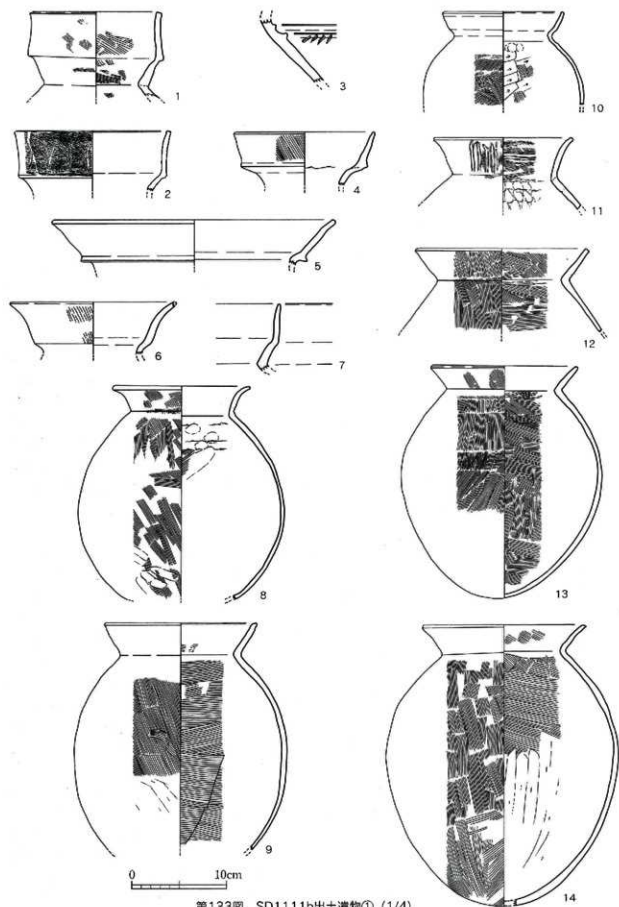
第132図 SD11111土層断面図 (1/60)

著しいが、それぞれの規模は現状でSD1111aが幅約2.5m、長さ約14m、深さ45cm、SD1111bが幅約2.5m、長さ約14m、深さ約40cmである。東側と西側については、さらに調査区外に伸びる。いずれの溝からも完形品を含む多量の土師器が廃棄された状態で出土した。特にSD1111aの十層観察によると、集落内側に相当する南側からの流入土が認められ、溝の埋土下位付近に多量の土器が廃棄されていたことが判明した。遺構の状態や遺物の出土状態から、SD1111a・SD1111bは東田室遺跡の集落を区画または圍繞する性格の溝と推定される。調査範囲内の溝の展開をみると、SD1111a・SD1111bは緩やかに北側に蛇行あるいは湾曲しているようにみえる。住居跡などの遺構は溝SD1111a・SD1111bの南側に分布しており、集落の主体となる居住域は溝より南側と推定できる。また、本調査以前の確認調査において、W4区以西には顕著な遺構が存在しないことが確認されている。当該遺構SD1111a・SD1111bは、今回の調査範囲では調査可能な面積が少なかったものの、東田室遺跡の集落の規模や構造を推定する上で重要な遺構のひとつと思われ、今後この溝の延長部を追跡する必要を強く感じるものである。SD1111aとSD1111bの所産時期は、切り合い関係や出土遺物の年代観、特に小型丸底土器等の比較や高坏の形態などから、SD1111aが古墳時代前期後半、SD1111bが古墳時代前期前半に比定される。

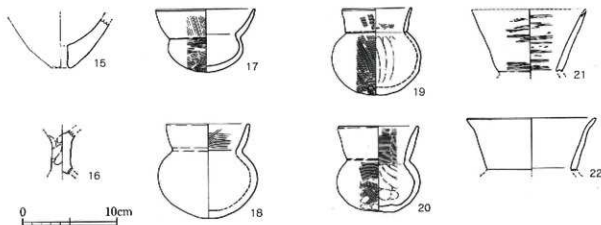
集落を区画
または圍繞
する溝



SD1111a遺物出土状況



第133図 SD1111b出土遺物① (1/4)



第134図 SD1111b出土遺物② (1/4)

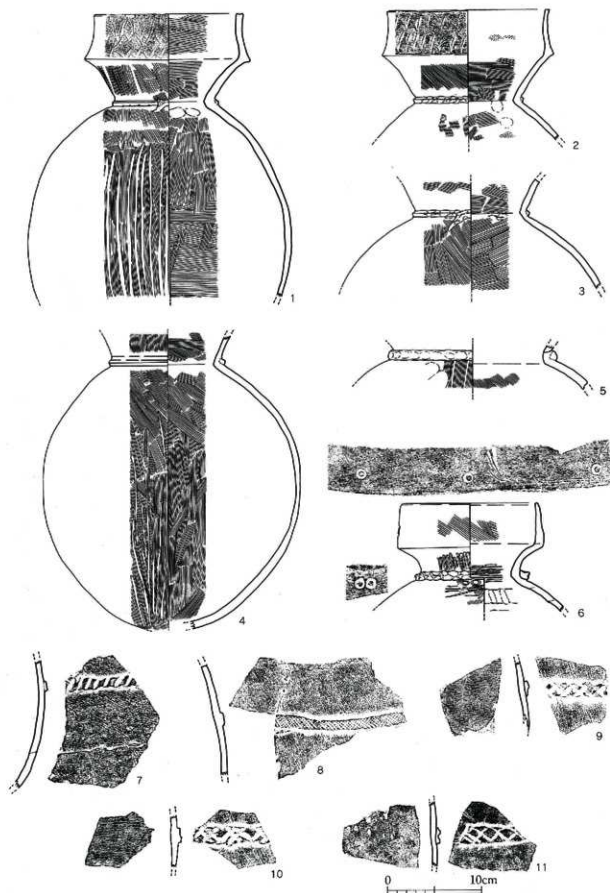
数型土器

SD1111b 出土遺物 (第133・134図) 第133図1・2は在地系(安国寺式)の複合口縁壺である。1は二次口縁がやや内傾し、それに対して2はやや外反する。また、2については、二次口縁の外面に櫛描波状文を施している。3も在地系の壺の肩部で、外面に二条の断面三角形の突帯を有し、突帯の下位に短沈線文を施している。4～6は二重口縁壺(畿内系あるいは山陰系か?)、7は複合口縁壺の口縁部である。8～14は壺である。この中で12～14などは頸部が締まり、丸味を帯びる胴部に丸底をもつ布留式の特徴をよく備えているが、口縁端部は肥厚していない。第134図15も壺の底部で、形態は尖底状となり、焼成前の貫通孔をもつ。型式学的には古墳時代前期前半より、古相を呈する可能性があり、混入品の可能性もある。16は製塩土器の脚部で、外面には指頭痕が認められる。17は小型丸底土器で、口径は胴部最大径より上回る。後述するSD1111aの出土資料(第139図63)と比較すると、口縁部の伸びが発達せず、短いような印象を与える資料である。18～20は小型の壺で、底部が丸底になる。口径は胴部最大径より小さくなる。21・22は口縁部が外傾しながら伸びる単口縁の壺の口縁部である。

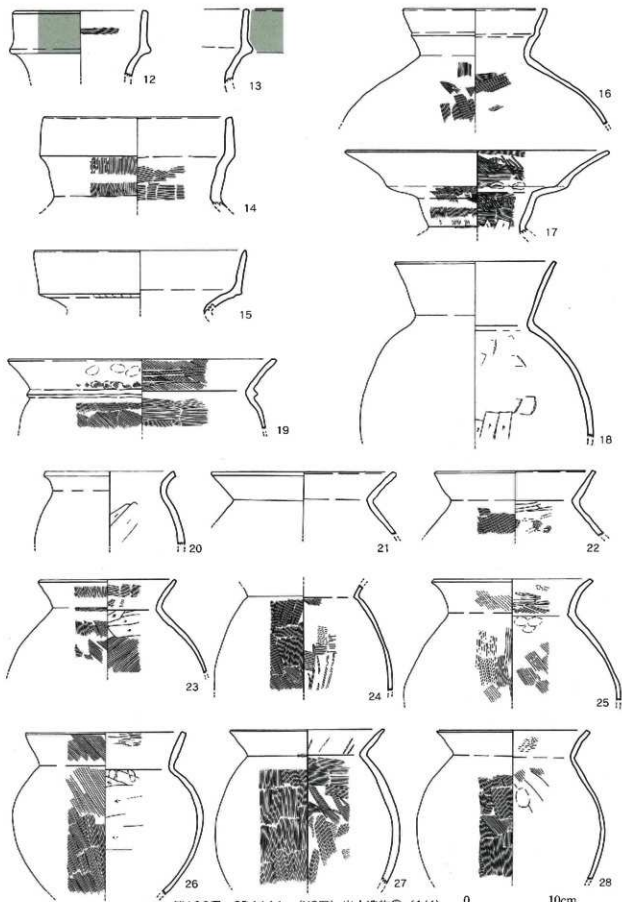
畿内系の二重口縁壺

山陰系

SD1111a 出土遺物 (X6区) (第135～140図) 図示したものは、SD1111aの出土遺物の中でも、X6区で出土した遺物である。第135図1～5は在地系(安国寺式)の複合口縁壺である。このうち、1・2の二次口縁外面には櫛描波状文が描かれている。6も在地系の複合口縁壺であるが、二次口縁外面に櫛描波状文を描かず、竹管による円形押圧文を施している。図示した遺物は口縁部が一周するが、円形押圧文は3箇所施されている。また、肩部外面の突帯下にも円形押圧文が施されている。頭部の突帯は上下から指頭で押圧することにより、凹みを形成している。7～11は在地系の複合口縁壺で、ベルト状突帯を有する胴部中位付近の破片である。第136図12・13は在地系土器の複合口縁壺で、二次口縁の外表面には櫛描波状文が描かれず、赤色顔料の塗布が認められる。14～16は二重口縁壺で、二次口縁が内傾気味に立ち上がるもの(14)と外傾気味に立ち上がるもの(15・16)のバリエーションが認められる。17は畿内系の二重口縁壺で、刷毛目調整が行われた後に、ナデあるいはミガキ調整が施されている。18はやや外傾する単口縁を有する壺で、胴部内面には削り調整が行われている。20～第138図41は壺で、口縁部の屈曲や胴部のプロポーションなどに複数のバリエーションが認められるが、やや長胴気味となる胴部形態を呈するもの(55・33・37～39)や頸部が締まり、丸味を帯びる胴部に丸底をもつ布留式の特徴を備えているもの(34・41)が主体となるようである。42・43は山陰系土器の範疇に属する壺の口縁部である。第139図44・45は大型の鉢である。口径と胴部最大径がほぼ等しく、壺と比較して器高が浅い器形となる。46～48も鉢で、46は44・45と比較してやや小型になる。47は口縁部が外傾するが、胴部との境が不明瞭となってい

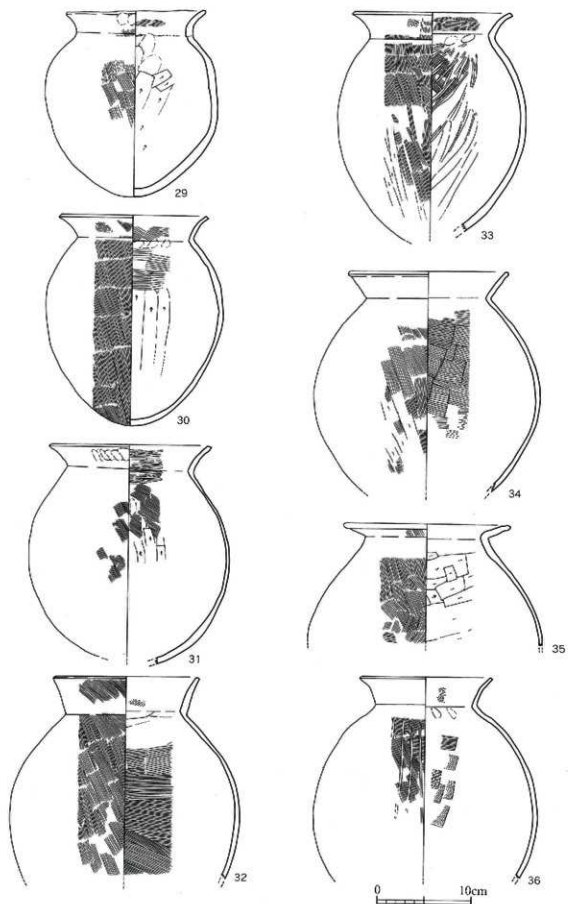


第135図 SD11111a (X6区) 出土遺物① (1/4)

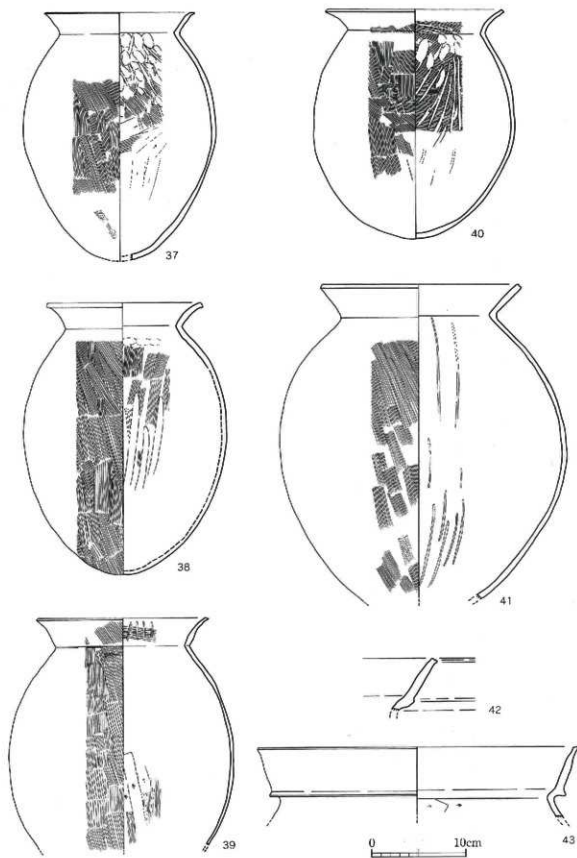


第136図 SD1111a (X6区) 出土遺物② (1/4)

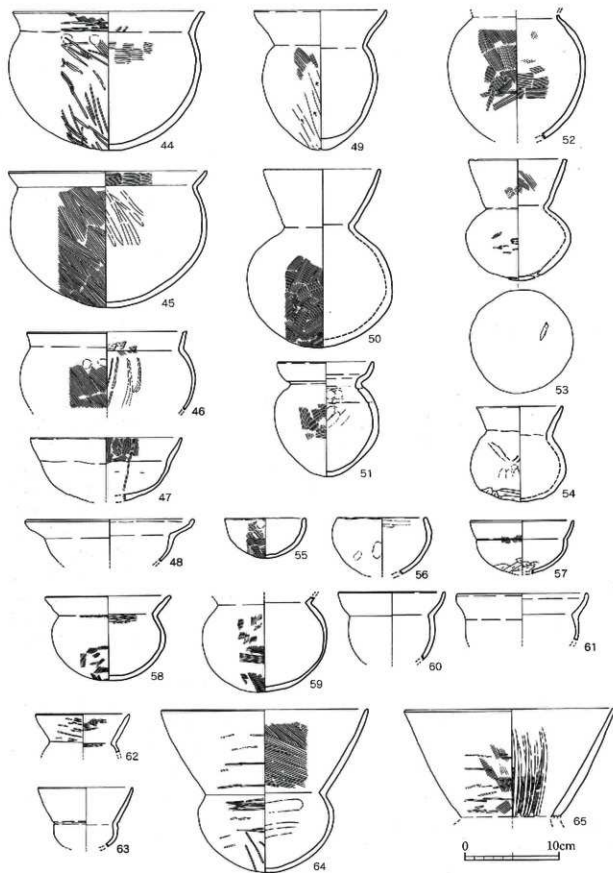
0 10cm



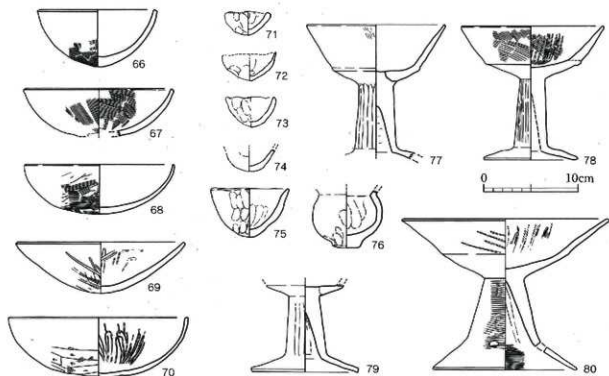
第137図 SD1111a (X6区) 出土遺物③ (1/4)



第138図 SD1111a (X6区) 出土遺物④ (1/4)



第139図 SD1111a (X6区) 出土遺物⑤ (1/4)



第140図 SD1111a (X6区) 出土遺物⑩ (1/4)

る。48は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部がやや肥厚している。49はやや小型になる甕で、口縁部はくの字状に屈曲し、外傾しながら長く伸びる。50は口縁部が長く伸び、底部が丸底となる甕である。51は小型の甕で、口縁部が屈曲し、底部は尖底気味の丸底となる。52も甕で、底部と口縁部を欠損する胴部の大型破片である。53は長頸甕で、底部付近に鉄器等の鋭利な刃物で施した焼成後の穿孔が認められる。54は小型の甕で、底部外面に削り調整が行われている。55・56は口縁部が直立または内傾気味に立ち上がり、底部が丸底となる小型の鉢である。57～62はくの字状に屈曲する口縁部に丸底となる鉢で、60・61については口縁部が内湾している。63は小型丸底土器で、SD1111bの出土資料(第134図17)と比較すると口縁部が長く伸びており、新相の傾向を有するものである。64は「巨大な小型丸底土器」とも称するべき資料で、通常サイズの小型丸底土器と比較して、口径・器高とも2倍から3倍の大きさになるものである。このようなサイズの小型丸底土器の出土例は寡聞にして知らないが、大分県竹田市久住町の都野原田遺跡49号竪穴からの出土品に類似⁽³⁾が認められる。また、このような大型の小型丸底土器は、近畿地方でも類例がないという⁽⁴⁾。65は長頸甕の大型品と思われる口縁部の大型破片である。胴部以下を欠損するため、断定できないが、第140図66～70は鉢で、いずれも類似した器形を呈するが、口径や底部の形態などに小異が認められる。71～76は手捏ね成形によるミニチュア土器で、71～75は鉢形、76は甕形を呈する。77～79はエンタシス状の脚柱部を有する布置式の高坏で、久住編年ⅢA期の様式となる資料である。80は大きく開く口縁部を有し、脚柱部と裾部の境に透かし孔が認められる高坏である。

焼成後の
穿孔。

「巨大な
小型丸底
土器」

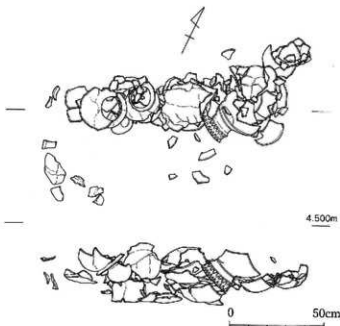
(3) 久住町教育委員会・大分県教育委員会『都野原田遺跡』(2001年 114頁第117図2)

(4) 大阪府埋蔵文化財センター・市村慎太郎氏のご教示による。

SD1111a出土遺物 (X7区)

(第141～143図) 図示したものは、SD1111aの出土遺物の中でも、X7小区で出土した遺物である。前述したように、これらの遺物は狭い範囲に集中して出土したもの(第141図)で、良好な一括資料を形成している。第142図1は在地系(安国寺式系)の複合口縁甕で、二次口縁の外面に櫛描波状文が施されている。頸部には指頭によって上下から押圧された突帯が巡らされている。胴部は内外面とも刷毛目調整が主体となるが、外面下位には荒いミガキも施されている。2も複合口縁甕の破片で、外面に複合螺鈿文と円形押圧文が施されている。当該資料の文様は、在地系というよりも、中・西部瀬戸内系の属性と考えられる。3・4は鉢で、3は口径と胴部最大径がほぼ等しくなり、4は口径が胴部最大径より僅かに大きくなる。5は口縁部が外傾気味に立ち上がり、底部が丸底となる鉢である。外面に削り調整、内面にミガキが認められる。6～第143図13は甕である。6は頸部が締まるともに底部が丸底となるもので、布留式系の影響を受けた資料と考えられるが、口縁端部は肥厚していない。7～12は口縁部が外反するものや長胴気味の胴部を有するものなど、在地系の属性が強い甕である。13は大きく開く口縁部を有し、頸部に突帯を有するもので、当該資料も在地系の甕に位置づけら

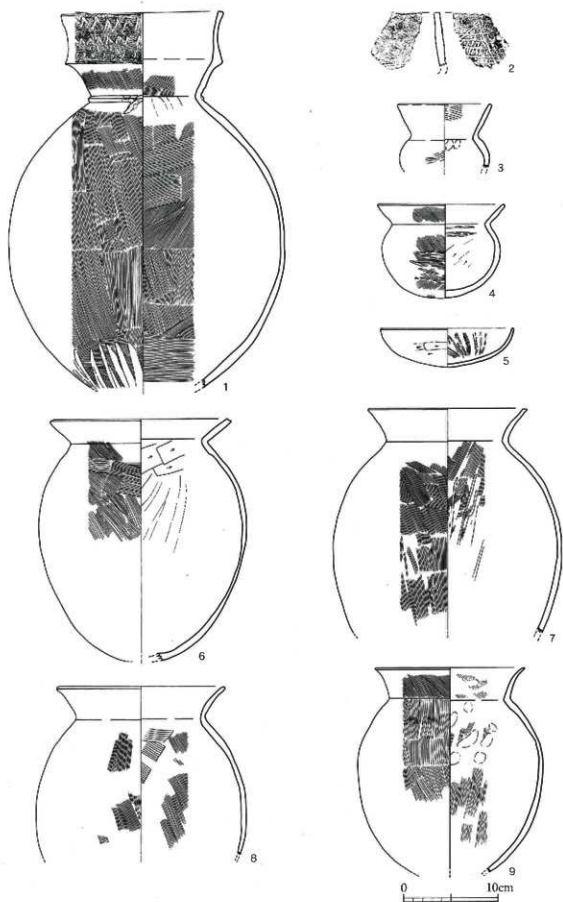
中・西部
瀬戸内系の
属性



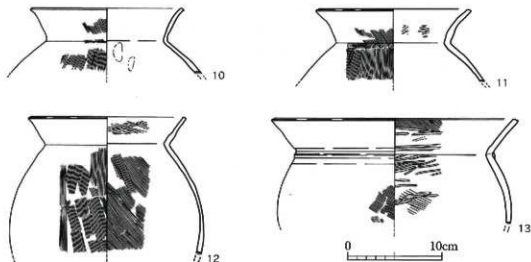
第141図 SD1111a (X7小区) 遺物出土状況 (1/20)



SD1111a (X7小区) 遺物出土状況



第142図 SD1111a (X7小区) 出土遺物① (1/4)



第143図 SD1111a (X7小区) 出土遺物② (1/4)

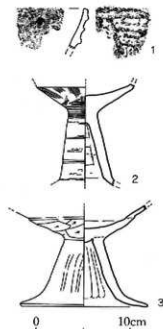
れるものである。頭部の突帯は、通常指頭による上下からの押圧によって装飾性の強いものとなるが、当該資料については押圧が認められず、突帯が退化した印象を与えるものである。

SD1111出土遺物 (第144図) 図示した遺物はX6区から出土した土器で、SD1111aあるいはSD1111bのどちらかに帰属することは間違いないものであるが、出土位置を特定できなかった資料である。1は口縁部の破片で、外面に隆帯による文様を形成する。2は布留式の高坏で、脚柱部はエンタシス状の膨らみをもち、外面には横方向のミガキが施されている。当該土器は久住ⅢA期(古墳時代前期後半)の標式資料となるものであるため、出土位置を特定できなかったものの、SD1111aに帰属する遺物であった可能性が高いと考えている。

隆帯の文様

SD1111周辺包含層 (第131図) SD1111のプランを確認する目的で、X6小区・X7小区で掘り下げを行っていたところ、当該遺構南側の東西約7.3m、南北約1.6mの範囲に土器小片が分布する状況を確認した。土器の分布範囲を示すプランなどは確認することができず、本節ではこの分布範囲を「SD1111周辺包含層」として、報告することにした。出土遺物には土器小片が主体を占めており、後述する高坏脚部を除いて、図化可能な資料は存在しない。遺物の分布範囲については、第131図を参照されたい。

SD1111周辺包含層出土遺物 (第144図) 図示した遺物は、高坏の脚部である。僅かに残存する坏部外面には、削り調整が施されている。脚柱部の外面には縦方向の荒いミガキが認められ、脚柱部から続く裾部は強く屈曲する。古墳時代前期前半に比定される資料である。



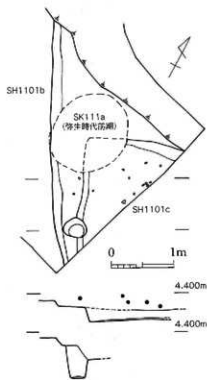
第144図 SD1111およびSD1111
周辺包含層出土遺物 (1/4)

住居跡

SH1101b・SH1101c (第145図) I-1区(Y8・Z8小区)に位置する竪穴住居跡である。検出段階では単一の遺構と認識していたが、掘り下げの過程で2基の住居跡が切り合っていたことが判明し、さらに住居跡床面の精査過程で弥生時代前期末の貯蔵穴SK1110aを検出した。従って、都合3基の遺構が切り合っていたことになる。遺構の構築順序は、SK1101a→SH1101b→SH1101cである。遺構の平面形態は、北側が攪乱、南側および西側が調査区外になるため不明であるが、方形プランを呈するものである可能性が高い。規模については、SH1101bが南北3.9m、深さ10cm、SH1101cが東西1.5m、南北1.7m、深さ20cmを測る。調査範囲の中では、支柱穴など、住居跡に直接関係する遺構は検出できなかった。出土遺物については、埋土中から弥生時代前期末の土器片が少量出土しているが、これらは周辺からの混入遺物と解釈される。SH1101b・SH1101cの構築時期を示す遺物は出土していないが、周辺の遺構のあり方から、両者とも古墳時代前期の住居跡と考えておきたい。

3基の遺構の切り合い

構築時期を示す遺物がない

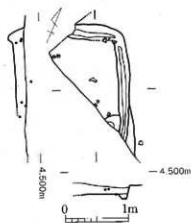


第145図 SH1101b・SH1101c実測図 (1/60)

SH1202 (第146図) I-2区の南西隅(Z10~A11小区)に位置する竪穴住居跡である。弥生時代前期末に比定される土坑SK1203・SK1211と切り合い関係を有し、両者を切って構築されている。方形プランを呈する住居跡の北東コーナーと思われ、規模については東西1.25m、南北1.8m、深さ16cmである。調査範囲の中では、支柱穴・炉等の遺構は存在していない。検出した部位には、深さ7~10cmの壁溝が巡っている。埋土中から少量の土器破片が出土しているが、弥生時代前期末に比定される資料が多く、それらの大半は周辺からの混入と推定される。住居跡の詳細な構築時期を示す良好な資料は存在しないが、土師器の小型器(ミニチュア土器)が出土している。出土遺物と周辺の遺構のあり方から、当該遺構も古墳時代前期の住居跡と考えておきたい。

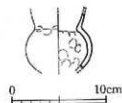
壁溝

ミニチュア土器



第146図 SH1202実測図 (1/60)

SH1202出土遺物(第147図) 図示した遺物は土師器の小型器である。手摸ねで成形されたミニチュア土器で、胴部内面に指頭痕が多く認められる。



第147図 SH1202出土遺物 (1/4)

SH1301 (第148図) 1-3区

(A12小区)に位置する竪穴住居跡である。1-3区全体に広がる弥生時代前期末の包含層(71頁参照)を切って構築されており、また南東側では柱穴2基(SP1302・SP1303)に切られている。ちなみにSP1302からは黒色土器小片(第269図1・187頁参照)、SP1303からは糸切り底の土師質土器小皿(第269図2、187頁参照)が出土しており、前者は古代、後者は中世の所産である可能性が高い。住居跡の平面形態は方形プランで、北西側と南東隅は調査区外に伸びる。規模については、現状で南北3.6m以上、東西6m以上である。図示した図面の中で網掛けを行ったものが主柱穴と推定され、主柱穴が4本柱となる住居跡である可能性が高いと考えるが、未調査部分が多く、



第148図 SH1301実測図 (1/60)

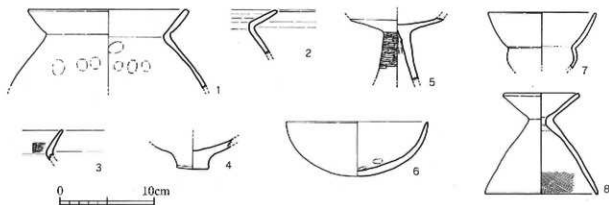
遺構

詳細は不明である。また、住居跡床面の南壁と東壁の部分には幅25cm、深さ15cmほどの壁溝が検出された。さらに、1-3区北壁の壁面土層の観察によると、住居跡の床面に黒色土と黄褐色土を交互に積み重ねた貼床が、15~20cmの厚さで形成されていることを確認した。出土遺物には、住居跡埋土中から布留式系の甕・高坏、小型丸底土器、X形小型器台などの土師器が出土している。これらの遺物の年代観から、当該住居跡の所産時期は久慈編年ⅢA期に併行する古墳時代前期後半に比定される。

貼床

SH1301出土遺物 (第149図) 1~3区

は布留式系の甕の口縁部である。いずれも内外面はナデ調整を主体とするが、3については内面に刷毛目調整が残存している。また、1の胴部には粘土紐



第149図 SH1301出土遺物 (1/4)

接合痕に対応する部位に指頭痕が認められる。4は壺または甕の底部と推定される破片で、底部の先端部が突起し、小さな平底状を呈している。5は布留式系の高環で、脚柱部がエンタシス状を呈し、当該部分の外面に横方向のミガキを施している。6は底部が丸底となる環で、底部内面付近に指頭痕が認められる。7は小型丸底土器で、底部を欠損している。口縁部がやや内湾気味に伸び、内外面ともナデ調整を主体とする。8は小型器台で、いわゆる「X形小型器台」と呼称される器形を呈する。受部内外面と脚部外面および内面上位にナデを施し、脚部内面下位には刷毛目調整が残存している。以上の出土遺物のうち、5の高環および8のX形小型器台は、久住編年ⅢA期の標式とされる資料群のひとつである。

X形小型
器台

SH2101 (第150図) Ⅱ-1区 (B13小区)
に位置する竪穴住居跡である。住居跡の平面形態は方形プランで、南側は調査区外に伸びる。規模については、現状で南北5.6m、東西4m以上、深さ15cmである。図示した図面の中で網掛けを行っているものが主柱穴で、主柱穴が4本柱または2本柱の住居跡である可能性が高いと考えるが、未調査部分があるため、詳細は不明である。主柱穴と思われる遺構の他にピットが2基検出されているが、これらからは出土遺物がなく、詳細な構築時期は不明(中世か?)



SH2101遺物出土状況

である。壁溝については、当該住居跡からは検出されなかった。出土遺物については、やや特異な山十状態を示すものがある。まず、住居跡北東壁の東寄りで、検出面の上面に相当するレベルから、小型丸底土器が3個体寄せ集められたような状態で出土した(第150図A・写真参照)。この下位からも小型丸底土器1個体が出土している。さらに、住居跡北東壁の西寄りでも、小型丸底土器1個体が出土した(同B)。これらの遺物の出土状況は、宮内克己氏⁽¹⁾によって指摘された住居跡施絶儀礼に伴う行為として理解できるものである可能性が高い。この場合、住居跡の埋土は意図的に埋め戻されたものであることが指摘されている。本住居跡の場合は埋土の土層観察が不十分であるものの、廃絶行為の所産と思われる遺物が住居跡の検出面上から出土していることを考えると、埋土の大半は意図的に埋め戻されたものである可能性が高いと推定している。その他、住居跡北東壁付近で長頸壺や甕、高環などがややまとまって出土したほか、埋土中から土師器が一定量出土している。出土遺物の年代観から、当該住居跡の所産時期は古墳時代中期前半に比定される。

寄せ集めら
れた小型
丸底土器

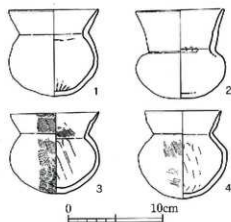
埋め戻さ
れた埋土

SH2101出土遺物 (第151・152図) 第151図1~4は小型丸底土器で、住居跡北東壁の東寄り一括出土した資料である。古墳時代前期の資料と比較すると、口縁部の伸びが短くなり、口径と胴部最大径がほぼ同じになる傾向が認められる。第152図5は甕で、当該時期の小型丸底土器を大型にしたような器形を呈する。内外面ともナデ調整を主体とする。6は小型の甕で、手懸ねで成形されたミニチュア土器である。7~12は高環で、7・8・10は坏環、11・12は脚柱部、5は坏環と脚柱部が完存する資料である。脚柱部の裾部が屈曲するもの(11・12)と屈曲せずにラップ状に開くもの(9)の二者が存在するようである。13・14は小型丸底土器で、第151図で図示した小型丸底土器と同様な器形を呈する資料である。このうち、13については住居跡北東壁の西寄り単体で出土した資料である。15~17は甕で、古墳時代前期の資料と比較すると、体部が球形化する傾向

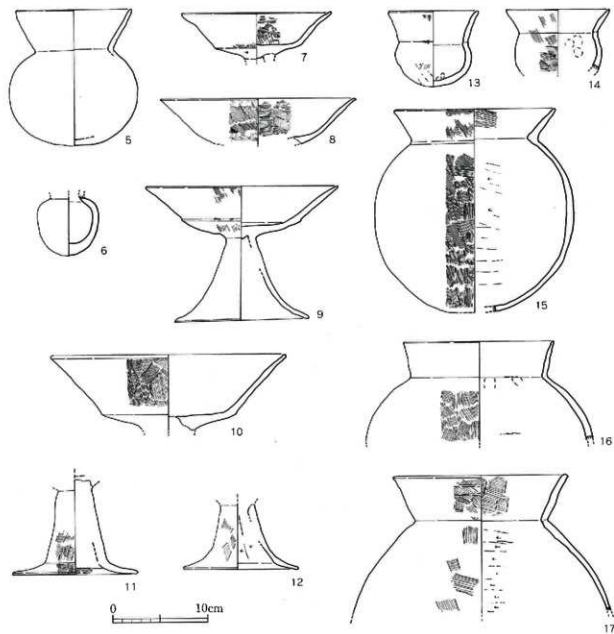
ミニチュア
土器

注(1) 宮内克己「竪穴住居跡の儀礼」(『九井考古学』第79号 九井考古学会 2004年)

が認められる。以上の住居跡出土遺物は良好な一括資料と評価できるものであるが、小型丸底土器(1~4・13・14)が古墳時代前期の特徴を失っていることや高坏脚柱部の裾部がラップ状に開く資料(第152図9)などが出現していることなどが特徴として掲げられる。上記の特徴から、当該一括資料の所産年代は古墳時代中期前半に比定される。



第151図 SH2101出土遺物① (1/4)

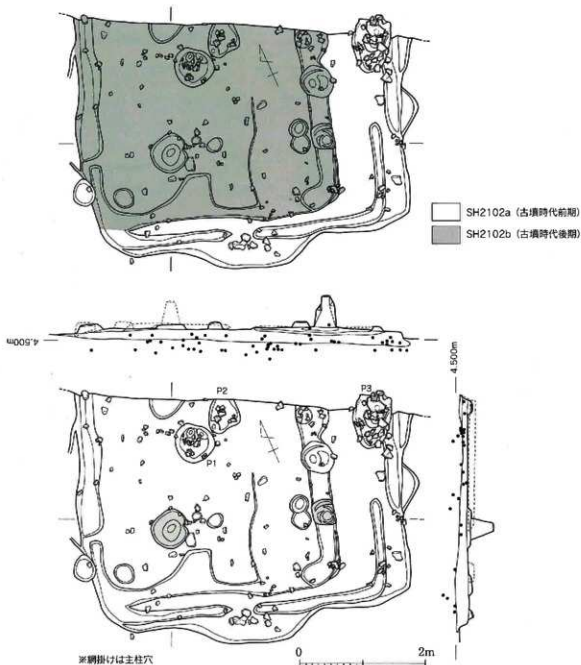


第152図 SH2101出土遺物② (1/4)

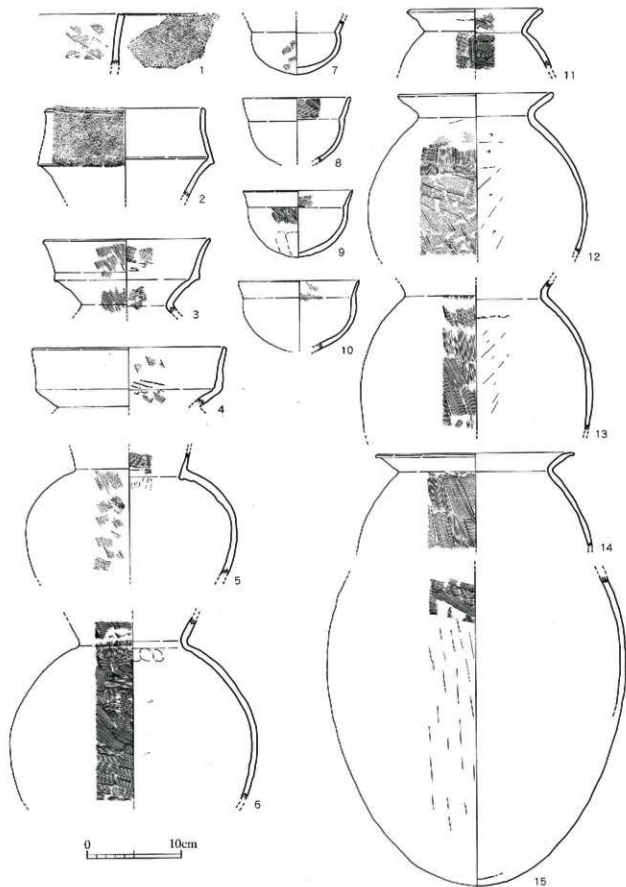
古代時代
後期の
住居跡
SH2102b
との重複

SH2102a (第153図) II-1区 (B13・14小区) に位置する竪穴住居跡である。古墳時代後期の住居跡SH2102b (162頁参照) と切り合い関係を有し、両者は重複した位置に構築されている (第153図上段)。互いの埋土が類似した黒色土であることから、両者の弁別は苦慮したが、発掘時における遺構の平面形態や出土遺物を参考にしながら、遺構の形態を下記のように解釈した。SH2102aの平面形態は方形プランで、北側は調査区外に伸びる。規模については現状で南北3.6m以上、東西5.3m、深さ約20cmである。床面から複数の柱穴が検出されており、図中で網掛けを行った2本が主柱穴と推定される。未調査部分も多く断定できないが、主柱穴が4本となる住居跡である可能性が高い。また、主柱穴以外にも土師器が密集して出土するピットが3箇所 (P1～P3) ほど存在するが、その性格を明らかにすることはできなかった。壁溝については南・西・東壁側か

壁溝



第153図 SH2102a実測図 (1/60)



第154図 SH2102a出土遺物 (1/4)

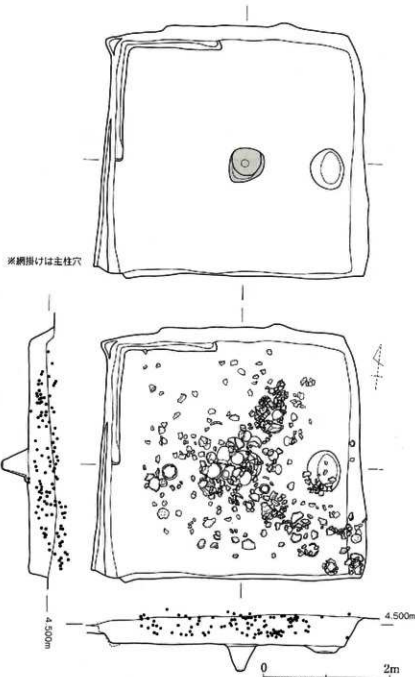
住居跡の
配置(？)

ら検出された。この中で東壁側の埋溝は、南壁側からL字状に屈曲するものとそれよりさらに東に位置するものの二者が検出されており、住居跡が東側に拡張されたことを示唆する事象であると考えている。出土遺物については、前記したピットP1・P2・P3の内部から土師器の甕が出土しているほか、住居跡埋土中からも土師器が一定量出土している。埋土中からの遺物には、床面密着の状態で出土した遺物はなく、いずれも埋土下位から上位のレベルで出土している。出土遺物の年代観から、当該住居跡の所産年代は古墳時代前期前半に比定される。

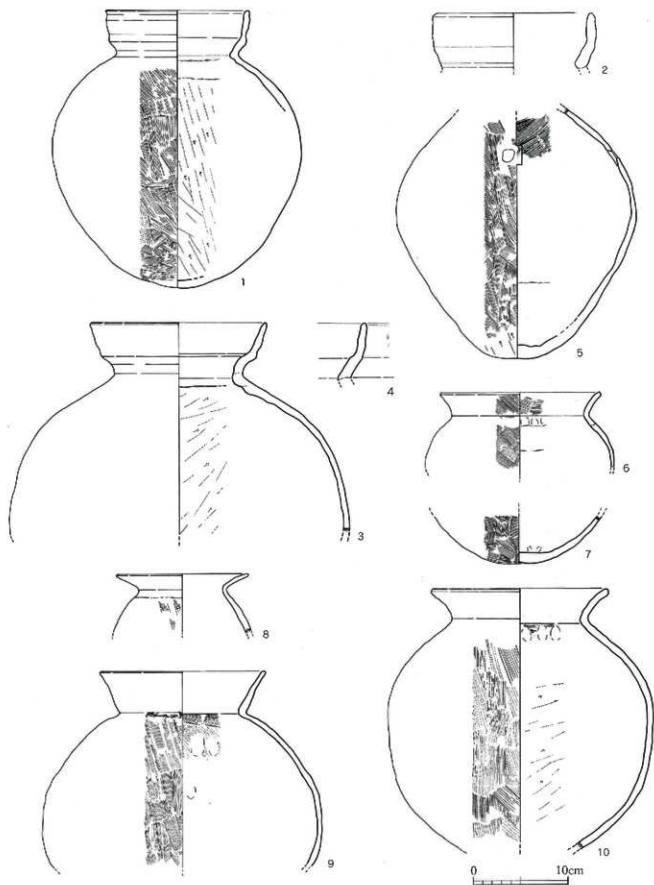
SH2102a出土遺物 (第154図) 1・2は在地系(安国寺式系)の複合口縁蓋で、いずれも二次口縁が大きく発達する。口縁外面には退化した櫛描波状文が描かれている。3・4も複合口縁蓋で、

3は口縁部が大きく外反するのに対し、4は直立気味に立ち上がる。5・6は壺で、口縁部を欠損するが、単口縁蓋となる可能性が高い。7～10は小型丸底土器または鉢で、頸部のしまりが弱い器形を呈する。11～15は甕で、11は小型、12～14は中型、15は大型となる。14・15は前述したP3・P1から、それぞれ出土した資料である。

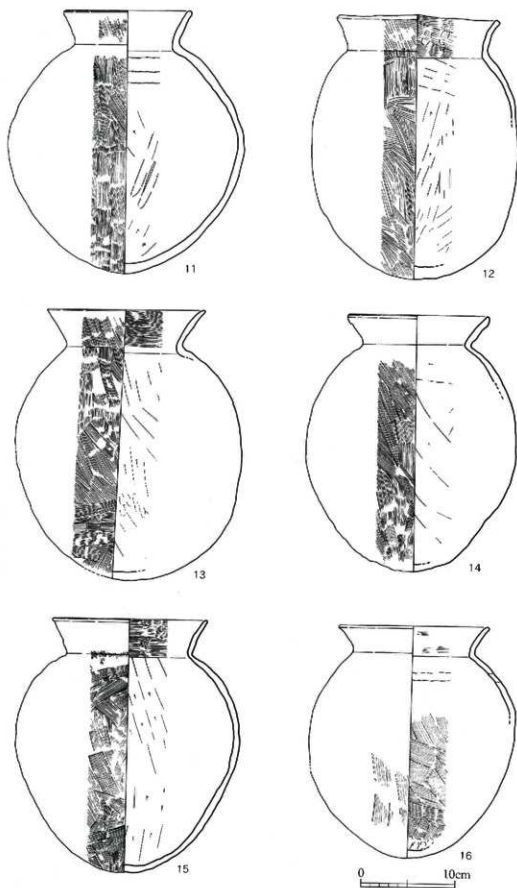
SH2106 (第155図) II-1区(B13～C14小区)に位置する竪穴住居跡である。古墳時代前期の住居跡SH2107・SH2108(105・106頁参照)と切り合い関係を有して



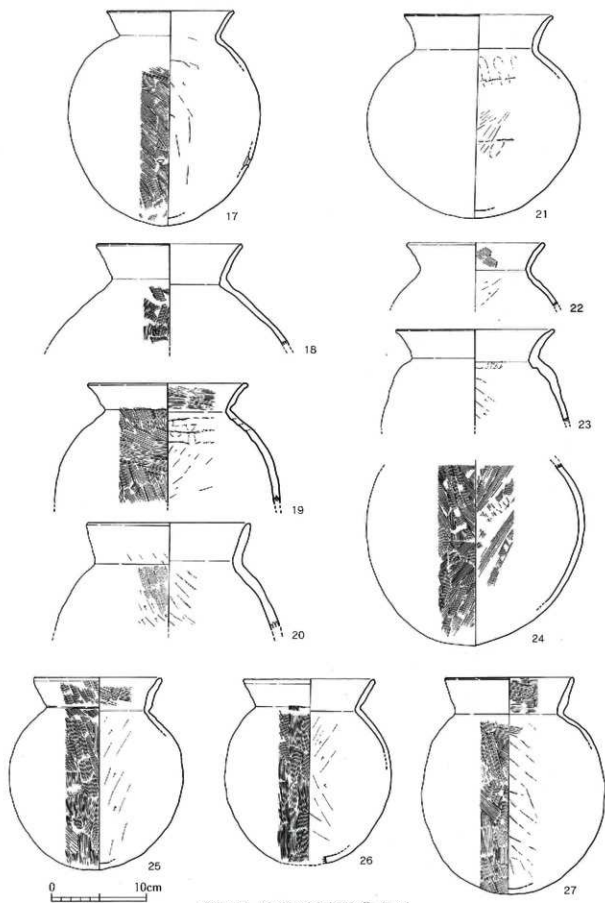
第155図 SH2106実測図(1/60)



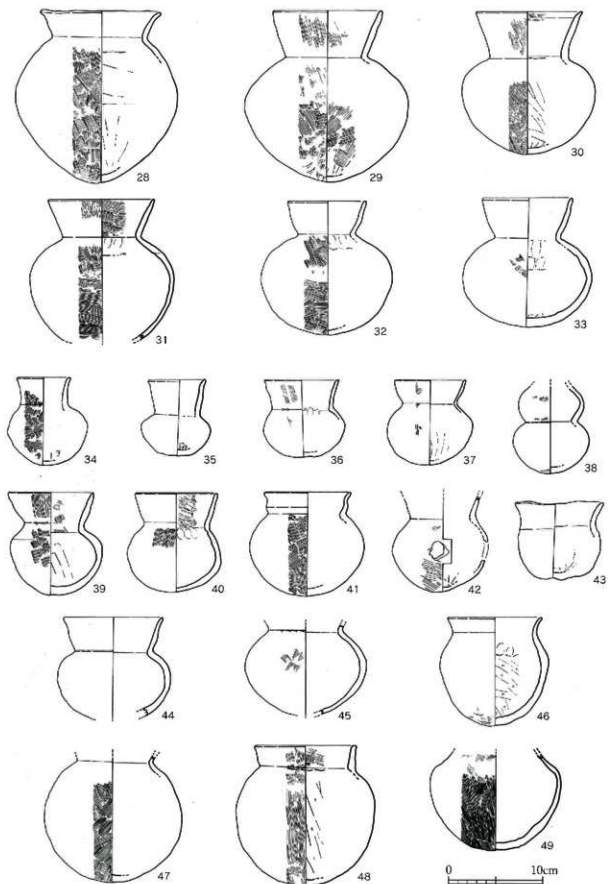
第156図 SH2106出土遺物① (1/4)



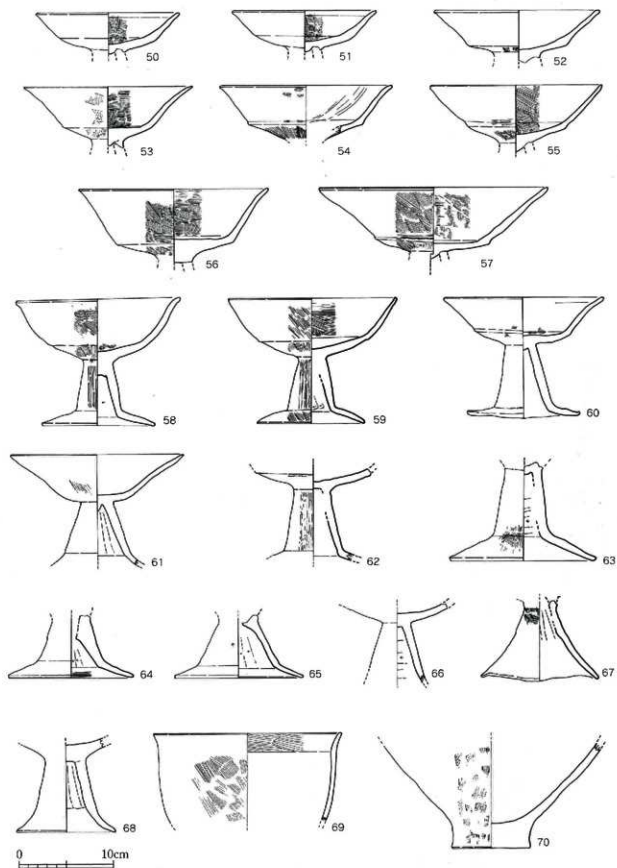
第157図 SH2106出土遺物② (1/4)



第158図 SH2106出土遺物③ (1/4)



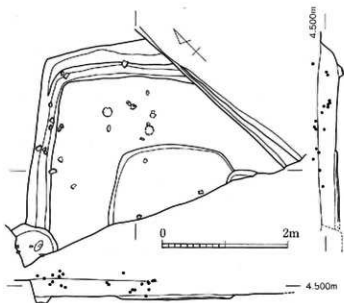
第159図 SH2106出土遺物④ (1/4)



第160図 SH2106出土遺物⑤ (1/4)

竪溝	<p>おり、両者を切って構築されている。住居跡の平面形態は方形プランで、規模については南北4m、東西4.2m、深さ45cmである。主柱穴については明確なものが認められなかったが、床面中央に径0.5m、深さ45cmの柱穴、床面東側に長径65cm、短径55cm、深さ10cm前後の浅い窪みが認められた。中央の柱穴以外に主柱穴と思われるピットが存在しないため、主柱穴が1本柱の住居跡である可能性が高い。盛溝については北壁と西壁側の一部から検出され、その規模は幅15cm前後、深さ5cm前後を測る。出土遺物については、埋土中に完形品を含む大量の土器が廃棄された状態で検出された。出土遺物は住居跡埋土の中央から南西側に集中する傾向が認められ、特に埋土中央部付近からは土師器の甕や小型壺などが集積され、折り重なったような状態で出土した。床面密着の状態でも出土した遺物はなく、いずれも埋土上下位から上位のレベルで出土している。出土した土師器の中には、小型壺や高坏などが目立つほか、甕形土器や胴部に焼成後の穿孔を行っている資料も存在する。これほどの量の土師器類を単一の住居跡で消費したとは通常考えられないので、当該住居跡の周辺で何らかの祭祀や儀礼を行った後、使用した土器類を一括廃棄あるいは一部を埋置したものであろう。出土遺物の土器様相を検討してみると、土師器の小型精製三器種が認められず、当該時期にはこれらが消滅している可能性が高いこと、甕にはいくつかのバリエーションが認められるが、布留式系の属性から変化したものが主体を占めること、高坏にエンタシス状の細い脚柱部を有する資料がなく、逆に裾部が屈曲せずに開く形態のものが出現していることなどの特徴が挙げられる。従って、当該住居跡の所産時期は、出土遺物の年代観より古墳時代中期前半に比定される。</p>
山陰系	<p>SH2106出土遺物 (第156～160図) 第156図1～4は二重口縁甕で、口縁部の特徴から、山陰系土器の範疇に属する資料である。胴部が残存する1・3については、内面に削り調整が認められる。5は壺の胴部と推定される大型破片で、口縁部を欠損しており、胴部上位には焼成後の穿孔が認められる。胴部中位に最大径をもち、頸部がややすぼまる器形を呈している。6～第159図28は甕で、やや小型のサイズのもの(8)、胴部が球形化しているもの(10・21)、胴部が長胴気味の傾向をみせるもの(12～17)のほか、器高がひとまわり小さく、中型甕(25～28)といえるサイズになるものなど、いくつかのバリエーションが認められる。29～33は直立口縁甕をもつ壺で、胴部最大径より口径が小さくなる。34～37は小型の壺で、34・35については前述した直立口縁甕を小型化したような器形を呈する。38は甕形土器で、口縁部を欠損する。外面には刷毛目調整が残存する部位もあるが、基本的には内外面ともナデによって仕上げられている。39～43についても小型の壺で、口縁部が湾曲するもの(41)や胴部に焼成後の穿孔を有するもの(42)、手摺ねによって成形されたもの(43)などのバリエーションが認められる。第160図50～68は高坏である。脚柱部が残存するものについては、裾部が屈曲するもの(58～65)と裾部が屈曲しないかあるいは屈曲度が弱くラップ状に開くもの(67・68)の二者が存在する。後者の裾部が屈曲しない脚部を有する高坏は、古墳時代中期になって出現する型式である。69は鉢で、口縁部が緩やかに反する形態を呈する。胴部外面と口縁部内面に刷毛目が認められるが、口縁部外面と胴部外面についてはナデ調整が行われている。70は弥生時代前期末の土器の底部と思われる資料で、混入品である。上記の資料は、混入品と思われる少数の弥生土器を除いて、古墳時代中期前半の良好な一括資料と考える。</p>
焼成後穿孔	
甕形土器	
焼成後穿孔	
混入品	

SH2107 (第161図) II-1区 (B・C13小区) に位置する竪穴住居跡である。弥生時代前期末の貯蔵穴SK2114および古墳時代中期前半の住居跡SH2106と切り合い関係を有しており、遺構の構築順序はSK2114→SH2107→SH2106である。住居跡の平面形態は方形プランで、南側は調査区外にのびる。規模は現状で南北3.1m以上、東西4m以上、深さ25cmである。住居跡に伴う施設としては、床面中央から南北1.1m以上、東西1.9m以上、深さ約10cmを測る土坑（以下、中央土坑と略称）が検出された。



第161図 SH2107実測図 (1/60)

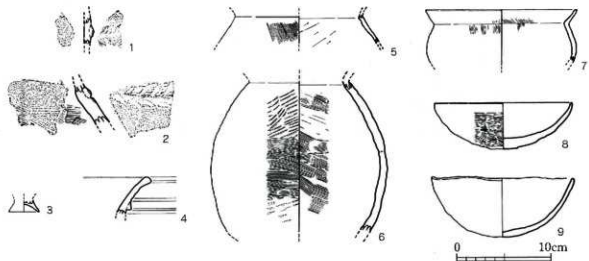
中央土坑

壁溝

その埋土中には、僅かではあるが炭化物を含むことを確認している。また、中央土坑の南西側に1基の柱穴が確認されたが、中央土坑と切り合い関係を有することもあり、主柱穴である可能性は低い。壁溝については北壁と西壁側の床面から検出され、住居跡壁面を全周していたと推定される。壁溝の規模は幅25～35cm前後、深さ10cmである。出土遺物については、住居跡埋土下位から上位にかけて完形品を含む土師器類が一定量出土したが、床面密着の状態出土したものはない。土師器坏（第162図8）の中には倒置の状態埋土中位から出土した資料もあるが、これが住居跡跡絶の行為に伴うものか否かは判断しがたい。住居跡の所産時期については、年代の指標となる決定的な資料が不足しているものの、古墳時代中期前半の住居跡に切られていることや出土遺物の様相などから、古墳時代前期前半に比定しておきたい。

製塩土器

SH2107出土遺物 (第162図) 1は土師器葺の胴部の小破片で、外面にベルト状突帯を貼付している。2は葺の肩部付近の破片で、肩部と頸部の境付近に断面三角形の突帯を貼付し、突帯上とその下に短沈線文を矢羽根状に施文している。3は小型の土器の脚部と思われ、製塩土器の脚部で



第162図 SH2107出土遺物 (1/4)

ある可能性が高い資料である^(注)。内外面ともに指頭圧痕が認められる。4は頸部付近に断面三角形の突帯を貼付する帯で、突帯上には指押さえなどの装飾は認められない。在地系の變の口縁部と推定される。5は頸部の帯で、外面に刷毛目調整、内面にミガキ調整がなされている。布留式系の帯であろう。6も帯で、外面は叩きの後に刷毛目調整、内面は刷毛目調整を施している。当該資料は胎土に石英粒や片岩粒を多く含み、通常見られる土師器とは印象が異なる胎土が使用されている。7は鉢で、内外面ともに刷毛目調整が残存しているが、ナデによって仕上げられている。8・9は底部が丸底になる環である。このうち、8は住居跡埋土中位から倒置の状態で出土した資料で、口縁部の一部を除いて、完形の状態である。

SH2108 (第163図) II-1区(C14小区)に位置する竪穴住居跡である。古墳時代中期前半の住居跡SH2106(98頁参照)と切り合い関係を有しており、遺構の構築順序はSH2108→SH2106である。住居跡の平面形態は方形プランと思われ、南側および西側については調査区外に伸びる。規模は現状で南北3.5m以上、東西4.4m以上、深さ約10cmである。床面中央に南北1.1m以上、東西1.5m、深さ10cm前後を測る中央土坑が検出され、土坑の埋土中に炭化物を含むことを確認した。支柱穴については明確なものは検出されていない。壁溝は北壁と東壁側の床面の一部から検出され、おそらくは住居跡壁面を全周していたと推定される。壁溝の規模は幅30cm前後、深さ15cm前後である。遺物の出土状況については、やや特異な特徴を示すものがあり、それらを下記で指摘する。

中央土坑

特異な遺物の
出土状況

第163図上段A;住居跡北壁西寄りの地点で、ミニチュア土器1個体(第164図1)と土師器壺2個体(同2・3)がまとまった状態で出土した。ミニチュア土器は口縁部を上に向けた正位の状態、壺2個体は口縁部を東に向けて横倒しの状態であった(写真参照)。これら土師器3個体は住居跡床面からやや浮いた状態で、しかも壺溝が完全に埋没したレベルよりもさらに上位で検出されていることから、住居跡が一定程度埋没または埋設された後に埋没されたものと推定される。また、土師器の壺には口縁部に意図的な打ち欠きが認められたり、胴部上位に焼成後の穿孔がなされたものが使用されていた。



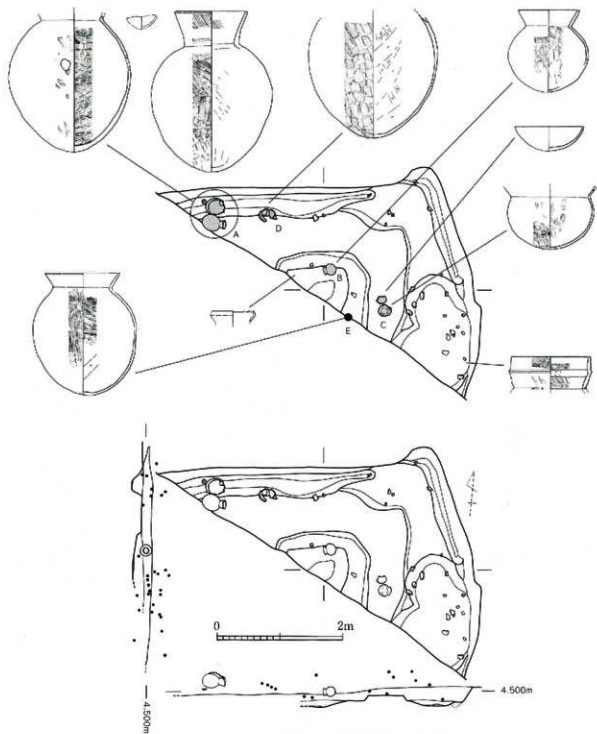
SH2108遺物出土状況

同B;中央土坑上面から、土師器の中型壺(第164図5)が口縁部を斜め下に向けた状態で出土した。当該資料も中央土坑が完全に埋没あるいは埋設された後に、埋没または遺棄されている可能性が高い。中型壺の口縁部には意図的な打ち欠きが認められる。

同C;環(第164図7)と鉢(同8)が並んで出土した。両者とも図上復元ができる程度の大型破片であるが、完存の状態ではない。いずれも床面からやや浮いた地点から出土している。環には口縁部の2箇所在意図的な打ち欠きがある。鉢については口縁部を欠損しているが、これが意図的なものかどうかの判断が難しい。

同D;住居跡北壁西寄りの地点で、土師器壺の大型破片(第164図4)が出土した。口縁部から胴部付近を欠損するが、これが意図的なものかどうかの判断は難しい。当該資料も床面からやや浮い

注(2) 田中裕介氏(大分県教育庁文化課)のご教示による。

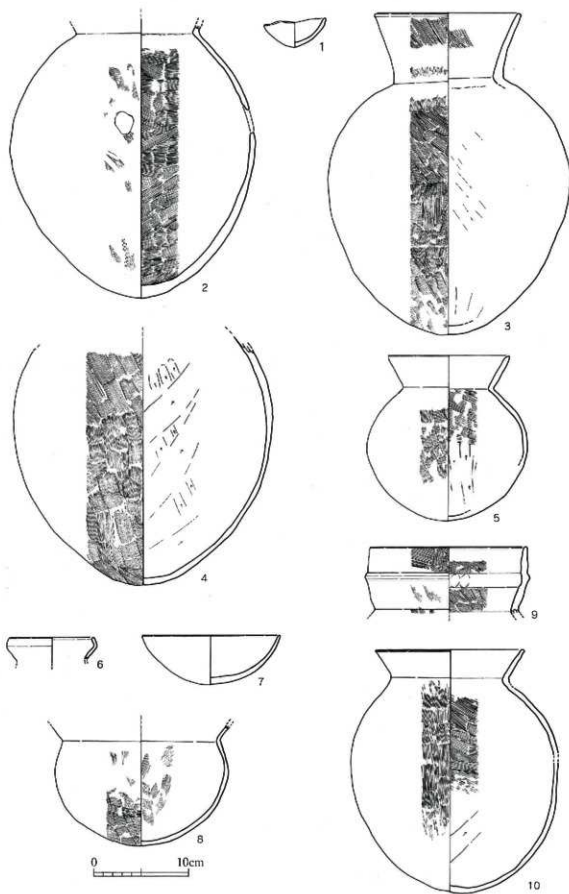


第163図 SH2108実測図と遺物出土状況 (1/60)

た地点から出土している。

同B; 中央土坑の南東側から、布留式系の土師器甕(第164図10)が出土した。出土レベルは土坑上面に相当する地点で、上記Aとほぼ同じレベルである。図上復元可能な大型破片であるが、欠損部分も多い。意図的な打ち欠きや穿孔等は、残存部分には認められないようである。

以上で指摘した遺物の出土状態について、A・Bは住居跡廃絶儀礼に伴う行為の所産と理解している。C～Eについては、廃絶儀礼による行為の可能性も考えられるものの、断定には至っていない。このように、当該住居跡では確実に住居跡廃絶儀礼の所産と考えられる遺物の出土状態が認められ

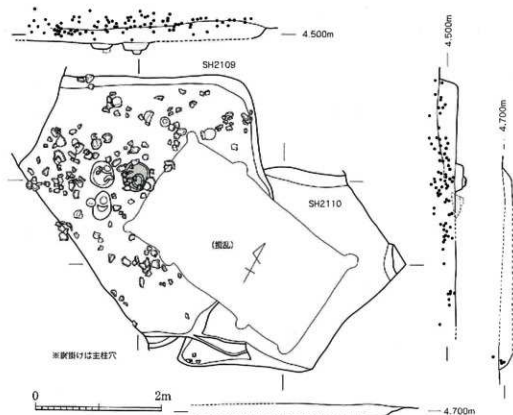


第164図 SH2108出土遺物 (1/4)

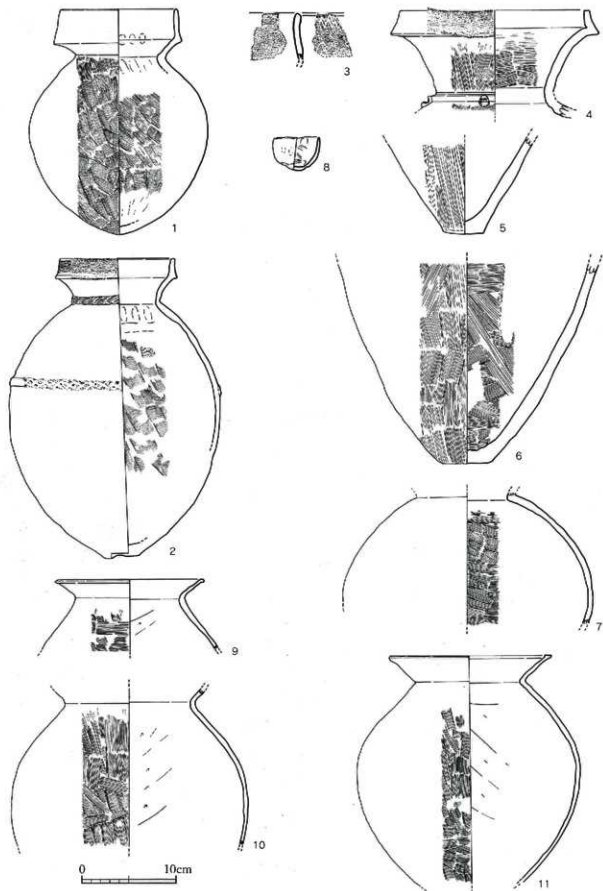
ることに着目しておきたい。住居跡の時期については、年代の指標となる決定的な資料が不足しているものの、古墳時代中期前半の住居跡に切られていることや出土遺物の土器様相などから、古墳時代前期前半に比定される。

SH2108出土遺物 (第164図) 1～3は第164図上段Aとした地点から、一括出土した資料である。1はミニチュア土器で、環を小型にしたような器形を呈し、手捏ねによって成形されている。2は土師器の蓋で、口縁部を欠損し、胴部上位に焼成後の穿孔が行われている。3は単口縁の蓋で、口縁部に意図的な打ち欠きが認められる。4は甕の大型破片で、肩部以上を欠損する。胴部外面は刷毛目調整、内面は削り調整が認められる。5は中央土坑上面(第163図上段B)から出土した中型甕である。口縁部に意図的な打ち欠きがある。6は複合口縁をもつ小型の甕の口縁部で、内外面ともナデ調整を主体とする。破片のため断定はできないが、在地系(安岡寺式系)の甕を小型化したミニチュア土器である可能性もある。7・8は第163図上段Cとした地点から、出土した資料である。7は底部が丸底となる環で、口縁部の2箇所に意図的な打ち欠きが認められる。8は鉢で、口縁部を欠損する。9は二重口縁密の口縁部で、内外面ともに刷毛目調整を主体とする。10は布留式系の甕で、内外面とも刷毛目調整を施すが、内面下半部には削りが残存している。

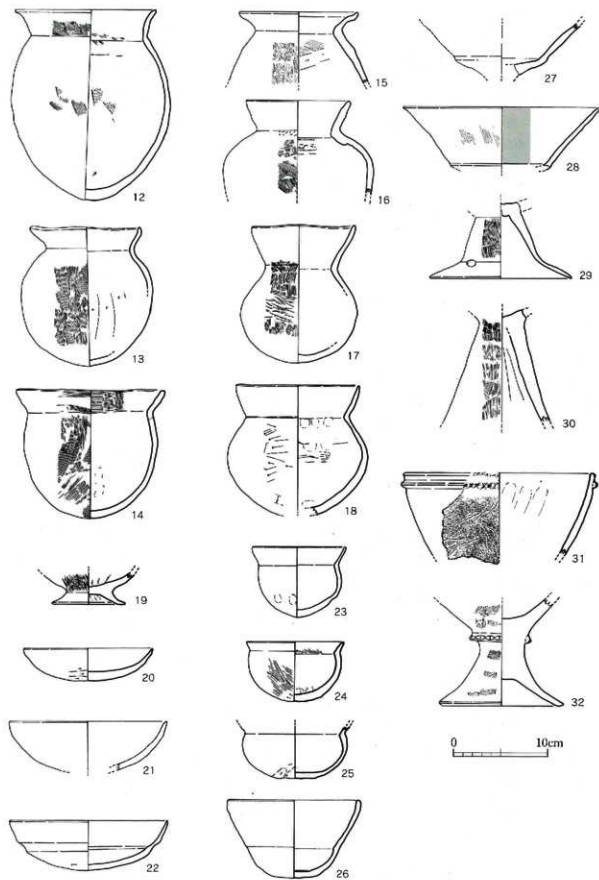
SH2109 (第165図) II・1区(C14小区)に位置する竅穴住居跡である。古墳時代前期前半の住居跡SH2108、時期不詳の住居跡SH2110と切り合い関係をもっており、遺物の構築順序はSH2110→SH2109→SH2108となる。また、住居跡南西側を大型の攪乱によって破壊されている。住居跡の平面形態は方形プランと思われ、南西側については調査区外に伸びる。規模は現状で南北4.1m以上、東西3.9m以上、深さ約25cmである。柱穴については床面中央付近にピットが3基検出されたが、その中で図中に網掛けを行っているものが、主柱穴である可能性が高い。攪乱による破



第165図 SH2109・SH2110実測図(1/60)



第166圖 SH2109出土遺物① (1/4)



第167図 SH2109出土遺物② (1/4)

壊部分が存在するため、断定はできないが、当該遺構は主柱穴が1本柱の住居跡と推定している。壁溝は確認されていない。出土遺物については完形品を含む多量の土器が出土しているが、床面密着の状態出土したものではなく、いずれも埋土下位から検出山にかけてのレベルから出土している。出土遺物には、口縁部が大きく発達した小型九底土器（第167図26）などがあり、これらの土器の年代観から、当該住居跡の所産時期は久住編年ⅡC期に伴行する古墳時代前期前半に比定される。

SH2109出土遺物（第166・167図） 第166図1は底部が九底となる複合口縁蓋で、口縁部内外面はナデ調整、胴部外面と胴部内面中位は刷毛目調整、胴部外面下位は削り調整が施されている。口縁部外面には櫛描波状文が描かれておらず、無文である。2は在地系の複合口縁蓋で、底部は僅かに平底が残る。口縁部外面に櫛描波状文、頸部に縄紐を表現した突帯、胴部上位にベルト状突帯を有する。胴部外面はナデ調整、内面は刷毛目調整が施されている。3は在地系の複合口縁蓋で、二次口縁が発達し、外面に櫛描波状文が施された破片である。4も在地系の複合口縁蓋で、二次口縁がやや短く、その外面には退化した櫛描波状文が施されている。頸部には断面三角形の突帯を1条巡らし、突帯の下位にはリボン状浮文を有する。5・6は蓋または胴と推定される底部で、平底を呈する資料である。4～6は前述した1～3と比較して型式学的には古州を呈する資料であり、混入品である可能性も考えられる。7は頸部が締まる形態となる蓋で、口縁部を欠損しているが、単口縁蓋に復元される資料である。8は手探ねによって成形されたミニチュア土器である。9～11は布留式系の蓋で、肩部がナデ屑となる形態を呈する。口縁部が残存するものは、口縁端部が肥厚する傾向が認められる。第167図12～15・18は中型の土器器蓋である。16・17は単口縁となる小型の蓋である。19は台付き鉢の脚部で、胴部以上を欠損する。20～22は内湾気味に立ち上がる口縁部と九底の底部を有する鉢である。この中で、22については胴部中位付近に湾曲が認められ、底部外面に削り調整が施されている。23～25はく字の字形に屈曲する口縁をもつ鉢である。26は小型九底土器で、口縁部が内湾気味に長く伸びる。内外面ともナデ調整を主体とする。27～30は高環で、27・28は坏部、29・30は脚柱部である。28には内面に赤色顔料の塗布が認められ、29には脚柱部と裾部との境界付近に円形の透孔がみられる。31・32は弥生時代前期末の土器で、混入品である。31は下城式土器の蓋の口縁部で、口縁端部と突帯上に刻目が施されている。32は高環の脚部で、脚部と坏部の境界付近に刻目突帯を有する。

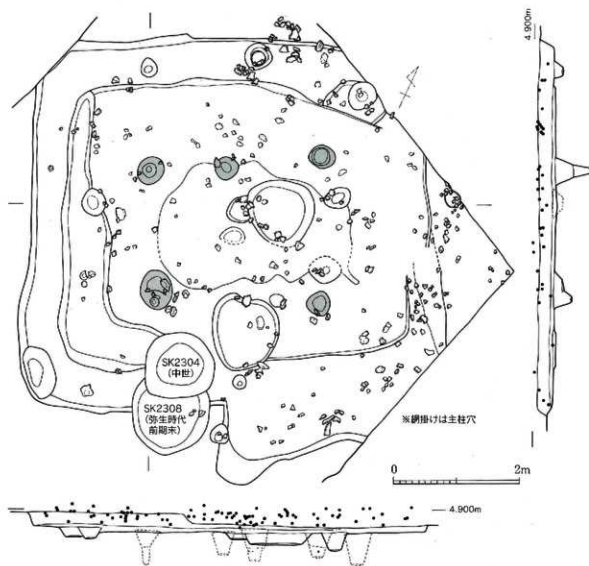
以上の土器の中で、時期比定の指標になる資料は小型九底土器（26）で、口縁部が大きく発達していることから、久住編年ⅡC期に伴行する古墳時代前期前半に比定できる。また、遺物の出土状況から1・2の複合口縁蓋も、確実に当該資料と共伴する土器と推定している。

SH2110（第165図） Ⅱ-1区（C14・15小区）に位置する竅穴住居跡である。古墳時代前期前半の住居跡SH2109と切り合い関係を有しており、遺構の構築順序はSH2110→SH2109となる。また、住居跡東側を大型の攪乱によって破壊されている。住居跡の平面形態は方形プランと思われ、北東側と南東側については調査区外に伸びる。規模は現状で南北3.2m以上、東西3.3m以上、深さ約20mである。柱穴や壁溝については、検出されていない。出土遺物は住居跡南西隅付近で、土器小片が少量検出されたが、図示に耐える遺物は存在しない。良好な出土遺物は存在しないが、古墳時代前期前半の住居跡に切られていることから、SH2110の所産時期は古墳時代前期前半以前と考えられる。

混入品？

小型九底土器

図示可能な遺物がない

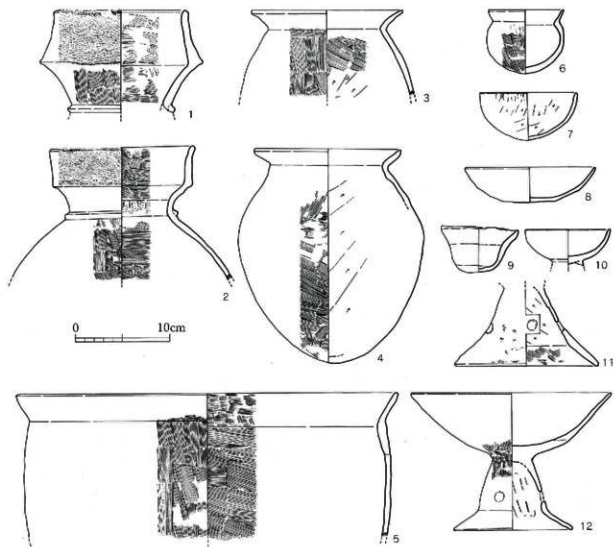


第168図 SH2305実測図 (1/60)

SH2305 (第168図) II-3区 (D16・17小区)に位置する竪穴住居跡である。中世の上坑SK2304・弥生時代前期末の貯蔵穴SK2308と切り合い関係を有する。住居跡の平面形態はプランで、住居跡北東隅および南東隅は調査区外に伸びる。規模は南北5.7m、東西6.3m、深さ約30cmである。図中で網掛けを行っているものが主柱穴と思われ、主柱穴の数は5本柱を数える。壁溝は検出できなかったが、壁面の周囲に幅50～60cm前後のベッド状遺構を設けている。ベッド状遺構をもつ住居跡は、東田室遺跡の中では当該遺構が唯一のものである。また、住居跡中央部の南北約2m、東西約3mの範囲に炭化物が集中している状況が認められた。住居跡の埋土中から土師器などの遺物が一定量認められ、特筆すべきものとしては、鉄鏃・銅鏃各1本が出土している。出土遺物の年代観から、SH2305の所産時期は古墳時代前期前半に比定される。

SH2305出土遺物 (第169・170図) 1・2は在地系(安国寺式系)の複合口縁甕である。1の口縁部がやや内傾気味に立ち上がるのに対し、2は口縁端部がやや外反する。いずれも二次口縁部の外面に櫛指波状文を施す。3・4は甕で、3は胴部がやや胴気味になるのに対し、4は頭部が縮まり、ナデ肩となるプロポーションを呈する。5は口縁部が口縁部がくの字状に屈曲する大型の

ベッド状
遺構

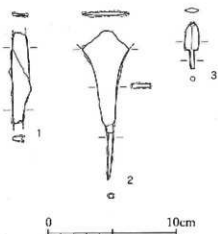


第169図 SH2305出土遺物① (1/4)

甕である。6は小型の鉢で、くの字状に屈曲する口縁部をもつ。外面は刷毛目調整、内面はナデ調整が主体となる。7・8は口縁部が内湾気味に立ち上がる形態の小型の鉢で、7は内外面に一部に削り調整が認められ、8は底部が平底気味になる。9は手捏ねによって成形されたミニチュア土器の鉢である。10は小型の高坏で、内外面ともナデ仕上げが行われている。11・12は高坏で、いずれも脚柱部下に透かし孔を設けている。第170図は金属製品で、1は刀子、2は鉄鏃、3は銅鏃である。3の銅鏃は刃部と茎部の接合部付近に圧力による歪みが生じており、実際に使用された痕跡が残るものである。

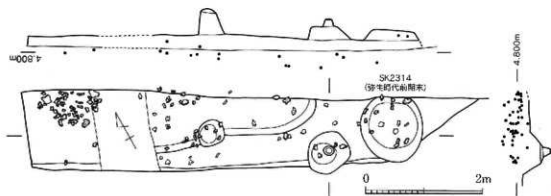
ミニチュア
土器

鉄鏃・銅鏃

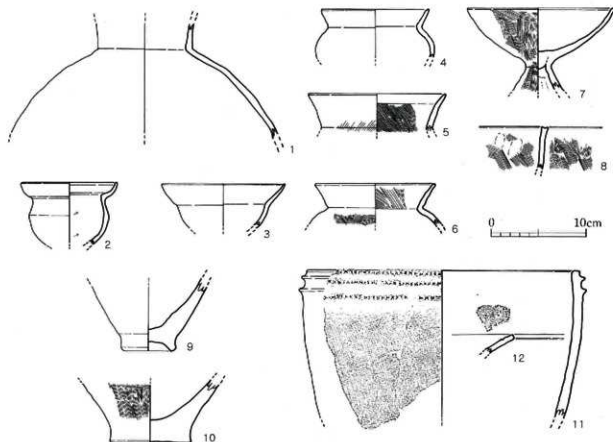


第170図 SH2305出土遺物② (1/3)

SH2311 (第171図) II-3区(C16小区)に位置する竪穴住居跡である。弥生時代前期末の貯蔵穴SK2313・SK2314と切り合い関係を有する。住居跡の平面形態は方形プランと思われる。北側および西側については調査区外に伸びる。規模は現状で南北1.4m以上、東西7.6m以上、深さ約20cmである。調査区の制限によって、主柱穴など住居跡の附属施設については不明である。住居跡の埋土中から土師器などの遺物が一定量出土しているが、周辺に弥生時代前期末の遺構が存在するため、当該時期の遺物も混入している。出土遺物の年代観から、SH2311の所産時期は古墳時代前期前半に比定される。



第171図 SH2311実測図 (1/60)



第172図 SH2311出土遺物 (1/4)

畿内系の
二重口縁蓋

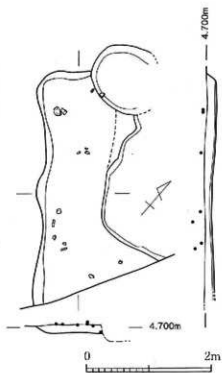
SH2311出土遺物 (第172図) 1は口縁部を欠損するが土師器の蓋で、内外面ともナデ調整を主体とする。その形態から畿内系の二重口縁蓋である可能性が高い。2は小型の鉢で、口縁部が内湾しながら立ち上がり、二重口縁のような形態を呈する。3は小型丸底土器で、底部を欠損する。4は鉢で、くの字状に屈曲する口縁部を有する。5・6は小型の甕の口縁部と推定される資料である。7は高環で、環部の底部については、環部と脚柱部の接合部を充填するような手法で成形されている。8は甕または鉢の口縁部と思われ、内外面は刷毛目調整を主体とする。9～11は弥生時代前期末の土器で、混入品と思われる資料である。9～11は甕で、9・10は底部、11は下城式土器の口縁部である。11の下城式土器については口縁部外面に2条の刻目交帯を有し、口縁端部外面にも直接刻みを施している。12は甕の口縁部の破片で、内面に凹形の刺突文を施している。

弥生時代
前期末の
土器(混入)

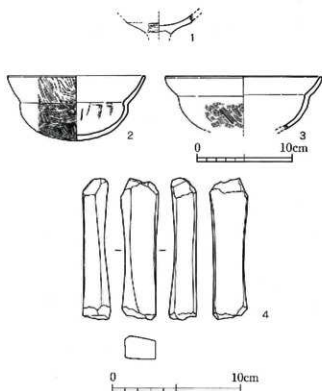
SH2404 (第173図) II-4区(D・E18小区)に位置する整穴住居跡である。古墳時代後期の住居跡SH2403・2410と切り合い関係を有し、また遺構の東側は攪乱によって破壊されている。住居跡の平面形態は方形プランと思われ、攪乱や切り合いによって破壊を受けているが、その規模は現状で南北3.8m以上、東西1.1m以上、深さ約15cmである。調査範囲の中では、支柱穴・井跡・炭溝等の遺構は検出できなかった。出土遺物については、住居跡埋土中より土師器が少量と砥石が1個体出土している。これらの年代観から、SH2404の所産時期は古墳時代前期前半に比定される。

SH2404出土遺物 (第174図) 1は高環の環部と思われる破片で、外面にミガキが認められる。2・3は内湾気味に立ち上がる「く」の字状の口縁部を有し、底部が丸底となる鉢である。4は粘板岩を素材とする砥石である。

砥石



第173図 SH2404実測図 (1/60)

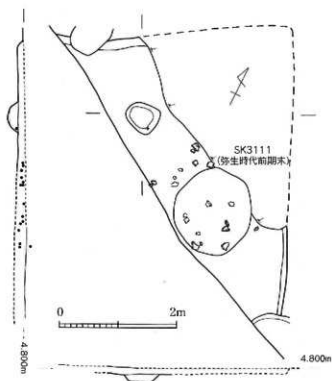


第174図 SH2404出土遺物 (1～3は1/4、4は1/3)

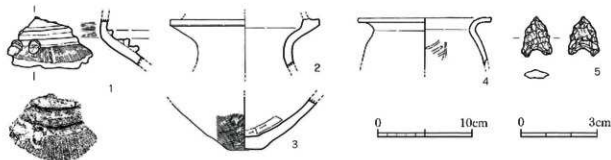
SH3109 (第175図) III-1区 (I23・24小区) に位置する竪穴住居跡である。古墳時代後期の不明遺構SX3101、古墳時代後期の土坑SK3109、弥生時代前期末の土坑SK3111と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK3111→SH3109→SX3101・SK3110となる。また、遺構の北東隅は大型の攪乱によって破壊を受け、南側は調査区外に伸びる。住居跡の平面形態は方形プランと思われ、攪乱や調査区の制限によって未調査の部分も多いが、その規模は現状で南北5.0m以上、東西1.0m以上、深さ約20cmである。床面北西側から柱穴を1基検出したが、このピットが住居跡に直接付属する遺構であるかどうかは不明である。出土物については、住居跡埋土中より弥生土器が少量と石鏃が1点出土している。出土した土器類は概ね弥生時代後期後半から東葉の時期を示しており、これらが住居跡の構築時期を示唆するものである可能性が考えられる。しかし、出土遺物の量が僅少であり、土器類が混入品である可能性を捨てきれないことや今回の調査区周辺に

弥生時代
後期に
遡る?

弥生時代後期に遡る遺構を確認できていないことから、SH3109の所産年代を弥生時代後期に比定することは躊躇される。従って、本報告では当該住居跡の構築年代を、とりあえず古墳時代前期に比定しておきたいが、このことについてはさらに将来の発掘状況を勘案しながら、再検討を行う必要があると考えている⁽³⁾。



第175図 SH3109実測図 (1/60)



第176図 SH3109出土遺物 (1~4は1/4、5は2/3)

註(3) 昭和24年(1949)に大分師範学校歴史科が実施した東田室遺跡の調査では、弥生時代後期土器を包含する土器層が検出されている。大分師範学校歴史科「大分市東田室室式遺跡第一次発掘調査報告」(1949年 芳子原明)

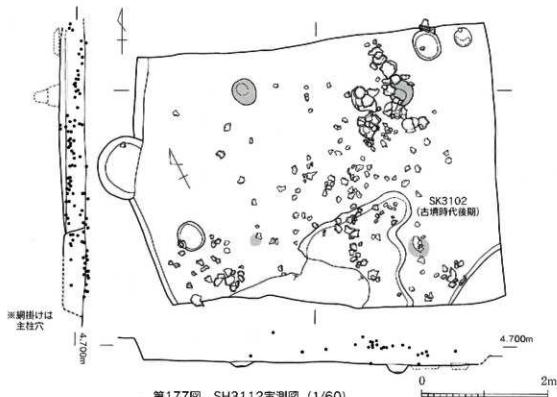
SH3109出土遺物（第176図） 1・2は弥生土器の壺で、在地系（安国寺式）の複合口縁壺である。1は頸部から肩部にかけて付近の破片で、外面に断面三角形の突帯を2条貼り付け、リボン状浮文を2単位有する。2は頸部付近の破片で、二次口縁の部位を欠損する。3は壺の底部と思われる、平底が明瞭に残存している。4は壺で、口縁部が大きく外反する形態を呈する。5は築山産黒曜石を素材とする石鏃で、混入品と思われる資料である。

石鏃
(混入品)

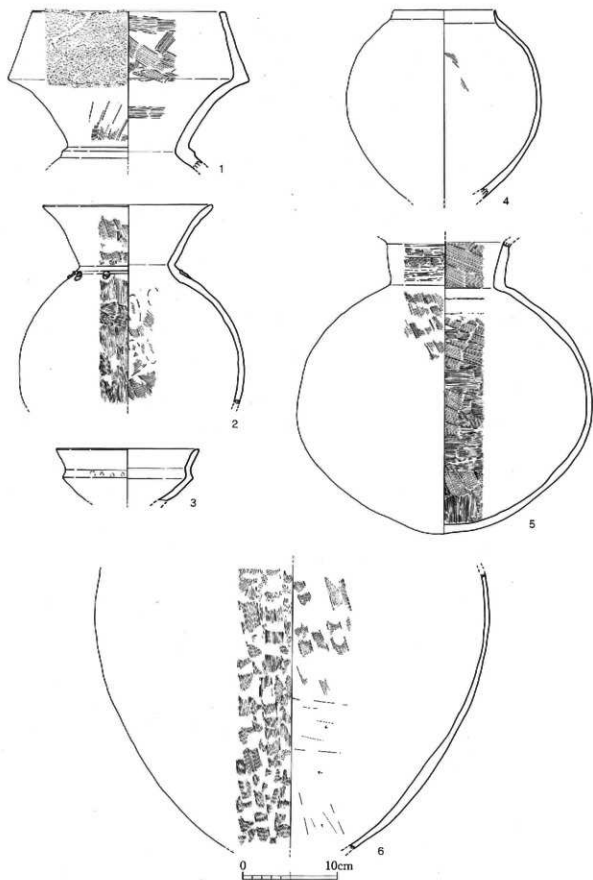
SH3112（第177図） III-1区(124・25小区)に位置する竪穴住居跡である。弥生時代前期末の貯蔵穴SK3113・SK3114、古墳時代後期の土坑SK3102と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK3113・SK3114→SH3112→SK3102となる。住居跡の平面形態は方形プランと思われ、北壁側と南壁側は調査区外に伸びる。また、西壁側については住居跡埋土が上位の包含層と類似した黒褐色であったため、本来のラインよりやや西側に掘り過ぎている可能性が高い。さらに、床面中央南側の一部は擾乱によって破壊されていた。SH3112の規模は現状で南北4.3m以上、東西5.7m、深さ35cmである。住居跡の附属施設としては、主柱穴と推定されるピットを4基確認しており、このうち南側の2基は弥生時代前期末の貯蔵穴と重複している。壁溝は検出されていない。出土遺物については、住居跡北東側の埋土から、肩部にリボン状浮文を有する単口縁壺などをはじめとした土師器がややまとまって出土したほか、住居跡埋土中より土師器類が多量に出土したが、床面密着の状態で出土したものは認められない。出土遺物の年代観の年代観より、SH3112の所産時期は古墳時代前期前半に比定される。

掘り過ぎ?

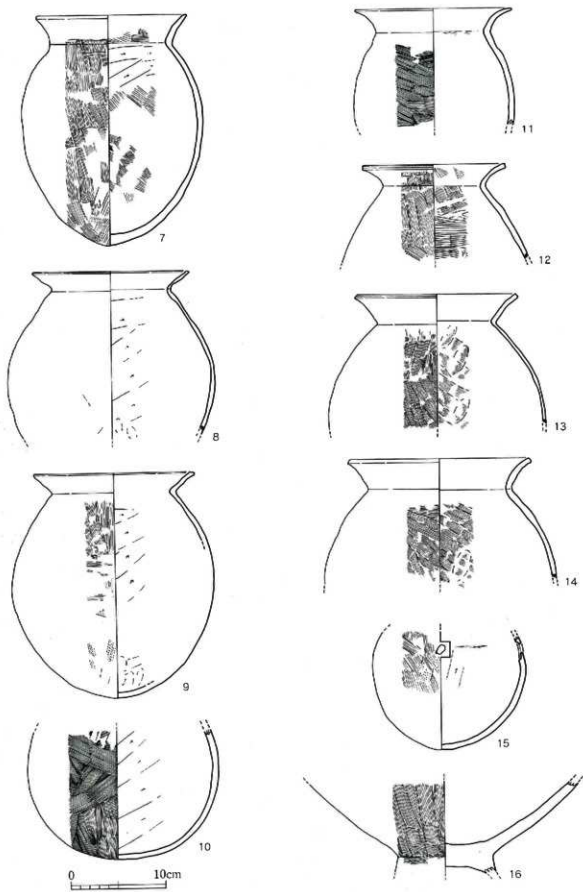
SH3112出土遺物（第178～181図） 第178図1は在地系（安国寺式）の複合口縁壺である。二次口縁が大きく発達し、頸部には退化した断面三角形の突帯を1条貼り付けている。口縁部外面には退化した縞描波状文を施す。2は在地系の単口縁壺で、肩部に退化した断面三角形の突帯とリボン状浮文を有する。この遺物は住居跡北東側の埋土中から良好な状態で出土したことが確認されており、当該住居跡に確実に伴う資料である。リボン状浮文を有する土器は弥生時代後期に盛行す



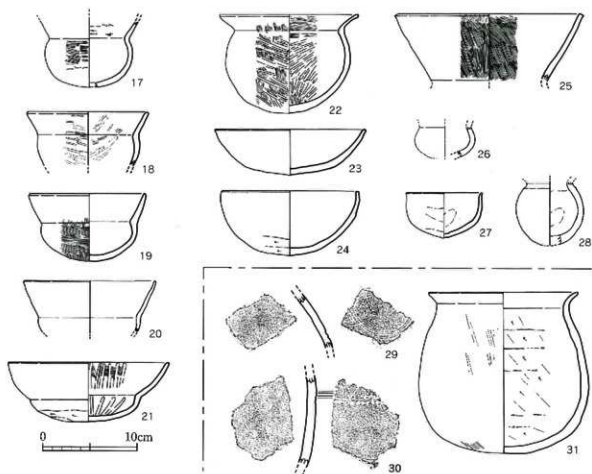
第177図 SH3112実測図 (1/60)



第178図 SH3112出土遺物㊦ (1/4)



第179圖 SH3112出土遺物② (1/4)

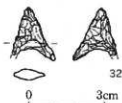


第180図 SH3112出土遺物③ (1/4)

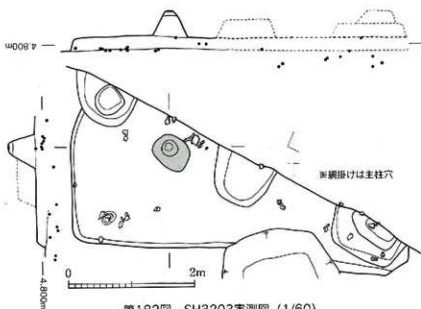
リボン状
浮文の残存畿内系の
二重口縁壺ミニチュア
土器

が、当該資料については頸部の三角突起がかなり退化していることが看取される。リボン状浮文という属性が、古墳時代前期まで残存していることが確認される興味深い資料である。3は二重口縁壺の口縁部破片である。4は無頸壺で、内面に一部刷毛目調整が残存するものの、内外面ともナメ調整を主体とする。5は口縁部を欠損するが、畿内系の二重口縁壺と推定される遺物である。6は壺の胴部の大型破片である。第179

図7~15は甕で、特に8・9については、口縁部の形態や胴部のプロポーションから、布留式系の甕と考えられる資料である。また、15は小型の甕で、胴部上位に施成後の穿孔が認められる。16は器種不明であるが、底部に台が付く器形となる。第180図17~21は小型丸底土器で、特に21は口径が大きく、浅めの器高となる資料である。22はくの字状の口縁部が大きく開き、底部が丸底となる鉢で、胴部内面は比較的丁寧なミガキ調整で仕上げられている。23・24は口縁部が外傾または内湾気味に立ち上がる鉢で、24の外面には削り調整が行われている。25は口縁部が開く器形となる甕または鉢で、胴部以下は欠損のため、不明である。26~28は小型のミニチュア土器である。29・30は弥生時代前期末に比定される弥生土器で、混入品である。29は外面にヘラ描き重弧文、30は外面にヘラ描き連続點衛文と列点文が施されている。前者は在地系（東九州系）の、後者は西部瀬戸内系の属性を有する資料である。31は胴部下半部が下膨れとなる器形を呈する土器の甕で、古墳時代後期に比定される資料である。切り合い関係にあるSK3102（174頁参照）からの混入品と考えられる。第181図32は姫島産黒燧石を素材とする石鏃である。弥生時代前期末の所産と思われる、混入品であろう。

第181図 SH3112出土
遺物④ (2/3)

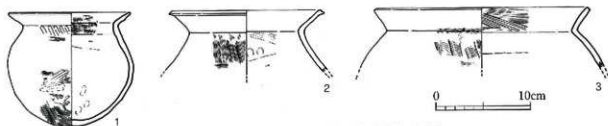
SH3203 (第182図) III-2区 (F21・22小区) に位置する竪穴住居跡である。古墳時代後期の住居跡SH3204と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSH3203→SH3204となる。また、時期不明の土坑や柱穴、攪乱によって切ら



第182図 SH3203実測図 (1/60)

れている部位がある。住居跡の平面形態は方形プランと思われ、北東側は調査区外に伸びる。その規模は現状で南北2.6m以上、東西5.4m以上、深さ約20cmである。床面から主柱穴と推定されるピットを1基確認したが、これと組み合う柱穴は調査範囲内では検出できなかった。壁溝については、検出されていない。出土遺物については、住居跡埋土中から土師器類が少量出土した。出土遺物の年代観から、SH3203の所産時期は古墳時代前期前半に比定される。

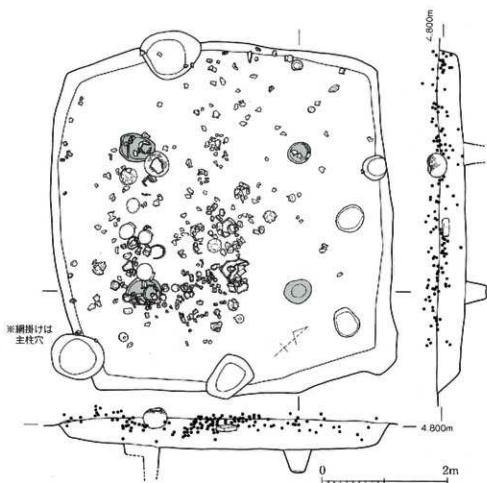
SH3203出土遺物 (第183図) 1～3はいずれも土師器の甕で、1は小型、2・3は中型のサイズである。このうち、2については口縁端部の形態や肩部がナデ厩になるなど、布疋式甕の特徴を備えている資料である。



第183図 SH3203出土遺物 (1/4)

SH3205 (第184図) III-2区 (F・G21小区) に位置する竪穴住居跡である。古墳時代前期の住居跡SH3206、弥生時代前期末の貯蔵穴SK3214・SK3211と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK3214・SK3211→SH3206→SH3205となる。住居跡の平面形態は方形プランで、その規模は一辺約5.5m、深さ45cmである。床面から主柱穴と推定されるピットを4基確認しており、主柱穴が4本となる住居跡である。壁溝は検出されていない。出土遺物については、埋土中から丸形品を含む大量の土師器類や土玉、台石などが出土している。出土遺物の中で最も注目されるものが、絵画土器である。絵画土器は住居跡埋土北西側の埋土上位から、底部を下にした正位の状態で出土した。後述するように、絵画土器は胴部にヘラ描きによって絵画を描いた土器で、絵画の中心となるモチーフは「竜」と推定される。検出時の観察では口縁部を完全に欠損しており、「竜」のモチーフが描かれていた肩部の一部も意図的に割られたような状況が看取できた。その後、遺物整理の過程で胴部と接合する口縁部が確認され、口縁部は胴部が出土した地点に近接する内側に置かれていたこ

絵画土器の
出土状況



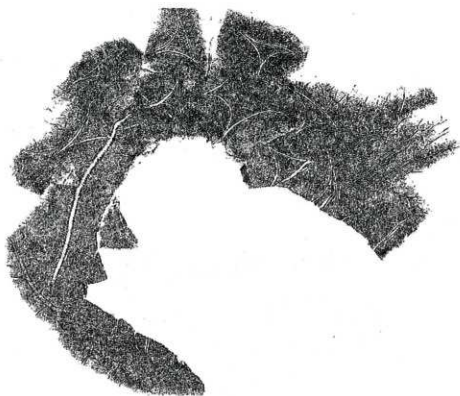
第184図 SH3205実測図 (1/60)

とが判明した。当該土器を住居跡埋土中に埋置するに当たり、口縁部と胴部を意図的に分割し、肩部付近の絵画部分も意図的に破損させた後、口縁部と胴部を並べて置いたものと推定される。その他にも多量の土器類が出土しているが、すべてが埋土下位以上に包含されており、床面密着の状態で出土したものは存在しない。また、住居跡中央付近から台石が出土したが、これも床面からやや浮いた状態であり、台石が機能していた状態ではなく、廃棄あるいは埋置された状況を示している。SH3205の所産時期は、遺構の切り合い関係や出土遺物の年代観から、古墳時代中期前半に比定される。

台石の
出土状況

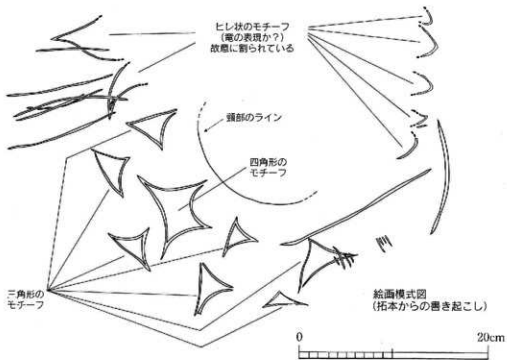
「絵画土器」

SH3205出土遺物 (第185～190図) 第185・186図に示したものは大型の土師器壺で、肩部にヘラ状工具によって原始的な絵画を描いていることから、「絵画土器」と呼ばれる資料である。壺の口縁部は退化した複合口縁であるが、口縁部の中心軸が胴部の中心軸とやや外れており、口縁部と胴部の接合の様相が歪んだ印象を与えるものである。底部は完全な丸底となる。口縁部と胴部の外面は全体的に刷毛目調整が施されていたようであるが、最終的にはほとんどすべてが「罫なナデ」によって消されている。胴部内面には輪積みの成形痕と削り調整が認められる。また、胴部下位には焼成後の穿孔が認められ、その形状から、穿孔は鉄鎌あるいは鉄剣等の鉄器類でなされたことが推定される。ヘラ描きによる絵画(第186図参照)は、土器の肩部全周いっばいに伸びやかな筆致で描かれている。絵画には曲線で描かれた三角形のモチーフが7単位、四角形のモチーフが1単位認められ、長い直線と緩やかな弧線も1本づつ認められる。また、欠損した部位が多いものの、魚



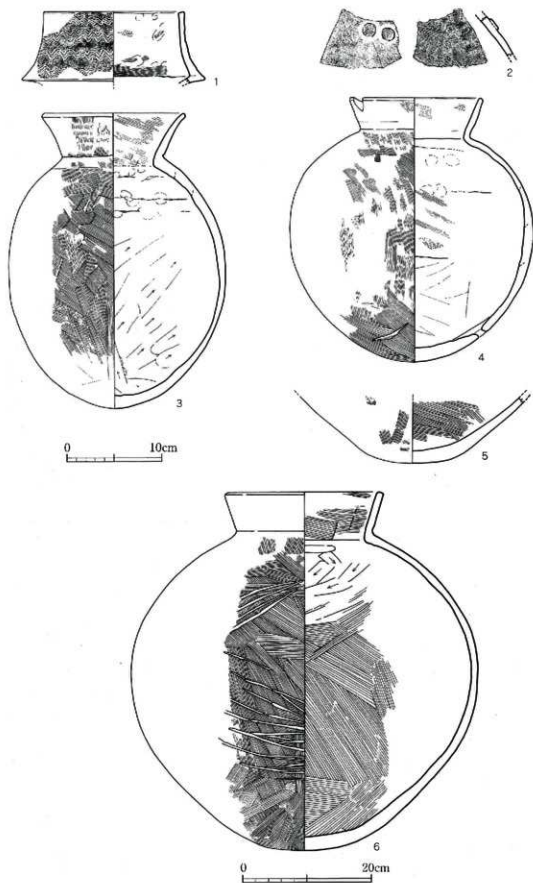
0 20cm

第185図 SH3205出土遺物 (絵画土器 1/4)

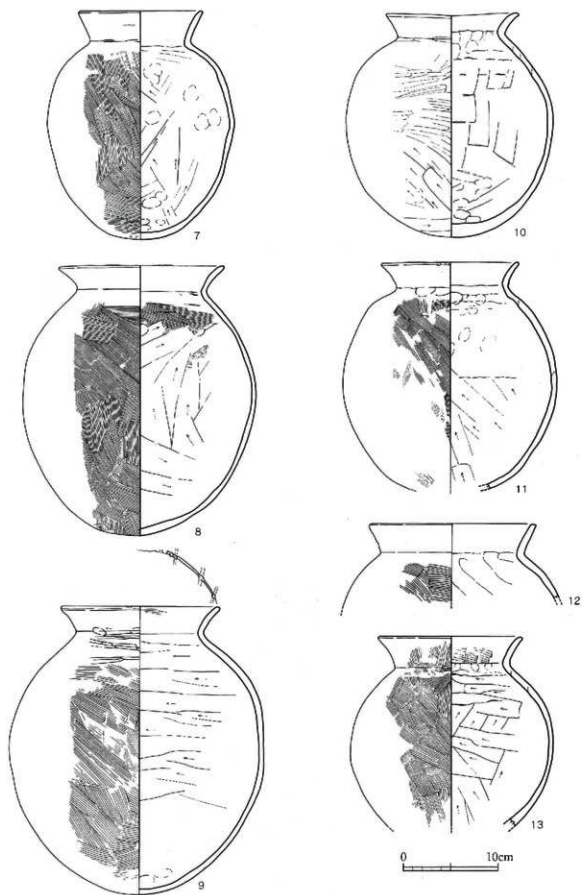


第186図 SH3205出土遺物② (絵画土器 1/4)

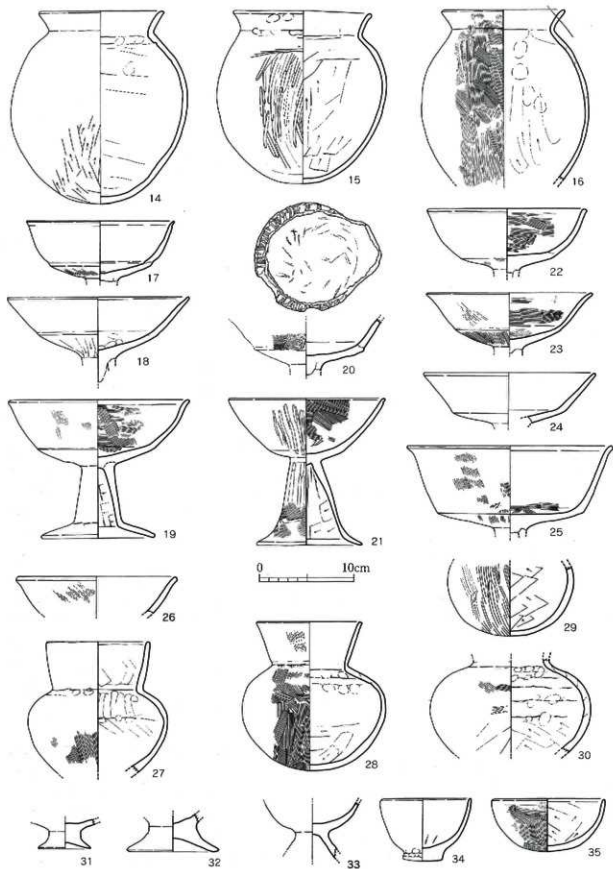
第3節 古墳時代前期～中期前半の遺構・遺物



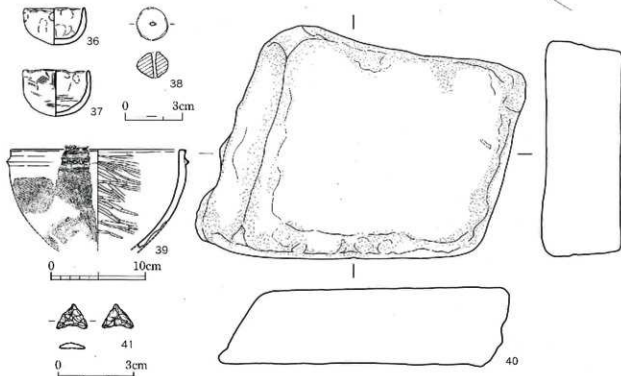
第187図 SH3205出土遺物③ (1～5は1/4、6は1/6)



第188図 SH3205出土遺物④ (1/4)



第189図 SH3205出土遺物⑤ (1/4)



第190図 SH3205出土遺物⑥ (36・37・39・40は1/4, 38は1/2, 41は2/3)

の背鰭を思わせるような三角形の表現が少なくとも5単位以上、胸鰭を思わせるようなモチーフ2単位に直線数本が組み合わされたような表現もみられる。これらの絵画が何を表現しているのかは不明であるが、おそらくこの絵画を描いた工人には文様ひとつひとつに意味があり、この文様の組み合わせが何らかの「物語」を構成するものであったことが推定される。絵画土器に描かれた文様のひとつひとつについては、それが何を表現しているのかは正確には不明である。しかしながら、魚の背鰭や胸鰭に似たヒレ状のモチーフについては、弥生時代後期から古墳時代前・中期に散見される菱形土器の文様のうち、「竜」⁽⁴⁾と推定されているヘラ柄文様の一部と類似点が認められ、本資料の絵画の一部もこの「竜」を表現したものである可能性を指摘しておきたい。このヒレ状のモチーフは絵画全体の中で中心的位置を占める文様で、前述したように、当該文様を描いた部位を意図的に破砕していることに注意を促しておきたい。第187図1は在地系(安岡寺系)の複合口縁壺と推定される資料で、外面に細描き波状文を4単位廻らしている。2も在地系の壺と推定される層部の破片で、外面にボタン状浮文が2単位貼り付けている。なお、1・2はいずれも古墳時代前期以前の所産と思われる、混入品と推定される。3・4は単口縁の壺で、4については口縁部に意図的な打ち欠きと胴部下位に鉄器類による焼成後の穿孔が認められる。5・6も単口縁の壺であるが、大型のサイズになるものである。第188図7～第189図16は壺で、古墳時代前期のものと比較して、全般的に胴部が球形化する傾向が認められる。なお、9については、口縁部上面にヒゴ状の部材を押し当てたような小さな圧痕がみられる。同様な圧痕が大分県宇佐市岩金遺跡SH2出土の土師器壺⁽⁵⁾(古墳時代前期後半)でも認められる。17～26は高環である。脚柱部が残存するものについてみると、19は裾部が強く屈曲し、21は裾部の屈曲が弱く、端部がラップ状に閉門する。20は屈曲部の断面に短直線を施すことによって、口縁部が強固に接合するように工夫がなされてい

「竜」の表現?

混入品

口縁部上面に圧痕

註(4) 春成秀男「絵画から記号へ—弥生時代における農耕儀礼の論考—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第35巻 1991年)

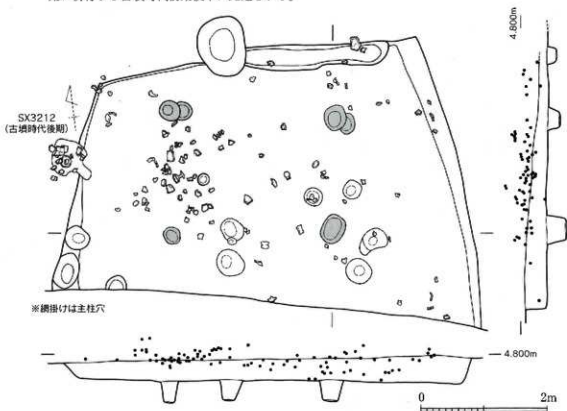
(5) 大分県教育庁埋蔵文化財センター「岩金遺跡発掘調査報告書」(2007年 14頁第137図5)

十五

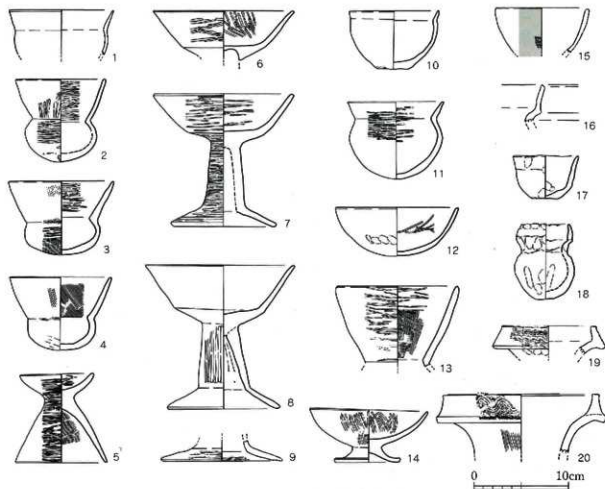
る。25は口径と坏部の器高がひとまわり大きい大型品である。27～30は長頸壺、31・32は台付きの器形の脚台部である。33は小型の高坏である可能性が考えられる製品である。34は小型の鉢で、底部は平底状となり、底部付近の胴部外面には、底部成形の際に生じた指頭痕が認められる。35は直線的に立ち上がる口縁部と丸底をもつ鉢で、外面に刷毛目調整、内面に削り調整が認められる。第190図36・37は手捏ね成形による小型のミニチュア土器である。38は土玉で、径4mm程度の貫通孔を有する。39は弥生時代前期末に比定される下城式土器の甕で、混入品と考えられる資料である。40は安山岩を素材とする台石、上面に使用痕が認められる。41は姫島産黒耀石を素材とする石鏝で、弥生時代前期末の所産と推定されるため、これについても混入品であろう。

SH3206 (第191図) III-2区 (G21小区)に位置する竪穴住居跡である。古墳時代中期前半の住居跡SH3205、弥生時代前期末の貯蔵穴SK3213、古墳時代後期のカムFSX3212と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK3213→SH3206→SH3205→SX3212である。住居跡の平面形態は方形プランと思われ、南側は調査区外に伸びる。平面プランがややいびつであるのは、埋土が類似した複数の遺構が重複していたため、SH3206のプランが正確に認識できなかった可能性もある。住居跡の規模は現状で南北3.6m以上、東西6.5m、深さ約30cmである。床面から複数のピットを検出したが、図中で網掛けを行ったピットが主柱穴である可能性が高い。従って当該遺構は主柱穴が4本となる住居跡で、北側の2本についてはそれぞれ柱穴の重複が認められるため、住居跡の改修などを反映する事象と推定している。壁溝については北壁側の一部に設けられており、その規模は幅約40cm、長さ2.1m、深さ15cmを測る。出土遺物については、住居跡埋土中から小型丸底土器・小型器台・高坏・在地系の複合口縁壺を模倣したミニチュア土器等の土器器が出土しており、高坏や小型の土器類が目立つ印象を受ける。SH3206の所産時期は、出土遺物の年代観から、久住編年ⅢA期に併行する古墳時代前期後半に比定される。

住居跡の
改修？
高坏や小型
の土器類が
目立つ



第191図 SH3206実測図 (1/60)

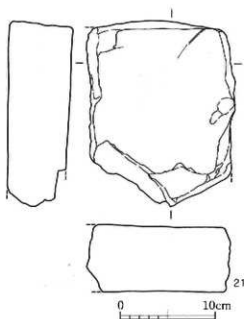


第192図 SH3206出土遺物① (1/4)

SH3206出土遺物 (第192・193図) 第192図

1～4は小型丸底土器で、口縁部が長く上方に発達するもの(2～4)が主体を占める。5は小型器台で、器形は「X形小型器台」と呼称されるものに類似するが、坏部と脚柱部との境の貫通孔が認められない。6～9は布留式系の高坏で、エンタシス状の脚柱部を有する資料である。この中で7の脚柱部には横方向のヘラミガキ、8の脚柱部には縦方向のヘラミガキが施されている。10・11は口縁部がくの字状に屈曲する鉢で、11は底部が丸底となるが、10の底部については平底が痕跡的に残存する。12は口縁部が外傾気味に立ち上がる形態の鉢で、底部は丸底になる。外面の胴部中に指頭痕、内面の一部にヘラミガキが認められる。13は長頸瓶の口縁部と思われ、外面はヘラミガキ、内面は刷毛目調整とヘラミガキが施されている。14は台付鉢で、坏部には内外面ともに斜め方向のヘラミガキが目立つ。

X形小型
器台に類似



第193図 SH3206出土遺物② (1/4)

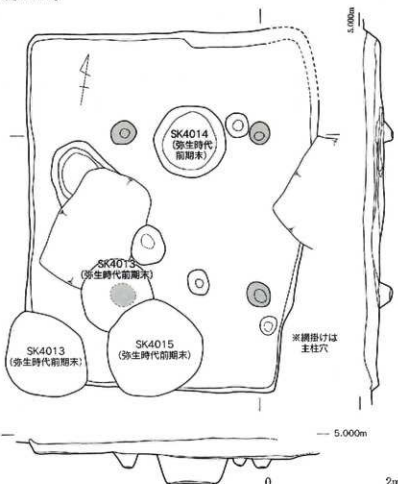
ミニチュア
土器（赤土
系の複合
口縁部を
模倣）

15は小型の鉢で、外面に赤色顔料が塗布されている。16は壺の口縁部の小破片で、その形態から山陰系土器の範疇に属する資料である。17・18は手探ね成形によるミニチュア土器である。この中で、特に18については在地系（安国寺式系）の複合口縁壺を小型化した形態を呈し、大分市内の遺跡では他に賀来中学遺跡⁽⁶⁾で類例がある。19・20は在地系（安国寺式系）の複合口縁壺で、二次口縁が未発達となる資料である。いずれも外面に櫛描波状文を施している。弥生時代後期の所産で、混入品であろう。第193図21は安山岩を素材とする扁平な礫を使用した台石である。

SH4010（第194図） IV区（G23～H24小区）に位置する竪穴住居跡である。弥生時代前期末の貯蔵穴4基（SK4013～4016）と切り合い関係を有し、これらの遺構を切って構築されている。住居跡の平面形態は長方形プランで、その規模は南北5.6m、東西4.5m、深さ15cmである。床面から複数のピットを検出したが、岡中で網掛けを行ったピットが支柱穴である可能性が高いと考える。支柱穴が4本となる住居跡で、このうち南西側の支柱穴は弥生時代前期末の貯蔵穴SK4013と完全に重複していた。土壌からは検出されていない。出土遺物については、住居跡埋土中から土師器や鉄剣などが出土したが、いずれも床面からやや浮いた位置からの出土であり、床面密着の状態で出土したものは認められなかった。SH4010の所産時期は、良好な資料を欠くものの、出土遺物の年代観より古墳時代前期後半に比定される。

SH4010出土遺物（第

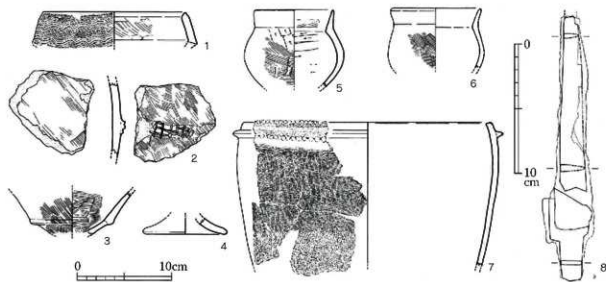
195図） 第195図1・2は在地系（安国寺式系）の複合口縁壺である。1は口縁部の破片で、外面に櫛描波状文が認められる。2は胴部中位付近の破片で、外面にベルト状突起をもつ。3は高環で、環部下位の破片である。脚部を欠損するが、脚柱部がエントシス状を呈する高環に復元される可能性が高い。4は小破片であるが、高環脚部の破片であろうか。5・6は口縁部がくの字状に屈曲する鉢で、口径は胴部最大径よりやや小さくなる。7は下城式土器の甕で、混入品である。8は鉄剣と思われる資料である。



第194図 SH4010実測図 (1/60)

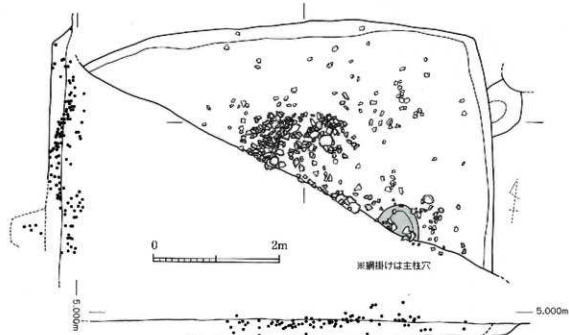
鉄剣

註(6) 大分市教育委員会「賀来中学校遺跡」(1992年 68頁第56図35・36)



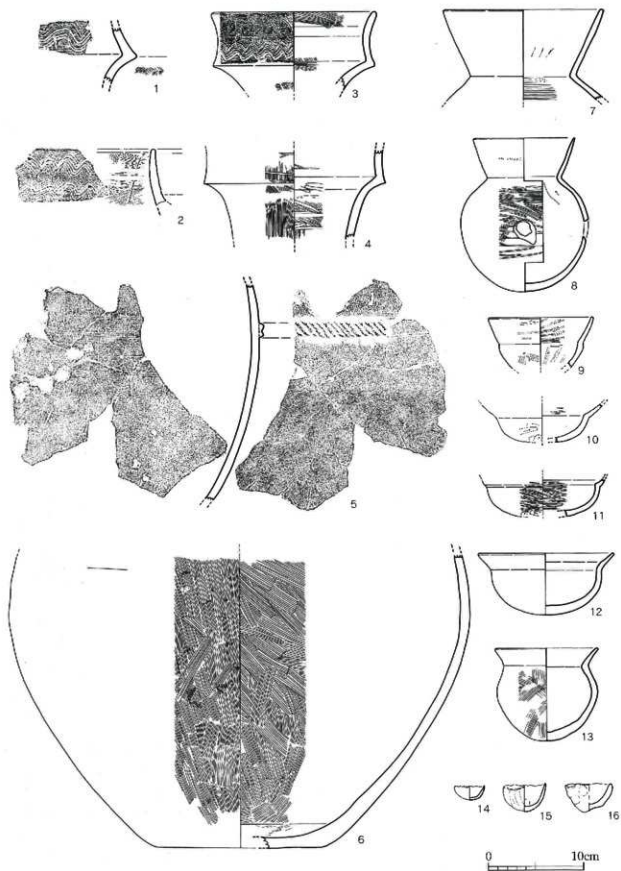
第195図 SH4010出土遺物 (1~7は1/4、8は1/3)

SH4012 (第196図) IV区 (H23・24小区) に位置する竪穴住居跡である。弥生時代前期末の貯蔵穴SK4013・SK4028と切り合い関係を有し、これらの遺構を切って構築されている。住居跡の平面形態は方形プランで、南壁側と西壁側は調査区外に伸びる。その規模は現状で南北3.7m以上、東西6.2m以上、深さ約20cmである。床面から主柱穴と推定されるピットを1基検出したが、木調査部分が多いため、主柱穴の本数は確認できていない。尿溝は検出されなかった。出土物については、住居跡埋土中から多量の土師器と石器が少量した。土師器類は住居跡埋土の中央付近に集中する傾向が認められたが、いずれも埋土下位から検出上面にかけて分布しており、床面密着の状態で出土したものは認められなかった。住居跡の年代を示唆する遺物としては、小型丸底土器や脚柱部がエンタシス状を呈する高坏などがある。以上の事象から、SH3203の所産時期は、久住編年ⅢA期に併行する古墳時代前期後半に比定される。

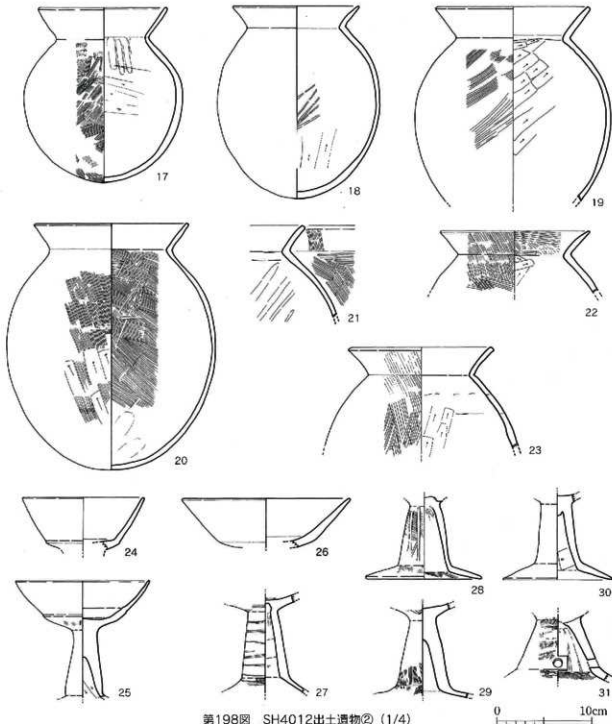


第196図 SH4012実測図 (1/60)

第3節 古墳時代前期～中期前半の遺構・遺物



第197図 SH4012出土遺物① (1/4)



第198図 SH4012出土遺物② (1/4)

SH4012出土遺物 (第197～199図) 第197図1～4は在地系(安国寺式系)の複合口縁壺である。1～3は二次口縁の外面に櫛描波状文を施しているが、4は無文となる。5も在地系(安国寺式系)の複合口縁壺と推定される資料で、ベルト状突帯を有する胴部の大型破片である。6は大型の壺の胴部下位から底部にかけての破片で、内外面とも刷毛目調整が施されている。底部は平底となるが、これは壺のサイズがかなり大型のものであるため、土器製作上の技術的な限界から、丸底になしえなかったものと推定する。7・8は口縁部が外傾しながら伸びる単口縁の壺である。口径は胴部最大径より小さくなる。サイズは7が中型、8がやや小型である。また、8については胴部に焼成後の穿孔が認められる。9・10は小型丸底土器で、10の方が口径が大きく、器高が低い器形

平部が壊る
大型壺の
底部

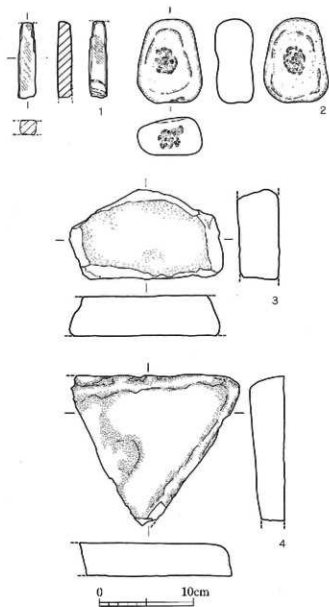
第3節 古墳時代前期～中期前半の遺構・遺物

となるようである。11は鉢で、口縁部を欠損する。僅かに残存する口縁部のカーブの軌跡から推定すると、有段屈曲鉢に復元される可能性も考えられる。器表面の内外面ともにナデ調整が行われている。

ミニチュア土器

12・13は口縁部がくの字状に屈曲し、底部が丸底となる形態の鉢であるが、12は器高が浅く、13はやや深い。14～16は小型のミニチュア土器である。第198図17～23は甕である。このうち、20の胴部はナデ研となり丸味を帯びた胴部をもつなど、布留式系の特徴を備えているものの、口縁端部は肥厚することなく収めている。胴部内外面は刷毛目調整を主体とし、外面下部の一部には削り調整が施されている。また、底部内面には損頭痕が認められる。24～31は高坏で、これらのうち脚部が残存する25・27～30はエンタシス状に膨らむ脚柱部をもつ。27には横方向のヘラミガキ、28には縦方向のヘラミガキが認められる。当該資料は久住編年ⅢA期の指標とされている土器のひとつである。31はやや大めの脚柱部に透かし孔を有する資料である。第199図に提示したものは石器である。1は雁行、2は凹石、3・4は台石である。2の凹石には衣裏・側面に1箇所ずつ、計3箇所に使用痕が認められる。1は粘板岩、2～4は安山岩を素材とする。

石器



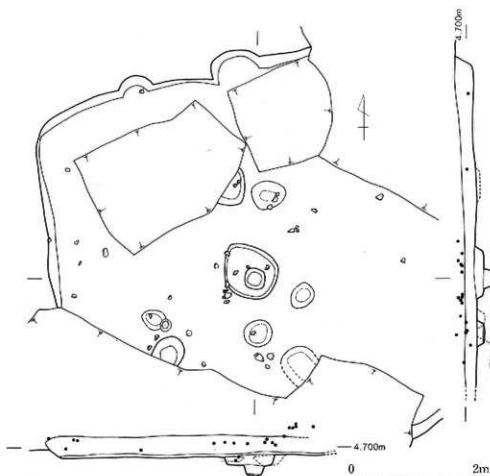
第199図 SH4012出土遺物③ (1/4)

2の凹石には衣裏・側面に1箇所ずつ、計3箇所に使用痕が認められる。1は粘板岩、2～4は安山岩を素材とする。

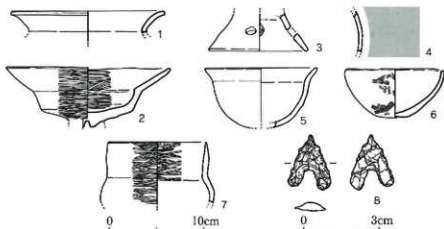
SH4026 (第200図) IV区 (H24・25小区) に位置する竪穴住居跡である。住居跡の北辺と西辺の一部を確認したものの、南側と東側は攪乱によって大きく破壊されている。規模は現状で、南北5.0m以上、東西6.3m以上、深さ約20～30cmを測る。床面からはビッドなどを数基検出したが、主柱穴や伊跡などを確認できなかった。また、崖溝についても検出されていない。埋土中より土器器頭が出土しており、この中には口縁部が屈曲する有段高坏など、時期の指標となるような遺物も存在する。SH4026の所産時期は、出土遺物の年代観から、古墳時代前期前半に比定される。

有段高坏

SH4026出土遺物 (第201図) 1は土器器の甕の口縁部で、内外面ともにナデ調整が認められる。2は口縁部が屈曲する有段高坏の坏部で、脚柱部を欠損する。内外面ともにミガキ調整によって仕上げられている。3は高坏の脚部と思われる破片で、残存部の中位に透かし孔を有する。4は



第200図 SH4026実測図 (1/60)



第201図 SH4026出土遺物 (1~7は1/4、8は2/3)

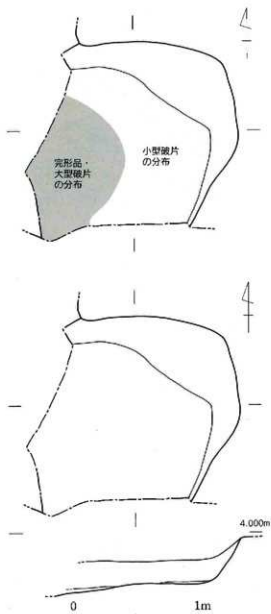
壺類の胴部破片で、外面には赤色顔料の塗布が認められる。5は口縁部がくの字状に屈曲する鉢で、底部は欠損しているが、丸底を呈するものと推定される。内外面はナデ調整が行われている。6も鉢で、口縁部は胴部から直立気味に立ち上がり、底部は平底気味の丸底となる。外面には刷毛目調整、内面にはナデ調整が行われている。7は小型の壺または鉢で、口縁部が直立し、口径は胴部最大径より小さくなる。内外面ともにナデ調整が施されている。8は姫島産黒曜石を素材とした石鏃である。弥生時代前期末の所産と思われ、混入品であろう。

石鏃
(混入品)

七坑

SK1108 (第202図) I

—1区(X6小区)に位置する土坑である。土坑の平面形態は不整形プランで、西側と南側は調査区外に伸びる。現状での規模は、東西1.5m、南北1.4m、深さ約20cmである。土坑内からは、土器類を主体とする多量の土器が出土し、良好な一括資料を形成している。遺物の出土状況については、埋土上位までは大型破片を含む土器片が全体的に分布している状況が認められ、埋土中位以下からは完形品を含む大型破片が土坑西側(土坑中央部に相当する部位)に集中し、中型から小型の破片が土坑東側に集中して出土する傾向が認められた。この傾向は埋土の下位のレベルほど顕著になり、埋土下位では完形品および大型破片が土坑西側に、小型破片が土坑東側に集中していた。以上の出土状況を総括すると、SK1108では完形品および大型破片を土坑中央部に、中型以下の破片をそれらに隣接または取り巻くように、意図的に配置していた可能性が高い。この原則は土



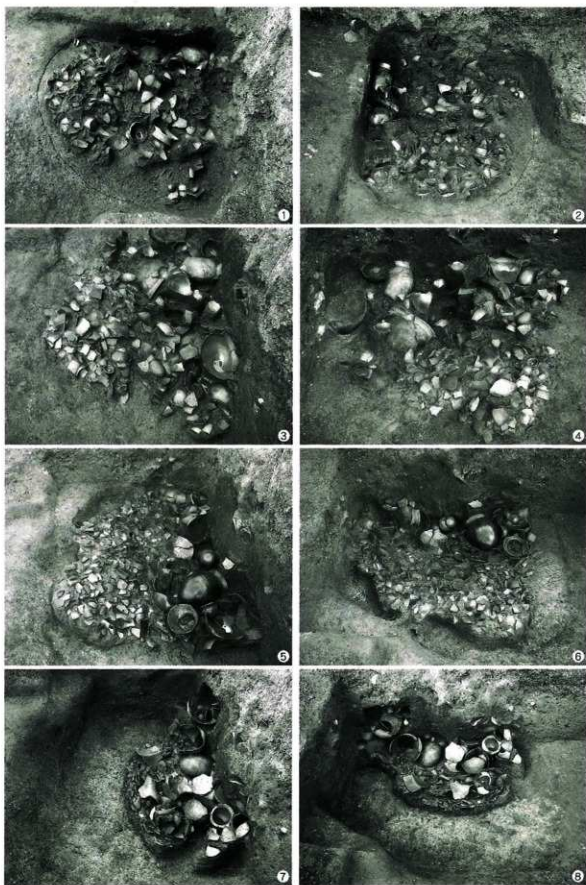
第202図 SK1108実測図 (1/30)

特異な遺物の出土状況

坑の下位ほど厳密に遵守され、上位では原則が崩れていたことが窺取される。このような遺物の出土状況については、特異なものと考えられるため、遺物出土状況の推移を撮影した写真を掲載した(次頁参照)。SK1108の所産時期は、出土遺物の年代観から、古墳時代前期前半に比定される。

(次頁写真図解説明)

- ①埋土上位の遺物出土状況。大型破片を含む土器片が土坑全体に分布している。
- ②埋土中位の遺物出土状況。土坑西側に大型破片が、東側に中・小型破片が分布する傾向が現れ始めた。
- ③埋土下位の遺物出土状況。土坑西側に完形品を含む大型破片が、西側に小型破片が分布する傾向が顕著に現れる。
小型破片は埋土中位で出土したものより小さいようだ。
- ④小型破片を除去した状態。土坑西側には完形品や完形に近い大型破片が集中していることがよくわかる。



SK1108遺物出土状況

畿内系
の二重口縁壺

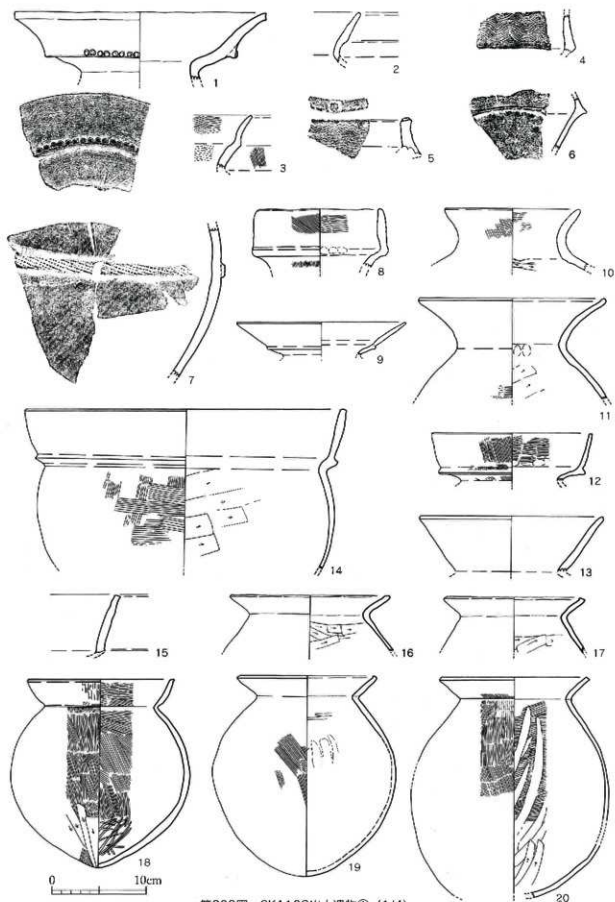
SK1108出土遺物 (第203～209図) 第203図1は畿内系の二重口縁壺で、二次口縁下部に円形浮文を貼り付ける。内外面ともナデ調整を主体とする。2・3は二重口縁壺の口縁部破片で、2は内外面ともナデ調整、3は二次口縁外面を除いて、内外面とも刷毛目調整が施されている。4～6は在地系の複合口縁壺で、いずれも二次口縁外面に櫛描波状文が認められる。また、5については二次口縁が未発達で、口縁端部上面に円形浮文を貼り付けるなど、やや古相を呈しており、混入の可能性が考えられる資料である。7は在地系の複合口縁壺と思われる胴部破片で、外面中位付近にベルト状突起帯を有する。突起上にはヘラによって格子状の文様が描かれている。8は複合口縁壺で、二次口縁の外面に櫛描波状文は認められないものの、在地系の資料と推定される。9は二重口縁壺の口縁部破片で、内外面ともナデ調整を主体とする。10・11は単口縁の壺で、11については口縁端部をつまみ上げることによって、肥厚させている。12は二重口縁壺、13は口縁部がラッパ状に開く単口縁壺の口縁部である。14・15は山陰系土器の甕と思われる資料で、14は口径が胴部最大径をやや上回る。口縁部内外面はナデ調整、胴部外面は刷毛目調整、内面は削りを施す。15は二次口縁の破片で、内外面ともナデ調整を主体とする。16～第206図49は甕である。このうち、16～19については、口縁端部を肥厚させたり、上方につまみ上げるなど、布留式系の甕の属性を有する。また、20については、口縁端部に肥厚は認められないものの、胴部のプロポーショナルが下膨れ気味になるなど、当該時期の甕の特徴をよく備えている。21～49については胴部がやや長胴気味となり、在地系の甕の系譜に連なる資料と推定される。50・51は、頸部が縮まり、口縁部がラッパ状に開く単口縁の壺である。第206図52は蓋または甕の底部で、尖底状の形態を呈し、焼成前の貫通孔を有する。第207図53～56は鉢で、くの字状に屈曲する口縁部に丸底の底部となる資料である。53・54・56の胴部内面には削り調整が行われている。57も鉢と推定される資料で、口縁部から胴部の破片である。口縁部に若干の屈曲を加えることによって、注口部を形成している。外面に刷毛目調整、内面にミガキ調整がなされている。58～60は大型の鉢で、口径と胴部最大径がほぼ等しくなり、口径が器高を上回る器形を呈する。61～65は小型丸底土器で、口縁部がやや湾曲しながら上方に伸び、口径は胴部最大径を上回る。61・65については、底部外面に削り調整が認められる。以上の小型丸底土器は、すべて在地系の胎土を使用して製作されている。66は小型丸底の鉢で、口縁部の伸びが短くなり、口径と胴部最大径がほぼ等しくなる。内外面は最終的にミガキ調整で仕上げられている。67・68も鉢で、器高がやや低く、くの字状に屈曲する口縁部をもち、底部は丸底となる。口径は胴部最大径を大きく上回る。69は小型屈曲口縁鉢で、口縁部の屈曲度がやや弱い印象を受けるが、久住欄年ⅡC期の標式とされている資料である。内外面はナデ調整が主体となる。70も鉢であるが、口縁部の形態は小型屈曲口縁鉢から変化したような印象を与えるものである。69・70についても、使用されている胎土は在地系のものである。71～76は底部が丸底になり、口縁部が内湾気味に立ち上がる鉢である。77は小型器台で、脚部を欠損する。外部外面には削り調整が認められる。当該土器の胎土も在地系のもので判断される。第208図78・79は長頸壺である。78については完形品で、口縁内外面と胴部外面に刷毛目調整、胴部内面にナデを施す。79については玉葱形の胴部を有し、口縁部は欠損している。胴部外面はミガキによって仕上げられている。80は口縁部を欠損するが、鉢と推定される資料である。胴部から底部にかけて指圧痕が認められ、底部外面には削り調整が認められる。81も丸底の鉢で、口縁部を欠損する。胴部外面には刷毛目調整、内面にはナデ調整が行われており、底部内面付近には削り調整が認められる。82～83は鉢で、口縁部がくの字状に屈曲し、底部が丸底になる。第207図67・68の鉢と比較して、器高がやや高いのが特徴である。84～86は高杯で、このうち86については外部の内外面に赤色顔料の塗布が認められ、脚柱部には透かし孔を有する。87～89はミニチュア土器で、87は壺形、89は鉢形を呈する資料である。いずれも手捏ねによって整形されており、内外面に指頂痕が多数認められる。90は台付鉢の脚部である。わずかに残存す

山陰系土器

小型丸底
土器小型屈曲
口縁鉢

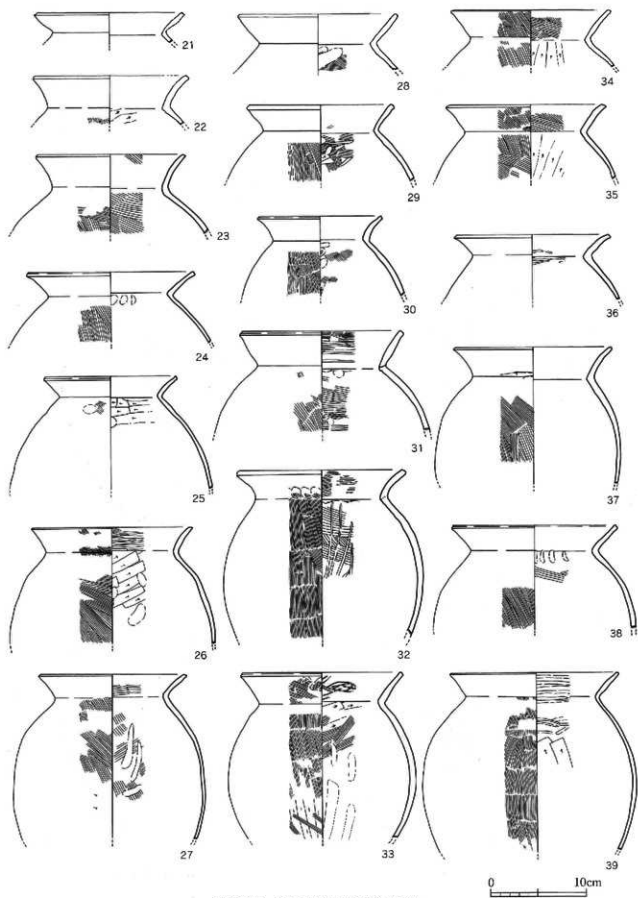
小型器台

ミニチュア
土器

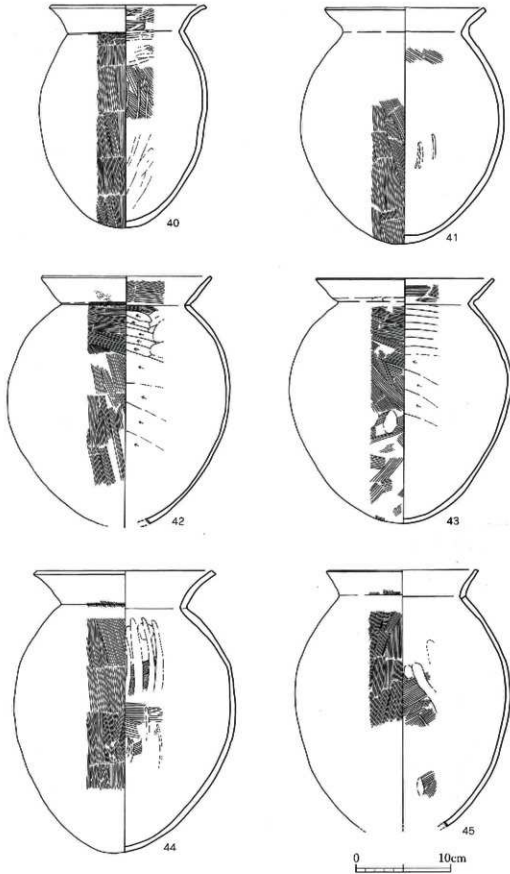


第203図 SK1108出土遺物① (1/4)

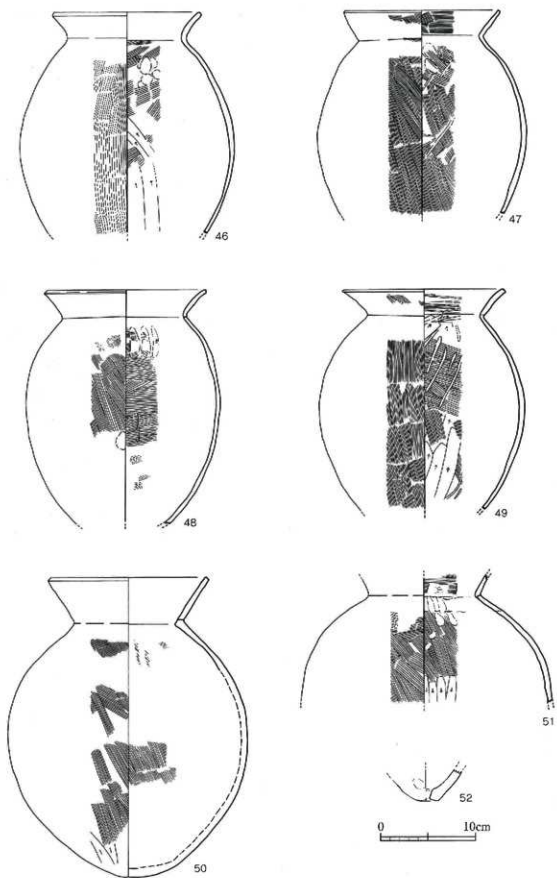
第3節 古墳時代前期～中期前半の遺構・遺物



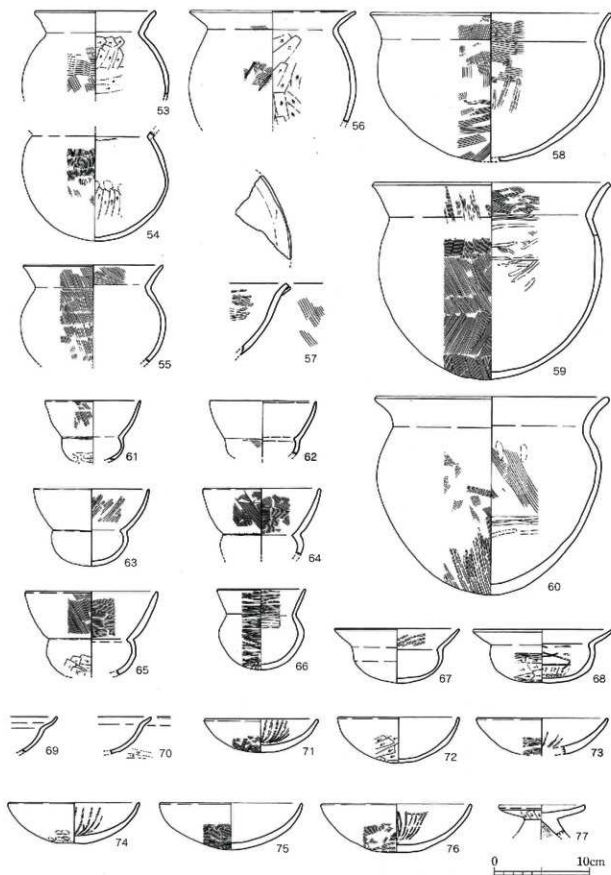
第204図 SK1108出土遺物② (1/4)



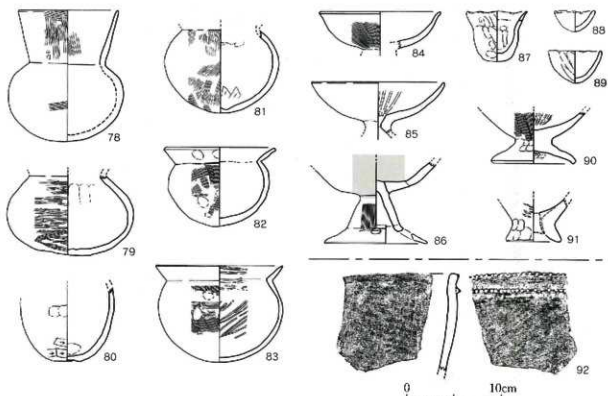
第205図 SK1108出土遺物③ (1/4)



第206図 SK1108出土遺物④ (1/4)



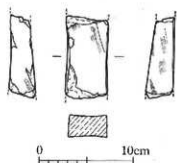
第207図 SK1108出土遺物⑤ (1/4)



第208図 SK1108出土遺物⑥ (1/4)

杯部内外面には刷毛目調整が行われ、脚部外面には脚部と杯部を接合する際に生じた指頭痕が認められる。91は製埴土器で、脚部外面には指頭圧痕がみられ、わずかに残存する胴部の外面には荒い叩きの痕跡が認められるようである。92は下城式土器の甕の口縁部破片で、口縁端部外面に突帯上に刻目を有する。弥生時代前期末の所産で、混入と思われる資料であるが、出土地点は土坑内の小型破片が集中する地点で、他の古墳時代前期の土器とともに混在していた。遺構の周辺に弥生時代の土坑や貯蔵穴などが集中して営まれていたために生じた事象であろう。第209図に提示したものは、粘板岩を素材とする砥石である。4面が使用されている。

製埴土器



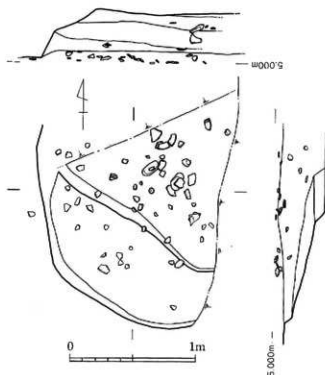
第209図 SK1108出土遺物⑦ (1/4)

SK1110 (第210図) I-1区 (X7小区) に位置する土坑である。遺構の形態は不整形で、北側と東側は視乱によって破壊されている。その規模は南北約1.6m、東西約1.5m、深さ約40cmである。遺構の中央部で段がつくことから、複数の遺構が切り合っている可能性も考えられるが、掘り下げ中に明瞭な土色の変化は認められなかった。遺物は検出面付近に集中する傾向があるが、埋土中位からも一定量の遺物が出土した。古墳時代前期を主体とした土師器が出土したほか、特筆すべき遺物として土製紡錘車がある。また、弥生時代前期末の土器も少量混入していた。出土遺物の年代観から、当該遺構の所産年代は古墳時代前期後半に比定される。

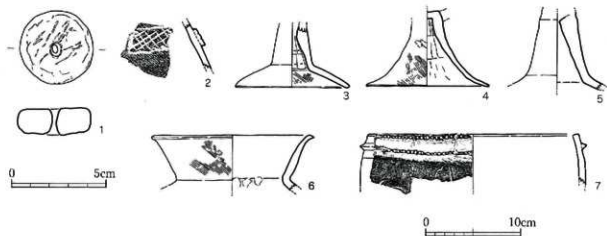
土器
紡錘車

SK1110出土遺物 (第210図)

1は土製の紡錘車である。径2.0cm、厚さ0.7cmで、中央に径約2mmの貫通孔をもつ。2は在地形(安国寺式系)の複合口縁壺に復元される土師器の胴部破片である。ベルト状突帯を有し、ヘラ描きによる格子文が施されている。3～5は土師器高杯の脚部で、裾が屈曲して開くもの(3・5)とラッパ状に開くもの(4)の2者が認められる。6は土師器甕の口縁部で、口縁が大きく開き、端部が尖り気味に肥厚している。7は弥生時代前期末に比定される下城式土器の甕である。口縁部外面に直接刻みを施し、口縁外面に1条の刻目突帯をもつ。混入品と思われる資料である。



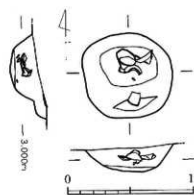
第210図 SK1110実測図 (1/30)



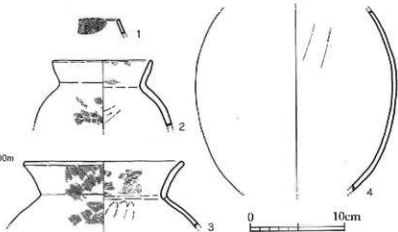
第211図 SK1110出土遺物 (1は1/2、2～7は1/4)

SK1113 (第212図) 1-1区(X6小区)に位置する土坑である。古墳時代前期の溝SD1111bの発掘後に検出された。遺構の形態は略円形プランで、その規模は径約0.7m、深さ約20cmである。埋土中から土師器の甕の大型破片などが出土した。遺構の性格は不明である。出土遺物の年代観から、当該遺構の所産年代は古墳時代前期前半に比定される。

SK1113出土遺物 (第213図) 1は在地系(安国寺式系)の複合口縁壺で、二次口縁部の破片である。外面に櫛形波状文が描かれている。2～4は甕で、2・3は口縁部から胴部上位が残存する破片、4は胴部の大型破片である。



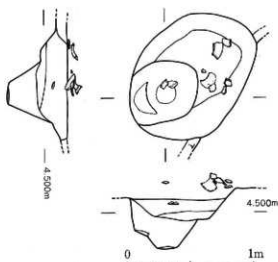
第212図 SK1113実測図 (1/30)



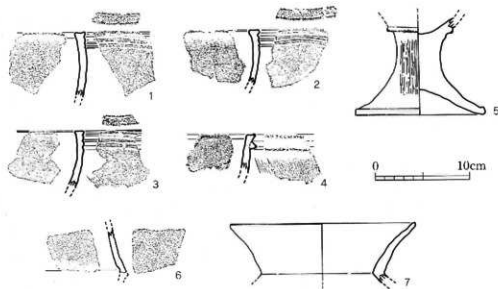
第213図 SK1113出土遺物 (1/4)

SK2105 (第214図) II-1区 (B14小区) に位置する土坑である。完掘後の状況から、切り合い関係にある土坑と柱穴各1基が重複していたことが観察されるが、出土遺物はすべて土坑埋土に包含されており、柱穴からの出土遺物は認められなかった。土坑のプランは不整形形で、その規模は長径1.15m、短径0.85mである。出土遺物の大半は弥生時代前期末の土器であるが、古墳時代前期の土器片が少量混在していた。遺構の所属時期を示すものは、古墳時代の遺物と推定される。遺構の性格は不明であるが、廃棄土坑であろうか。出土遺物の年代観から、遺構の所産年代は古墳時代前期前半に比定される。

廃棄土坑?



第214図 SK2105実測図 (1/30)



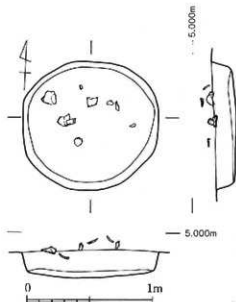
第215図 SK2105出土遺物 (1/4)

SK2105出土遺物 (第215図) 1～5は弥生時代前期末の土器で、混入品と推定される資料である。1～3は鉢で、同一個体となる可能性が高い。口縁端部が水平になり、口縁部外面には3条のヘラ描き沈線文を有する。4は下城式土器の甕の口縁部で、口縁端部外面と沈線上に刻目をもつ。5は高環の脚柱部で、脚柱部と環部の境界付近に1条の刻目突帯を巡らしている。6・7は古墳時代前期に比定される土師器で、遺構の所産年代を示唆する遺物である。1は在地系(安岡寺式)の複合口縁壺の二次口縁部で、外面に楕楕波状文を施す。7は口縁部が大きくラップ状に開く蓋の口縁部で、内外面ともナデ調整を主体とする。

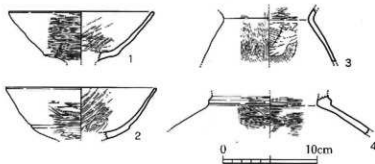
SK3216 (第216図)

Ⅲ-2区(G22小区)に位置する土坑である。遺構の形態は円形プランで、規模は径1.0～1.1m、深さ約20cmである。遺構の形態は弥生時代前期末の貯蔵穴に類似するが、出土遺物は古墳時代前期のものに限られる。遺構の性格は不明であるが、廃棄土坑であろうか。出土遺物は土師器が大半を占め、遺構埋土上位から散在的に出土した。出土遺物の年代観から、遺構の所産時期は古墳時代前期前半に比定される。

廃棄土坑?



第216図 SK3216発掘図(1/30)

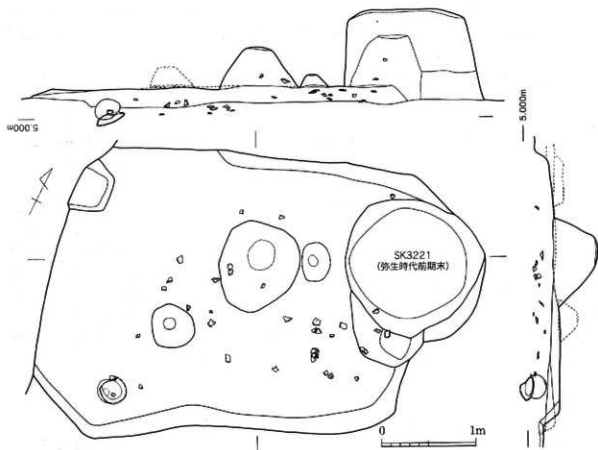


第217図 SK3216出土遺物(1/4)

三角形の突帯を1条巡らしている。在地系(安岡寺式)の複合口縁壺と推定される資料である。

その他の
遺構

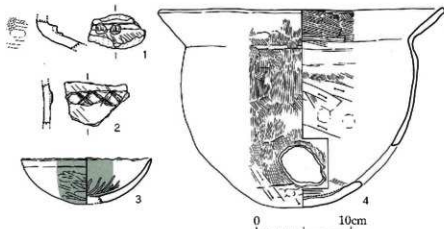
SX3220 (第218図) Ⅲ-2区(G21・22小区)に位置する竪穴遺構である。弥生時代前期末の貯蔵穴SK3221、古墳時代前期後半の住居跡SK3206と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK3221→SX3220→SK3206となる。遺構の平面形態は略隅丸方形プランで、その規模は長辺3.9m、短辺2.9m、深さ約15cmである。床面中央付近で径約1m、深さ約40cmの土坑1基が検出され、その他にも柱穴数基を検出した。遺構の性格は不明である。遺物の出土状態で注目されるべきものとして、竪穴遺構南西隅付近から、土師器の甕が正位の状態で出土した。甕の出土レベルは床面からやや浮いた位置にあり、甕の胴部には焼成後の穿孔が認められた。その他、埋土中から土器片など



第218図 SX3220実測図 (1/40)

が一定量出土している。遺構の所産年代は、出土遺物の年代観から、古墳時代前期前半に比定される。

SX3220出土遺物 (第219図) 1は壺の頸部破片で、断面三角形の突帯1条とリボン状浮文2単位が残存する。在地系(安国寺式系)の複合口縁壺と推定され、リボン状浮文は主に弥生時代後期に盛行することや小破片であることから、混入品である可能性も考えられる。2も在地系(安国寺式系)の複合口縁壺と推定される胴部破片で、ベルト状突帯を有する資料である。3は鉢で、内



第219図 SX3220出土遺物 (1/4)

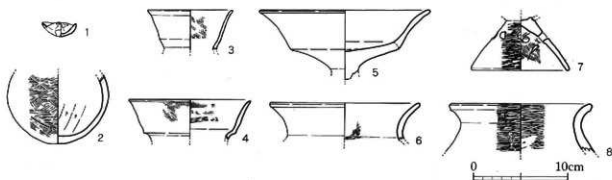
外面に赤色顔料を塗布する。口縁部に細かい打ち欠きが認められ、これらは意図的なものと推定される。4は甕で、くの字状に屈曲する口縁部をもつ。底部は平底気味の丸底となる。胴部下位に焼成後の穿孔が認められる。

SX4029 (第219図) IV区 (H24小区) で検出された性格不明の遺構で、南北0.8m、東西0.6mの範囲に土器片が集中して分布していた。土器片の分布範囲に対応するようなプランの確認はできていない。出土遺物にはミニチュア土器や小型器台、高坏の他に小型の壺などが認められ、祭祀的な様相が強い印象を受けるが、遺構の性格を明らかにすることはできなかった。出土遺物の年代観から、当該遺構の所属年代は古墳時代前期前半に比定される。

ミニチュア
土器

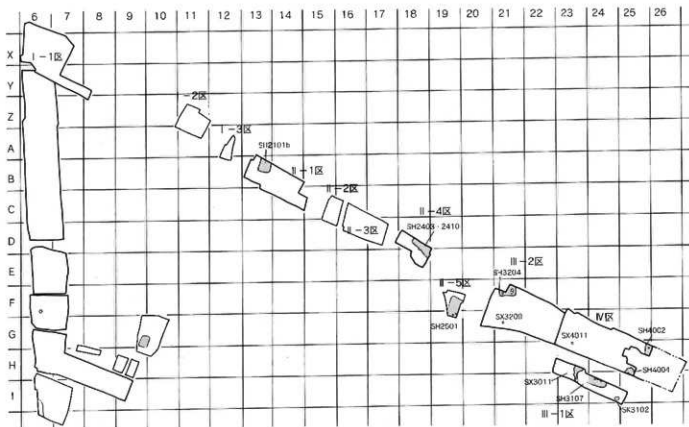
SX4029出土遺物 (第220図) 1は手型ね整形によって製作されたミニチュア土器で、内外面に指頭圧痕が認められる。2は小型の壺で、口縁部を欠損する。3・4は二重口縁壺で、口径が小さいことから、この種の土器の中では小型の部類に属する資料であろう。5は高坏の坏部で、内外面ともナデ調整を主体とする。6は甕の口縁部で、内面の一部に刷毛目調整の痕跡が残存している。7は小型器台の脚部で、脚部上位に透孔が存在している。外面はミガキ調整によって仕上げられ、内面には刷毛目調整が認められる。8は弥生土器の壺の口縁部で、内外面ともミガキ調整によって仕上げられている。弥生時代前期末に比定されるもので、当該土器は他の出土遺物と明らかに年代が異なるものであることから、混入品と解釈される資料である。

弥生土器
(混入)



第220図 SX4029出土遺物 (1/4)

第4節 古墳時代中期後半～後期の遺構・遺物



第221図 古墳時代中期後半～後期の遺構 (1/1,200)

第4節 古墳時代中期後半～後期の遺構・遺物

概要 古墳時代中期後半から後期に比定される遺構としては、竪穴住居跡・カマド（またはカマド状遺構）・土坑・不明遺構がある。

古墳時代
中期後半

古墳時代中期後半に比定される遺構は、竪穴住居跡2基 (SH2501・SH3107) である。これらの住居跡からは、いずれも第1型式4～5段階 (TK23～TK45型式) の須臾器が出土しており、5世紀末葉前後に位置づけられる遺構である。当該段階になると、大分市内の遺跡でもカマドを付設する竪穴住居跡が散見されるようになる⁽¹⁾が、東田室遺跡の住居跡ではカマドをもつ住居跡の検出はできなかった。しかし、SH2501の出土物には、混入品の可能性も考えられるものの、甕の把手が複数個体出土しており、東田室遺跡でもこの時期にカマドが出現していた可能性も考えられる。

第8表 古墳時代中期後半～後期の遺構一覧

地区	遺構名称	遺構の性格	時期	注目すべき遺物	備考	掲載頁
II-1区	SH2102b	住居跡	古墳時代後期	フイゴ羽口	古墳時代前期の住居跡が重複	162
II-4区	SH2403	住居跡	古墳時代後期	管止	SH2410と同一段階	163
	SH2410	住居跡	古墳時代後期		S2403と同一遺構	163
II-5区	SH2501	住居跡	古墳時代中期後半	石製遺跡等	動物遺体(シカ)出土	154
III-1区	SK3101	不明遺構	古墳時代後期			172
	SK3102	土坑	古墳時代後期			174
	SH3107	住居跡	古墳時代中期後半			160
III-2区	SH43204	生火跡	古墳時代後期		動物遺体(ウマの骨)出土	165
	SH4002	カマド	古墳時代後期			170
IV区	SH4002	住居跡	古墳時代後期	有孔土罐		166
	SH4004	住居跡	古墳時代後期			168
	SK4011	カマド	古墳時代後期			171

古墳時代
後期

古墳時代後期に比定される遺構は、竪穴住居跡・カマド（またはカマド状遺構）・土坑・不明遺構である。竪穴住居跡は遺構の残存状態が不良であるものが多いが、5基（SH2106b・SH2403・2410・SH3204・SH4002・SH4004）が検出されている。出土遺物の中には須恵器が含まれることから、須恵器の型式によって、遺構の細かい構築年代を推定することが可能である。5基の住居跡はすべてが同時に併存していたものではないが、竪穴住居跡も含めた古墳時代後期に比定される遺構数は、弥生時代前期末や古墳時代前期の遺構数に次ぐものであり、東田窯遺跡では当該段階にも、一定規模の集落が存在していたことを示している。この時期の住居跡にはカマドを付設することが一般的になり⁽²⁾、東田窯遺跡でもSH4004でカマドを有する住居跡が検出されている。また、地山である黄褐色砂質土の直上に堆積する黒褐色砂質土中で、焼土の広がりや焼けた粘土塊の集中など、カマド状の遺構と推定されるものが2基（SX3209・SX4011）検出されている。これらは本来竪穴住居跡に付設したカマドそのものであると推定され、住居跡床面が地山の黄褐色砂質土まで達していなかったために、住居跡プランの検出に失敗したものである可能性が考えられる。出土遺物の中にも、やや注意を払っておきたいものが認められた。竪穴住居跡SH2102bからは、フイゴの羽口が出土している。住居跡の残存状況が不良であったため、遺構内で金属製の行為があったことは確認できず、鉄滓などの土土も認められなかったが、フイゴの羽口には明確な使用痕が認められた。SH2403の堀土中からは管玉が出土した。管玉の穿孔技術は、両面穿孔によるものである。SH3204の埋土上位からは、馬の歯と推定される動物遺存体が出土した。山上遺物は僅少で、馬の陶が住居跡内に廃棄された性格については明らかにできていない。

その他、土坑が1基（SK3102）、性格不明の遺構が1基（SX3101）、検出されている。

また、包含層である黒褐色砂質土中からも、古墳時代後期の遺物が多数出土した。この中には有孔土錫が多数認められ、当該段階の東田窯遺跡での生業の一部を反映した遺物であると考えている。さらに、装身具である有孔円盤も一定量出土しており、その中には未製品や製品の素材となる石材なども認められた。遺跡内で装身具の生産が行われていた可能性を示唆する遺物⁽³⁾である。

註(1) 大分市内の遺跡の中で、5世紀後半以降の集落として代表的なものに鞍馬市遺跡が掲げられる。

大分県教育委員会『鞍馬市遺跡-七取川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』（1994年）

(2) 大分市内の遺跡の中で、古墳時代後期の集落として代表的なものに毛井遺跡B地区が掲げられる。

大分県教育委員会『毛井遺跡B地区 遺跡197号人分複バイパス工事に伴う発掘調査報告書』（大分県文化財調査報告書第135編 2002年）

(3) 近年、大分市内における古墳時代の遺跡で、集落内で玉類などの装身具の生産が行われていた痕跡が確認された報告が増加している。

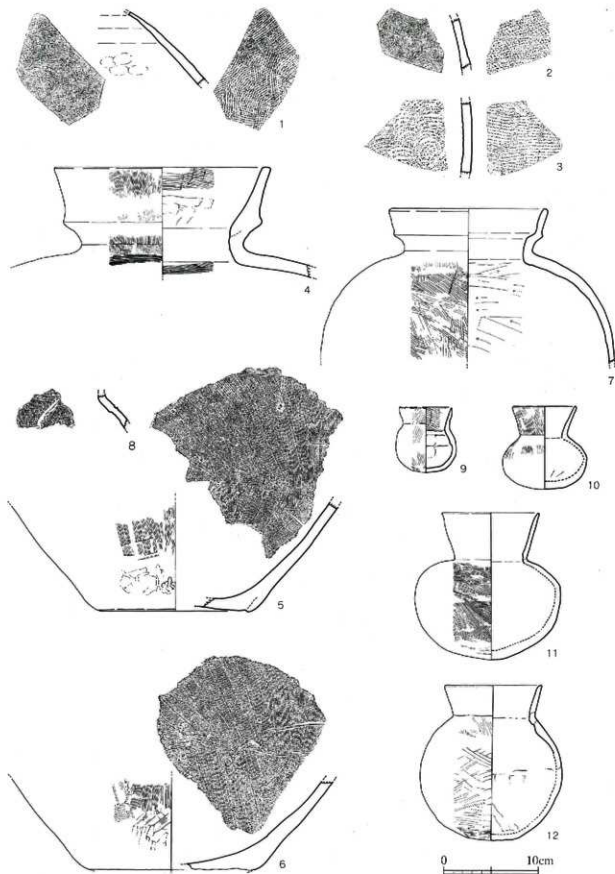
大分県教育委員会『若宮八幡宮遺跡第1次発掘調査～上野ヶ丘中学の校舎耐震工事に伴う埋蔵文化財調査報告書～』（大分県埋蔵文化財調査報告書第67集 2006年）

住居跡

SH2501 (第222図) II-5区 (F・G19小区) に位置する竪穴住居跡である。II-5区では調査着手直後の掘り下げ段階から、調査区南側の黒褐色土中から多量の土器類が出土し始めた。遺物の分布範囲に何らかの遺構が存在することは容易に予測できたが、遺構プランの確認ができず、出土遺物の平面とレベルの記録を行いながら、遺物の取り上げと掘り下げを併行して行った。その結果、最終的には住居跡と推定される方形の遺構プランを確認したが、調査区南西隅付近で、不整形な土坑が数基切り合っている状況も看取できた。遺構相互の埋仕が非常に類似していたため、住居跡と土坑の切り合いを確認できず、所属遺物の弁別も正確にできなかったことになる。遺物の大半はSH2501とした住居跡に帰属するものと思われるが、取り上げミスの遺物が混在している可能性が考えられる。竪穴住居跡SH2105は北壁と西壁の一部を検出し、東南側は調査区外に伸びる。遺構の平面プランは方形を呈し、その規模は現状で、東西3.9m以上、南北6.6m以上、深さ約35cmである。床面からピットを2基検出したが、主柱穴かどうかは断定できない。住居跡埋土中より、須

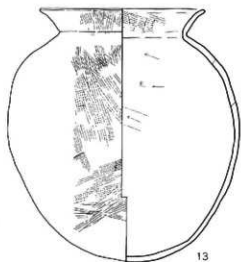


第222図 SH2501実測図 (1/60)

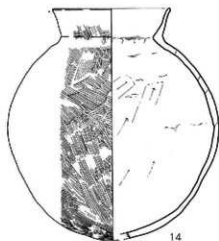


第223図 SH2501出土遺物① (1/4)

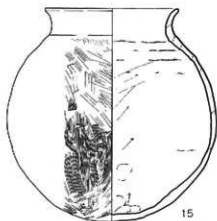
第4節 古墳時代中期後半～後期の遺構・遺物



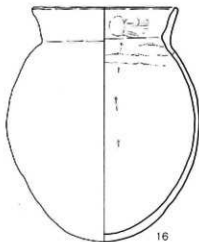
13



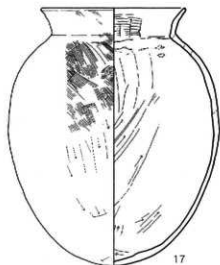
14



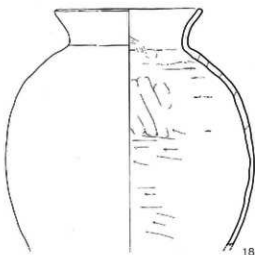
15



16



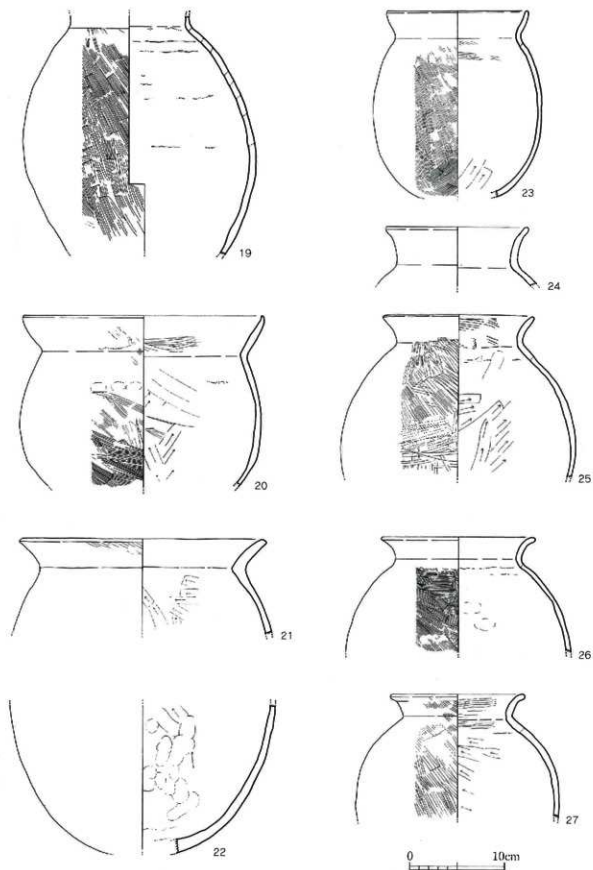
17



18

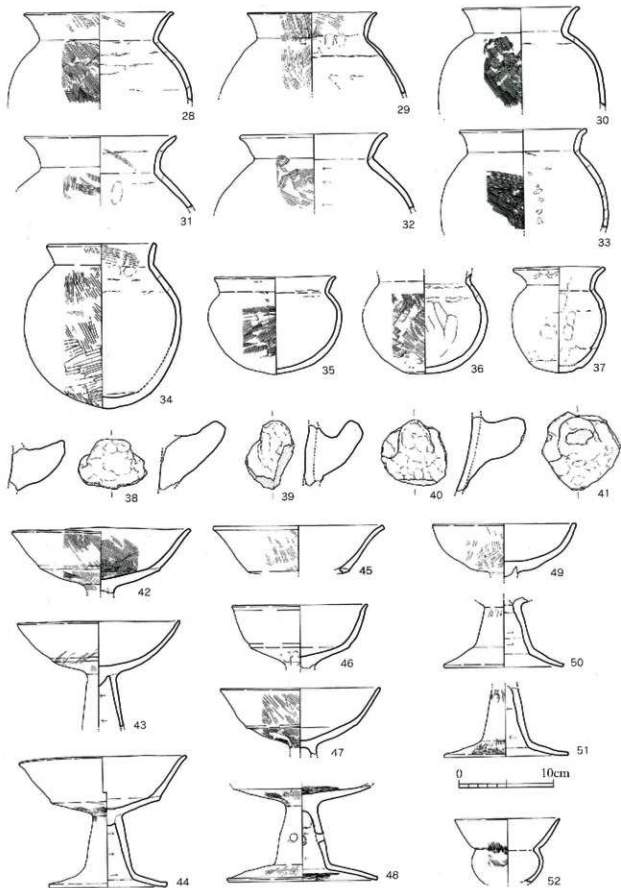


第224図 SH2501出土遺物② (1/4)

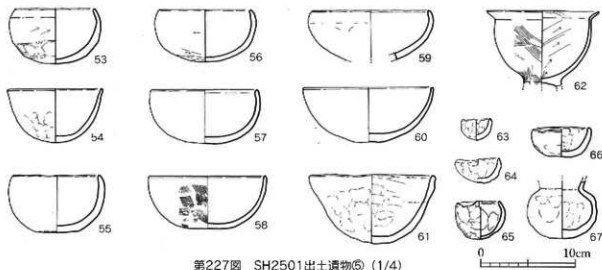


第225図 SH2501出土遺物③ (1/4)

第4節 古墳時代中期後半～後期の遺構・遺物



第226圖 SH2501出土遺物④ (1/4)



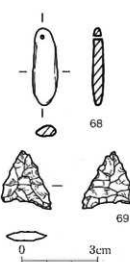
第227図 SH2501出土遺物⑤ (1/4)

第1型式
4～5段階
(TK23～
47型式)
5世紀末葉

恵器・土師器などの土器類や石製の垂飾品が出土している。須恵器の中には第1型式4～5段階(TK23～TK47型式)に比定される甕が出土しており、当該遺物が住居跡の構築年代を示唆する遺物と考えられる。SH2501の所産年代は、出土遺物の年代観から、5世紀末葉前後に比定される。

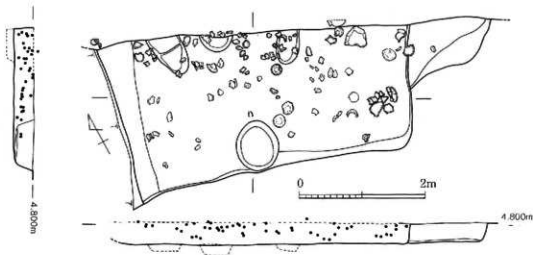
須恵器甕

SH2501出土遺物 (第223図～第228図) 第223図1～2は須恵器の甕の胴部破片である。1は外面に平行叩きが施されており、内面はナデ調整が行われている。2は外面に擬格子叩きが行われた後に、部分的に折頭による筋状のナデが認められ、さらに内面にはナデ調整が認められる。このような特徴をもつ須恵器の甕は第1型式4～5段階(TK23～TK47型式)に比定される可能性が高い。3も須恵器甕の破片で、外面に平行叩き、内面に同心円当具痕が認められる。1・2と同時期かもしれないが、混入品である可能性も考えられ、詳細な生産年代を確定できない資料である。4～6は大型の二重口縁甕で、同一個体の可能性が高い資料である。底部付近の胴部内面にも刷毛目調整が密に施されている。7も二重口縁甕で、口縁内外面はナデ調整、胴部外面は刷毛目調整、胴部内面は削り調整が行われている。8は甕の肩部付近の破片で、外面にヘラ描き文の一部が認められるが、これが意図的な文様であるかどうかは判断できない。9・10は小型の長頸甕、11は中型の長頸甕である。12は中型の甕で、肩部がナデ層になり、丸味をもった胴部を有する。第224図13～第226図33は甕で、胴部のプロポーションには長胴気味のものや丸味を帯びたものなど、いくつかのバリエーションが認められる。ここでは15などにみられるように、胴部のプロポーションが球形化の傾向を帯び、口縁部と頸部の境にみられる接線が不明瞭となるタイプの甕が出現していることに、特に注意を払っておきたい。34・37は小型の甕である。35・36はくの字形に屈曲する口縁をもち、底部が丸底となる鉢で、36については口縁部を欠損する。38～41は瓶の把手、42～51は高坏である。52は小型九底土器で、古墳時代前期の所産であるため、混入品と考えられる。第227図53～61は鉢である。53は口縁部外面付近にやや強いナデを施されている。61は口縁部が肥き、胴部外面に折頭痕が認められる。62は台付きの甕または鉢である。63～67は小型のミニチュア土器で、63～66は鉢形、67は壺形を呈する。第228図68は川原石を素材とする垂飾品で、上端部に小さな孔を開けている。69は姫島産黒曜を素材とする石鏃で、混入品である。弥生時代前期末の所産であろう。



第228図 SH2501出土遺物⑥ (2/3)

石鏃



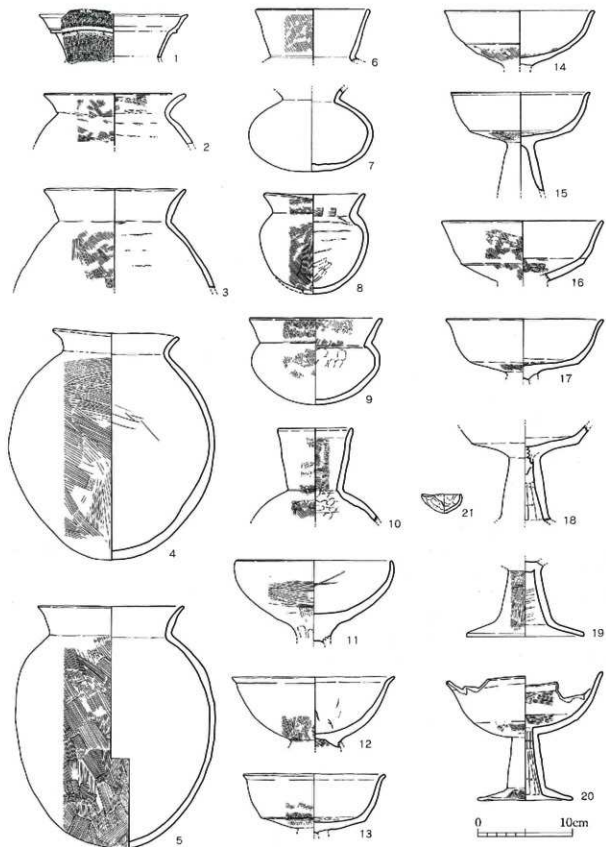
第229図 SH3107実測図 (1/60)

SH3107 (第229図) III-1区 (I24小区) に位置する竪穴住居跡である。住居跡南壁と東壁の一部を検出し、北側については調査区外に伸びる。西側は大型の掘孔によって、大きく破壊を受けている。また、東側に時期不明の不整形土坑が存在するが、埋土が互いに類似する黒褐色土であるため、両者の切り合い関係を明確にできなかった。遺構の平面形態は方形プランと推定され、その規模は現状で東西4.2m以上、南北2.1m以上、深さ約30cmである。床面からピットや土坑などを数基検出したが、いずれも当該住居跡に直接付属する施設かどうかは不明である。主柱穴や壁溝なども検出できていない。住居跡埋土中から須恵器・土師器などの土器類が出土しており、良好な一括資料を形成している。特に、埋土中央部付近より完形品の鉢が3個体出土し、また出土した鉢や高坏の中に意図的な打ち欠きや貫通孔を有する資料が存在した。これらの出土品はいずれも住居跡埋土中から検出されたもので、床面密着の状態で出土したものは認められない。完形の鉢や打ち欠きのある高坏が住居跡の廃絶行為の際に使用されたものである可能性も考えられるが、当該遺構の場合は、それを断定する確たる証拠をつかめなかった。出土した須恵器の中に第I型式4～5段階 (TK23～TK47型式) に比定される匙があり、当該遺物が住居跡の構築年代を示唆する遺物と考える。SH3107の所産年代は、出土遺物の年代観から、5世紀末葉前後に比定される。

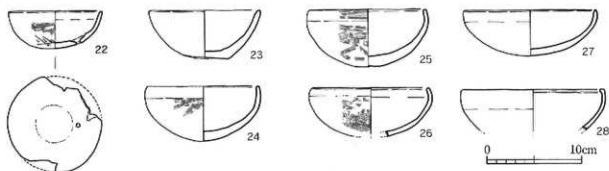
第I型式
4～5段階
(TK23～
47型式)
5世紀末葉

須恵器類

SH3107出土遺物 (第230図・第231図) 第230図Iは須恵器の匙の口縁部である。口縁部は短く外反し、口縁端部に稜を有する。口縁部外面と頸部外面には櫛描き波状文が施され、内面にはナデ調整が行われている。このような特徴を有する須恵器匙は、第I型式4～5段階 (TK23～TK47型式) に比定されるものである。2～5は土師器の甕である。完形に復元される4・5はくの字形に屈曲する口縁部をもち、長胴気味のプロポーションを呈する資料である。また、4については、胴部内面に削り調整が行われた痕跡が認められる。6・7は長頸蓋で、6は胴部以下を、7は口縁部を欠損する。6の外面は刷毛目調整、内面はナデ調整が行われ、7については内外面ともナデ調整が主体となる。10も長頸蓋であるが、6と比較して頸部の幅が小さいものとなっている。8・9は小型の甕または鉢で、9については口径の方が器高より大きくなる。11～20は高坏である。11は口縁部が外反せず、坏部の口縁部が内湾気味に立ち上がる形態を呈する。12は口縁部が短く外反する坏部をもつが、坏部の下位に稜線を形成していない。13～18は口縁部が外反し、坏部外面下位に口縁部との境の稜線を形成するものである。18は坏部の底部外面に脚柱部との接合を行うために



第230図 SH3107出土遺物① (1/4)



第231図 SH3107出土遺物② (1/4)

穿孔

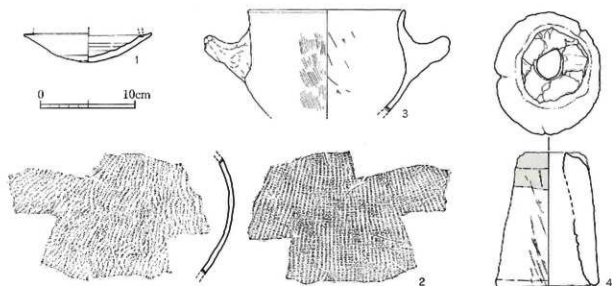
形成された孔首状の突起の痕跡が認められる。19は脚柱部で、大きくラップ状に開く裾部を有する。外面は刷毛目調整、内面は刮り調整が行われている。20はやや深めの坏部を有するもので、完形に復元される資料である。口縁部には意図的な打ち欠きが認められ、さらに坏部の底部内面に穿孔を施し、坏部と脚柱部を貫通させている。第231図22～28は口縁部が外反または内湾気味に立ち上がる鉢である。22はやや小型のもので、底部付近の胴部外面に小さな貫通孔を有する。貫通孔は焼成後に施されたものである。23～28は土師器の鉢である。このうち、23はやや外反気味になる口縁部と平底気味の底部をもつ。内外面ともナデ調整を主体とする。28は口縁端部を肥厚させ、端部上面に小さな平坦面を形成している。

TK209型式
6世紀末葉
～7世紀
初葉

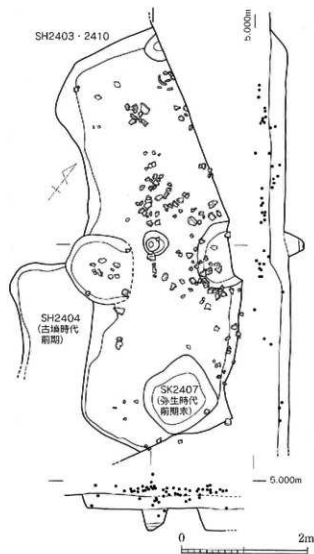
SH2101b (第153図) II-1区 (B13・14小区)に位置する竪穴住居跡である。古墳時代前期の住居跡SH2102a (96頁参照)と切り合い関係を有し、両者は重複した位置に構築されている。互いの埋土が類似した黒色土であることから、両者の弁別は苦慮したが、発掘時における遺構の平面形態や出土遺物を参考にしながら、遺構の形態を下記のように解釈した (遺構実測図は、96頁第153図参照)。SH2102bの平面形態は方形プランで、北側は調査区外に伸びる。規模については現状で南北3.0m以上、東西4.1m以上、深さ約20cmである。床面から複数の柱穴が検出されているが、主柱穴と思われるピットは存在しない。藍溝については、東・西壁側から検出されている。出土遺物については、住居跡埋土中より、須恵器・土師器などが出土したほか、注けすべきものとして、フイゴの羽口が揚げられる。ただし、鋳造・鍛造関連の遺物は羽口1点に留まり、住居跡床面や埋土の状況からも、当該住居跡で金属生産などが行われた痕跡は認められなかった。出土遺物の中にTK209型式の須恵器坏身があり、当該遺物が住居跡の構築年代を示唆する遺物と考える。SH2102bの所産年代は、出土遺物の年代観から、6世紀末葉から7世紀初頭前後に比定される。

フイゴ羽口

SH2102b出土遺物 (第232図) 1は須恵器の坏身である。口縁部を欠損するが、口径が11.5cm前後に復元されるもので、底部には回転へう刮りが施される。TK209型式に比定され、6世紀末から7世紀初頭前後の所産である。2は須恵器の胴部で、外面に平行叩き、内面に同心円当具痕が認められる。甕の胴部である可能性が高いが、平瓶や横瓶の胴部破片である可能性も考えられる。3は把手をもつ甕で、器高が低い小型の器形を呈する。外面は刷毛目調整、内面は刮り調整が行われている。4はフイゴの羽口で、完形に復元される資料である。上端部が被熱により、赤変している。



第232図 SH2101b出土遺物 (1/4)



第233図 SH2403・2410実測図 (1/60)

SH2403・2410 (第233図) II-4区(D18小区)に位置する竪穴住居跡である。途中、調査区排土の切り返しを行ったため、同一遺構に2つの名称が付いている。古墳時代前期の住居跡SH2404と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSH2404・SH2403・2410となる。遺構の平面形態は方形プランで、北側については調査区外に伸びる。その規模は現状で東西6.5m、南北2.3m以上、深さ約20cmである。柱穴・壁溝・土坑・カマドなど、住居跡に直接付属すると思われる施設は検出できなかった。出土遺物については住居跡埋土中から、須恵器・土師器などが一定量認められたほか、住居跡南東隅付近の埋土から管玉1点が出土した。出土遺物の中にTK43型式前後の須恵器蓋環があり、当該遺物が住居跡の構築年代を示唆する遺物と考える。SH2403・2410の所産年代は、出土遺物の年代観から、6世紀後半に比定される。

SH2403・2410出土

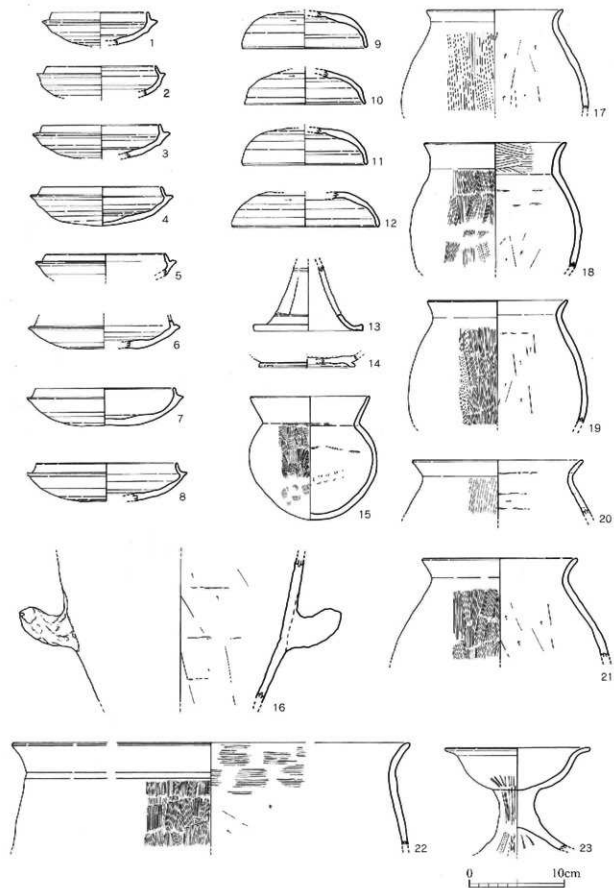
遺物 (第234・235図)

第234図に図示した遺物は管玉である。両面穿孔により、貫通孔を作出している。第235図1~8は、須恵器蓋環の坏身である。口径10.1~14.9cmを測り、口縁端部は丸く仕上げら



第234図 SH2403・2410出土遺物① (1/3)

第4節 古墳時代中期後半～後期の遺構・遺物



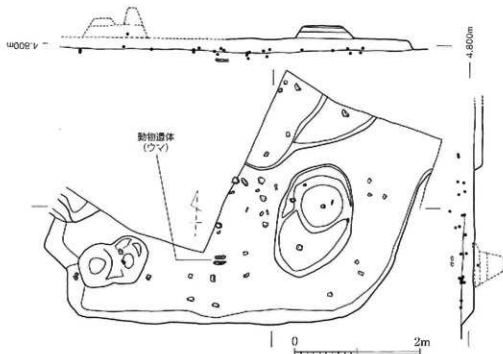
第235図 SH2403・2410出土遺物② (1/4)

TK43型式
6世紀後半

れるとともに、底部には回転ヘラ削りを施す。9～12は須恵器蓋杯の蓋である。口径13.2～15.4cmを測り、天井部には回転ヘラ削りを施す。1～12の蓋杯は、いずれもTK43型式前後の特徴を示す資料である。13は長脚2段透かしの須恵器高杯の脚部で、脚部上位以上を欠損する。14は須恵器の高台付椀の底部で、8～9世紀代の所産と思われることから、混入品であろう。15は土師器の鉢または小型の甕で、口縁部がくの字状に屈曲し、底部が丸底となる。当該遺物は古墳時代前期から中期の所産である可能性が考えられ、これも混入品であろう。16は土師器の甕の胴部で、把手が残存するが、口縁部と底部を欠損している。17～21は土師器の甕で、いずれも口縁部と頸部の境の稜線が不明瞭となる傾向が認められ、胴部は長胴気味となる器形を呈する。外面は刷毛目調整、内面は削り調整が行われている。22も土師器の甕の口縁部で、口径の正確な復元は困難であるが、大型品に属する製品であろう。23は土師器の高杯で、杯部の口縁部が外反し、脚部が閉く器形を呈する。

動物遺体
(ウマの歯)TK43型式
6世紀後半

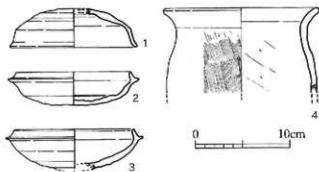
SH3204 (第236図) III 2区北西隅(D18小区)に位置する竪穴住居跡である。古墳時代前期の住居跡SH3203と切り合い関係を有する。遺構の平面形態は方形プランで、北側については調査区外に伸びる。住居跡の南壁、および東壁と西壁の一部を確認したが、周囲の地山が脆弱な砂質土であったため、遺構プランを正確に確認できず、発掘時のプランに歪みが生じてしまっている。床面で土坑や柱穴数基を確認したが、住居跡の付属施設かどうかは判断できなかった。出土遺物については埋土中から、須恵器・土師器が少量出土したほか、埋土上位から動物遺体(ウマの歯)が出土した。動物遺体が当該遺構から出土した意味は不明である。なお、動物遺体に関する自然科学的な分析については、第5章(191頁)を参照されたい。出土遺物の中にTK43型式前後の須恵器蓋杯があり、当該遺物が住居跡の構築年代を示唆する遺物と考える。SH3204の所産年代は、出土遺物の年代観から、6世紀後半に比定される。



第236図 SH3204実測図 (1/60)

SH3204出土遺物 (第237図)

第237図1は須恵器蓋環の蓋である。口縁端部がやや外反し、口径は13.5cmを測る。天井部は回転ヘラ削りを施す。2・3は須恵器蓋環の坏身で、口径は12.2～12.5cmを測り、口縁端部は丸く仕上げられるとともに、底部には回転ヘラ削りを施す。1～3の蓋環は、いずれもTK43

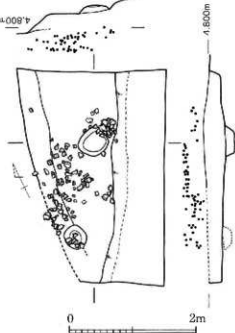


第237図 SH3204出土遺物 (1/4)

型式前後の特徴を示す資料である。4は土師器の甕で、長胴気味の器形を呈する。胴部外面は刷毛目調整を施し、内面は削り調整を行っている。

SH4002 (第238図) IV区 (H25小区) に位置する聚穴住居跡である。遺構の残存状況は不良で、住居跡内蔵の一部を検出したに留まり、その他の部位は調査区外になるか、掘乱によって破壊されている。遺構の平面形態は方形プランと推定され、その規模は現状で、南北3.4m以上、東西1.5m以上、深さ30cmを測る。床面からピットを2基検出したが、当該住居跡に直接付属する遺構であるかどうかはわからない。遺物については、須恵器・土師器や有孔土埴が認められたが、いずれも遺構検出面より上位のレベルで出土した。出土遺物の中にTK43～TK209型式前後の須恵器蓋環があり、当該遺物が住居跡の構築年代を示唆する遺物と考える。SH4002の所産年代は、山土遺物の年代観から、6世紀後半から末葉に比定される。

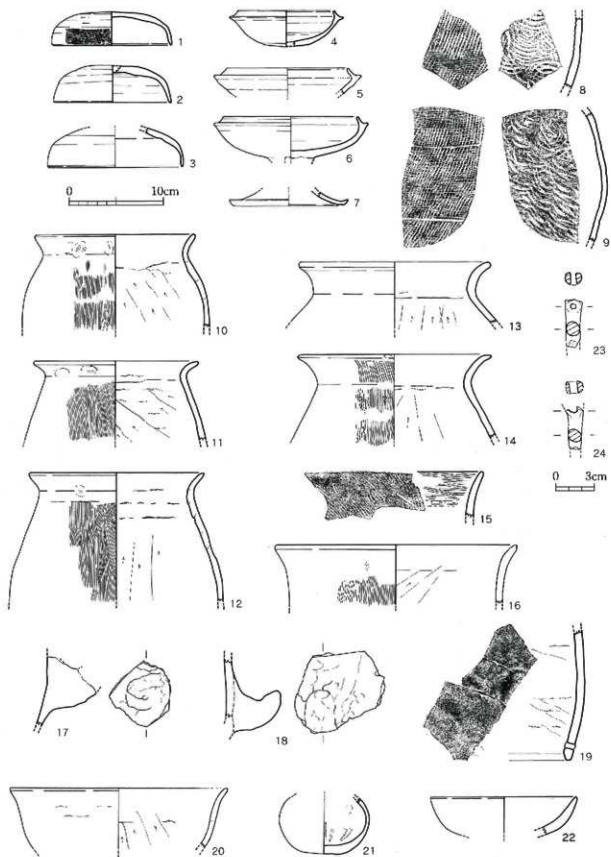
SH4002出土遺物 (第239図) 第239図1～3は須恵器蓋環の蓋である。口径は12.5～14.4cmを測り、天井部は回転ヘラ削りを施す。また、1の口縁部外面にはカキメ状の調整がなされている部位が認められる。4・5は須恵器蓋環の坏身で、口径は10.2～13.0cmを測り、口縁端部は丸く仕上げられるとともに、底部には回転ヘラ削りを施す。以上の蓋環はいずれもTK43～TK209型式前後の特徴を示す資料である。6・7は須恵器の高坏で、6は有蓋高坏の坏部、7は脚部の破片である。8・9は須恵器の甕の胴部破片で、いずれも外面に平行叩きの後にカキメ調整、内面に同心円当具痕が認められる。さらに9については、胴部外面の調整における最終段階で残った沈線文が2条施されている。10～14は土師器の甕で、いずれも底部を欠損する。15～19は甕で、15・16は口縁部、17・18は把手、19は底部の破片である。なお、19については胴部下位に焼成前の穿孔を有する。20は口縁部が如意状に開く土師器の鉢で、底部を欠損する。外面はナデ調整、内面は縦方向の削り調整が行われている。21は土師器の甕で、丸味を帯びた胴部に平底気味の丸底をもつ。口縁部は欠損している。22は口縁部が外傾気味に立ち上がる土師器の鉢で、底部を欠損する。内外面ともナデ調整によって仕上げている。23・24は有孔土埴である。



第238図 SH4002実測図 (1/60)

TK43～
TK209型式
6世紀後半
～末葉

有孔土埴

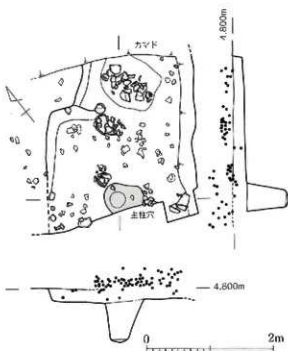


第239図 SH4002出土遺物 (1~22は1/4、23・24は1/3)

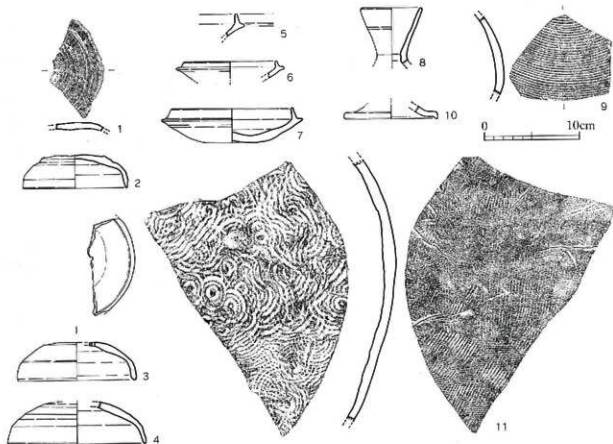
SH4004 (第240回) IV区 (H・125小区) に位置するカマド付きの竪穴住居跡である。住居跡の北西隅付近を検出したが、遺構の残存状況は不良であり、その他の部位は調査区外になるか擾乱によって破壊されている。遺構の平面形態は方形プランと推定され、その規模は現状で南北2.0m以上、東西2.1m以上、深さ約20cmを測る。床面から深さ約60cmのピットを1基検出しており、当該遺構が支柱穴の中の1基であると思われる。住居跡の北壁側にカマドと考えられる南北0.8m、東西1.0mを測る焼上の広がりが見られた。焼上上面からは、土師器の竪などが破壊した状態で出土している。その他の出土遺物には須恵器・土師器などの土器類のほか、台石などがあり、住居跡の型土上位付近に集中する傾向が認められた。出土遺物の中にTK43～TK209型式前後の須恵器があり、SH4004の所産年代は6世紀後半から末葉に比定される。

カマド

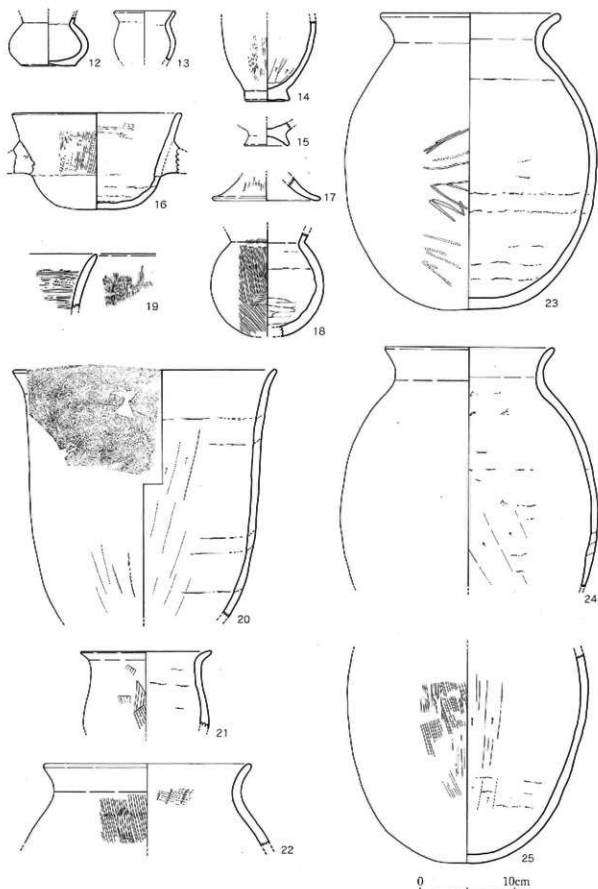
TK43～
TK209型式
6世紀後半
～末葉



第240回 SH4004実測図 (1/60)

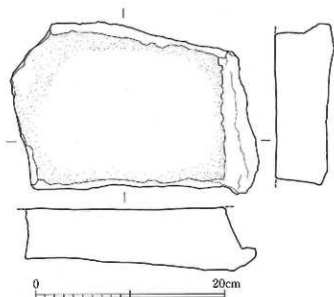


第241回 SH4004出土遺物① (1/4)



第242図 SH4004出土遺物② (1/4)

SH4004出土遺物 (第241～243図) 第241図1～11は須恵器である。1は胴部の破片で、外面に回転ヘラ削りが施されている。提強の胴部破片と推定される資料である。2は蓋で、口径は11.0cmを測る。天井部はヘラ切り未調整で、回転ヘラ削りはなされていない。短須恵の蓋である可能性が考えられる。3～4は蓋環の蓋で、口径は12.5～14.4cmを測り、天井部は回転ヘラ削りを施す。3の天井部には穿孔が認められる。5～7は蓋環の坏身で、口径は6が10.0cm、7が13.0cmを測る。口径端

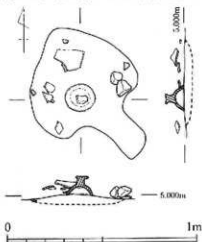


第243図 SH4004出土遺物③ (1/4)

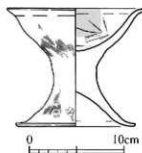
部は丸く仕上げられており、7については底部に回転ヘラ削りが施されている。3～7の蓋環はいずれもTK43～TK209型式前後の特徴を示す資料である。8は口縁部で、提瓶の口縁部になる可能性が高いと考える。9は横瓶の胴部破片と考えられるもので、外面にカキメ調整が施されている。10は低脚高環の脚部破片である。11は甕の胴部破片で、外面に平行叩きとカキメ調整、内面に同心円当具痕が認められる。第242図12～25は土師器である。12は小型の甕で、平底の底部を有するが、口縁部を欠損している。13は小型の甕で、くの字形に屈曲する口縁をもつが、底部を欠損する。14も小型の甕で、口縁部を欠損するが、底部は平底になる。15は器種不明の底部である。16は口縁部が外傾気味に開く鉢で、胴部中に把手が付いている。17は高環の脚部破片と思われる。18は口縁部を欠損し、底部が丸底になる器形の甕である。古墳時代前期の所産である可能性が高く、混入品であろう。19・20は甕、21～25は甕である。このうち、20・24はカマドの周辺から出土した資料である。第243図で図示したものは、安山岩を素材とする台石である。

カマド

SX3209 (第244図) III-2区 (G21小区) に位置するカマドと考えられる遺構である。古墳時代前期の住居跡SH3206と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSII3206→SX3209となる。南北約0.6m、東西約0.55mの範囲に焼土の広がり認められ、その中央部に穴形に復元される土師器高



第244図 SX3209実測図 (1/20)



第245図 SX3209出土遺物 (1/4)

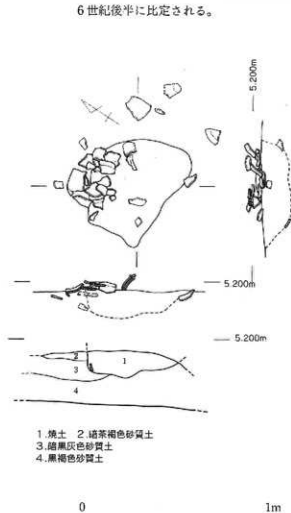
環が伏せられた状態（口縁部を下にした状態）で掘えられていた。高環はカマドの支脚として使用されたと思われる、当該遺構は本来、壁穴住居跡に付設されたカマド遺構と推定される。しかしながら、カマド遺構周辺の土壌と遺構埋土である黒褐色砂質土を判別することが困難であり、住居跡のプランを明らかにすることができなかった。焼土内から土師器や礫が少量出土しているが、図化可能な遺物は土師器高環のみである。当該資料と類似した器形の高環がSI12403・2410から出土（第234図23・164頁参照）しており、共存遺物の年代観から、当該高環の所産年代が6世紀後半代に比定されることを示唆している。従って、SX3209の所産年代は6世紀後半代と考える。

SX3209出土遺物（第245図） 図示した遺物は、土師器の高環である。坏部の内面に赤色顔料の塗布が認められる。

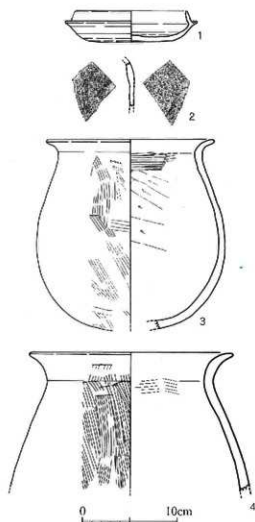
類似した
器形の高環
がSI12403
・2410
から出土

カマド **SX4011（第246図）** IV区（H23小区）に位置するカマドと考えられる遺構である。南北約0.5m、東西約0.5mの範囲に焼土の広がりが見られ、その上位に土師器類（第247図3）が斜め方向に横たえられた状態で出土した。周辺からは別個体の土師器壺や須恵器坏身、提瓶などが出土した。当該遺構も壁穴住居跡に付設されたカマド遺構と推定されるが、遺構周辺の土壌を判別することが困難であり、住居跡のプランを明らかにすることができなかった。出土遺物の中に、TK43型式前後の須恵器があり、SX4011の所産年代は6世紀後半に比定される。

TK43型式
6世紀後半



第246図 SX4011実測図（1/20）



第247図 SX4011出土遺物（1/4）

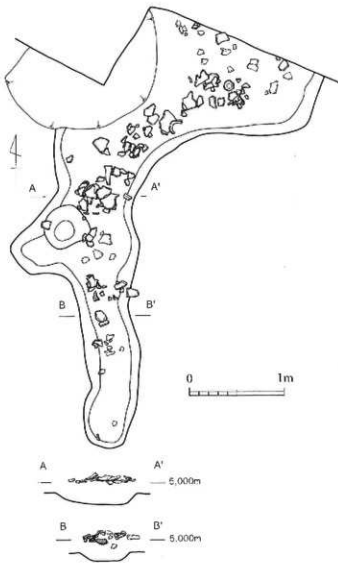
SX4011出土遺物 (第247図) 1は須恵器蓋の坏身で、口径は11.8cmを測る。口縁端部は丸く仕上げられ、底部には回転ヘラ削りが施されている。TK43型式に比定される資料である。2は須恵器の胴部破片で、外面に回転ヘラ削り、内面にナデ調整が行われている。提握の胴部と推定される破片である。3・4は土師器の甕で、いずれも胴部が長胴の傾向を呈する資料である。

遺構の
名称不明

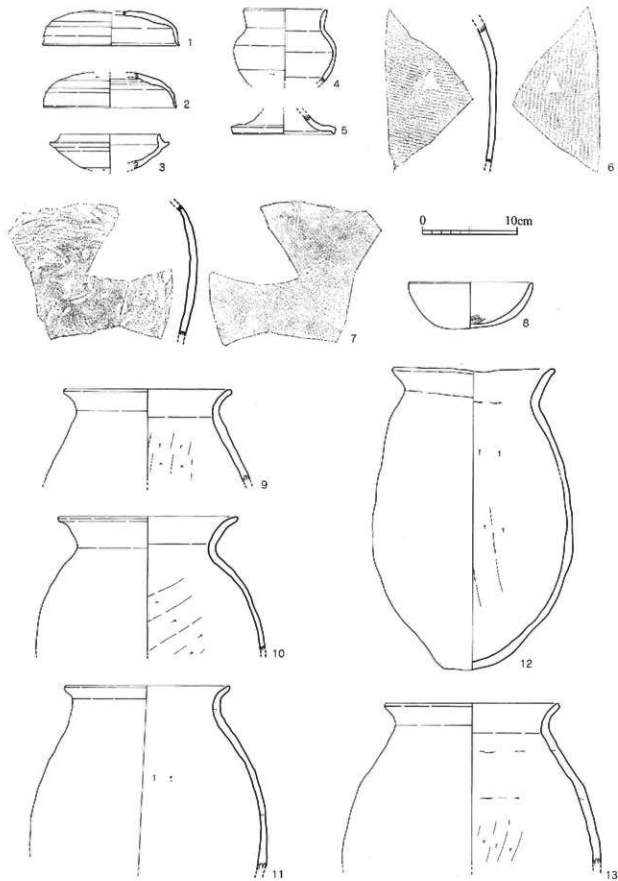
TK85～
TK209型式
6世紀後半
～末葉

SX3101 (第248図) III-1区(H・123小区)に位置する遺構である。遺構の平面形態は弧状を呈し、北側はさらに調査区外に伸びる可能性がある。北西隅と東側は投乱によって破壊されている。遺構の規模は南北4.7m、東西2.8m、深さ15cmである。遺構検出面や埋土上位を中心に須恵器や土師器等の土器類が出土している。発掘後の床面には特記すべき施設は検出できなかった。遺構の性格は不明である。出土した須恵器の中には、MT85～TK209型式前後の蓋環が認められ、当該遺物が住居跡の構築年代を示唆する遺物と考える。SX3101の所産年代は、出土遺物の年代観から、6世紀後半から末葉に比定される。

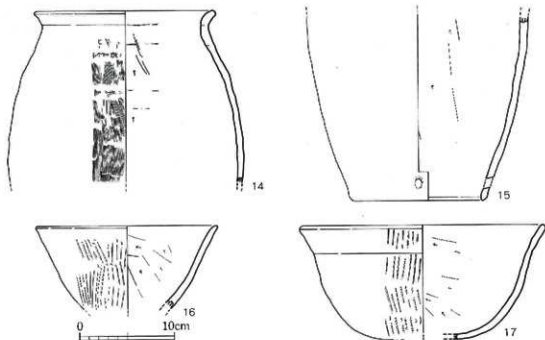
SX3101出土遺物 (第249・250図) 第249図1・2は須恵器蓋の蓋である。1は口縁端部がやや外反し、端部に弱い稜を形成する。2は口縁端部を丸く収める。いずれも天井部に回転ヘラ削りを施す。3は須恵器蓋の坏身で、口径が10.5cmを測り、底部に回転ヘラ削りを施す。1～3の蓋環は、MT85～TK209型式に比定される。4は須恵器の甕で、口縁部は外傾気味に立ち上がり、底部には回転ヘラ削りを施す。5は須恵器高環の脚部である。6・7は須恵器の甕の胴部破片で、6は内外面とも半打叩き、7は外面に平行叩き、内面に同心円当具痕が認められる。8は土師器の鉢で、口縁部が直立気味に立ち上がり、底面は平底気味の丸底となる。9～第250図14は土師器の甕で、いずれも胴部が長胴気味のプロポーションとなる。15は土師器甕で、胴部下位に貫通孔を有する。16・17は口縁部が外傾しながら開く形態の鉢で、いずれも外面に荒い刷毛目調整を施し、内面にはミガキ調整が認められる。



第248図 SX3101実測図 (1/40)



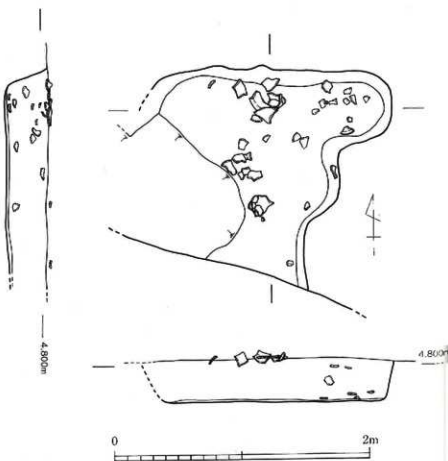
第249図 SX3101出土遺物① (1/4)



第250図 SX3101出土遺物② (1/4)

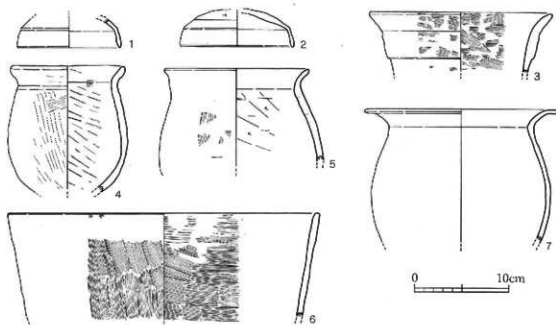
SK3102 (第251図)

Ⅲ-1区 (I24小区)に位置する土坑である。古墳時代前期の住居跡SH3112と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSH3112→SK3102となる。平面プランは不整形で、南側は調査区外に伸び、西側は攪乱によって破壊を受けている。遺構の規模は南北1.8m、東西1.9m、深さ約25cmである。遺構の平面形態が不整形であるため、複数の土坑が切り合っている可能性も考えられるが、掘り下げ中に遺構埋土の変化を認めることはできなかった。出土遺物の中にTK209型式前後の須恵器坏蓋があり、SK3102の所産年代は6世紀末から7世紀初頭に比定される。



第251図 SK3102実測図 (1/30)

TK209型式
6世紀末
～7世紀
初頭



第252図 SK3102出土遺物 (1/4)

SK3102出土遺物 (第252図) 1・2は須恵器の坏蓋で、天井部には回転ヘラ削りが行われている。TK209型式に比定される資料である。3～5は土師器の壺で、3は頸部に幅広の隆帯が認められる。6は内外面に刷毛目調整が認められるもので、甕の口縁部と推定される。7は土師器の壺で、器壁が薄く、口縁部が大きくラッパ状に開く形體を呈する。古墳時代前期に比定される資料で、切り合い関係にあるSH3112からの混入品であろう。

混入品

包含層等出土遺物 (第253図～第257図) 古墳時代中期から後期に比定される遺物の中で、遺構に直接伴わないものや明らかに他時期の混入したと推定されるものを、この項目で一括して紹介する。これらはその大半がⅢ・Ⅳ区付近の黒褐色砂質土中から出土した古墳時代後期の遺物である。前述のように、東田空遺跡第3次調査では遺構検出面とした黄褐色砂質土の上位にこの黒褐色砂質土が堆積しており、Ⅲ・Ⅳ区付近では他の地区と比較して、黒褐色砂質土がやや厚く堆積している傾向が認められた。掘り下げ中から当該土層中で古墳時代後期の遺物が一定量出土していたことを認識していたが、この黒褐色砂質土中で遺構検出や遺構のプラン確認を行うことは極めて困難であった。従って、出土遺物の位置とレベルを小地区ごとに記録しながら掘り下げを進めたが、この過程で遺構床面が黄褐色砂質土に達していない古墳時代後期以降の遺構を確認できなかった可能性が考えられる。以下で報告する遺物の大半は、本来古墳時代後期の遺構に所属していたものであった可能性が高いが、上記のような事情で、包含層出土遺物として取り上げた遺物である。

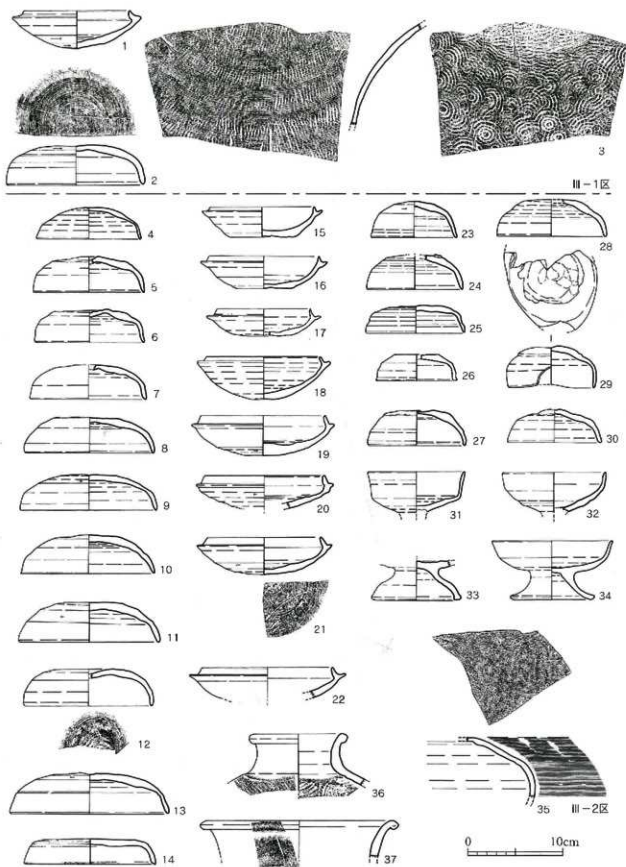
Ⅲ・Ⅳ区
付近の黒褐色
砂質土

第253図1～3はⅢ・Ⅰ区から出土した土器である。1はTK209型式(6世紀末～7世紀初頭)に比定される須恵器の坏身で、底部に回転ヘラ削りが施されている。2は坏蓋で、天井部に回転ヘラ削りが施されるほか、当該部位にヘラ記号が認められる。TK43型式(6世紀後半)に比定される資料である。3は甕の破片で、外面に平行叩き、内面に同心円当具痕が認められる。

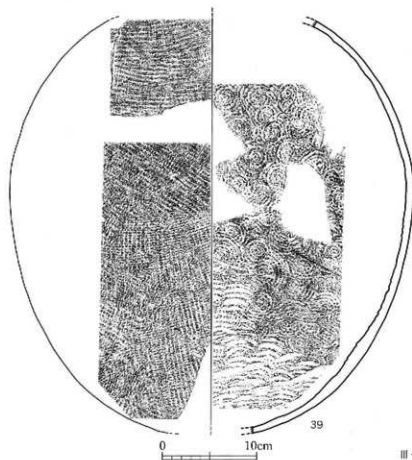
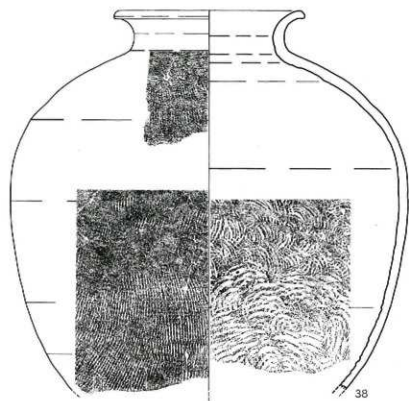
土器
Ⅲ・Ⅰ区

第253図4～第255図43はⅢ・2区から出土した土器である。第253図4～14は須恵器の蓋で、図示した資料のすべての天井部にヘラ削りが施されている。また、12の天井部内面に同心円当具痕が認められる。4～7はTK209型式(6世紀末～7世紀初頭)、8～11はTK43型式(6世紀後半)、12・13はTK10～MT85型式(6世紀中頃)、14はMT15型式(6世紀前半)に比定される。15～22

Ⅲ・2区

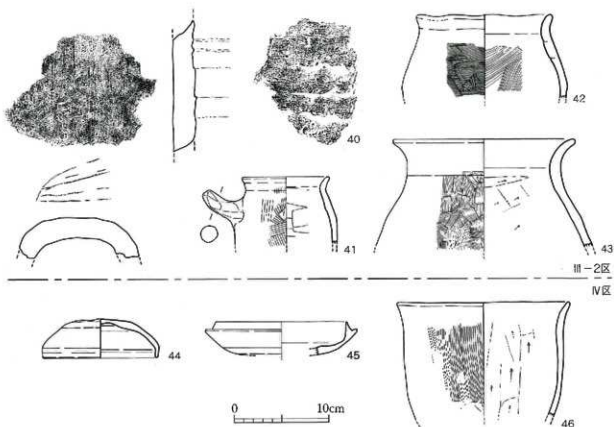


第253図 包含層等出土遺物①(土器1 1/4)



第254図 包含層等出土遺物② (土器2 1/4)

Ⅲ-2区



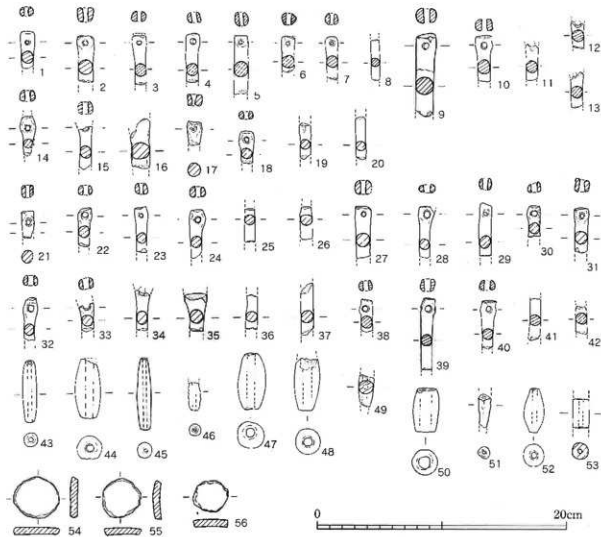
第255図 包含層等出土遺物③ (土器3 1/4)

は坏身で、いずれの資料も底部に回転ヘラ削りが施されている。また、21の底部にはヘラ記号が認められる。15～17はTK209型式、18～22はTK43型式に比定される。23～30は口径が小型であることから、短頸壺の蓋と推定される資料である。23～25は天井部に回転ヘラ削りが施されるが、26～30は天井部がヘラ切り未調整となる。また、29については焼け込みが著しい資料である。31・32・34は無蓋高環と思われる資料である。31・32については、脚部を欠損するが、長脚に復元される器形となる。それに対して、34の脚部は短脚となっている。33も高環であるが、その形態から有蓋高環に復元される資料である。35は平瓶の肩部と思われる破片で、外面にカキ目が施されている。36は横線の口縁部と思われる口縁部で、わずかに残存する肩部の外面に平行叩き、内面に同心円当具痕が認められる。37は壺の口縁部で、頸部外面にヘラ記号が認められる。第254図38・39は須恵器の大甕で、39は口縁部と底部を欠損する。いずれも胴部外面に併行叩き、内面に同心円当具痕が認められる。40は用途不明の特殊な遺物である。胎土は土質で、断面形態は円筒状を呈する。内面に粘土紐による成形痕が顕著に残存するが、布目などは全く認められず、ナデの痕跡のみが残る。外面はナデ調整が行われており、ヘラ横きによる文様または記号がある。一見したところ、初期瓦や円筒埴輪のような印象を受ける遺物であるが、細部を検討すると、瓦や埴輪でないことは明白である。現状ではこれ以上の検討に進むことができない資料である。41は土師器の小型甕で、胴部には牛角状の把手を有する。42・43は土師器の甕である。

用途不明の特殊な遺物

土器IV区

第255図44～46はIV区から出土した土器である。41は須恵器坏蓋、45は須恵器坏身で、前者はTK217型式（7世紀前半～中頃）、後者はTK209型式（7世紀前半～中頃）に比定される。46は土師器の甕で、外面は刷毛目調整、内面は削り調整が主体となる。



第256図 包含層等出土遺物④(土製品 1/3)

- 有孔土鍾 1. SD1109 2. SK2202 3~5. I-3区 6~8. II-4区 9~13. II-5区
14~20. III-2区 21. S4026 22~42. IV区
- 管状土鍾 43~44. I-1区 45. II 3区 46. II-4区 47~50. III-2区 51~53. IV区
- 土器片加工品 54. SD1109 55. III 2区 56. IV区

土製品
有孔土鍾

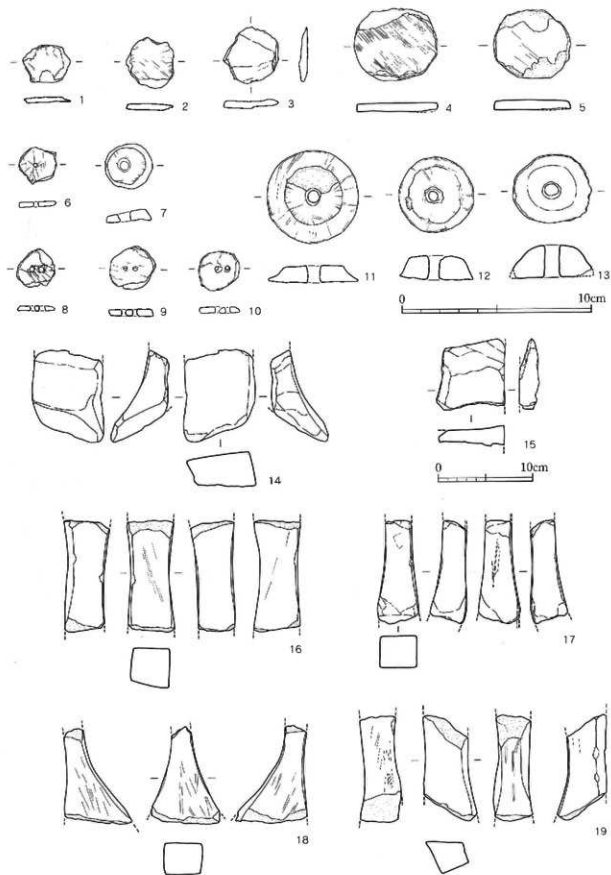
第256図では、土製品を図示した。

1~44は有孔土鍾である。有孔土鍾は弥生時代後期に出現し、古墳時代以降も存続するもので、共存遺物がない場合は詳細な年代を確定できないものである。東田家遺跡第3次調査では遺構に伴って年代が確定できる事例は古墳時代後期の住居跡S114002の埋土中から出土した2個体(第238図23・24、167頁参照)のみである。その他、第256図1は近世以降の溝SD1109、2は古代の土坑SK2202、21は古墳時代前期の住居跡SH4026から出土したが、混入品である可能性が高い。第256図で図示した有孔土鍾の大半は、古墳時代後期の所産である可能性が高いと考える。

管状土鍾
土器片
加工品

45~55は管状土鍾である。管状土鍾も弥生時代に出現し、古墳時代以降も存続する。図示した管状土鍾も古墳時代後期の所産である可能性が高いと考えるが、確証がない。

56~58は土器片加工品である。これらについても詳細な所産年代を確定できていない。



第257図 包含層等出土遺物⑤(石製品 1~13は1/2、14~19は1/3)

石製品
有孔円盤

第256図では、石製品を図示した。

1～10は結晶片岩を素材とする有孔円盤である。複数個体を重ね合わせて紐で繋ぎ、頭飾りや腕輪などの装身具としたものと推定される。貫通孔が1個のもの(6・7)と2個のもの(8～10)が認められる。また、これとは別に製作途中の未成品と推定されるもの(1～5)がある。出土地点は1～4・6・9がⅢ-2区のG21小区、10がⅢ-2区のG22小区、7・8がⅣ区の2311小区、5がⅣ区(-括)で、Ⅲ-2区とⅣ区の比較的に近い場所から集中して出土している。その他、図示していないが、素材を粗削り・荒削りした段階と推定される結晶片岩片も複数出土している。これらは大半が黒褐色砂質土中から出土しており、古墳時代後期の所産と思われる。出土遺物の記録や遺物の提示が十分ではないが、当該地点付近で結晶片岩製の装身具の製作が行われた可能性を示唆する遺物群である。

結晶片岩製の装身具の製作

紡錘車

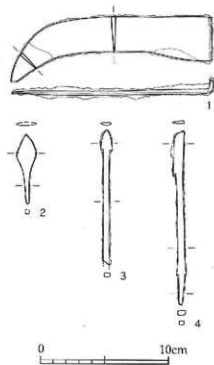
11～13は滑石製の紡錘車である。このうち、11は古墳時代前期の住居跡SH3206、12は絵西土器が出土した古墳時代中期の住居跡SH3205から出土しており、それぞれが遺構の年代まで遡る可能性がある。ただ、SI13206もSH3205も結晶片岩製の未製品の出土が多いⅢ-2区からの出土であるため、取り上げミスや混入の可能性も考えられ、紡錘車の年代も古墳時代後期に所属するものであることも考慮しておきたい。13はⅣ区(24H小区)の出土で、古墳時代後期の遺物であろう。

砥石

14～19は砥石である。これらについても、遺物の詳細な所産時期が明らかではないものの、その大半が古墳時代後期に比定される可能性が高い。

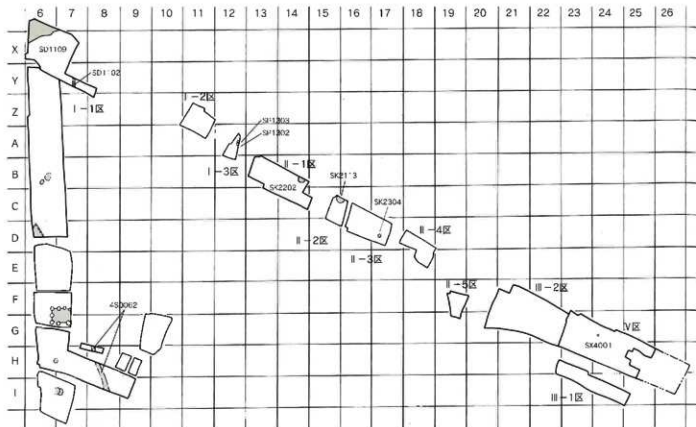
鉄器・鉄製

第257図では、鉄製品を図示した。図示した鉄製品の出土地点は、すべてⅢ-2区包含層である。1は鉄鎌で、刃部が曲刃となる曲刃鎌である。2～4は鉄鏃である。1は刃部が柳葉形を呈し、頸部は短頸となる。2の刃部は両翼を有する盤箭式で、頸部は長頸である。基部以下を欠損する。3は刃部が片刃となり、頸部は長頸となる。茎部の上端には閉筈被を有する。以上の鉄器も詳細な時期を確定できないが、出土地点と周辺の遺構の状況から、古墳時代後期の所産である可能性が高い。



第258図 包含層等出土遺物⑥
(鉄製品1/3)

第5節 古代・中世・近世の遺構・遺物



第259図 古代・中世・近世の遺構 (S=1/1,200)

第5節 古代・中世・近世の遺構・遺物

概要 本項目では、古代・中世・近世の遺構について、報告する。

古代

古代(奈良・平安時代)の遺構については、溝1基(SD1102)、土坑1基(SK2202)がある。溝SD1102については断面形態が逆台形を呈するもので、埋土中からは詳細な時期を決める遺物は出土しなかった。大分市教育委員会が実施した東州築遺跡第4次調査で類似した溝遺構(4SD062)が検出されており、報告者は当該遺構がSD1102の延長部である可能性を示唆されている。この見解を尊重し、本項目でもSD1102の所産時期を奈良・平安時代と解釈した。

中世

中世の遺構については、土坑2基(SK2113・SK2304)と性格不明の遺構1基(SX4001)のほか柱穴数基があり、いずれも中世前半(12～13世紀)に比定されるものである。SX4001は性格不明の遺構であるが、和泉型瓦器2枚を埋置したものであり、特殊な遺構として注目に値する。

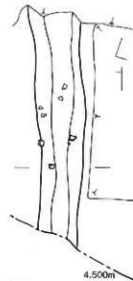
近世

近世の遺構については、溝SD1109がある。東田空遺跡3次調査では、近世以降の遺構については調査の対象としなかったが、本遺構については、古墳時代前期の溝SD1111と重複した位置で検出されたため、人力による掘り下げと遺物の回収を行った。

第9表 古代・中世・近世の遺構一覧

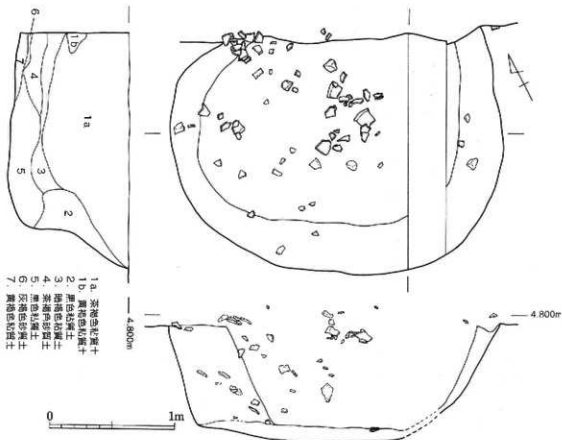
地区	遺構名称	遺構の性格	時 期	注目すべき遺物	備 考	埋没員
I-1区	SD1102	溝	古代?		遺構僅少	183
	SD1109	溝	近世～近代			187
I-3区	SP1302	柱穴	古代	内黒土河磨 赤焼土河磨		187
	SK1303	柱穴	中世(12～13世紀)			187
II-1区	SK2113	土坑	中世(12～13世紀)			185
II-2区	SK2202	土坑	古代			183
II-3区	SK2304	土坑	中世(12～13世紀)	白磁1枚		186
IV区	SX4001	不明遺構	中世(12世紀)	和泉型瓦器2		186

SD1102 (第260図) I-1区(Y7小区)で検出された溝である。遺構の北側は擾乱によって破壊されており、南側はさらに調査区外に伸びる。断面形態は逆台形を呈し、その規模は長さ約2.5m、幅40cmを測る。出土遺物としては土器の細片が少量認められたのみで、固化に耐える資料は得られなかった。従って、詳細な所産時期は不明である。なお、大分市教育委員会が実施した東山室遺跡第4次調査で、本遺構と類似した溝4SD062が検出されており、報告者はSD1102と4SD062の関連性を注目している⁽¹⁾。SD1102と4SD062は直線距離で約80m離れており(第259図参照)、両者が同一の遺構であると断定することは慎重でありたいが、ここでは大分市教育委員会による見解を重視し、SD1102の所産時期を4SD062と同時期の古代(奈良・平安時代)に比定しておきたい。



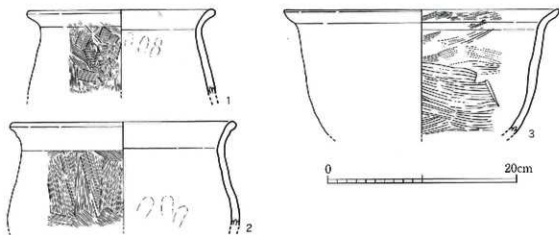
第260図 SD1102
実測図(1/40)

SK2202 (第261図) II-2区(C15・16小区)で検出された土坑である。遺構の平面形態は略楕円形プランで、その規模は長さ2.6m、短径1.8m以上、深さ約90cmである。土層断面を観察すると、埋土中位付近で、掘り返しが行われた痕跡が確認できた。遺構の性格は不明であるが、廃棄土坑(ゴミ捨て穴)であろうか。埋土上位から土師器や須恵器などの土器類が一定量出土したが、

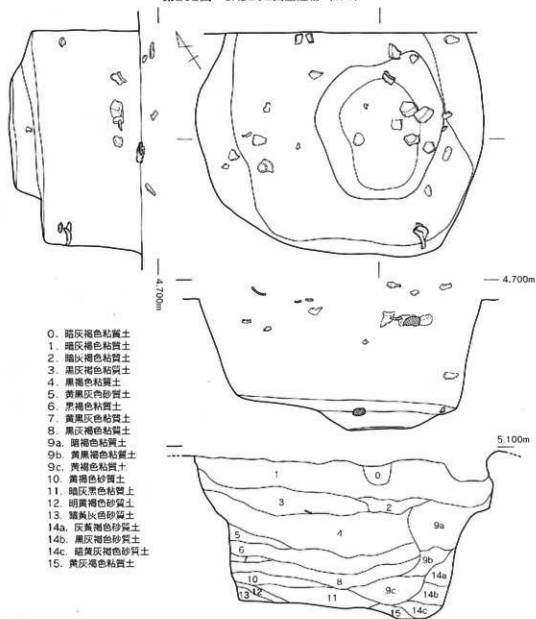


第261図 SK2202実測図(1/30)

東山室遺跡
第4次調査
4SD062と
同一遺構?



第262図 SK2202出土遺物 (1/4)



- 0. 暗灰褐色粘質土
- 1. 暗灰褐色粘質土
- 2. 暗灰褐色粘質土
- 3. 暗灰褐色粘質土
- 4. 黄褐色粘質土
- 5. 黄褐色粘質土
- 6. 黄褐色粘質土
- 7. 黄褐色粘質土
- 8. 黄褐色粘質土
- 9a. 暗褐色粘質土
- 9b. 黄褐色粘質土
- 9c. 黄褐色粘質土
- 10. 黄褐色粘質土
- 11. 暗灰褐色粘質土
- 12. 暗灰褐色粘質土
- 13. 暗灰褐色粘質土
- 14a. 暗灰褐色粘質土
- 14b. 暗灰褐色粘質土
- 14c. 暗灰褐色粘質土
- 15. 黄褐色粘質土

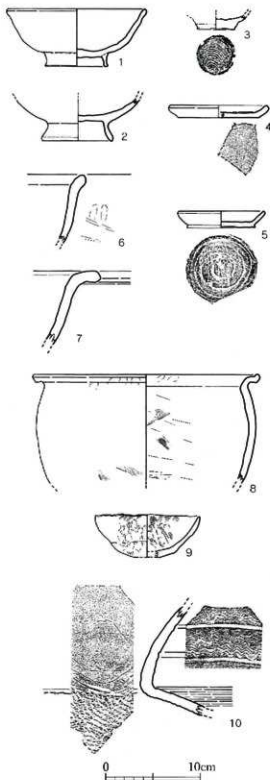
第263図 SK2113実測図 (1/30)

詳細な時期を決める標式的な資料は得られなかった。遺構の所産時期は、土師器甕などの形態から、古代（奈良・平安時代）に比定されるものとする。

SK2202出土遺物（第262図） 1・2は土師器の甕で、胴部外面は刷毛目調整、内面はナズ調整と指頭爪痕が認められる。3は口縁部が大きく開く鉢で、外面はナズ調整、内面は刷毛目調整が主体となる。そのほか、混入品と思われる7世紀後半代の須恵器蓋環が出土しているが、図示していない。

SK2113（第263図） II-1区（B14小区）で検出された土坑である。遺構の平面形態は略楕円形プランで、その規模は長径2.25m、短径1.75m、深さ約1mである。遺構の性格は不明であるが、廃棄土坑（ゴミ捨て穴）であろうか。遺構埋土から白色研磨土師器の塊や土師質土器小皿などの土器類が出土した。出土土器の中には、古墳時代の所産になる土器類も混入していた。SK2113は出土遺物の年代観から、12～13世紀代に比定される。

SK2113出土遺物（第262図） 1・2は白色研磨土師器の塊である。いずれも高台が付き、器表面はナズ調整とミガキ調整が行われている。3～5は底部に回転糸切り痕が認められる土師質土器で、3は小型の環、4・5は小皿である。6～8は甕、あるいは土鍋で、いずれも底部を欠損する。9は手押ね整形による小型の鉢で、器表面に指頭爪痕が多く認められる。10は須恵器の大甕で、口縁部外面に柳掻き波状文と辻線文が認められ、内面にはナズ調整がなされている。肩部付近の外面にはカキメ調整、内面には同心円当具痕が認められる。9は古墳時代前期、10は古墳時代後期の所産で、いずれも混入品と思われる資料である。



第264図 SK2113出土遺物（1/4）

白色研磨
土師器

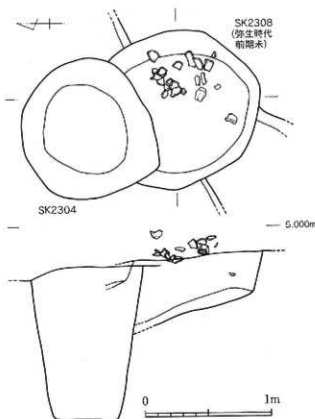
SK2304 (第265図) II-3区 (D17小区) で検出された土坑で、弥生時代前期末の土坑SK2304と切り合い関係を有する。遺構の平面形態は略円形プランで、その規模は径約1.05m、深さ約1.2mである。土坑の深さが深いため、天水などを溜める水溜め状あるいは井戸状の遺構とも推定したが、その性格を明らかにすることはできなかった。出土遺物は僅少であるが、埋土上位から中国産の白磁碗の口縁部破片を検出した。出土遺物や周辺の遺構の状況から、SK2304の所産年代は12～13世紀代に比定される。

白磁

SK2304出土遺物 (第266図) 図示したものは、中国産白磁の口縁部破片である。口縁端部を飞縁状に成形する。森田勉・横田賢次部分類⁽²⁾のIV類に属する資料である。



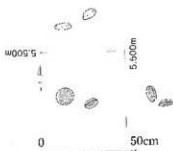
第266図 SK2304出土遺物 (1/4)



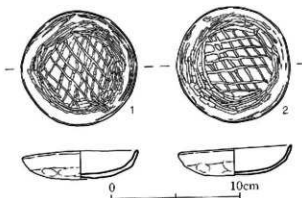
第265図 SK2304実測図 (1/30)

SX4001 (第267図) IV区 (G24小区) で検出した性格不明の遺構で、和泉型瓦器皿2個体を埋置したものである。瓦器皿の出土地点と周辺の土壌が類似しており、遺構のプランを確認できていない。なお、当該遺構の南東約180mに位置する東田宮遺跡第1次調査では、和泉型瓦器皿3個体を副葬する土坑墓SX020⁽³⁾が検出されており、本遺構との関連性が注目されるが、SX4001は単独の遺構であるため、土坑墓ではないと判断している。遺構の所産年代は、瓦器皿の年代観から12世紀代に比定される。

和泉型
瓦器皿



第267図 SX4001実測図 (1/20)



第268図 SX4001出土遺物 (1/3)

註(2) 森田勉・横田賢次「大宰府出土の輸入中国内器について」(『九州歴史資料研究論集』第4集 九州歴史資料館 1978年)

(3) 大分市教育委員会「東田宮遺跡-大分市U字野所遺跡の発掘調査報告書-」(1999年) 22～25頁

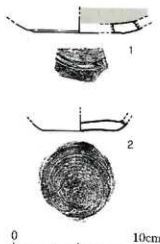
東田宮遺跡第1次調査SX020出土の和泉型瓦器皿は、見込みの筒状が椀子状ではなく、平縁状でないしは不定方向のものとなる。第3次調査SX4001のものよりも、型式学的に後出の資料である。

和泉型
瓦葺器

SX4001出土遺物 (第268図) 1・2は和泉型瓦葺器で、見込みに格子状の暗文が施され、口縁内面にも螺旋状のヘラミガキが認められる。口縁外面にはナデが施され、底部付近には指頭庄痕が多くみられる。いずれも近畿地方からの搬入品と断定できる資料で、それらの所産年代は12~13世紀代に比定される。

内黒土加飾

1-3区柱穴出土遺物 (第269図) 1 3区から検出された柱穴の中で、2基から土器小片が出土した。遺構の所産時期を推定する上で参考になる遺物であるため、ここで紹介する。なお、柱穴の位置や平面図等は第148図(92頁)を参照されたい。1はSP1302出土の内黒土加飾で、外面はナデ調整が施され、内面は黒色を呈している。小片であるため、詳細な時期は不明であるが、9世紀代の所産であろう。2はSP1303出土の土師質土器小皿で底部外面に右回転の回転系切り痕が認められる。当該資料も破片であるため、詳細な所産時期は不明であるが、12~13世紀代の所産であると考えられる。

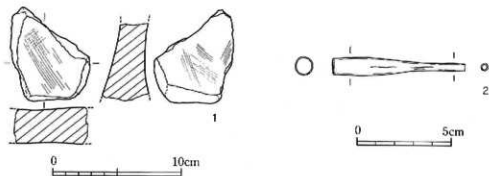


第269図 1-3区柱穴出土遺物 (1/3)

SD1109 1-1区(X6小区)で検出された近世の溝である。東田家遺跡第3次調査では近世以降の遺構は発掘調査の対象としていないが、古墳時代前期の溝SD1111と重複した位置に構築されていたため、遺構番号を付して、掘り下げと遺物の回収を行ったものである。遺構の埋土上位の一部は重機によって掘り下げを行っている。SD1111の上層断面(第132図、79頁参照)の検討と併行して当該遺構の断面観察を行ったところ、複数の溝が切り合っていることを確認したが、いずれも近世以降の遺構と判断したため、詳細な掘り分けを行わなかった。回収した遺物の中に、煙管と磁石を検出したため、図示して報告する。

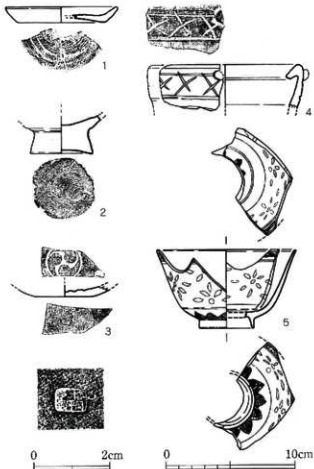
煙管
磁石

SD1109出土遺物 (第270図) 図示した遺物は、1が粘板岩を素材とする磁石、2が青銅製の煙管吸口である。2の煙管は間違いなく近世以降の遺物であるが、1の磁石については古墳時代以前の所産である可能性も考えられる。その他、図示していないが、陶磁器類若干が出土しているほか、前節で提示した古墳時代の所産と考えられる有孔土錘(第256図1)や土器片加工品(同56)なども混入していた。



第270図 SD1109出土遺物 (1は1/3、2は1/2)

その他の遺物 (第271図) 遺構に帰属しない、その他の遺物をここで紹介する。1はⅢ-2区 (F24小区) から出土した土師質土器小皿で、口縁部が外傾気味に開く器形を呈し、底部外面には回転糸切り痕が認められる。SK2113からの出土遺物 (第262図5、185頁) に類例がある。12~13世紀の所産であろう。2はⅢ 2区 (G21小区) から出土した土師質土器の台付杯で、底部に厚い脚柱部を有する。当該資料の所産年代も12~13世紀に比定される。3は白色の精選された胎土をもち、型打ち成形によって製作された土師質土器の小皿である。見込みには凹文が打ち出されており、底部外面には「博多平岡造」の刻印を有する。この種の土師質土器小皿は明治時代に福岡県福岡市 (博多区) で生産された製品であることが判明している。大分県下の遺跡では、別府市照湯遺跡⁽⁴⁾で同種の製品の報告例がある。4はⅢ-1区から採集された肥前陶器 (唐津焼) で、折り返しによって成形された口縁部の外面にヘラ描きによる「×」状の文様を施す。また、口縁外面に小さな粘土粒が貼付されている。16世紀末葉から17世紀初頭に比定される唐津焼の水指である可能性が高い。5は口縁内外面と胴部外面下位に青花文様を有する磁器碗で、胴部中央には透かし彫りによる文様が施されている。「笠手」と通称される中国清朝時代に製作された磁器で、18世紀後半以降に比定される製品である。

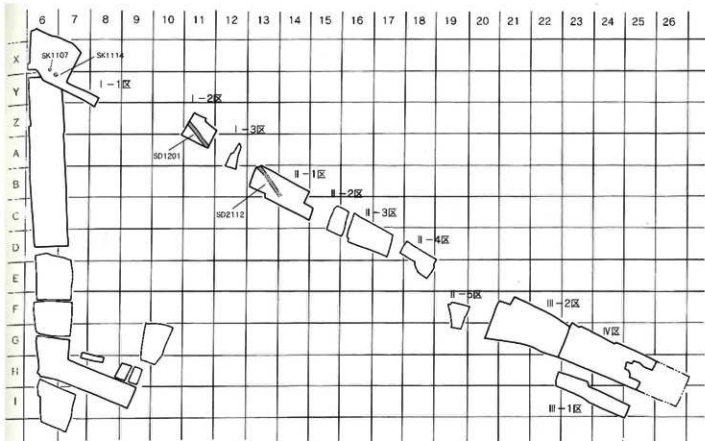


第271図 その他の遺物 (1/3、3の刻印は実大)

「博多
平岡造」

滑石磁器
笠手

註(4) 大分県教育委員会『照湯遺跡』大分県文化財調査報告書第154編 (2003年) 第15図24、14頁



第272図 時期不明の遺構 (1/1,200)

第6節 時期不明の遺構

概要 本項目では、出土遺物が少ないなどの理由で詳細な時期を確定できない遺構を報告する。報告の対象とする遺構は、SK1107・SK1114・SK1201・SD2112の4基である。

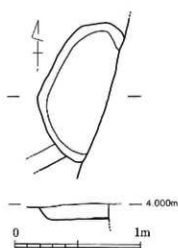
第10表 時期不明の遺構一覧

地区	遺構名称	遺構の性格	時期	注目すべき遺物	備考	掲載頁
I-1区	SK1107	土坑	不詳		遺物量少のため、時期不明	189
	SK1114	土坑	不詳		遺物量少のため、時期不明	189
I-2区	SD1201	溝	不詳		遺物量少のため、時期不明	189
	SH2111	住居跡?	不明		遺物量少のため、時期不明	—
II-3区	SD2112	溝	不詳	遺物量少のため、時期不明	189	
	SK2301	土坑	不明	遺物量少のため、時期不明	—	

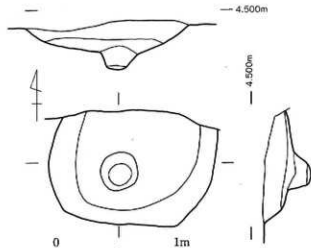
時期不明の
土坑

SK1107 (第273図) I-1区(X7小区)で検出された土坑である。遺構の平面プランは不整形楕円形を呈し、西側は調査区外に伸びる。その規模は南北1.1m、東西0.5m、深さ12cmである。周辺に弥生時代前期末の貯蔵穴や土坑が散在するため、SK1107も当該時期の所産である可能性が考えられるが、出土遺物が皆無であるため断定できない。また、弥生時代前期末の貯蔵穴や土坑であるとしても、その規模が非常に小さいことになる。従って、遺構の所産時期は不明である。

SK1114 (第274図) I-1区(Y7小区)で検出された土坑である。遺構の平面プランは不整形楕円形を呈し、北側は攪乱によって破壊されている。その規模は南北0.9m以上、東西1.3m、深さ約20cmである。土坑底面より、径約30cm、深さ15cmのピットを検出した。当該遺構も周辺の状況から、弥生時代前期末の所産である可能性が考えられるが、出土遺物が皆無であるため断定できない。従って、遺構の所産時期は不明である。



第273図 SK1107実測図 (1/30)



第274図 SK1114実測図 (1/30)

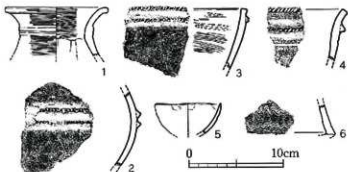
時期不明の
溝

SD1201 Ⅰ-2区 (Z11~A11区) を斜めに縦走するような形で検出された溝である。溝は北西から南東へ直線的に伸びているが、A11小区の南端部でわずかに南方向に屈曲するような状況が伺える。規模は長さ約10.3m、幅約1.0m、深さ約40cmである。Ⅰ-2区に集中する弥生時代前期末の遺構をすべて切っている。出土遺物は僅少で、弥生時代前期末の土器と古墳時代前期の土師器ほかが少量認められるに過ぎない。遺構の所産時期は古墳時代前期以降に比定される可能性が考えられるが、出土遺物が少なく、決め手に欠ける状況である。

古墳時代
前期以降?

SD1201出土遺物 (第275図)

1~4は弥生時代前期末の土器である。1は壺の口縁部で、頸部に削出突帯をもつ。2は胴部の破片で、外面中位に2条の刻目突帯を有する。3は下城式土器の甕である。4は外反する口縁部に直接刻目を施し、口縁外面に1条の刻目突帯を有する。



第275図 SD1201出土遺物 (1/4)

また、刻目突帯の下位に1条の

沈線文を施している。5・6は古墳時代前期の土師器である。5は手捏ねによって成形された小型の鉢で、内外面に指圧痕が認められる。6は在地系(安国寺式系)の複合口縁壺の二次口縁で、外面に2単位の櫛描波状文が認められる。

SD2112 Ⅱ-1区のB13小区を斜めに縦走するような形で検出された溝である。Ⅱ-1区で検出された古墳時代の住居跡群と切り合い関係を有するが、それぞれの埋土が非常に類似しており、明確に切り合い関係を確認することができなかった。規模は長さ約10.5m、幅約1.0m、深さ約40cmである。出土遺物は土器小片が少量出土したのみで、遺構の詳細な所産年代を確定できない状況である。

第5章 自然科学的分析

東田室遺跡の動物遺体

はじめに

大分県大分市田奈町に位置する東田室遺跡は、弥生時代前期末から中世までの複合遺跡である。沖積低地上の遺跡からは、弥生時代前期末の貯蔵穴、古墳時代の住居跡や溝、奈良・平安時代の土坑などが確認された。

ここでは、弥生時代前期末の貯蔵穴と古墳時代中期・後期の住居跡から出土した動物遺体の同定結果を報告する。

資料と方法

資料は、いずれも発掘現場で目視・採集されたものである。資料1は、廃絶後の貯蔵穴に土器とともに廃棄された可能性が高いものと考えられる。資料2は、住居跡の廃棄遺物などで遺棄されたものである可能性も考えられるが、調査所見からは判断できないものである。資料3は、廃絶後の住居跡に多量の土器片と混在して出土したものである。

これらについては現生標本と比較し同定をおこなった。哺乳類の現生標本は、国立歴史民俗博物館西本豊弘氏の所蔵標本を参照させていただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

同定された動物遺体は大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管されている。

結果と考察

同定結果を第11表に示す。確認された動物遺体は、ウマ・イノシシ・シカの哺乳類3種である。以下に同定結果および出土位置・保存状態などについて時代の古い順に記載する。

(1)イノシシ *Sus scrofa* (資料1・第276図)

SK4018 (弥生時代前期末の袋状貯蔵穴)の埋土中位から、左上顎骨、右前頭骨および左側頭骨～後頭骨が検出された。同一個体のものであるが、接合しない。骨の形は残っているが、劣化が進んで脆弱化している。上顎の歯列は乳臼歯を残し、M1は萌出完了、M2は未萌出であることから、生後約半年の若い個体と推定される。他に同じ頭蓋のものと思われる骨片も若干検出されているが、切歯・犬歯や右上顎歯がみられないことから、頭蓋全体が存在していた可能性は低く、おそらく破片化した頭蓋骨の一部が貯蔵穴に廃棄されたのではないかと推測される。なお、出土した部位によって野生個体かブタかを判断することは困難である。

(2)シカ *Cervus nippon* (資料2・第276図)

SH2501 (5世紀末の住居跡)の埋土中から中予骨 (近位端から骨幹中央付近まで) が検出された。骨幹の割れ口はスパイラル・フラクチャーに類する形状をなしており、人為的に打ち割られたものである可能性が高い。全体が強く焼けており、灰色～暗灰色を呈する。この住居跡は焼欠住居ではないため、人為的に焼かれた可能性もあるが、確実でない。

(3)ウマ *Equus ferus* (資料3・第277図)

SH3204 (6世紀後半の住居跡)の埋土上部において、左右の上顎頰歯 (P2～M3) が植立時の位置関係を保った状態で検出された。歯以外の骨体はみられなかった。性別は判断の指標となる犬歯を含む吻部の保存状況が明確でないため、判断できない。年齢は、咬合面が土中にあり (本資料は上記臼歯列が土ごと取り上げられているため)、歯冠高の正確な計測はできなかったが、5.5～7才程度の成熟と推定される。おそらく本来は頭蓋骨全体が埋蔵されていたが、骨が溶解消失し、臼歯

イノシシ
SK4018
弥生時代
前期末

シカ
SH2501
古墳時代
中期後半
(5世紀末)

ウマ
SH3204
古墳時代
後期
(6世紀
後半)

東田室遺跡の動物遺体

のみが残されたものと思われる。ただし下顎骨が検出されていないことから、下顎骨はもともと存在していなかった可能性が高い。すなわち上顎骨（を伴う頭蓋骨）が単独で埋蔵されていたと推定されることから、このウマは死後いったん解体または腐朽によって頭蓋骨・下顎骨が分離したと考えられ、意図的に安置または埋納されたものである可能性も考えられる。

おわりに

本遺跡の資料3点を同定した結果、弥生時代のイノシシ、古墳時代のシカ・ウマであった。出土量が少量であるが、本遺跡における動物利用の一端が明らかとなった。

今後こうした資料の蓄積により、当該時期の環境・資源利用の様相がいつそう明らかになるものと期待される。

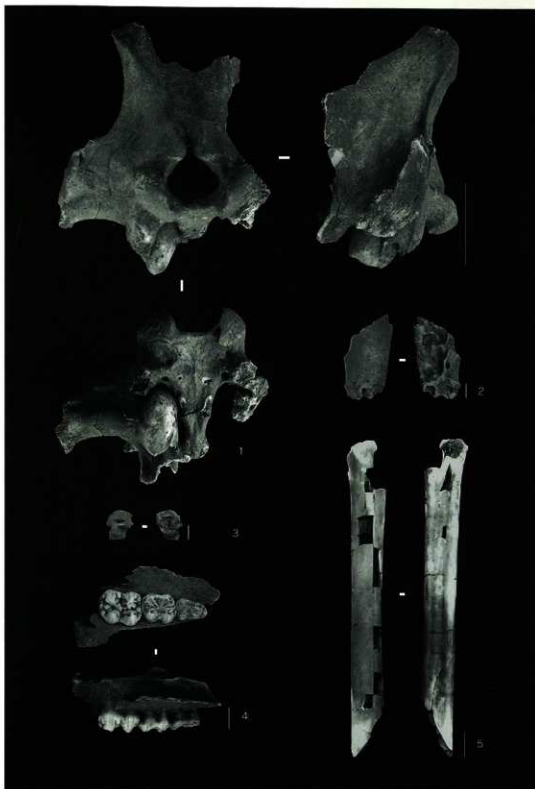
(孔 智賢 (パレオ・ラボ)・樋泉 浩二 (早稲田大学))

参考文献

久保和土・松井章「第9章家畜〈その2-ウマ・ウシ〉」(西本豊弘・松井章編『考古学と動物学』1999年 169-208頁)

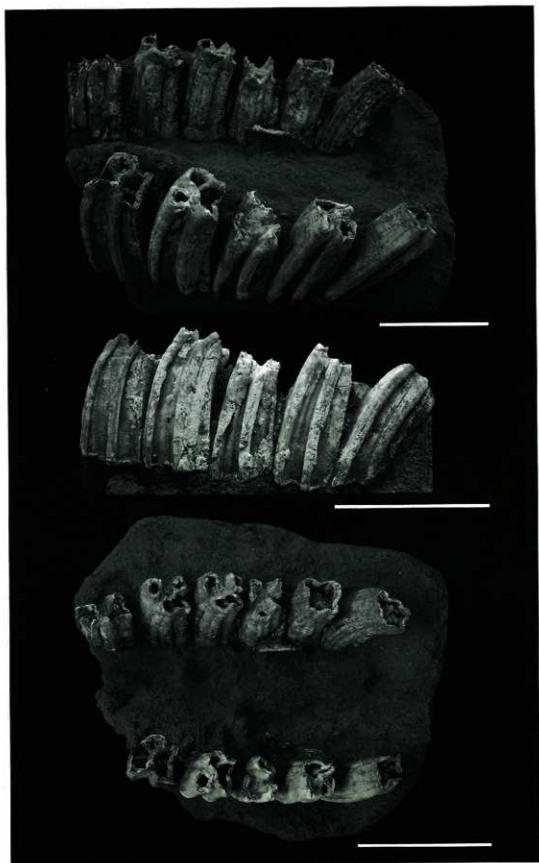
第11表 東田室遺跡から採集された動物遺体の同定結果

資料番号	遺 構	時 代	出土位置	埋土中	部 位	備 考
1	SK4018 (袋状貯蔵穴)	弥生時代前期末	埋土中	イノシシ	後頭骨～左側頭骨	
					右前歯骨	
					左下顎骨 (m2・m3・M1・M2)	M2は未検出。
2	SH2501 (住居跡)	古墳時代中期 (5世紀末)	埋土中	シカ	中手骨 (近位端～骨節)	全体に散らけている。
3	SH3204 (住居跡)	古墳時代後期 (6世紀後半)	埋土上位	ウマ	左上顎骨 (P2・P3・P4・M1・M2・M3) 右上顎骨 (P2・P3・P4・M1・M2・M3)	本表は顎骨全体 (下顎骨を除く) が存在していたものと思われるが、臼歯のみを残して、骨は溶解・消滅している。



第276図 東田窪遺跡出土の動物遺体①

- 1～4. イノシシ (資料1: SK4018. 弥生時代前期末. 1. 後頭骨～左側頭骨 (a: 後面, b: 左側面, c: 底面) 2. 右前頭骨 3. 側頭骨岩様部 4. 左上顎骨),
 5. シカ (資料2: SH2501. 古墳時代中期. 中手骨) スケールバーは1: 5 cm, 2～5: 1 cm



第277図 東田壙遺跡出土の動物遺体②
ウマ (資料3: SH3204. 古墳時代後期. 上顎歯)

第6章 総括

第1節 東田室遺跡における遺構・遺物の様相

近年、東田室遺跡として周知されている範囲内で、発掘調査が頻繁に実施されている。1997年には大分市教育委員会による共同住宅建設に伴う第1次調査が、2002年から2003年には同じく大分市教育委員会による都市計画道路印室町春日線建設に伴う第2次・第4～11次調査が、2002年から2003年には大分県教育委員会による大分駅周辺連続立体交差事業に伴う東田室遺跡第3次調査が行われた。これらの発掘調査によって、東田室遺跡は弥生時代前期末から中世にかけての大規模な複合遺跡であることが明らかになりつつある。本項目では、既に報告がなされた大分市教育委員会による調査地点の成果も加味しながら、現時点で判明している東田室遺跡における遺構・遺物の様相を概説しておきたい。

弥生時代
前期末

弥生時代前期末(第278図上段)に比定される遺構は、そのほとんどが貯蔵穴である。貯蔵穴以外の遺構としては、鹿葉土坑と推定される不整形な土坑や性格不明の溝などが少数検出されているに過ぎない。貯蔵穴は平面形態が円形、断面形態が袋状をなす穴倉が大半を占める。貯蔵穴はBC6・7区付近やGH22～24区付近に集中する傾向をみせるものの、現状では調査区の制限から、集落構成や遺構分布の解釈にまで言及するには時期尚早のようである。

円形袋状
貯蔵穴の
耐久要領

円形袋状の貯蔵穴は、壺などの土器に食糧を入れて保管する機能をもった遺構である。遺跡によっては、貯蔵穴底面から土器が使用されたままの状態で見出される事例がある。しかし、東田室遺跡の貯蔵穴は第1次から第11次調査までのすべての遺構に当たっても、土器が使用された状態で検出された事例はないようである。土器が一定量出土する場合は、本来の貯蔵穴としての機能を停止した後に鹿葉土坑として再利用されたものがほとんどである。このことは貯蔵穴が管まれた基盤土が砂質で脆弱であることから、壁などの崩落が頻りに起こっていたことが想定され、遺構の耐久期間が短かったことに原因があるろう。

土器の
特徴

貯蔵穴や土坑から出土した土器は、その大半が弥生時代前期末の特徴を有するものである。出土した壺の一部には頸部や肩部に段または削出突帯をもつ資料が少数存在し、弥生時代前期末より古い傾向をもつものが存在する。ただし、これらについても肩部に沈線や刻目突帯を有する壺や定型化した下城式土器の壺と共存している場合が多く、一括資料としては前期後半にまで遡ると考えることは難しいと思う。しかしながら、今後の調査で、段や削出突帯の壺のみが主体となる一括資料が発見され、東田室遺跡の起源が弥生時代前期後半に遡る可能性は残っている。壺については定型化した下城式土器が主体を占めるほか、頸部付近に多条沈線を施す西部瀬戸内系のものが一定量認められる。また、口縁部が直立し、その端部外面に直接刻みを施す壺(第57図4・5)などもあり、型式学的に古相を呈するものであるが、当該資料も取りあえず弥生時代前期末の土器と考えておきたい。その他、小破片ではあるが、波状口縁を有する類例の少ない資料(第34図17)なども検出されている。以上の土器相は下部遺跡第25次調査第III層・下部桑市遺跡第12・13層⁽¹⁾の出土土器と類似点が多く、弥生時代前期末の状況を良好に示す資料と判断される。

古墳時代
前期

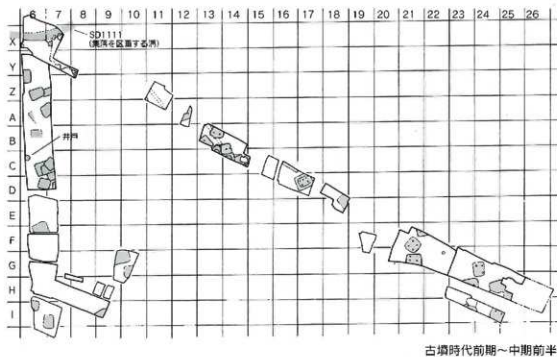
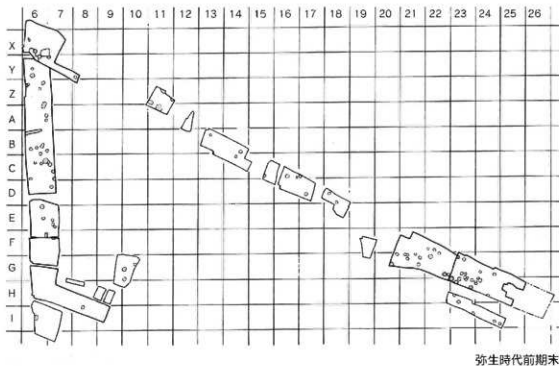
東田室遺跡では弥生時代中期から後期前半にかけては、遺構・遺物が見つからない。次に、遺跡がピークを迎えるのは古墳時代前期から中期前半(第278図下段)である。古墳時代前期には

註(1) 大分県教育委員会「卜部遺跡発掘調査報告書第61集(2005年)」

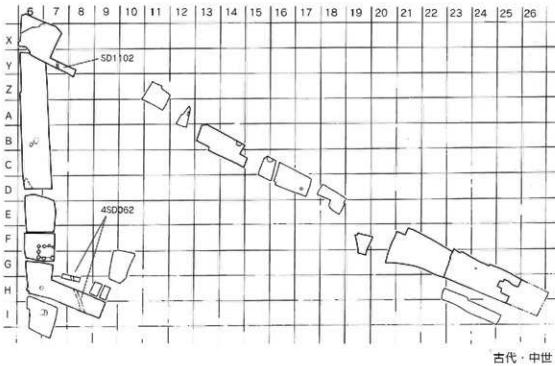
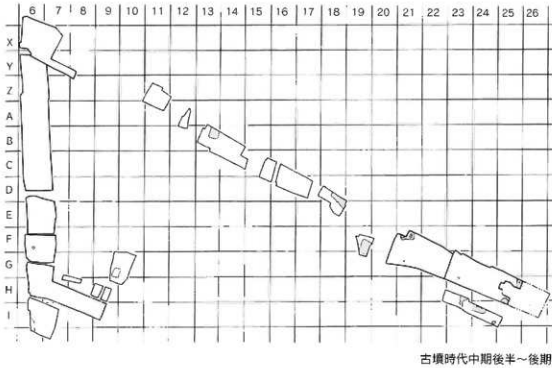
大分県教育委員会「卜部桑市遺跡」(大分県文化財発掘調査報告書第80集(1989年))

大分県教育委員会「卜部桑市遺跡Ⅱ」(大分県文化財発掘調査報告書第89集(1929年))

第1節 東田室遺跡における遺構・遺物の様相



第278図 東田室遺跡における遺構の変遷① (S=1/1,500)



第279図 東田室遺跡における遺構の変遷② (S=1/1,500)

第1節 東田室遺跡における遺構・遺物の様相

X6・7区付近で集落を区画する溝(環濠または条溝?) SD1111が掘削されている。SD1111は古墳時代前期の時間幅の中で埋没が終了しており、溝の埋没後も引き続き集落の存続がなされているようである。溝以外の遺構としては、多数の住居跡のほか、第2次調査では井戸も検出されている。住居跡には支柱穴が4本柱のものが認められるが、支柱穴が特定できない遺構も多い。このことは、やはり遺跡を形成する基盤層が脆弱な砂質土であり、規格的な建物構造を構築できなかったことに原因があるのかもしれない。当該時期の住居跡から出土する土器には焼成後の穿孔などが行われているものが散見され、その出土状況も床面よりやや浮いた状況で出土するなど、住居の腐蝕崩壊によって遺棄あるいは廃棄されたものと解釈できるものが多い。報告や遺構によっては、調査時の土層観察や土器の出土状況の提示が不十分な場合があり、今後の調査で留意しておきたい事象である。また、東田室遺跡の南西約1.4kmには前期古墳である亀甲古墳が存在していたことが確認されており、当該時期の東田室遺跡の集落とどのような関係を有するのかも今後の課題となろう。

古墳時代
中期前半

古墳時代中期前半では、大量の土器を出土した住居跡SI12106や絵土器が出土したSH3205の一括資料が注目される。

古墳時代中期後半から後期(第279図上段)には遺構数が激減するものの、一定量の遺構は構築されている。5世紀末葉前後の所産である住居跡SI12501からは土師器甕の把手が出土した。東田室遺跡では当該時期のカマドを付設した住居跡は確認されていないが、甕の存在はカマドの存在を示唆している可能性が高い。今後未調査の地点から、5世紀代に遡るカマド付きの住居跡が発見される可能性が考えられる。

古墳時代
中期後半

古墳時代
後期

古墳時代後期では検出された遺構は少ないものの、Ⅲ-2区やⅣ区の遺物包含層から、有孔土鍾などの遺物が一定量出土した。有孔土鍾の出土のみをもって、当該段階の集落を漁村と位置づけることはできないが、当時の海岸線に近い地点に位置する遺跡立地から、このようなことも視野に入れておきたい。また、包含層から出土した結晶片岩製装身具の中に未製品が存在しており、遺跡内で装身具類の製作が行われた可能性も考えられる。また、第4次調査4SX030⁽²⁾では7世紀前半の須恵器とともに布置式段階の土師器の大型破片が露上げされ、見かけの上で共存したような状況が検出されている。古墳時代後期に一定規模の整地や地形の変更が行われたことを物語っている。

古代

古代・中世(第279図下段)になると、遺構密度はさらに希薄となる。ただ、大分市教育委員会担当の第2・4～11次調査では8～9世紀段階の獨立柱建物や土坑などが調査され、良好な緑釉陶器の破片なども出土している。また、第4次調査で検出された溝4SD062と第3次調査のSD1102が同一遺構である可能性も示唆されている。4SD062とSD1102が同一遺構とすれば、その長さは100m近くに及ぶ区画溝となり、今後その性格が問題となろう。さらに将来、未調査の地点を丹念に発掘調査する機会があれば、例えば南金池遺跡⁽³⁾のように、海岸線近くに立地する当該時期の集落を発見できる可能性が考えられよう。

中世

中世の遺構の所産年代は、12～13世紀代に集中する。この中で和泉型瓦器皿2枚を埋置したSX4001は、その性格を明らかにできなかったものの、注目しておきたい遺構である。中世段階の遺構は第1次調査でも和泉型瓦器皿を副葬した土坑墓などが検出されているが、その全体像はいまだ不明の状況にある。今後、周辺地点の調査がさらに期待されることである。

注(2) 大分市教育委員会『東田室遺跡2』(大分市埋蔵文化財発掘調査報告第55号 2005年) 48頁

大分市教育委員会『海や川に近い集落-東田室遺跡第2次・4次～11次調査-(発見ファイル017)』(『大分市文化財隊員カド』2005年)

(3) 大分市教育委員会『南金池遺跡』(大分市埋蔵文化財調査報告第64号 2006年)

第2節 絵画土器について

東田室遺跡第3次調査で最も注目に値する遺物が、絵画土器（第185・186図、巻別図版参照）である。当該資料は古墳時代中期前半に比定される住居跡SH3205から出土したもので、ハラ書きによる原始的な絵画が土器の胴部全周に描かれている。

絵画土器は大型の複合口縁甕であるが、口縁部が退化しており、しかも口縁部の中心軸が胴部の中心軸から外れているため、口縁部と胴部の接合状況が歪んだ印象を与えるものである。絵画には曲線で描かれた三角形のモチーフが7単位、四角形のモチーフが1単位認められ、長い直線と緩やかな弧線も1本づつ認められる。また、欠損した部位が多いものの、魚の背鱗を思わせるような三角形の表現が少なくとも5単位以上、胸鱗を思わせるようなモチーフ2単位に直線数本が組み合わされたような表現もみられる。これらの絵画が何を表現しているかは不明であるが、古墳時代にこの絵画を描いた工人には個別の文様ひとつひとつに意味があり、これらの文様の組み合わせが何らかの「物語」を構成するものであったことが推定される。その物語とは日常生活の具体像ではなく、何らかの精神世界を表現する物語—例えば「神話」と呼ばれるようなもの—と想定される。

絵画の文様の中で注目されるものは、胸鱗・背鱗状のモチーフである。このモチーフは、西日本地域の弥生時代後期から古墳時代の絵画土器の類例⁽⁴⁾などから、「竜」を表現したものである可能性が高いと考える。竜は古来より瑞獣（めでたい動物）として神聖視されてきた想像上の動物で、その起源は中国に求められる。竜の文様は様々な祭祀で用いられ、中国の精神的な文化が大陸から流入してきたことを示す上で重要なものと考えられている。この「竜」のモチーフは絵画全体で中心的な位置を占める文様と思われるが、当該文様を描いた部位が意図的に破砕されていることに注意を払っておきたい。この部位は整理の最終段階に至っても接合する破片が見つからなかったことから、文様の部位が破砕された後、遺構外（もしくは遺跡外）に持ち出されたものと推定される。さらに、当該土器の口縁部についても意図的に切斷されたと思われ、胴部が出土した地点の近接した位置に置かれていた。また、土器の胴部下位には鉄器等でなされたと推定される焼成後の穿孔が認められた。

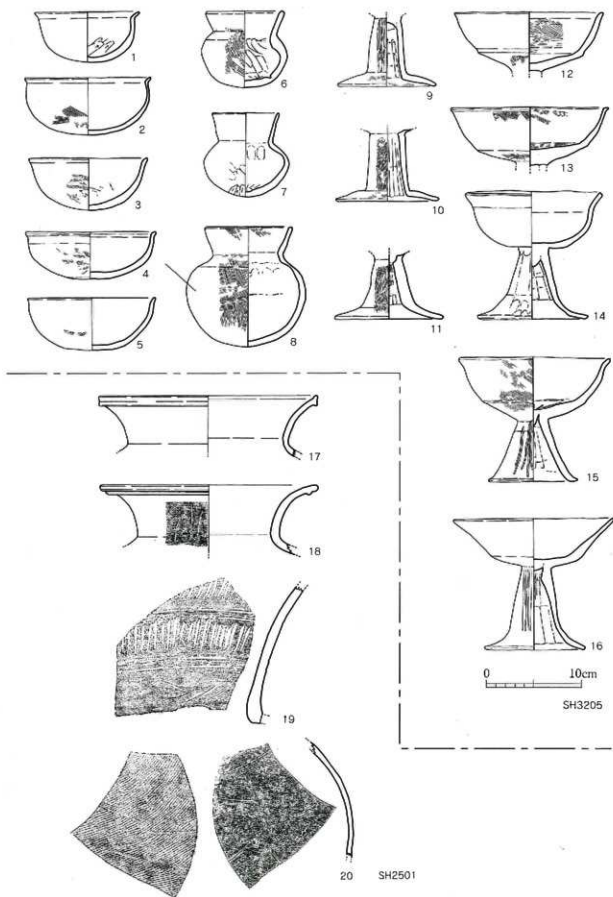
以上の検討から、絵画土器は遺構内に廃棄あるいは遺棄される時に、口縁部を切斷し、竜の文様部位を意図的に破砕したものと推定される。竜の文様部位は住居跡埋土から出土しなかったことから、遺構外もしくは遺跡外に持ち出された可能性が高いと考える。上記のように、東田室遺跡の絵画土器はそのプロポーション・文様・廃棄または遺棄にいたる経過ともに特殊な位置づけがなされたものである。当該資料は古墳時代に生きた人々の精神世界や祭祀行為を考えるうえで、一般の資料であろう。

補遺 校正中に報告漏れの遺物があったことに気づいたため、次頁に図面を提示する。

第280図1～16は古墳時代中期前半の住居跡SH3205（122頁）出土の土器である。これらは絵画土器が出土した遺構—括弧資料の一部である。鉢や小型甕、高杯が認められる。17～20は古墳時代中期後半の住居跡SH2501（154頁）出土の須恵器である。いずれも甕で、第1型式4～5段階（TK23～TK47型式）に相当し、5世紀末前後に比定される。SH2501の所産年代を示唆する資料のひとつである。

絵画土器の
文様1竜の
表現意図的な
破砕SH3205
(古墳時代
中期前半)SH2501
(古墳時代
中期後半)

註(4) 春成吾郎「絵画から記号へ—弥生時代における農耕儀礼の伝承—」〔『国立歴史民俗学館研究報告』第35巻、1991年〕



第280圖 SH3205・SH2501出土遺物(補遺)(1/4)

写 真 图 版



東田室遺跡第3次調査全景



東田室遺跡第3次調査
1-1区



東田室遺跡第3次調査
1-2・1-3区

東田室遺跡第3次調査
I-1~3区 (東から)



東田室遺跡第3次調査
II-1区



東田室遺跡第3次調査
Ⅲ-1・Ⅲ-2区



東田室遺跡第3次調査
Ⅲ-1区



SK1101a・SH1101b・SH1101c 遺物出土状況



SK1101a・SH1101b・SH1101c 完掘



SK1103



SK1103 完掘



SK1104



SK1106



SK1112 検出状況



SK1112 完掘



SK1203



SK1203 石罅出土状況



SK1204



SK1205・SK1206



SK1207



SK1207 紡錘車出土状況



SK1208



SK1209



SK1210



SK1210 石器出土状況



SK2114



SK2115



SK2308



SK2313



SK2314



SK2315



SK2316



SK2401



SK2407



SK3103



SK3104



SK3111



SK3113



SK3201



SK3114



SK3114 遺物出土状況近景



SK3202



SK3207



SK3208



SK3207 · SK3211 · SK3212



SK3211



SK3213



SK3214



SK3215



SK3217・SK3218



SK3219



SK3221



SK3222



SK4003



SK4005



SK4006



SK4007



SK4008



SK4009



SK4013



SK4014



SK4015



SK4015 遺物出土状況近景



SK4015・4016



SK4019



SK4017



SK4017 遺物出土状況近景



SK4018



SK4018 獣骨出土状況



SK4020



SK4028



SK4021~4024



SK4023



SK4027



SK4027 遺物出土状況近景



Ⅲ-1区遺物出土状況近景①



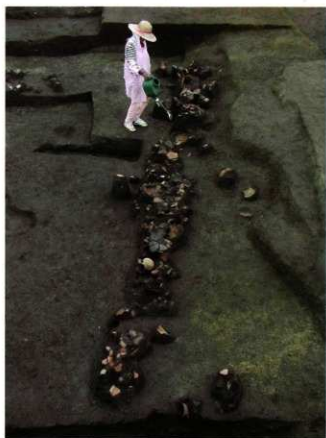
Ⅲ-1区遺物出土状況近景②



SD1111 検出状況



SD1111 遺物出土状況



SD1111 遺物出土状況



SD1111 土層



SH1201・SK1203



SH1301



SH1201 遺物出土状況



SH2101 遺物出土状況



SH2101 完掘出土状況



SH2102 遺物出土状況



SH2102 完掘出土状況



SH2106 遺物出土状況



SH2106 調査風景



SH2106 完掘状況



SH2107 遺物出土状況



SH2107 完掘状況



SH2108 検出状況



SH2108 遺物出土状況



SH2108 遺物出土状況



SH2108 完掘状況



SH2305 遺物出土状況



SH2305 完掘状況



SH2305 遺物出土状況



SH2305 鉄鏝出土状況



SH2305 銅鏝出土状況



SH2311 遺物出土状況



SH2311 瓦甃状況



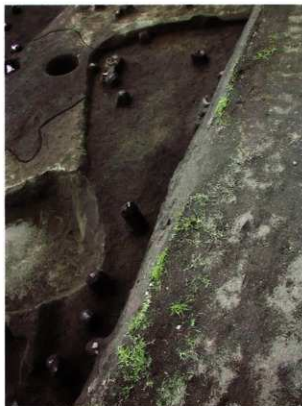
SH3112 遺物出土状況



SH3112 完掘出土状況



SH3112 遺物出土状況



SH3203 遺物出土状況



SH3203 完掘状況



SH3205 検出状況



SH3205 遺物出土状況



SH3205 完掘状況



SH3205 遺物出土状況



SH3205 絵画土器出土状況



SH3205 絵画土器出土状況
(後方右に見えるのが、接合する
口縁部の破片)



SH3206



SH4010 鉄剣出土状況



SH4010 遺物出土状況



SH4010 完掘状況



SH4012 遺物出土状況



SH4012 完掘状況



SH4026 遺物出土状況



SH4026 完掘状況



SK1108 遺物出土状況



SK1110 遺物出土状況



SK1110 紡錘車出土状況



SK1113



SK2105



SK3216



SX3220



SH2501 遺物出土状況



SH2501 完掘状況



SH2501 産飾品出土状況



SH3107 遺物出土状況



SH2403・2410 遺物出土状況



SH2403・2410 管玉出土状況



SH3204



SH3204 鹿骨出土状況



SH4002



SH4002 土鍾出土状況



SH4004 検出状況



SH4004 調査状況



SH4004 カマド検出状況



SH4004 遺物出土状況



SX3209



SX3101



SX4011



SK3102



SK2202 遺物出土状況



SK2202 完掘状況



SK2113 遺物出土状況



SK2113 完掘状況



SK2304



SK2304 遺物出土状況



SX4001 遺物出土状況





11-1



11-3



11-7



12-5



12-21



12-22

SK1103出土遺物(第11-12回参照)



19-5



34-4



47-1



20-10

SK1106出土遺物(第19-20回参照)



34-17

SK1208出土遺物(第34回参照)



47-2



47-3

SK2201出土遺物(第47回参照)

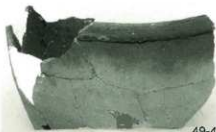


49-1

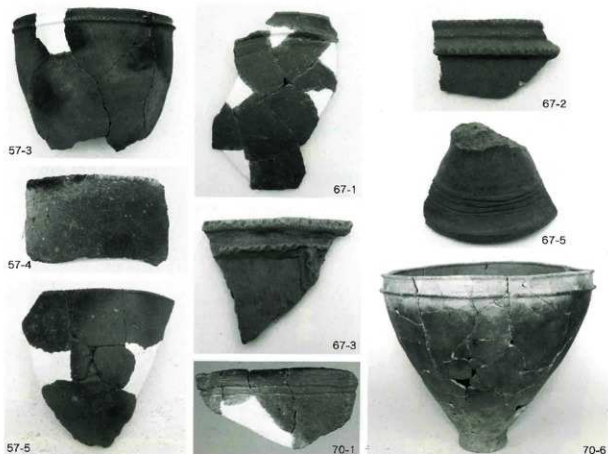


49-2

SK2308出土遺物(第49回参照)



49-4



57-3

67-1

67-2

57-4

67-5

67-3

57-5

70-1

70-6

SK2401出土遺物(第57図参照)

SK3111・SK3114出土遺物(第67・70図参照)



74-1

74-2

78-1

74-5

SK3202出土遺物(第74図参照)

SK3208出土遺物(第78図参照)



76-12

76-6

95-3

95-1

SK3207出土遺物(第76図参照)

SK4005出土遺物(第95図参照)



115-4

SK4023出土遺物(第115図参照)



119-7



119-8

SK4027出土遺物(第119図参照)



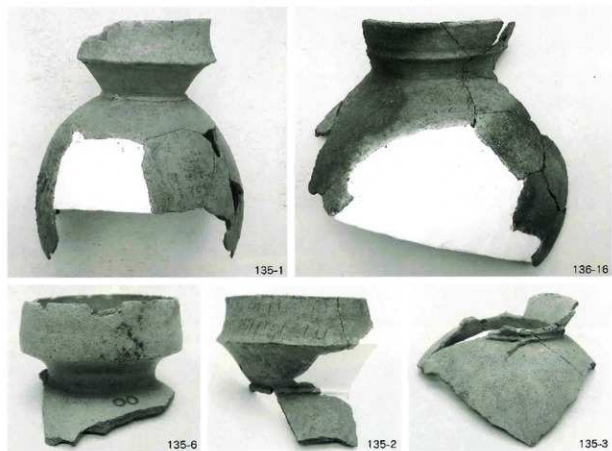
119-9



石磨丁(大型石磨丁を再加工する)(第126図参照)



SD1111b出土遺物(第133・134図参照)



SD1111a(X6区)出土遺物①(第135・136図参照)



SD1111a(X6区)出土遺物②(第137~139図参照)



SD1111a(X6区)出土遺物③(第139・140図参照)



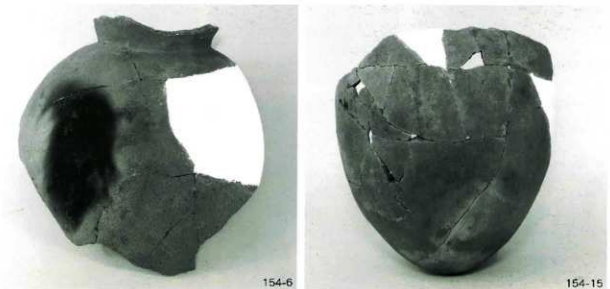
参考: 小型丸底土器の大きさ比較
(手前のふたつはSH3206出土の小型丸底土器(第192図2・4)、奥のものがSD1111出土の「巨大な小型丸高土器」(第139図64))



SD1111a(X7区)出土遺物(第142図参照)



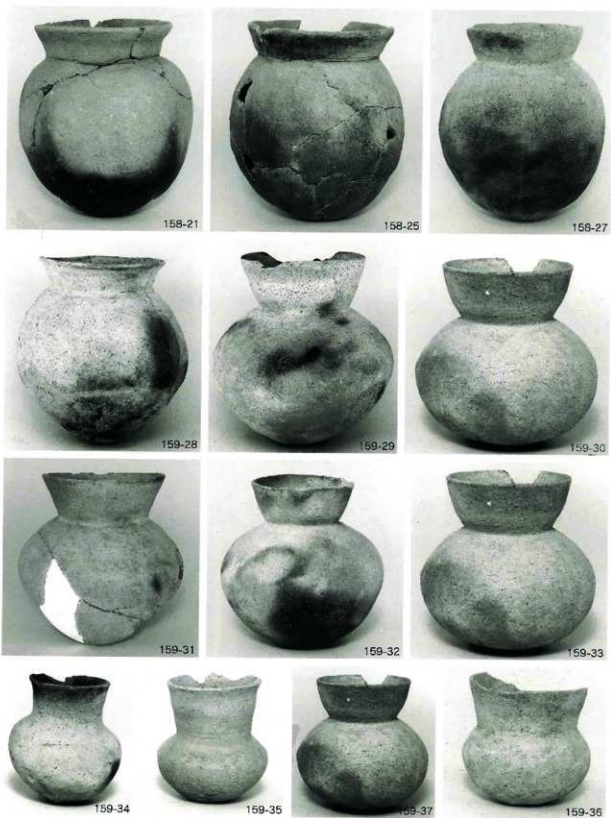
SD2101出土遺物(第151・152図参照)



SH2102a出土遺物(第154図参照)



SH2106出土遺物①(第156~158図参照)



SH2106出土遺物②(第158・159図参照)



159-38



159-40



159-41



159-42



159-43



159-44



159-46



159-48



159-49



160-58

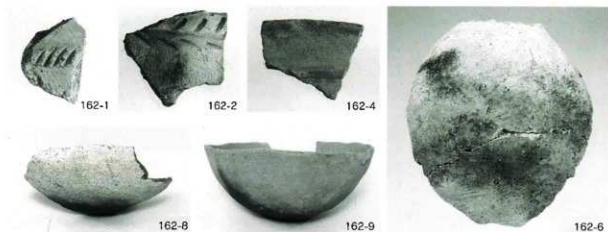


160-59



160-60

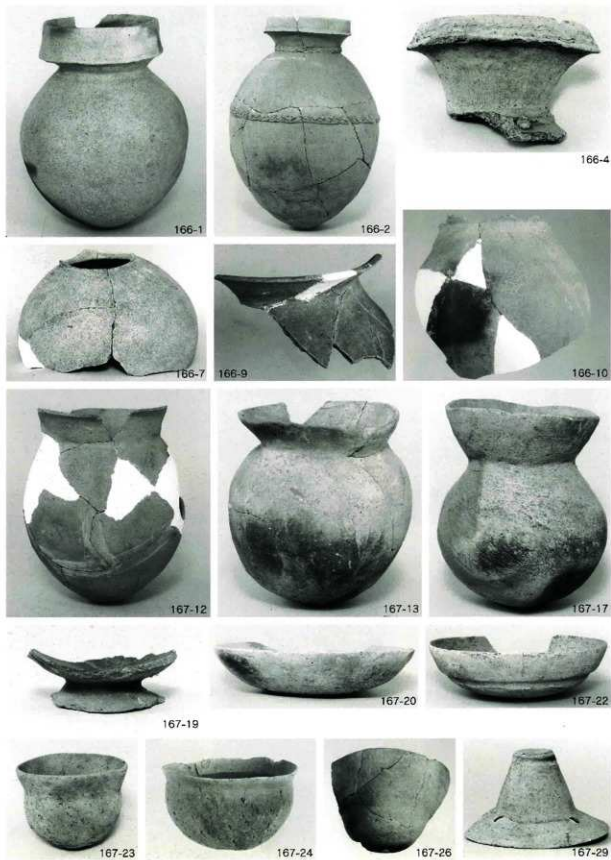
SH2106出土遺物③(第159・160図参照)



SH2107出土遺物(第162図参照)



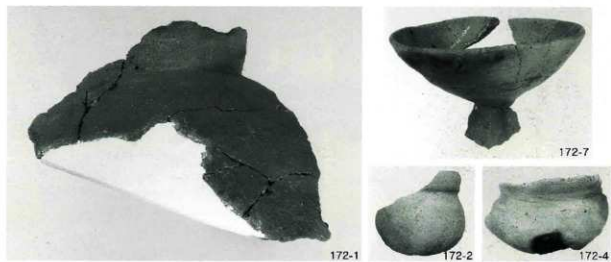
SH2108出土遺物(第108図参照)



SH2109出土遺物(圖166・167圖參照)



SH2305出土遺物(第169図参照)



SH2311出土遺物(第172図参照)



SH2404出土遺物(第174図参照)



178-1



178-4



178-2



178-5



179-7



179-9

SH3112出土遺物①(第178・179回参照)



179-10



179-15



180-17



180-23



180-20



180-21



180-24



180-22



180-26



180-27



180-28

SH3112出土遺物②(第179-180図参照)

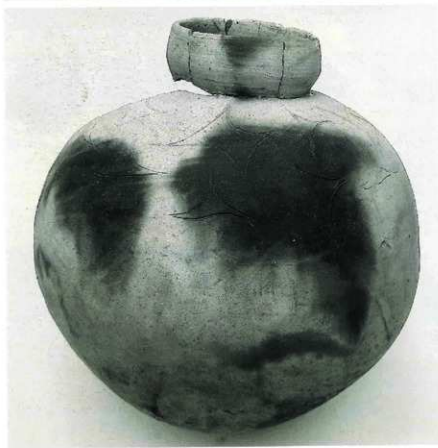


183-1

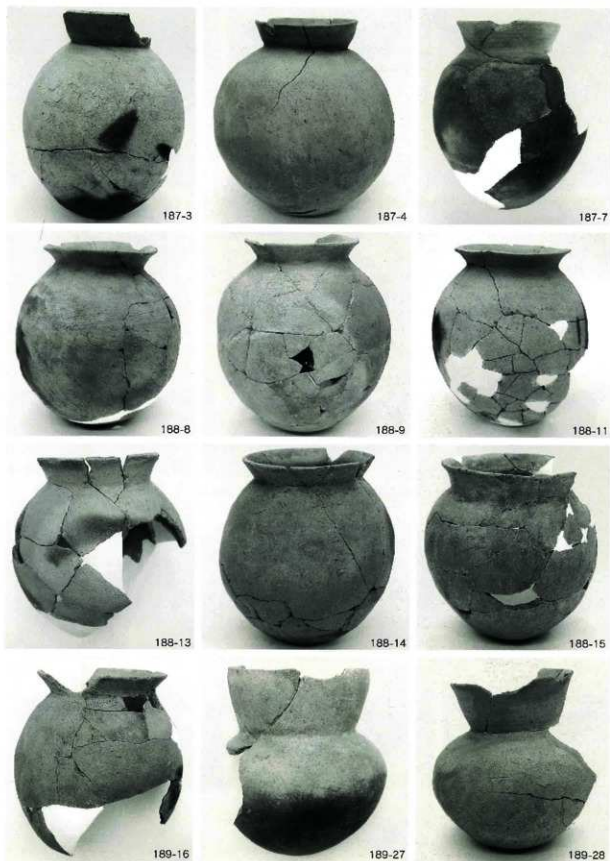


183-2

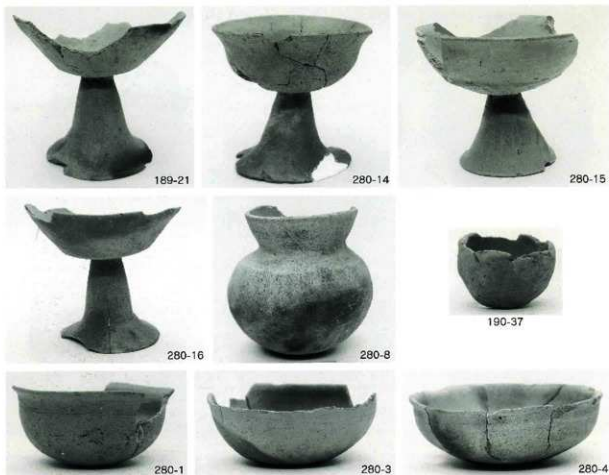
SH3203出土遺物(第183図参照)



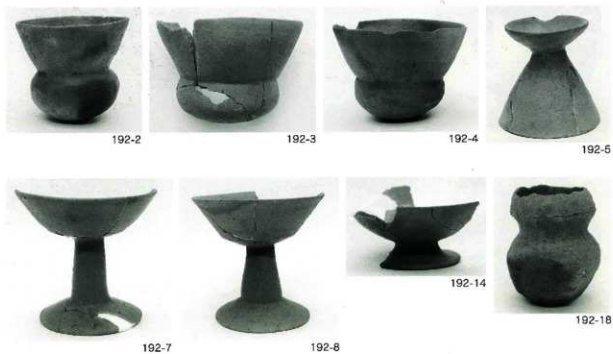
SH3205出土繪面土器
(第185圖參照)



SH3205出土遺物①(第187~189図参照)



SH3205出土遺物②(第189-190·280図参照)



SH3206出土遺物(第192図参照)



197-3



197-4



197-7



197-8



197-12



197-13



197-18



198-17



198-19



198-20



198-25

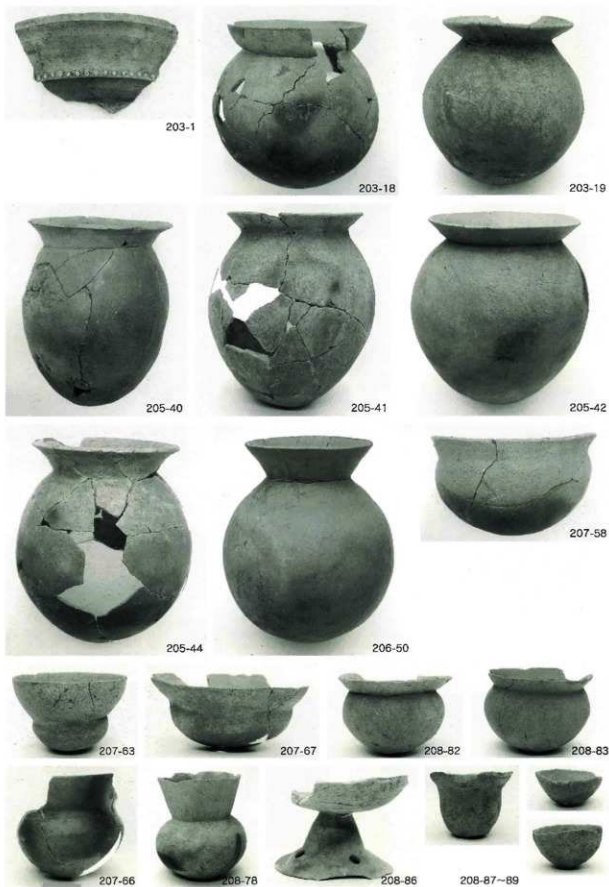


198-28

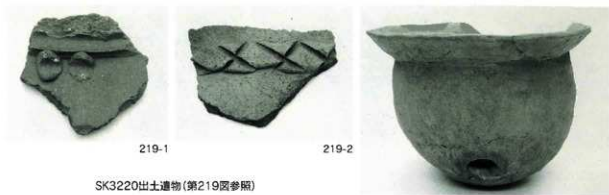


198-30

SH4012出土遺物(第197-198回參照)



SK1108出土遺物(第203~208図参照)



SH2501出土遺物①(第223~226図参照)



226-37



226-43



226-44



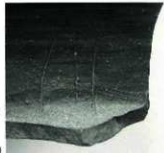
228-68



280-17



280-18



280-18 横断(ヘラ記号)

SH2501出土遺物②(第226・228・280図参照)



230-1



230-8



231-22



230-20



230-12

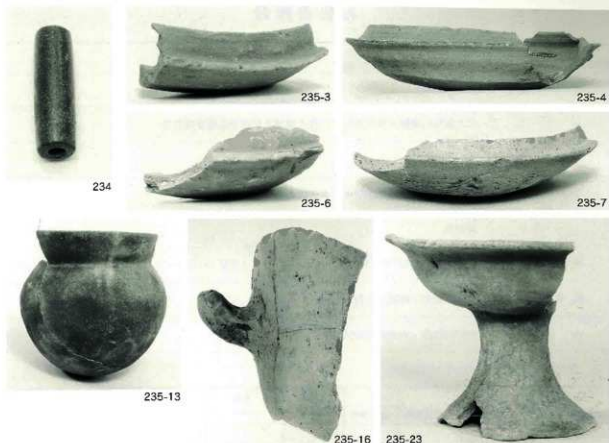


230-13

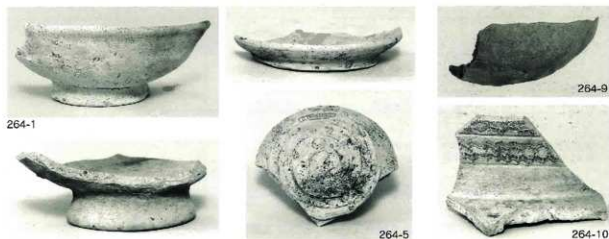


230-14

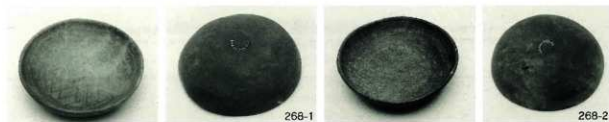
SH3107出土遺物(第230-231図参照)



SH2403・2401出土遺物(第234・235図参照)



SX2113出土遺物(第264図参照)



SX4001出土遺物(第268図参照)

報告書抄録

ふりがな	ひがしたむろいせき							
書名	東田家遺跡							
副書名	大分県付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	(7)							
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第27集							
編集者名	吉川寛(大分県教育庁埋蔵文化財センター)・孔智賢(パレオ・ラボ)・樋原岳二(早稲田大学)							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-1113 大分市中判田1977							
発行年月日	2008年3月25日							
ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東緯 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査施設
		市町村	遺跡番号					
ひがしたむろいせき 東田家遺跡	あおいでしたむろいせき 大分市判田町	44201	322099	33°14' 9"	131°35' 55"	2002年2月26日 ～2003年3月14日	1320	大分県 周辺連続 立体交差 事業
所収遺跡名	類別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東田家遺跡 第3次調査	集落	弥生・古墳 古代・中世	溝・住居跡・土坑・ 貯蔵穴	絵柄土器				
要約	<p>弥生時代前期末から近世までの複合遺跡。弥生時代前期末および古墳時代前期が最盛期となる。 古墳時代中期前半の住居跡から、絵柄土器が出土。絵柄土器には「竜」を表現したモチーフが描かれている。</p>							

東田室遺跡

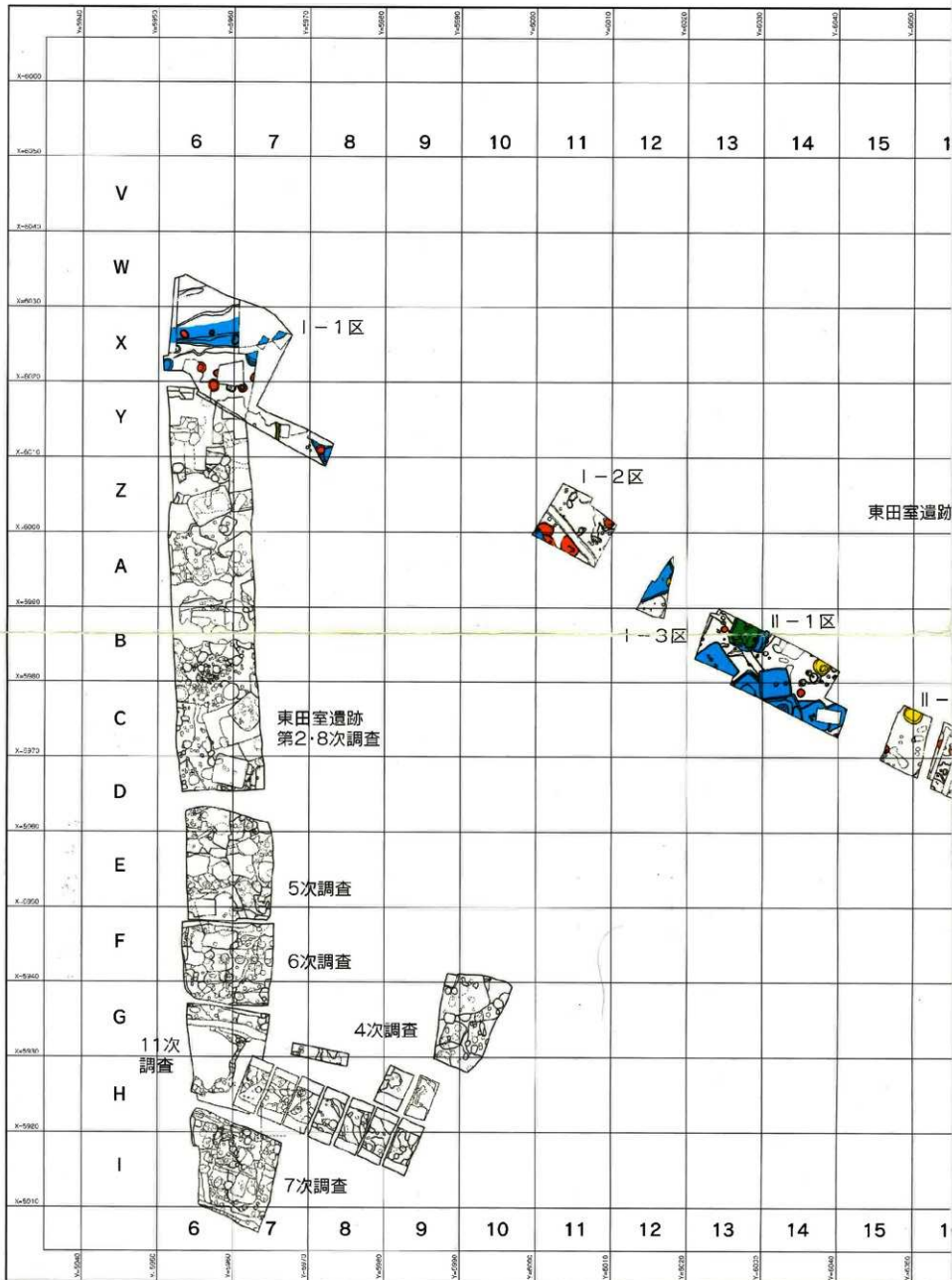
大分駅付近連続立体交差事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第27集

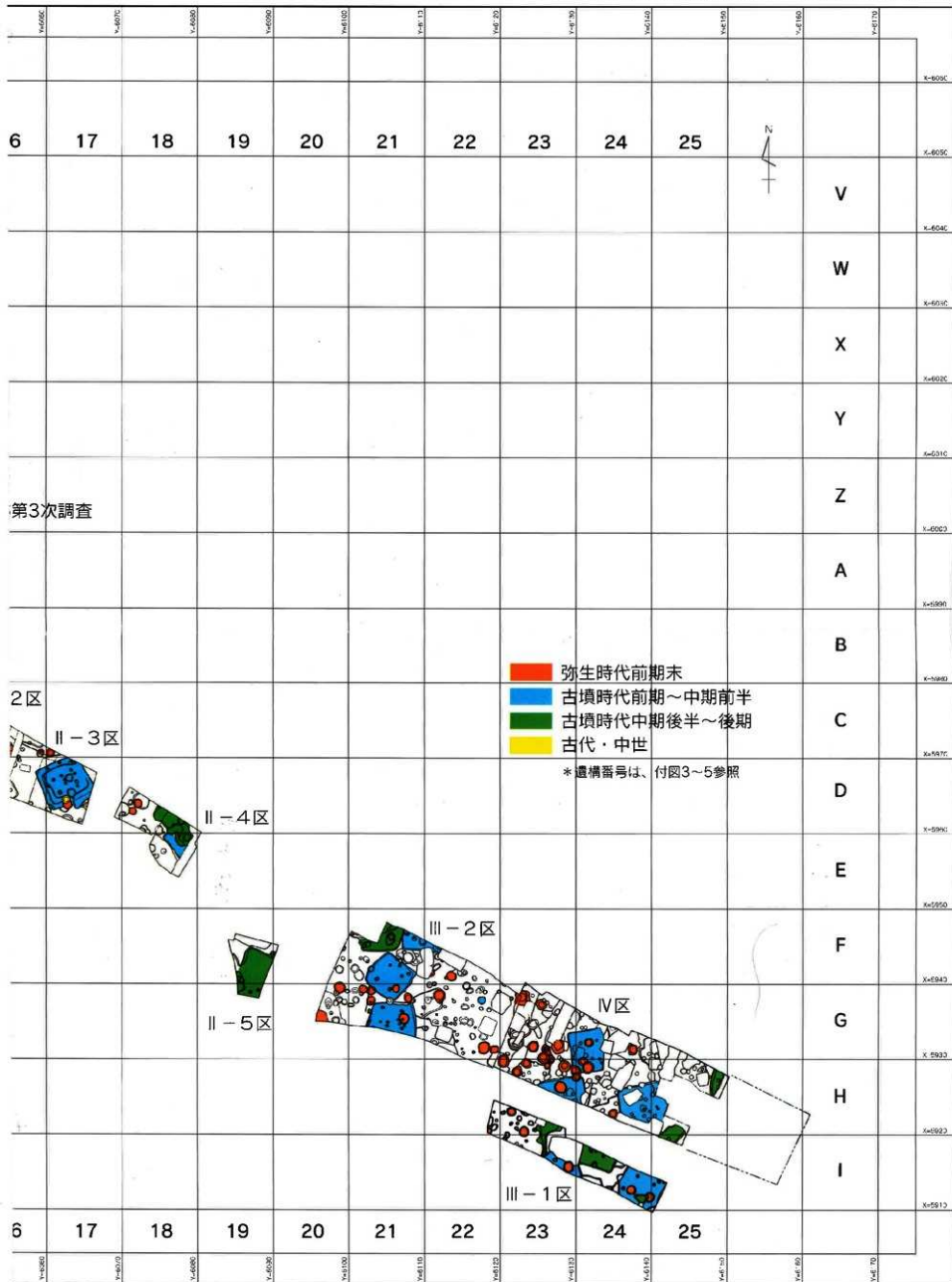
平成20年3月25日

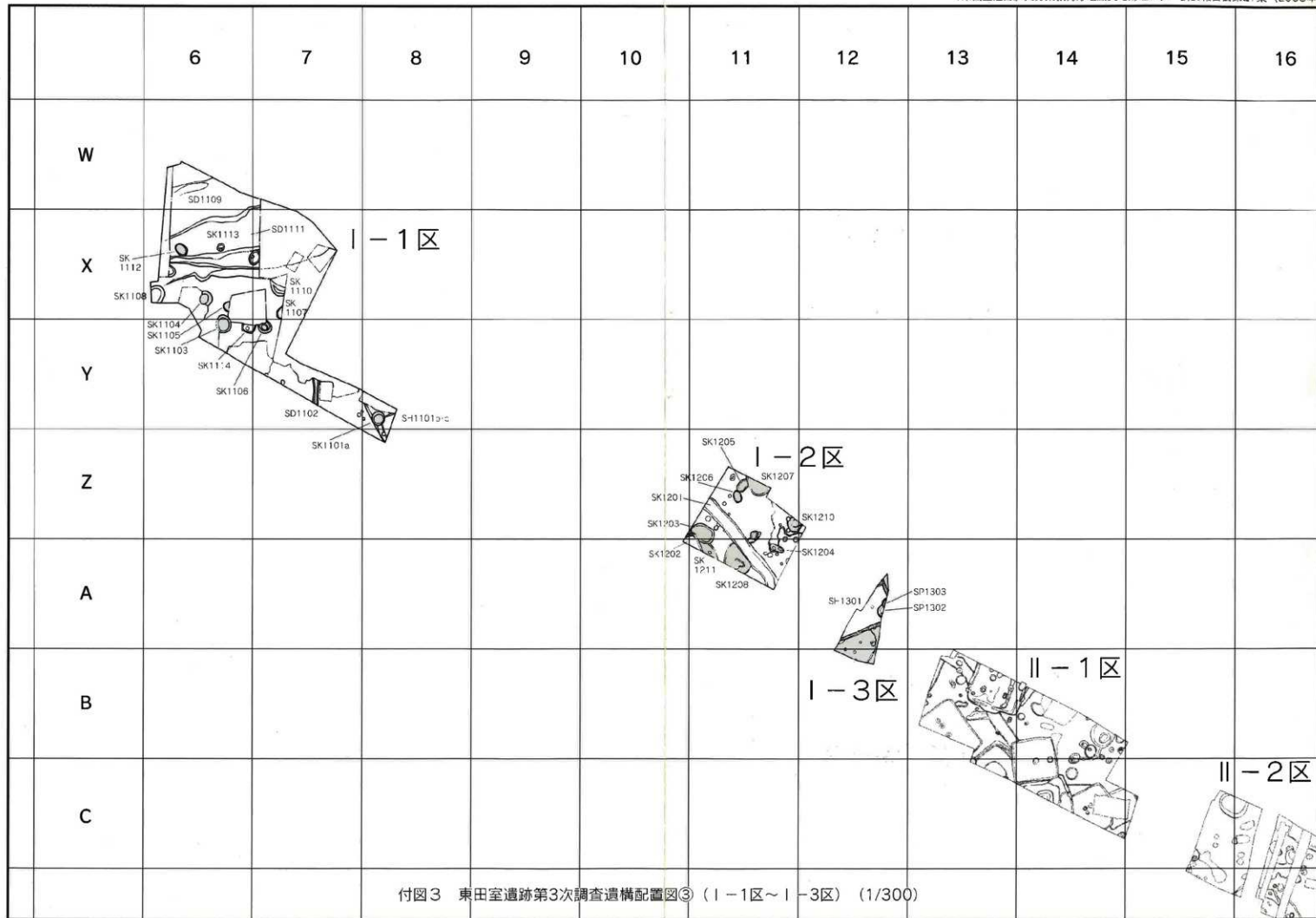
編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113 大分市大字中判田字ゼワノ門1977番地
TEL (097)597-5675

印刷 立川印刷株式会社
〒870-0901 大分市西新地2丁目4番5号
TEL (097)552-1110

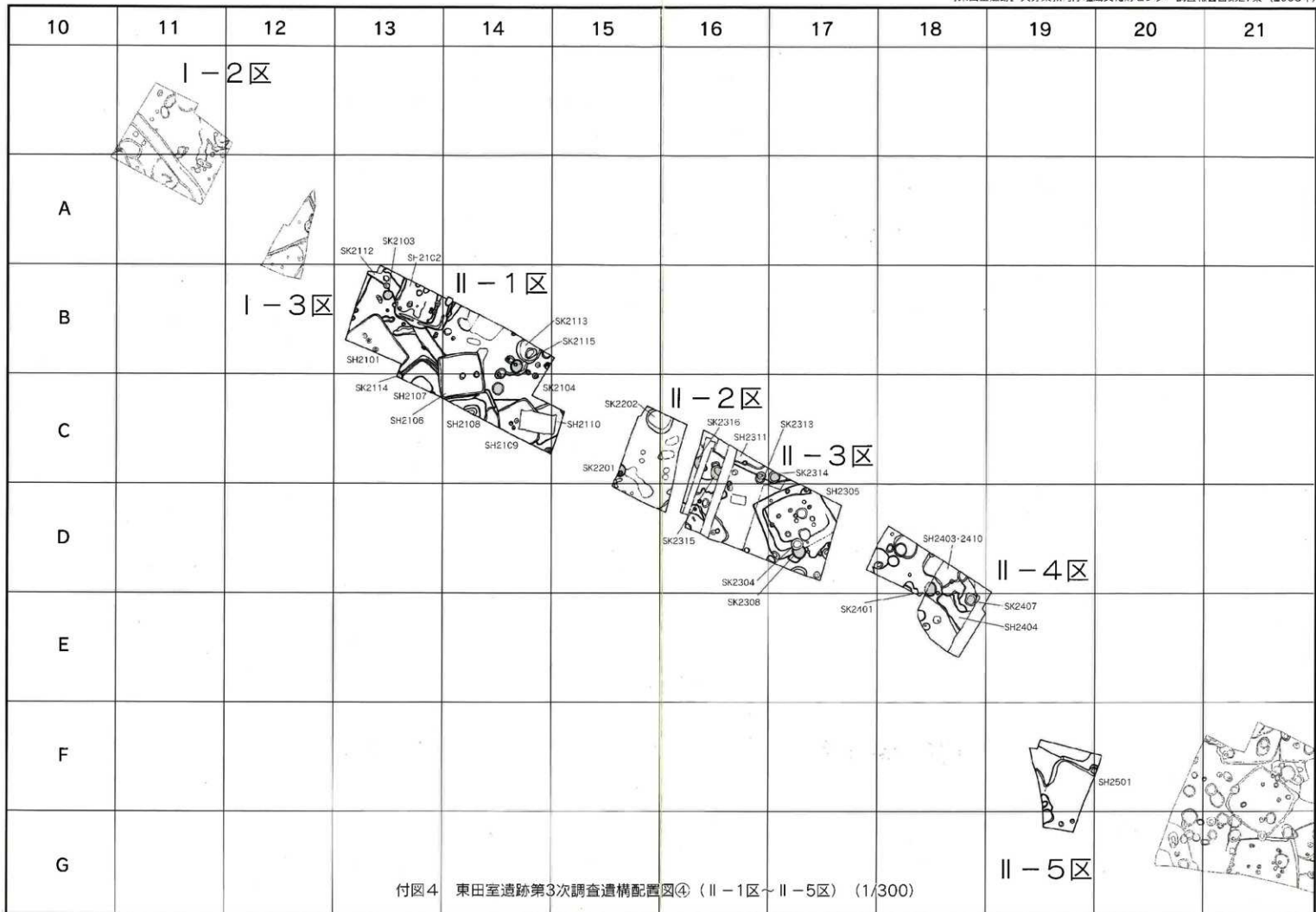


付図2 東田室遺跡第3次調査

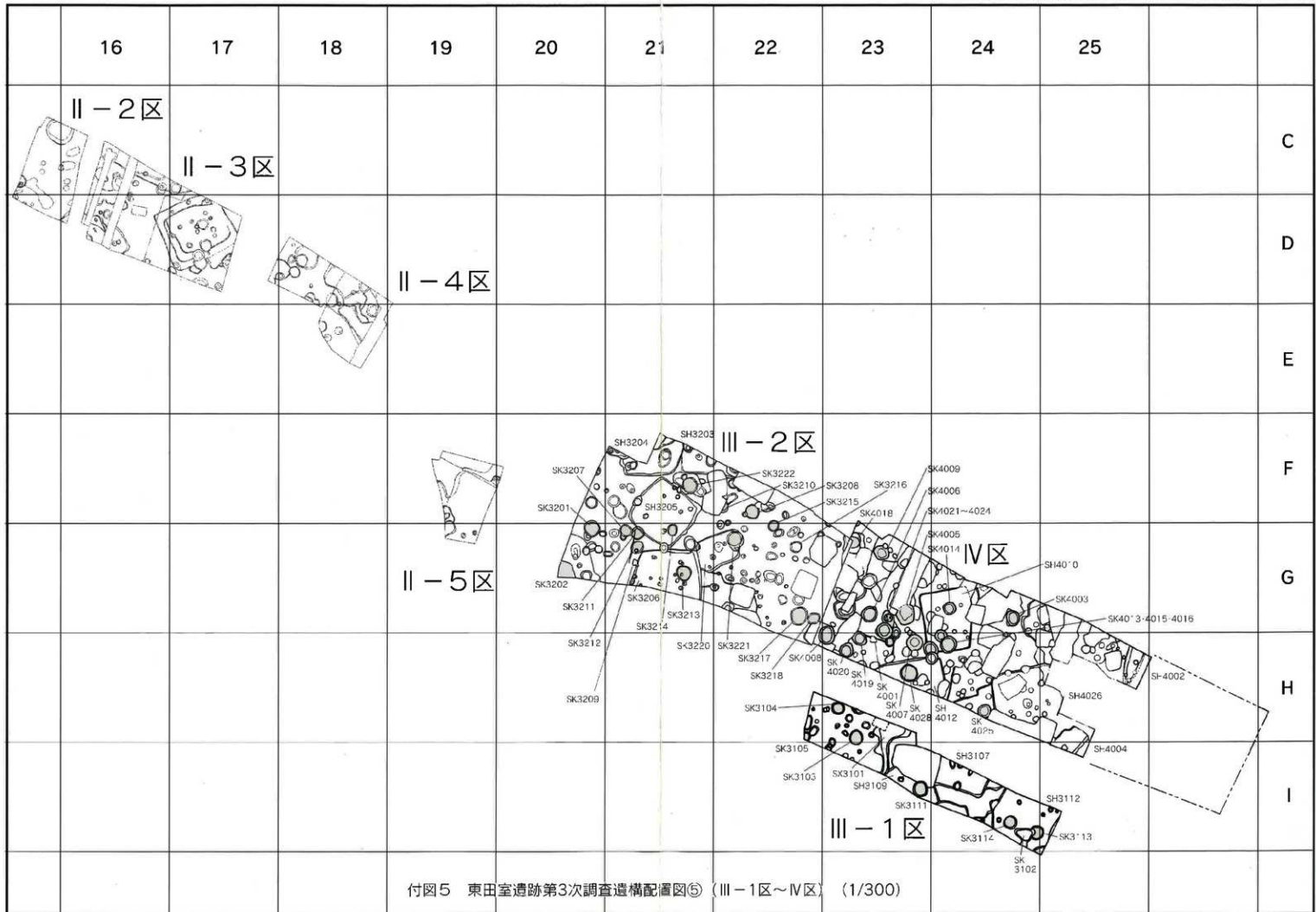




付図3 東田室遺跡第3次調査遺構配置図③（I-1区～I-3区）（1/300）



付図4 東田室遺跡第3次調査遺構配置図④（II-1区～II-5区）（1/300）



付図5 東田室遺跡第3次調査遺構配置図⑤ (III-1区~IV区) (1/300)